

平成二九年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史

No. 2

「文化講座資料・記録集」

2018（平成30）年3月
宮古島市教育委員会

平成二九年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史

No. 2

「文化講座資料・記録集」

2018（平成30）年3月
宮古島市教育委員会

例言

1. 本資料集は、平成 29 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業（国庫補助）で実施したシンポジウム・文化講座のレジュメ、講座風景写真、ポスター、新聞掲載記事などの資料を取りまとめたものである。

2. シンポジウムは、宮古島市教育委員会生涯学習振興課（文化財係）が主催した。

3. 文化講座は、全 5 回を実施し、各講座の概要は以下の通りである。

第 1 回シンポジウム「戦争遺跡の可能性 保存・整備・活用の視点から」

日 時：平成 29 年 6 月 10 日（土）午後 2 時から 5 時

会 場：宮古島市総合博物館・研修室

報告者：山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）、保久盛陽（南風原町教育委員会）、
久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

参加者数：32 人

第 2 回シンポジウム「浦底遺跡の発掘調査に見る無土器期研究の新展開」

日 時：平成 29 年 10 月 28 日（土）午後 2 時～ 5 時

会 場：宮古島市総合博物館・研修室

報告者：江上幹幸（元沖縄国際大学）、久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）、島袋綾野（石垣市教育委員会）、
山極海嗣（琉球大学）

総合討論コーディネーター：下地和宏（宮古島市市史編さん委員長）

参加者数：32 人

※平成 29 年 10 月 20 日～ 10 月 29 日にかけては、宮古島市総合博物館特別展「浦底遺跡発掘査展」が開催

第 3 回文化講座「中国産陶磁器からみるグスク時代東アジア海域の交易」

日 時：平成 30 年 2 月 3 日（土）午後 2 時～ 5 時

会 場：宮古島市総合博物館・研修室

報告者：田中克子（アジア水中考古学研究所）、久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）、
瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）

参加者数：21 人

第 4 回文化講座「化石で探る宮古島のホ乳類の移り変わりと人類渡来問題」

日 時：平成 30 年 2 月 18 日（日）午前 10 時～正午

会 場：宮古島市総合博物館・研修室

報告者：河村愛（富山大学）

参加者数：35 人

第 5 回文化講座「沖縄最古の文化への探求 - 新発見された県内最古級の遺跡 -」

日 時：平成 30 年 2 月 24 日（土）午後 2 時～ 5 時

会 場：宮古島市総合博物館・研修室

報告者：久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）、仲座久宜（沖縄県立埋蔵文化財センター）、
山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）、横尾昌樹（うるま市教育委員会）

参加者数：30 人

※平成 30 年 2 月 16 日～ 2 月 25 日にかけては、「発掘調査速報展 2017」

（沖縄県立埋蔵文化財センター主催）が開催

4. 本資料集の編集は菱木勇一が中心となり行い、総合討論のテープおこしについては西里咲子が行った。本書の掲載資料及び音声データなどについても、宮古島市教育委員会生涯学習振興課で保管・管理している。

5. 第 5 回文化講座については、沖縄県立埋蔵文化財センター第 70 回文化講座の資料を再掲載した。

6. 新聞記事の掲載については、宮古毎日新聞社、宮古新報社より掲載許可を得た。

平成 29 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

- 目次 -

1. 第 1 回 シンポジウム「戦争遺跡の可能性 - 保存・整備・活用の視点から -」	1
山本 正照 (沖縄立博物館・美術館)	
「戦争遺跡の整備について - 沖縄県内の事例から見る現状と課題 -」	13
保久盛 陽 (南風原町教育委員会)	
「南風原町における戦争遺跡の保存・活用について沖縄陸軍病院南風原壕群を中心に -」	20
久貝弥嗣 (宮古島市教育委員会)	
「宮古島市内での戦争遺跡活用事例」	27
総合討論	37
2. 第 2 回 シンポジウム「浦底遺跡の発掘調査にみる無土器期研究の新展開」	51
久貝 弥嗣 (宮古島市教育委員会)	
「宮古島市内の無土器期遺跡の概要 - 浦底遺跡の発掘調査を中心に -」	55
山極 海嗣 (琉球大学戦略的研究プロジェクトセンター)	
「海と島の世界へ進出し貝斧を利用した人々 - 東南アジア・南太平洋諸島地域の事例から宮古・八重山諸島を見る -」	63
江上 幹幸 (元沖縄国際大学)	
「集積遺構の用途と文化」	78
島袋 綾野 (石垣市教育委員会)	
「八重山諸島の無土器期 - 地理的環境にみる石器の利用を中心として」	88
総合討論	96
3. 第 3 回 文化講座「中国産陶磁器からみるグスク時代 東アジア海域の交易」	111
田中 克子 (アジア水中考古学研究所)	
「琉球出土の中国産陶磁器を考える - “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁を巡って -」	112
久貝 弥嗣 (宮古島市教育委員会)	
「宮古島市内グスク時代の中国産陶磁器」	120
瀬戸 哲也 (沖縄県立埋蔵文化財センター)	
「琉球列島の陶磁交易と那覇港」	129
4. 第 4 回 文化講座「化石で探る宮古島のホ乳類の移り変わりと人類渡来問題」	145
河村 愛 (富山大学)	
「化石で探る宮古島のホ乳類の移り変わりと人類渡来問題」	
5. 第 5 回 文化講座「沖縄最古の文化への探求 - 新発見された県内最古級の遺跡 -」	147
久貝 弥嗣 (宮古島市教育委員会)	
「ツツピスキアブ洞穴」	149
仲座 久宜 (沖縄県立埋蔵文化財センター)	
「白保竿根田洞穴」	152
山崎 真治 (沖縄県立博物館・美術館)	
「サキタリ洞遺跡」	154
横尾 昌樹 (うるま市教育委員会)	
「藪地洞穴遺跡」	158

平成 29 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業 第 1 回
シンポジウム

戦争遺跡の可能性

- 保存・整備・活用の視点から -

2017(平成 29)年 6 月 10 日

主催：宮古島市教育委員会



はじめに～戦争遺跡とは～

1. 戦争遺跡の定義

十菱駿武・菊池実編 2002年『しらべる戦争遺跡の辞典』柏書房株式会社の中では、戦争遺跡の定義について、以下のように記されている。

戦争遺跡（戦跡）とは、「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと」である。

*戦争考古学：第2次世界大戦末期の沖縄戦関係の遺跡や遺留品などを資料として、住民をまきこんだ沖縄戦の実相を考古学的手法で調査研究する分野（當眞嗣一）田中涿・佐原真編 2006年『日本考古学辞典』三省堂

2. 戦争遺跡の種類

『沖縄県の戦争遺跡』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2015年）では沖縄県内の戦争遺跡を以下のような種類に分類し報告している。

A. 沖縄戦以前

- ①海底線関係施設、②中城湾海軍需品支庫、③海軍望楼・特設見張所、④中城湾臨時要塞、⑤船浮臨時要塞、⑥防空監視哨、⑦戦争に関連する施設・記念碑

* 忠魂碑、奉安殿、天皇関係碑は⑦に含まれる。

B. 沖縄戦

- ①飛行場、②司令部壕、③陣地、④特攻艇秘匿壕、⑤学徒隊壕、⑥病院壕、⑦官公庁壕、⑧御真影奉護壕、⑨住民避難地、⑩偽陣地・偽兵器、⑪被災・破壊痕跡、⑫収容所

B①飛行場

飛行場に分類される戦争遺跡は、実際の飛行場の滑走路の他に、これに附随する誘導路や飛行機の掩体や、指揮所、電波探知機壕などが含まれる。沖縄県内では、以下の飛行場（陸軍8カ所、海軍5カ所）が建設され、宮古島市内でも3つの飛行場が建設されている。宮古島市内では、現在残されていないが、飛行機の掩体として、コの字形に土盛をし、天井部分を草木で覆って偽装した形態のもの掩体が構築されていたとの聞き取り調査がえられている。

<陸軍>・沖縄北飛行場（読谷飛行場） ・伊江島飛行場 ・沖縄中飛行場（現米軍嘉手納基地）、
・沖縄南（仲西）飛行場 ・沖縄東（西原）飛行場 ・宮古島西飛行場（下地）、
・宮古島中飛行場（野原） ・石垣島飛行場（白保）

<海軍>・小禄飛行場（現那覇空港） ・宮古島海軍飛行場（現宮古空港）

・石垣島北（平喜名）飛行場 ・石垣島南飛行場（旧石垣空港） ・南大東島飛行場

* 陸軍が首里石嶺に、海軍が糸満に秘密飛行場を建設。

B②司令部壕

司令部とは、旅団以上の規模の部隊が指揮下部隊を指揮統率する組織で、部隊の最高指揮権をもつ司令官をはじめ、司令官を補佐し作戦や用兵の計画・指導を行う参謀長や参謀などの幕僚を中心に構成される。司令部壕は、敵の攻撃から司令部をも守るために地上に堅固な構造物として、あるいは地下にトンネル状に構築・設置された施設である。

宮古島市内においては、タキグスバルの地下壕群が第28師団の司令部壕、西更竹司令部壕が独立混成第60旅団の司令部壕と考えられている。

B③陣地

陣地とは、上陸戦における地形の優位を得ることを目的とし、あらかじめ適所に障害物や塹壕などを設置したり、火砲などの装備を配備した場所をさす。陣地は、砲台、トーチカ、銃眼、陣地壕、監視所、戦闘指揮所、通信所の6つに細分される。

- a. 砲台：大砲などの火器を設置するための台座である。
- b. トーチカ：鉄筋コンクリート製の防御陣地をさすロシア語の軍事用語。トーチカには、小銃や機関銃などの小型火器が構えられる銃眼と監視をかねた窓が設けられる。
- c. 銃眼：全体がコンクリート製の構築物ではないものや、銃眼が1つしかないもの。
- d. 陣地壕：自然洞窟を利用したり、地質にあわせてダイナマイトやまたは削岩機やツルハシで掘られた壕
- e. 監視所：丘陵頂部など見晴らしが良い位置に立地し、監視窓などを有するもの。
- f. 戦闘指揮所：戦闘指揮所は、一定の形態で捉えることができないが、立地的には丘陵頂部や先端部に位置し、周辺の陣地の中心的な場所に位置する戦闘時の拠点となる場所。
- g. 通信所：通信所は電気信号を送受信する施設。

宮古島市内では、海軍砲台として、平良砲台、パナタガー嶺の砲台、平瀬御神崎の砲台、海軍砲台、友利砲台（2基）の砲台が設置されている。また、下里添の野戦重火器秘匿壕群には、陸軍の96式15糎榴弾砲が秘匿され、来間島の山砲また、海岸線には、敵の上陸に備えての水際作戦の一つとして、多くの銃眼が構築されている。

B④特攻艇秘匿壕

特攻艇秘匿壕とは、太平洋戦争時において陸海軍が採用した主に体当たりによる攻撃を行うための小型艇、つまり特攻艇を秘匿する壕である。陸軍は陸軍海上挺身隊、海軍は海軍震洋隊の部隊が組織されている。

宮古島市内では、陸軍海上挺身隊の特攻艇秘匿壕として、荷川取ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕（第4大隊）、大浜の特攻艇秘匿壕群（第30大隊）、トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群（第30大隊）が確認されている。海軍震洋隊の特攻艇秘匿壕として、ヌーザランミ特攻艇秘匿壕群（第41震洋隊・八木部隊）が確認されている。

B⑧御真影奉護壕

御真影とは、「明治期から第二次大戦の敗戦まで、宮内省から各学校に貸与された、天皇・皇后の写真」(大辞林) のことであり、御真影奉護壕とは、この御真影を護るために構築された壕のことである。

宮古島市内では、1944(昭和19)年10月10日の空襲後、野原岳にある第28師団司令部壕の近くに御真影の奉遷所が構築された。10月31日に、宮古島市内の御真影を宮古中学校に一時奉遷し、11月1日に野原岳の奉遷所(御真影奉護壕)へ移された。壕の構築には、市内の学校に勤務する教師が交代制で作業を行い、奉遷後も交代制で見張りが行われた。

B⑨住民避難地

住民避難地とは、米軍上陸以前に掘られた防空壕や、戦況に即して住民が避難した自然洞穴、本来は軍の陣地壕であったところ、山間部などに避難した際の掘立小屋やカマドなどの跡を総称する。

体験談や聞き取り調査によれば、宮古島市内では、家の敷地内やその周辺に家族が緊急に避難できるような小さな防空壕を掘ったり、自然の洞穴などに避難することが多かったようである。現在では、家の敷地内や周辺に構築された防空壕が残されている事例は確認できないが、自然洞穴が現在でも確認できるものも多く、代表的な事例として「チフサアブ」(来間島)、「フカスクアブ」(城辺福里)、「宮古南静園の避難壕」などがある。住民避難地は、前述してきた旧日本軍関連の壕に比して調査事例が少なく、今後これらの住民避難地に関する詳細な調査も必要とされる。

B⑩被災・破壊痕跡

被災痕跡とは、主に米軍の攻撃による弾痕や爆弾穴のことで、破壊痕跡は旧日本軍が作戦上、飛行場や橋梁を破壊した跡である。

宮古島市内では、明確な破壊痕跡は現在のところ確認されていないが、被災痕跡としては、「南静園職員宿舎塀に残る弾痕」や「旧西中共同製糖場煙突の弾痕」などが現在でも確認できる。

A⑦戦争に関連する施設・記念碑

日清戦争・日露戦争後、戦死した兵士を祀った忠魂碑が全国的に建立された。沖縄では、日露戦争後、特に大正期と昭和初期に盛んに建立されている。

宮古島市内では、現在でも「旧平良町の忠魂碑」(建立年:1924年)、「旧下地町の忠魂碑」(建立年:1932年)、「旧城辺村の忠魂碑」(建立年:1927年)、「旧伊良部村の忠魂碑」(建立年:1914)の4つの忠魂碑が確認できる。「旧伊良部村の忠魂碑」は、県内で最も古い1912年に建立された「旧佐敷村の忠魂碑」に次いで2番目に建立年が古い忠魂碑である。

宮古島市内の代表的な戦争遺跡①

【司令部壕】



西更竹司令部壕（独立混成第60旅団司令部と想定）



タキグスバルの地下壕群（第28師団司令部と想定）

【砲台】



バナタガー嶺野戦重火器砲台 ＊海軍砲台



東保茶根の戦争遺跡群 ＊海軍砲台（友利砲台）



与那浜崎の砲台 ＊海軍砲台



来間の山砲陣地壕 ＊山砲

宮古島市内の代表的な戦争遺跡②



下里添野戦重火器秘匿壕群 * 96式15糎榴弾砲



国仲砂川の壕 * 96式15糎榴弾砲

【通信関連】



アーリヤマの戦争遺跡群 * 発電機壕



野原岳頂上の電波探知機壕



盛加越の海軍通信隊壕

宮古島市内の代表的な戦争遺跡③

【陣地壕】



海軍 313 設営隊地下壕群 (海軍 313 設営隊の本部壕)



二重越の地下壕群 (海軍警備隊の本部壕)

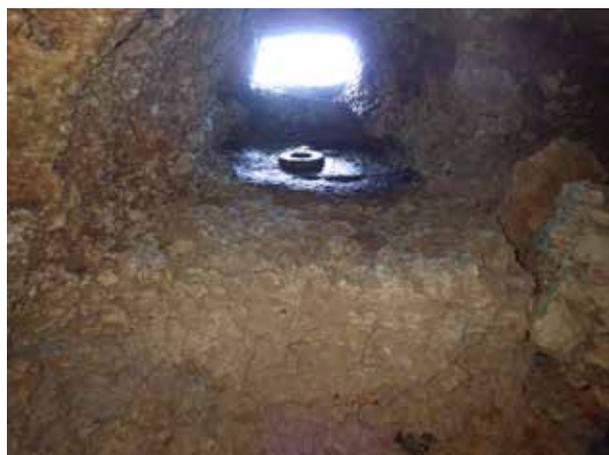
【トーチカ・銃眼】



パイナガマビーチの機関銃壕



久松の機関銃壕



タカシカバーの機関銃壕



ピンフ嶺のトーチカ

宮古島市内の代表的な戦争遺跡④

【御真影奉護壕】



御真影奉護壕

【飛行場】 * 通信関連施設



旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所

【特攻艇秘匿壕】



ヌーザランミ特攻艇秘匿壕群 * 海軍震洋隊



大浜の特攻艇秘匿壕群 * 陸軍海上挺身隊

【被災・破壊痕跡】



南静園職員宿舍塀に残る弾痕

『ガイドブック 宮古南静園』 宮古南静園入園者自治会 2011 年参照



旧西中共同製糖場煙突の弾痕

宮古島市内の代表的な戦争遺跡⑤

【住民避難壕】



チフサアブ



宮古南静園の避難壕

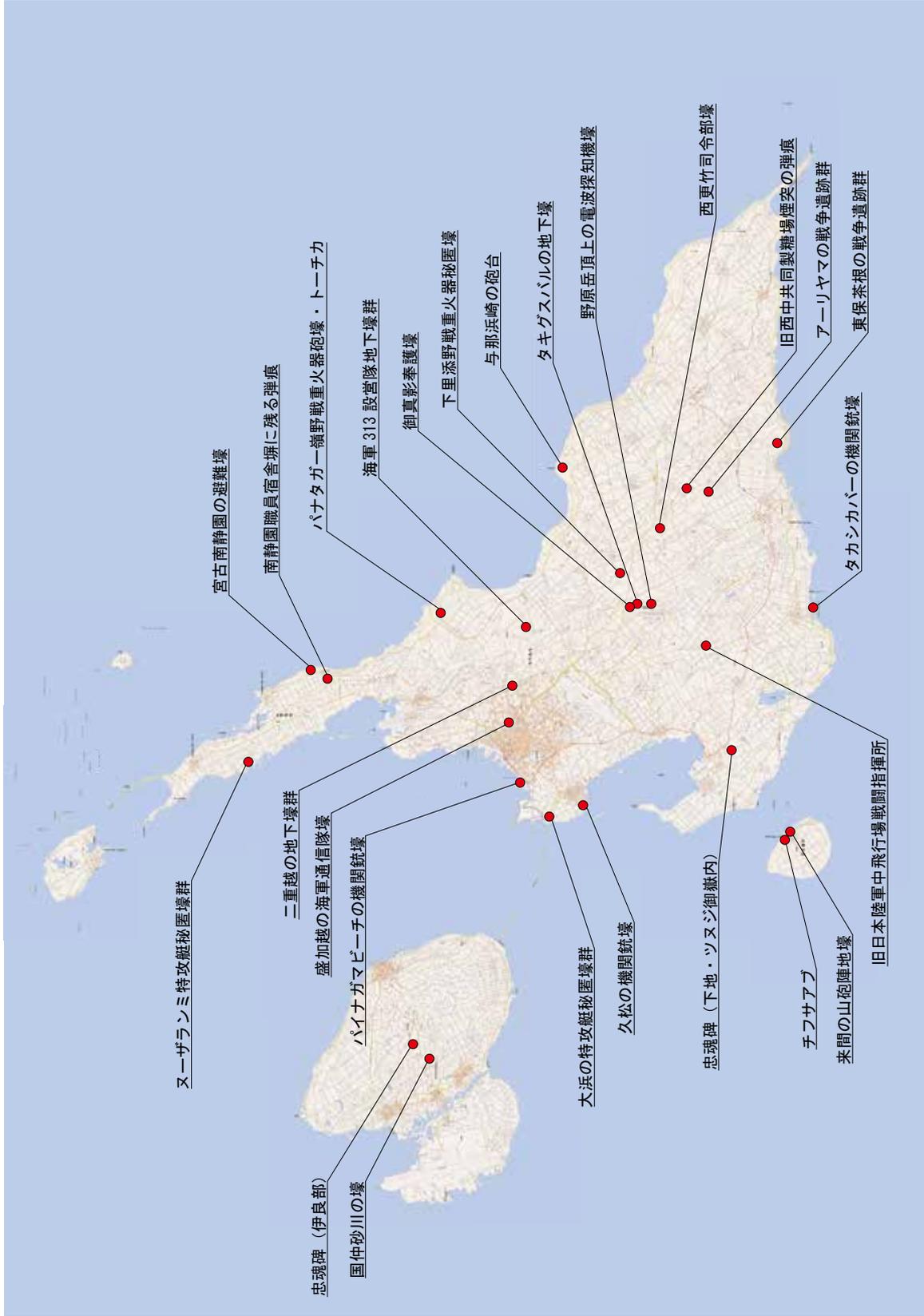
【戦争に関連する施設・記念碑】



忠魂碑 (伊良部)



忠魂碑 (下地・ツヌジ御嶽内)



第2図 宮古島市内の代表的な戦争遺跡位置図 (p5 ~ p9 に掲載した戦争遺跡の写真分)

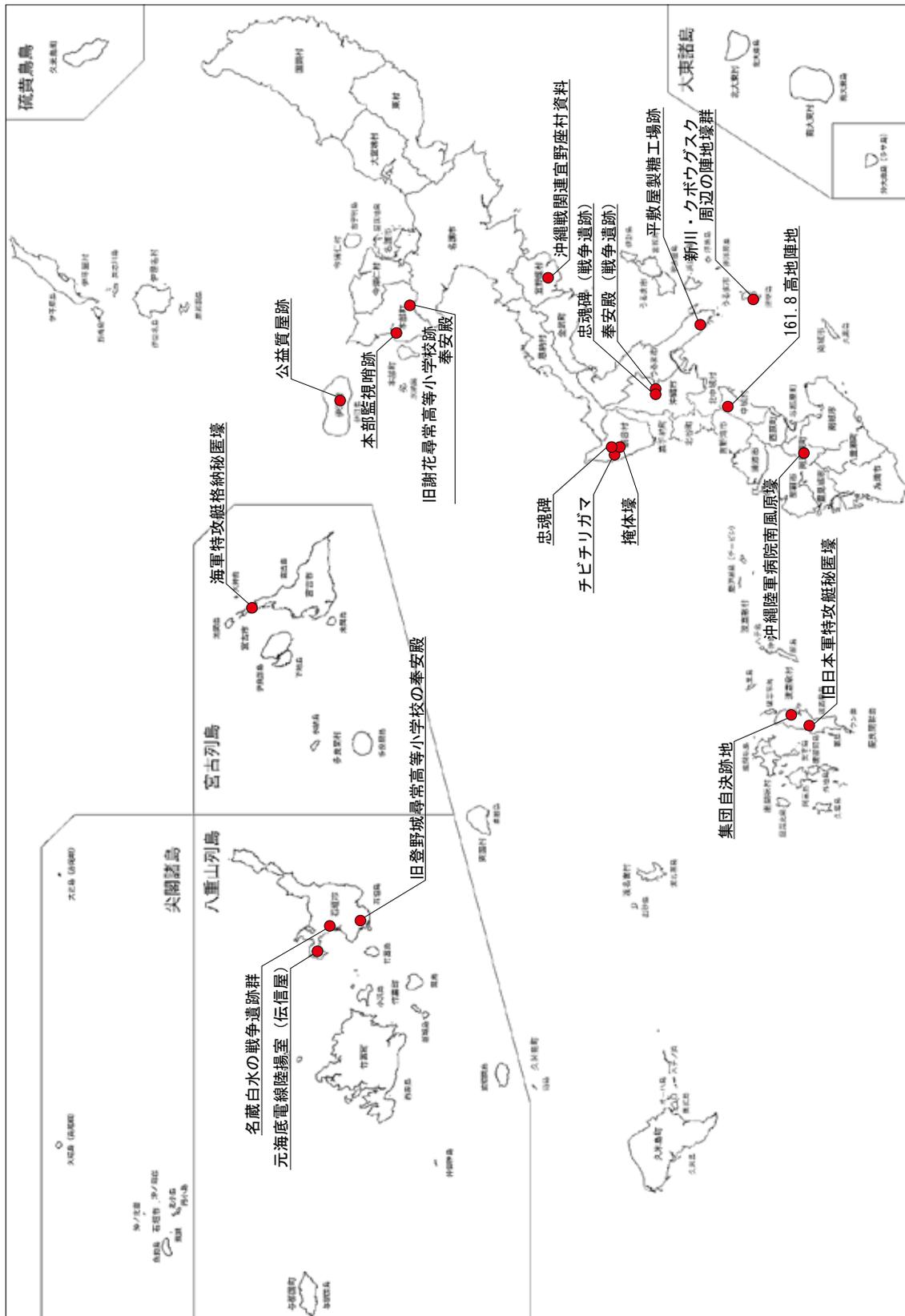
沖縄県内の戦争遺跡市町村指定文化財及び国登録記念物

表 1. 沖縄県内の戦争遺跡市町村指定文化財及び国登録記念物一覧表

No.	指定年月日	種別	指定名称	所在地
1	昭和52年12月14日	伊江村史跡	公益質屋跡	伊江村字東江上75
2	昭和61年9月25日	石垣市史跡	元海底電線陸揚室（電信屋）	石垣市字崎枝574-1
3	平成2年6月27日	南風原町史跡	南風原陸軍病院壕〈2007年に「沖縄陸軍病院南風原壕」に改称〉	南風原町字喜屋武地内
4	平成9年2月5日	沖縄市史跡	奉安殿（戦争遺跡）	沖縄市知花
5	平成9年2月5日	沖縄市史跡	忠魂碑（戦争遺跡）	沖縄市知花
6	平成16年3月3日	うるま市史跡	新川・クボウグスク周辺の陣地壕群	うるま市勝連津堅
7	平成16年4月15日	宮古島市史跡	海軍特攻艇格納秘匿壕	宮古島市平良字狩俣2569
8	平成17年3月1日	渡嘉敷村史跡	旧日本軍特攻艇秘匿壕	渡嘉敷村字阿波連渡嘉志久原873
9	平成17年11月30日	渡嘉敷村史跡	集団自決跡地	渡嘉敷村字渡嘉敷2760-1
10	平成20年2月7日	読谷村史跡	チビチリガマ	読谷村字波平大桑江原1135-2、1136-2
11	平成20年11月4日	石垣市歴史資料	旧登野城尋常高等小学校の奉安殿	石垣市字登野城村内290（登野城小学校内）
12	平成21年1月22日	読谷村史跡	掩体壕	読谷村字座喜味2943-1
13	平成21年1月22日	読谷村史跡	忠魂碑	読谷村字座喜味2976-1の一部2943-1の一部
14	平成21年3月30日	石垣市史跡	名蔵白水の戦争遺跡群	石垣市字名蔵シラ原1355-83
15	平成21年11月20日	本部町史跡（戦争遺跡）	本部監視哨跡	本部町字谷茶205
16	平成21年11月20日	本部町歴史資料	旧謝花尋常高等小学校跡 奉安殿	本部町謝花1番地
17	平成26年3月26日	中城村史跡	161.8高地陣地	中城村字北上原195番地
18	平成27年1月26日	国登録記念物（遺跡関係）	平敷屋製糖工場跡	うるま市勝連平敷屋
※1	平成13年10月9日	宜野座村歴史資料	沖縄戦関連宜野座村資料	宜野座字宜野座246

※1 文献資料の有形文化財として指定

『沖縄県の戦争遺跡』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2015）p326 第 8 表を抜粋



第2図 沖縄県内の戦争遺跡市町村指定文化財及び国登録記念物位置図

戦争遺跡の整備について

－ 沖縄県内の事例から見る現状と課題－

山本 正昭（やまもと まさあき）

沖縄県立博物館・美術館主任学芸員

はじめに

沖縄県内には 1077 ヶ所の戦争遺跡が確認されている。これは沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した詳細分布調査と詳細確認調査を実施したことで炙り出された数値であり、実に 12 年もの調査を経て明らかにされた戦争遺跡の実態である。

この 1077 ヶ所の数値は 2015 年 5 月時点のものであり（沖縄県立埋蔵文化財センター 2015a）、その後において開発等で消えていった戦争遺跡や新たに確認された戦争遺跡もあることから、現在においては厳密な実数を示しているとは言えない。

厳密な実数がすぐにはじき出せない主な理由は埋蔵文化財としての記録保存の対象となる遺跡を文化庁は「地域において特に重要なもの」（註 1）と位置付けていることから、全ての戦争遺跡は記録保存の対象とはなっておらず、遺跡分布図にも反映されていないことが要因となっている。つまるところ毎年、全国において全く認識されないまま失われていく戦争遺跡が数多く存在し、同時に全国的に戦争遺跡の実数が把握できていない状況にあると言える。

このように戦争遺跡が埋蔵文化財としての位置付けという意味では極めて曖昧であることから、その保存や整備が全くなされていないかと言えば、実はそうではない。松代大本営や知覧飛行場跡など、戦争の実態を学ぶ場として、そして平和学習の場として保存、整備、公開、活用されている事例も少ないながらも見る事ができる。沖縄県内においても同様にその整備、公開、活用がなされている事例が民間・行政が見られる。本報告では沖縄県内の整備事例を紹介し、その中から見えてくる課題について触れていきたい。

（註 1）平成 10 年に文化庁が通知した「埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則」で通称「10 年通知」と言われる。

1. 積極的な公開がなされている戦争遺跡

沖縄県内には市町村指定の戦争遺跡が 17 か所あるものの、そのうち積極的な公開が行われているのは南風原町にある沖縄陸軍病院南風原壕群のみである。1994 年に発掘調査が実施され、2006 年度まで保存整備事業が行われた後、2007 年度から南風原町教育委員会の教育施設としてその一部が一般公開された（吉浜ほか 2010）。現在までに沖縄県内外から多くの見学者が訪問しており、沖縄戦における戦争遺跡についての詳細を知ることができる唯一の教育施設として位置付けることができる。

他方、観光施設として公開されている戦争遺跡も存在する。沖縄観光コンベンションビューローが管理・運営している豊見城市の旧海軍司令部壕である。沖縄観光コンベンションビューローは沖縄県

旧海軍司令部壕（豊見城市）



1. 壕へ至る見学用の入口



2. 壕への通路



3. 通路空間



4. 作戦室



5. 作戦室内の解説並びにイラスト



6. 司令官室

土木建築部から委託されて、運営と公開がなされており、年間約 16 万人の観光客が訪れている。

1970 年に沖縄観光開発事業団によって壕内約 450m のうち約 300m が復元整備され、公開が開始された。壕内には部屋ごとに解説版やイラスト図、当時の様子を再現した木組などが展示されている。また、公開されている壕内には全て照明が設置され、壕内の床面も階段等が付け加えられていることから、安全面の配慮が十分に成されていることが分かる。更に旧海軍司令部壕に関連した資料を展示した資料館が併設されており、当該壕を見学する前のガイダンス施設としての役割を担っている。

以上、2 ヶ所の戦争遺跡については、それぞれその公開する目的は大きく異なるが、何れも沖縄戦の実態を知る上では欠かすことのできない遺跡であると共に、当時の様子を窺い知るために積極的な公開が行われている戦争遺跡であると言える。

2. 修復・整備された戦争遺跡

現在、大規模に整備された戦争遺跡としては沖縄陸軍病院南風原壕群の 20 号が挙げられる。壕内部を円滑に見学できるように床面の整備を行っている。また、壁や天井が剥落若しくは落盤する危険性があるものの、なるべく手を加えない形での公開を基本としているため、壕内の補強などは必要最小限としている。公開における安全面の確保については、常に案内ボランティアが見学者に付いていることや壕内にセンサーを設置して落盤などの危険性を早急に察知できるなどの対策を採っている。当該壕のように現状をそのまま活かしての修復・整備、公開は多大な費用を要することから、沖縄県内において同様の公開事例は他に見られない。

建造物では旧美里国民学校の奉安殿が、沖縄市教育委員会により 2012～2013 年度にかけて修復・整備が実施された。その際に建造物としての修復と戦争遺跡としての修復・整備といった点でその修復・整備方針が有識者間において協議された。その結果、空襲を受けた直後の時点での奉安殿が修復・整備の対象となった。なお、沖縄県内では 4 ヶ所の奉安殿が残存しているが、旧美里国民学校の奉安殿は県内で初めてでかつ唯一の修復・整備事例となっている。

3. 簡易な整備がなされている戦争遺跡

積極的な公開ではないものの、導入路の整備や解説版の設置といった、簡易ではあるが戦争遺跡の公開事例が沖縄県内にいくつか見ることができる。中でも名護市の沖縄愛楽園敷地内にある戦争遺跡で早田壕や弾痕が残る塀などを見学する際には、見学マップが沖縄愛楽園によって作成され、見学者の利用に供されている点で独自性が見られる。壕の内部は公開されていないが、壕口の近くには解説板が設置されておりその詳細を知ることができる。また、沖縄県におけるハンセン病の歴史を知る展示施設、交流会館では早田壕の解説や弾痕が残る塀の実物復元模型が展示されている。

那覇市首里の一中鉄血勤皇隊の壕は首里城公園区域整備計画の下で 2015 年に簡易な整備が行われている。この壕は養秀会館駐車場から銃器庫、教導兵詰所として使用された 3 ヶ所の壕をまですべてを歩道で結び、解説版がそれぞれの壕口に設置されている。あわせて、危険防止のための鉄柵も壕前に設置されている。

市町村指定文化財の戦争遺跡では渡嘉敷村の旧日本軍特攻艇秘匿壕や本部町の監視哨、中城村の

美里国民学校の奉安殿（沖縄市）



7. 全景



8. 壁面に見られる弾痕

早田壕（名護市）



9. 壕内の通路



10. 壕口ならびに解説板

愛楽園の弾痕が残る塀（名護市）



11. 弾痕が残る塀



12. 愛楽園交流会館内の展示のレプリカ

一中鉄血勤皇隊の壕(那覇市)



13. 壕前の状況



14. 壕へ続く歩道

161.8 高地陣地 (中城村)



15. 陣地内を通る道

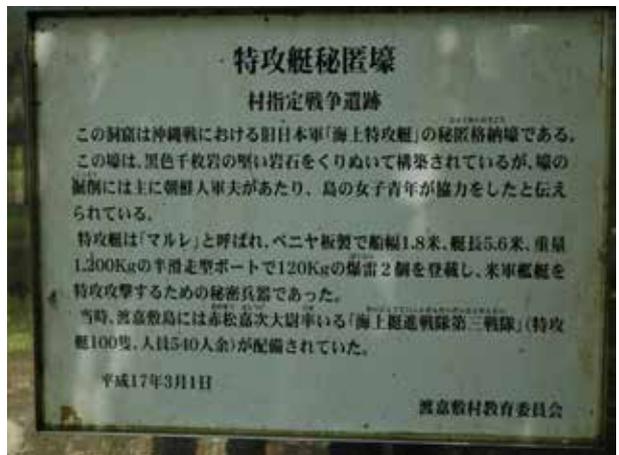


16. 案内解説版の略図

旧日本軍特攻艇秘匿壕 (渡嘉敷村)



17. 壕口



18. 案内解説版

座喜味の掩体壕（読谷村）



19. 掩体壕全景



20. 掩体壕内部

161.8 高地陣地、宮古島の海軍特攻艇格納秘匿壕などは、各自治体によって解説板が設置されている。また、解説板は設置されていないものの、読谷村指定文化財である座喜味の掩体壕は天井崩壊防止の措置として内部に鉄骨を組んで補強し、その内部や周辺は定期的に草刈りを行うといった管理が読谷村教育委員会によって行われている。

4. 整備・公開を実施していく前提として

戦争遺跡は遺跡としての位置付けが非常に難しい遺跡の範疇に入ると言える。

冒頭に挙げた、近現代遺跡における埋蔵文化財としての取り扱いについては、文化庁が平成10年に通知した「埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則」の中で近現代の遺跡は「地域において特に重要なもの」を記録保存の対象としたことから、全ての戦争遺跡が対象となっていないことが見て取れる。そして、「特に重要なもの」とする取捨選択の権限は遺跡が所在する当該市町村に委ねられていることから、その判断基準については各市町村によって定められることが前提となっている。このことは同種の戦争遺跡でも所在する市町村でその取り扱いが変わってくるということになる。加えて、沖縄県内では文化財保護行政が充実している市町村においても、「特に重要なもの」とする判断基準を持ち得ていない自治体が大半である。よって、そこから日々の文化財保護業務が多忙である上に戦争遺跡までは中々手が回らないといった実情が透けて見えてくる。

上記のことは多くの戦争遺跡が、その実態が明らかにされないまま失われてしまっている状況が依然として続いていることを意味していると同時に、地域にとって保存と整備を行っていくべき重要な戦争遺跡はどのようなものであるか、といった判断材料を持たない状況も依然として続いていると言いうこともできる。

このような沖縄県内における状況は全国的な戦争遺跡を取り巻く状況とほとんど大差が無い。よって全国各地において調査がなされないまま開発等により人知れず消えていった戦争遺跡が数多く存在し、現在進行形で戦争遺跡が消失している現状にあると言える。

戦争遺跡が保存され、整備・公開されていくためには詳細な調査によって各戦争遺跡の実態が明らかにしていくことが前提にあり、開発等で消えていく戦争遺跡から得られる情報は戦争遺跡の実態を

かにしていくことが前提にあり、開発等で消えていく戦争遺跡から得られる情報は戦争遺跡の実態を知る上でも、そして比較検証していく上でも必須であると言える。そのためには開発等で消えていく戦争遺跡に係る法整備を進めていく必要性が存在する。

5. まとめ

戦争体験者の高齢化により、戦争体験の聞き取りが毎年困難になってきている昨今において、近い将来戦争遺跡は戦争の実態を伺い知る上では一級の遺跡としての位置付けられてくることはほぼ間違いない。そして、戦争の情報を直接的に伝える材料として、そして戦争遺跡は新たな歴史資料として、後世に残していくことの意義は計り知れない。だが一方で、これまで述べてきたように戦争遺跡を残すための問題は山積しており、それを一つずつ乗り越えていかなければならない。そのためには戦争遺跡を残すことの意義をそれぞれが深く考えていく時期にきていると思える。

その意味で戦争遺跡は他の遺跡とは全く異なる視点での保存、公開、整備、活用が求められてくる遺跡ということができる。

【参考文献】

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001～2006「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）～（Ⅵ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第5、12、16、25、30、41集
- 吉浜忍ほか 2010『沖縄陸軍病院壕群南風原壕』高文研
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015a『沖縄県立埋蔵文化財センター企画展 沖縄県の戦争遺跡 - 沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果 -』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015b「沖縄県の戦争遺跡 - 平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書 -」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第75集
- 山本正昭 2015「宮古諸島における戦争遺跡を取り巻く状況について」『宮古郷土史研究会会報』No. 209 同研究会
- 山本正昭 2015「戦争遺跡の保存・整備・活用の現状を考える」『宮古郷土史研究会会報』No. 210 同研究会

南風原町における戦争遺跡の保存・活用について

－沖縄陸軍病院南風原壕群を中心に－

保久盛 陽（ほくもり あきら）

南風原町教育委員会

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 4. 沖縄陸軍病院南風原壕の保存について |
| 2. 南風原の沖縄戦 | 5. 沖縄陸軍病院南風原壕の活用について |
| 3. 沖縄陸軍病院南風原壕について | 6. おわりに |

1. はじめに

南風原町は沖縄本島中南部の内陸に位置する町で、県内唯一の海に面さない市町村である。南風原は王都首里、港で栄えた那覇・与那原に囲まれ、那覇・首里と島尻方面を結ぶ交通の要衝として発展してきた。また、戦前・戦中には軽便鉄道の2路線（那覇糸満線、与那原線）が通っていた。

以上のような、「海に面していない（内陸部）」、「交通の要衝（交通網が発達）」といった地理的環境が沖縄戦の際に南風原に配属された部隊の性格に表れている。

2. 南風原の沖縄戦

(1) 南風原に配備された部隊（図1参照）

南風原は内陸に位置する交通の要衝といった地理的環境から、沖縄戦の際には後方支援に関する部隊が数多く配備される。各部隊は集落の公民館や民家なども兵舎や倉庫として使用し、集落の周辺にある原野や畑には軍需物資が野積みされた。

そして、南風原に構築された日本軍の施設の中でも、特筆すべき施設として沖縄戦を指揮する第32軍の津嘉山司令部壕群と32軍直属の陸軍病院壕が挙げられる。ここでは、司令部壕に関する説明を記述し、陸軍病院壕に関する説明は次章にゆずる。

第32軍津嘉山司令部壕群は、津嘉山の「高津嘉山」と高津嘉山に連なる「チカシモー」に構築された壕で、人力で構築された壕としては県内最大規模となる全長約2,000m（本線壕400mに直行する支線壕100m×数本）の壕群である。1944年の夏から構築作業が行われ、壕の一部は民間会社の國場組が請け負って工事が進められた。完成した壕内部は明かりが多数取り付けられ、壁面の大部分が板張りであったとされ、上等なつくりであった。

しかし、のちに壕の耐久性や見通しの悪さが問題となり、戦闘指揮所は首里へと移された。そして残された壕群には、経理部・軍医部など後方支援に関わる部隊が置かれた。

その後、第32軍津嘉山司令部壕群は、2006年に国道工事によって一部分が発見され、町教育委員会によって発掘調査が行われている（写真1参照）。

図1 南風原に配備された主な部隊

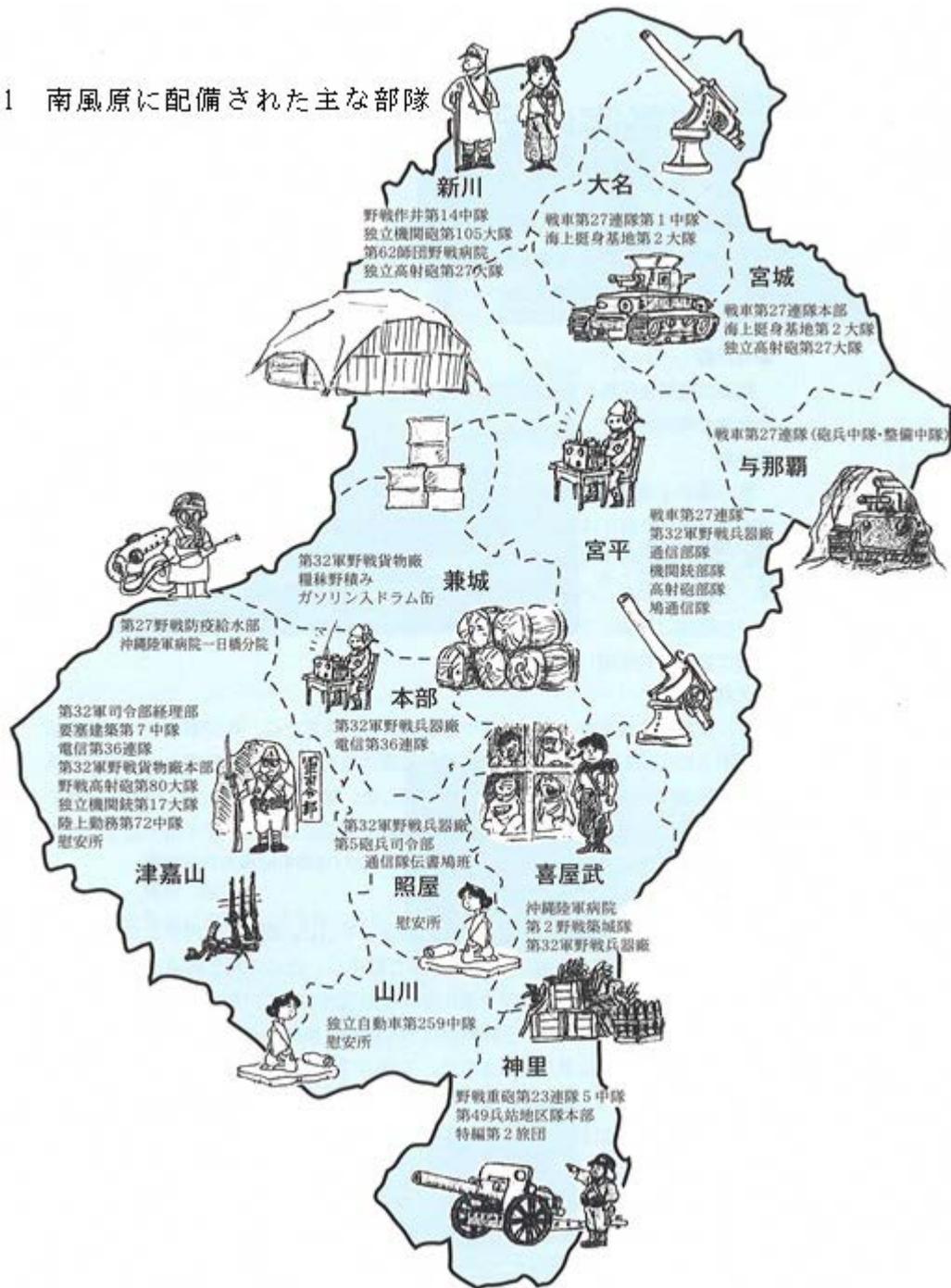


写真1 発掘された津嘉山司令部壕群

(2) 南風原の戦争被害

1944年10月10日に行われた米軍の空襲は旧那覇の市街地の約9割を焼き尽くした。その際、南風原の与那覇も空襲によって炎上し、82戸のうち72戸が焼失した。また他の集落でも機銃による攻撃を受け、数人の死傷者がでた。

そして、1945年3月下旬になると米軍による上陸前の攻撃が行われ、南風原でも被害が続出する。米軍上陸後の4月9日には役場から旧玉城村の親慶原への避難指示がでるが、指示は徹底されず避難した住民は一部であった。

5月22日に32軍司令部が首里から南部への撤退を決定した後は、南部へと移動する日本軍と住民の多くが南風原を通過する。日米の戦闘も南風原周辺で行われるようになり、日本兵・避難民関係なく攻撃が加えられた。結果、南風原の兼城十字路などは「死の十字路」とよばれ、山川橋などは「死の橋」とよばれた。

そして、6月になると、南部へ避難した南風原の避難民の多くが命を落とす。それは、組織的戦闘が終結したと言われる6月23日以後も確認されている。

沖縄戦によって、南風原は当時の人口の「8,023名」のうち「3,505名」が戦死し、戦死率は約44%を数える。

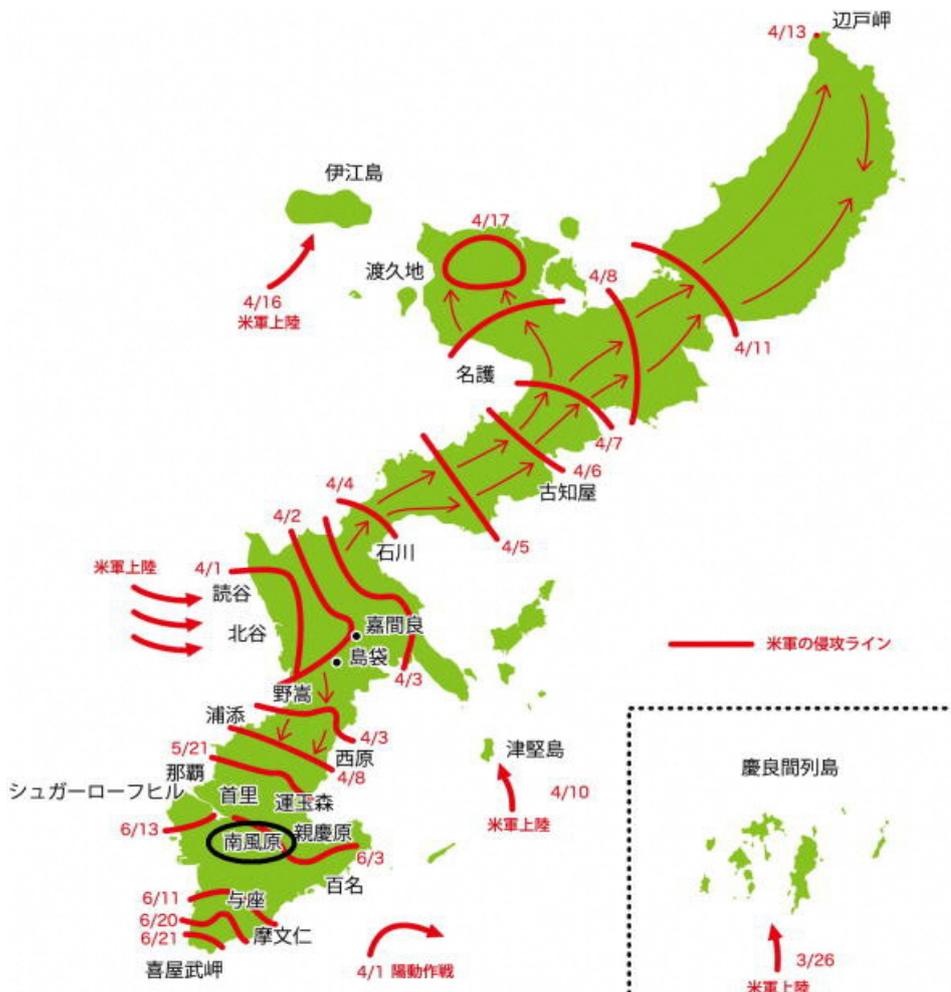


図2 沖縄戦戦闘経過図

3. 沖縄陸軍病院南風原壕について（図3参照）

沖縄陸軍病院南風原壕は、沖縄戦を指揮した第32軍直属の病院として南風原の黄金森（くがにむい）とよばれる丘陵に人力で構築された壕群である。

沖縄陸軍病院は1944年5月に熊本で編成され、6月より那覇市内で活動を開始する。また、同年の9月3日からは、米軍の上陸に備えて黄金森での壕構築が開始されている。

その後、1944年の10・10空襲によって病院が被害を受けると、その日の夜のうちに南風原国民学校（現在の南風原小学校）へと病院機能は移転する。同時に、生徒・教職員の学校への立ち入りは禁止となったため、授業は公民館や空き家などで行われた。

そして、米軍上陸前の攻撃が活発化する1945年3月23日からは黄金森の各壕での医療活動を開始するが、壕の多くは未完成の盲貫壕（貫通していない）ばかりであった。

壕は、黄金森丘陵の南側に外科の壕（のちに第一外科）、東側に内科の壕（のちに第二外科）、黄金森の北西に位置する丘陵に伝染病科の壕（のちに第三外科）が配置された。壕の総数は約30本である。陸軍病院では、軍医・看護婦・衛生兵など約350人に加えて、沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校生徒222人が教師18人に引率され、看護補助要員として動員されていた。

陸軍病院は米軍の進行のため、5月25日頃に南部への撤退を開始するが、歩けない重症患者に対しては青酸カリの配布などが行われた。ただし、中には命令に従わなかった軍医や衛生兵もいた。

撤退後は、病院本部を糸満市の山城、第一外科を波平と伊原、第二外科を糸洲、第三外科を伊原に設置した。この頃には治療活動は停止状態となり、将校以外の軍医や衛生兵は他の前線部隊に配置換えとなった。そして、6月19日に沖縄陸軍病院は解散した。

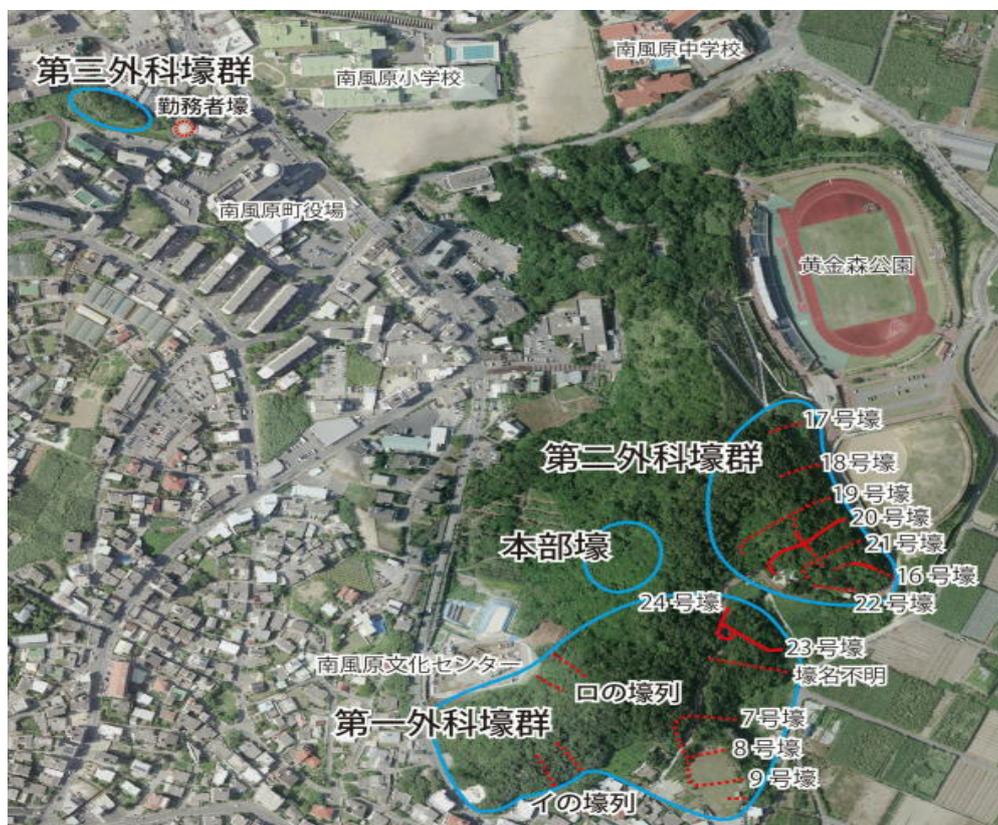


図3 沖縄陸軍病院南風原壕 配置図

4. 沖縄陸軍病院南風原壕の保存について

南風原町では1990年に「陸軍病院壕は沖縄戦の生き証人であり、町民のかけがえのない共有財産である」として、全国に先駆けて戦争遺跡を文化財（史跡）に指定した。

当時、国の文化財保護法では近代の戦跡を文化財として取り扱う規定がなかったため、南風原町は町の文化財指定基準に独自に「沖縄戦に関する遺跡」という一項を追加することによって戦争遺跡の文化財（史跡）指定を行った。

その後、広島「原爆ドーム」の世界遺産登録を求める動きを契機として、指定基準に「戦跡その他政治に関する遺跡」を加えた文化財保護法の改正が1995（平成7）年に行なわれた。南風原町による文化財保護条例指定基準の改正は全国に先駆けた画期的な取り組みであったといえる。

1993年には陸軍病院壕の保存と活用に向けて「南風原陸軍病院壕保存・活用調査研究委員会」が設置された。この委員会の中で、測量調査・発掘調査・地質調査などが行われ、保存・活用に向けた科学的な解明が行われた。また、劣化が進む壕の活用にあたって壕内に人を入れるのか、入口から覗くだけにするのか議論が行われた。そして、安全上の問題、予算上の問題などから壕内の見学は入口から覗くにとどめるという答申が出された。

しかし、答申後に当時の町長であった金城義夫氏から「壕の中を通すことに意義がある」という決断がくだされ、壕内に人を入れるという考えのもと整備に向けて動き出す。

その後、1997年に「南風原陸軍病院壕整備公開検討委員会」が設置され、2003年に保存・公開の具体的な答申書が町に提出された。そして、内部に人を通すことに決めた20号壕は、以下の考えのもと整備が行われた。

- ①保存状態の良い箇所は現状のまま残す。
- ②崩落の恐れのある個所は補強物を入れ、原形に近い形で覆土する。
- ③崩落の著しい出入口付近はコンクリートで補強する。



写真2：一般公開されている20号壕内部の様子

※20号壕は第2外科壕群の中心的な壕で、全長約70m、幅・高さはともに約1.8mの壕。19号壕・21号壕と連結した貫通壕で、壕の中央部には手術場が置かれた。

5. 沖縄陸軍病院南風原壕の活用について

2006年度に20号壕の保全と公開にむけた整備工事が実施された。整備工事は、「当時の遺構を壊さない」、「発掘調査等のこれまでの調査成果を基に正確に復元する」ことを原則とした。また、同時に壕内外にパイプひずみ計（丘陵の地滑り観測用）、荷重計（壕内の天井部の剥離・崩落観測用）などを設置して安全管理も行っている。

そして、2007年6月から20号壕の一般公開が始まった。公開にあたって、20号壕は通路が狭い上、劣化しやすい土の壕であることから、壕の保全と安全確保が課題となった。そこで、「1度に壕内に入る人数は10名以内」、「壕を案内するガイドは南風原町のガイド養成講座を修了した者」、「団体の見学は予約制」などの方針を定めた。

その方針に基づき、南風原町ではこれまでに9回のガイド養成講座を行っている。そして、ガイド養成講座の修了者によって結成された「南風原平和ガイドの会」会員が交代で壕に常駐し、見学者への説明を行っている。ガイドの会会員約60名の中には、20代から80代までの広い年齢幅のガイドが所属している。行政の力だけではなく、多くの人々の力を借りて、戦争遺跡の活用に取り組んでいる。

20号壕の見学者は年間約1万人で、これまでに約10万人が訪れている。



写真3：20号壕入口の様子



写真4：見学者の案内の様子

2015年1月からは、壕内の再現臭気の体験も行っている（写真5を参照）。それまで、壕はガイドの案内のもと、「視覚」（壕内の見学）、「聴覚」（ガイドの案内）による体験を行っていた。そして、当時の「壕内のニオイ」を再現し、【嗅覚】による体験を追加することで、戦時中の病院を具体的に追体験することができると考えている。

この臭気体験は、戦争遺跡である壕の見学と合わせて行うことで、戦争の実相をより具体的に追体験するとともに、平和を考えて戦争を拒否し、遺されてきた戦争遺跡や証言を後世へと正確に継承していくことを目的として実施している。



写真5：再現臭気の体験の様子
（臭気を詰めた小瓶を嗅いでもらっている）

6. 終わりに

沖縄陸軍病院南風原壕群における保存・活用を中心に述べてきたが、これで南風原町の取り組みが終わったわけではない。年間約1万人が訪れる20号壕は公開による壕への負担が大きく、経年劣化がどうしても避けられない。そのため、日々安全確認を行いながら公開を行っており、保存と活用のバランスは常に考えなければならない。また、黄金森に残るそのほかの戦跡も十分な活用ができておらず、これらの活用も今後の大きな課題である。

沖縄陸軍病院南風原壕は1990年の文化財指定から27年、一般公開から10年が経過するが、その都度課題が生じ、様々な人の協力を得てより良い保存・活用ができるよう取り組んでいる。

戦争遺跡は残すだけでなく、活用することこそ大きな意義がある。悲惨な戦争から生まれた負の遺産である戦争遺跡にしか語れない強いメッセージがある。そして、戦争体験者から直接話を聞くことが困難になりつつある今日において、戦争遺跡の担う役割は増々大きくなっている。戦争遺跡を二度と造らせないために、過ちを繰り返さないためにも、戦争遺跡から学び、歴史を継承していくことが求められているのではないだろうか。

参考文献

- 南風原町史編集委員会編 1999年 『南風原が語る沖縄戦』 南風原町史第3巻戦争編ダイジェスト版
沖縄県南風原町
- 南風原町史編集委員会編 2013年 『戦世の南風原－語る のこす つなぐ－』 南風原町史第9巻 戦争編本編 沖縄県南風原町
- 南風原陸軍病院壕保存・活用調査研究委員会 1996 『南風原陸軍病院壕－保存・活用についての答申書－』 南風原町教育委員会
- 南風原陸軍病院壕群整備検討委員会 2003 『南風原陸軍病院壕－整備・公開についての答申書－』
南風原町教育委員会
- 吉浜忍ほか編 2010 『沖縄陸軍病院南風原壕』 高文研

宮古島市内での戦争遺跡活用事例

久貝 弥嗣（くがい みつぐ）

宮古島市教育委員会

1. はじめに

太平洋戦争時、宮古島市内では地上戦はなかったものの、10・10空襲や、5・4艦砲に代表されるよう甚大な被害をうけている。また、これらの敵からの攻撃以上に、マラリアや食料不足による飢餓によって亡くなった方は圧倒的に多い。これらの戦時下における宮古の状況の背景には、宮古島が他の島に比べ非常に平坦な島であり、飛行場の建設に良好な立地を有していたことや、宮古島への敵の上陸も想定されていたことなどが関係してといえる。結果的に、宮古島市内には、3つの飛行場が建設され、1945年までには約3万もの旧日本軍兵が配備されている。

宮古島における旧日本軍の主要な作戦は、敵の上陸地点に兵力を集中し、一挙に敵を壊滅される「水際作戦」を第一とし、上陸を許した場合は、第28師団司令部のおかれた野原岳の防衛を中心とした持久戦を展開するというものであった。そのため、宮古島で確認される戦争遺跡の多くは、これらの作戦上に位置するものが多いといえる。「水際作戦」に関連するものとしては、海岸線に構築された銃眼や、砲台、山砲などの陣地壕が点在し、野原岳周辺には、司令部壕をはじめとした多くの壕がアリの巣のように掘り込まれている。また、陸軍中飛行場、陸軍西飛行場、海軍飛行場に関連した戦争遺跡が確認されるのも、宮古島市の戦争遺跡の特徴の一つであるといえる。

また、体験談などからは、市内の集落には旧日本軍の部隊が展開し、民家を間借りしたりしている状況などが確認される。今回は、これらの宮古島市での戦争遺跡の状況を踏まえ、これらの戦争遺跡をどのように保存、整備、活用していくことができるのか考えていきたい。

1. 宮古島市における戦争遺跡研究略史

略史であるが、宮古島市における戦争遺跡への調査、研究、取り組みについてふりかえってみたい。

宮古島市の戦争遺跡に関する調査は、県内の他市町村と同様に戦争体験談の聞き取り調査から始まっている。1974年に沖縄県教育委員会が宮古島市内での戦争体験談について取りまとめたのを皮切りに、1978年に平良市、1996年に城辺町、2003年に上野村教育委員会が戦争体験談に関する市・町・村史を発行している。これらの体験談は、部隊長の宿舎跡や、炊事場、壕の跡を示すような記載が詳細にあり、これらの情報を手掛かりに、各地域ごとの戦時下の様相を考えていくことができる。また、1970～80年代にかけては、戦時中に宮古で兵役に従事した元兵士による手記や資料集が数多く発行されているのも、一つの時代的な傾向として捉えることができる。体験談は、現在でも戦争遺跡の重要な情報源であり、元兵士によって作成された手記や資料集は、戦争遺跡の性格や構築、使用部隊を考える上で重要な資料であり、戦争遺跡の調査、研究の基礎となる資料の集成が行われた時期である。

戦争遺跡そのものへの調査、研究としては、1988年の砂川幸夫、下地康夫氏らによる戦争遺跡に関する報告が行われており、宮古島市内の戦争遺跡調査、研究の始動期として捉えることができる。そのような中で、県内全域の動向とも連動するが、宮古島市内の戦争遺跡の調査の大きな展開期となったが、戦後50年の節目をむかえる1995年である。この年、宮古郷土史研究会では、宮古島市内では初めて戦争遺跡を網羅的に取りまとめを行った『宮古の戦争と平和を歩く』を発行している。本誌は、宮古の戦争遺跡の名称や概要をまとめた初例の冊子である。B5版の小冊子ではあるが、20項目の戦争と、関連史跡、用語解説、戦争史略年表（宮古関係）、参考文献などが報告されている。これと関連して、第22回平良市民総合文化祭では、戦争遺跡に関する講演と、戦跡巡りが実施されている。上野村教育委員会では、元兵士の方とともに中飛行場戦闘指揮所跡や、第28師団の司令部壕の調査などを積極的に行っている。全国的な動向としても、1995年3月、文化庁によって『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』が改正され、その中の「史跡」の項目に「戦跡その他戦争に関する遺跡」が加えられている。これにより、太平洋戦争における戦争遺跡も史跡として指定することが可能となった。県内では、南風原町が沖縄戦50周年事業「戦争遺跡（壕）の保存活用を考える」を実施し、シンポジウムや壕見学会を行うなどしており、国内全域で、戦争遺跡がクローズアップされた大きな展開期として位置付けられる。

その後は、宮古郷土史研究会の中で仲宗根将二氏による戦争に関する報告が行われるなどの活動を見て取ることができるが、大きな動きを見て取ることができるのは、戦後60年をむかえる2005年前後のころである。まず、2004年4月15日には、宮古島市内では唯一の戦争遺跡の指定文化財である「海軍特攻艇格納秘匿壕」が平良市の史跡として指定をうける。2004～05年ににかけては、沖縄県立埋蔵文化財センターが、宮古島市内で戦争遺跡の分布調査を実施している。この時の調査では、各戦争遺跡の詳細な位置や測量調査を実施しており、平良地区16、城辺地区26、下地地区4、上野地区11、伊良部地区5の総計62の戦争遺跡が報告されている。また、第32回平良市民総合文化財（一般部）『郷土史部門』では、戦後60年「講和と戦跡めぐり」が開催され、多くの市民が参加している。

2012年以降は、ほ場整備工事などの開発行為に伴う戦争遺跡の発掘調査事例が急増する。長南陣地壕での発掘調査をはじめ、イリノソコ陣地壕、西更竹の避難壕、村越陣地壕、福嶺後の壕などで記録・保存のための発掘調査が実施されている。特に長南陣地壕は、壕内から当時の柱や梁が設置されたままの状態に残されており、壕の構造を知る重要な情報がえられた。2015年には、沖縄県立埋蔵文化財センターが、詳細分布調査の報告をもとに、県内の戦争遺跡についてその性格・内容をより詳細に把握し、今後の文化財指定も念頭に置いた保存・活用の取り扱いを検討するために、より詳細な考古学的調査を実施している。同年、宮古島市教育委員会では、沖縄振興一括交付金事業『綾道』で戦争遺跡編の製作を行った。本事業では、先に報告されている戦争遺跡について確認を行うとともに、聞き取り調査も行った。聞き取り調査を通して、直接の戦争体験者以外でも、壕の位置をご存じの方は多く、現時点においてもその調査の有効性が感じられた。またその一方で、まだ未報告の戦争遺跡が数多く残されている事にも気づかされた。これらの調査成果の一部については、博物館での特別展示や講座を通して報告や展示を行っている。

2. 整備

前述したように、宮古島市では、沖縄振興基金一括交付金を利用して『綾道－戦争遺跡編－』の作成を行った。これに関連して、同紙で詳細されている戦争遺跡には、遺跡名を記した標柱や、説明版の設置を行っている。内部への立ち入りについては、危険が伴うため、説明版に立ち入りを制限する文言も付されている。

その他、宮古島市内の戦争遺跡については、「海軍特攻艇格納秘匿壕」が市の史跡に指定を受けているものの、内部見学ができるような整備は整っていない。また、『綾道－戦争遺跡編－』で取り扱っていない戦争遺跡については、標柱や説明版が未整備のものも多い。

戦争遺跡そのものではないが、出土遺物の保存処理について補足しておきたい。前述した長南陣地壕群の発掘調査では、柱や梁をはじめとした大小200以上の木製品が出土している。木製品は、虫や湿度などの管理が難しい資料である。そこで、宮古島市教育委員会では、本遺跡から出土した資料の一部を保存処理を行った。柱や梁がつながった状態で発見される事例が少なく、今後の学習活用や、長く資料を活用していくためには必要な業務の一つであり、今後可能な限りその数を増やしていきたいと考える。



写真 宮古南静園の機関銃壕の標柱と説明版

3. 活用～学校での平和学習の事例を中心に～

宮古島市内における戦争遺跡の主な活用方法としては、戦跡の巡検がほぼ主体をなしている。特に、慰霊の日の前後には、当教育委員会へも案内依頼が複数寄せられる。ここでは、活用に方法の一つとして、学校からの依頼をうけた戦争遺跡の巡検について紹介したい。

『綾道－戦争遺跡編－』を作成するにあたり、体験談や戦史資料を調べる機会が多くなった。私自身、戦争遺跡を遺構として、その形態などをとらえるだけではなく、より具体的な壕の使用方法や、構築・使用した部隊などへ視点をむけるようになった。そうしてみていくと、小さな集落であっても、そのほぼ全ての地域に、軍が部隊を配備し、民家を間借りし、井戸の周辺で炊事場をもうけ、周辺の丘陵地に避難壕を構築するなどの一連動きを追うことができることが分かった。これは、詳細な体験談や聞き取り調査が重要な情報源となる。このよう自身の経験も踏まえ、学校の平和学習として戦争遺跡を活用する際に、より地域を限定して学習を行うことの重要性に気づかされた。

具体的な事例としては、城辺の山田地区に地域を限定した学習活動を実施した。山田地区は、戦時中に、輜重兵第28連隊が駐屯した地域である。山田地区を選定した理由としては、体験談などで、部隊長や軍医などが間借りした民家跡などが現在でも特定でき、当時の山田地区の状況を理解するのに資料がそろっていた点と、見学を行うことができるほどの壕が山田地区内に位置していたためである。また、学校（西城中学校）自体も、戦時中は旧日本軍に接收され、司令部がおかれるなどの拠点とされていた。そのため空襲の対象とされることも多く、実際に被害を受けていることが沿革誌からもみてとれる。

平和学習の事前打ち合わせの段階で、当日までに指定した体験談をよみ、住宅地図にその情報などを書きこんでおくことを学校側へお願いした。

当日は、まず、学校の教室で、学校やその周辺地の戦中の状況などを戦史資料などを使って解説を行い、その後住宅地図を見ながら、徒歩で山田地区の集落内を散策した。比較的多くの散策ポイントが徒歩の範囲内に分布していたため、体験談の確認や、補足説明などを行いながら、学習活動を進めていった。最後に、集落のすこしはずれにある山田バタの壕群の中に入り、当時の壕の様子や、壕の構築方法、部隊の概要などについて解説を行った。

今回の学習方法の一番の目的は、普段から使用している学校や、その周辺地が戦時中に空襲があったり、何百もの兵隊が集落内で生活していた様子などを感じてもらうことにあった。実際に、その状況を頭の中でイメージしながら学習することは、具体的な事例などを数多く上げられなければならない、難しい部分も多くあるように感じる。しかし、実際の体験として、身近な地域の学習を行っていくことで、地域や家族、そして次の世代にも語りついでいくことができるような一つのきっかけになればと考える。



- ①山田バタの壕群 ②岩崎眞一等兵の慰霊碑跡 ③兵舎・炊事場跡 ④經理担当宿泊宅 ⑤通信隊宿舎跡
 ⑥林間学校跡・見張り櫓跡 ⑦兵舎跡 ⑧横山大佐・宮川少佐宿泊宅 ⑨中尉宿泊宅 ⑩壕 (未確認)
 ⑪谷山雅哉 (医大尉) 宿泊宅 ⑫壕 (未確認) ⑬火葬場跡 (第28師団通信隊)

山田地区の戦争遺跡と関連地位置図

4. おわりに

近年、宮古島市内では、戦争遺跡の調査事例が増加しているが、それ以上に新発見される戦争遺跡は多い状況にある。これは、体験談を精査していくとともに、聞き取り調査を充実させていった成果の一つであると考ええる。戦争遺跡は、自然の岩盤や粘土層を掘り込んで構築されることが多いため、自然の落盤によってその痕跡が見えなくなることもある。戦争遺跡のこのような性格を考えるならば、戦争遺跡の分布調査を行い、これら一つ一つの壕の図面や写真の記録を後世に残していくことのできる重要な時期であると考ええる。

整備という面では、僅かずつであるが、市内の戦争遺跡に標柱や説明版の設定を行っているところである。『綾道 - 戦争遺跡編 -』は思った以上に、問い合わせも多い反共のあったシリーズである。これは、戦争遺跡への関心の高さを伺いしる一つの要素であるといえる。

最後に、活用の方法について整理してみたい。戦争遺跡の種類や定義については、2頁から9頁に記したとおりである。しかし、戦争遺跡を広い意味で捉えるのならば、部隊が間借りしていた民家や、炊事場を設けた井戸なども、周辺部としてその範囲に含めることも可能であろう。戦争遺跡を、地域の学習として活用していく一つの方法として、先にあげた学校の学習活動の事例は有功な手段であると考ええる。活用方法については、レーザー測量などを用いた3Dの活用や、ジオラマ、遺跡から出土した遺物の学習など様々な可能性があると考ええる。それぞれの学習にあわせた戦争遺跡の活用方法についてより積極的な意見交換を行うことで、戦争遺跡の可能性も広がっていくものと考ええる。

【参考資料①】

『太平洋戦争における宮古島戦没者名簿（都道府県別）』（宮古市町村会 1995 年）のデータを基にした旧日本軍兵士の死因、月別死亡者数、部隊別死亡者数のグラフ（菱木勇一作成）

表 1 戦没者の死亡要因図（死亡者総数 1956 人）

表 1 をみると、従来から指摘されるようにマラリアや飢餓による死亡を示す病死（586 人）、公病死（678 人）の割合が 65% と非常に高い割合を示している。また、空襲などの敵の攻撃によって死亡した戦史の割合は 16%（310 人）である。

表 1

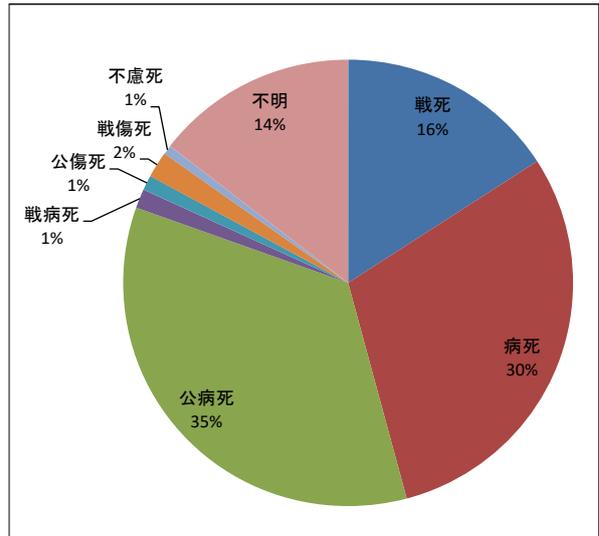


表 2 月別死亡者数

1944 年の 8 月頃から死亡者数が増加傾向にあり、組織的な沖縄戦が終結した 6 月以降にも死亡者数は増加し、終戦後の 1945 年 9 月にピークをむかえていることが見て取れる。

表 3 部隊別死亡者数

部隊の兵員数にもよるが、歩兵第 3 連隊（439 人）、歩兵第 30 連隊（406 人）、山砲兵第 28 連隊（164 人）で全体の半数以上を占めていることが見て取れる。その要因については、今後検討が必要。

表 2

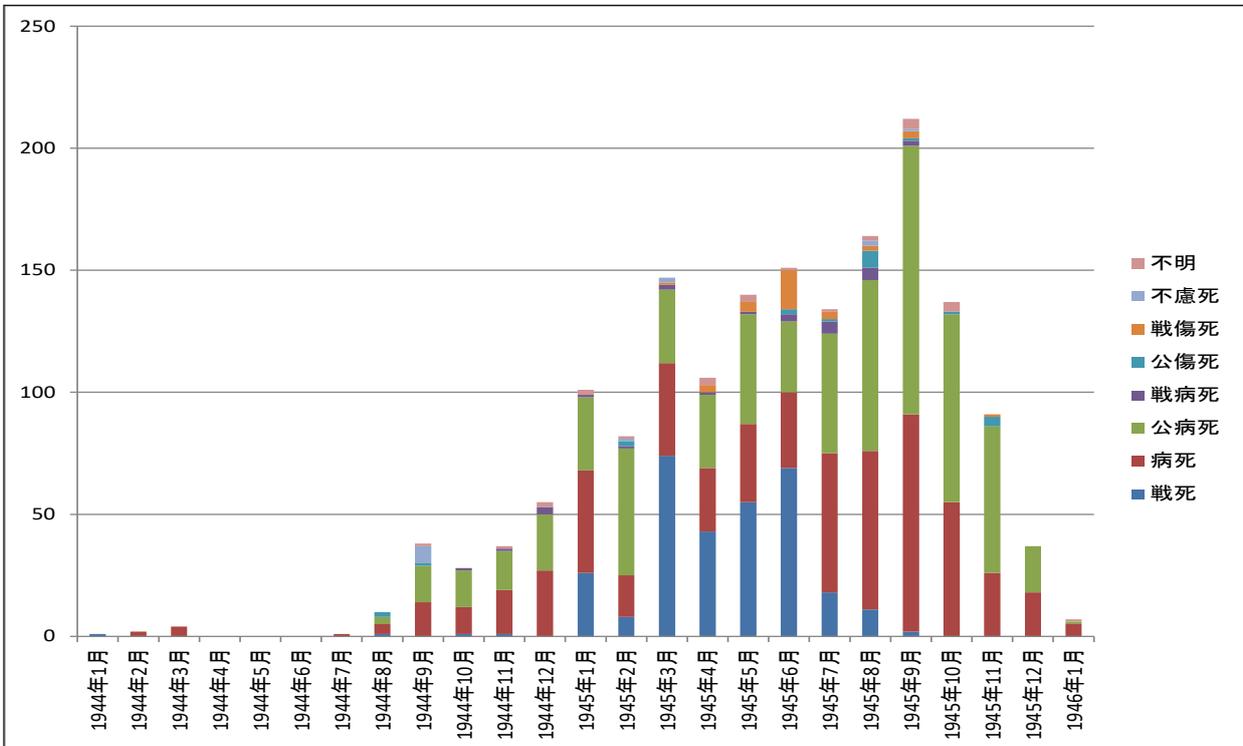
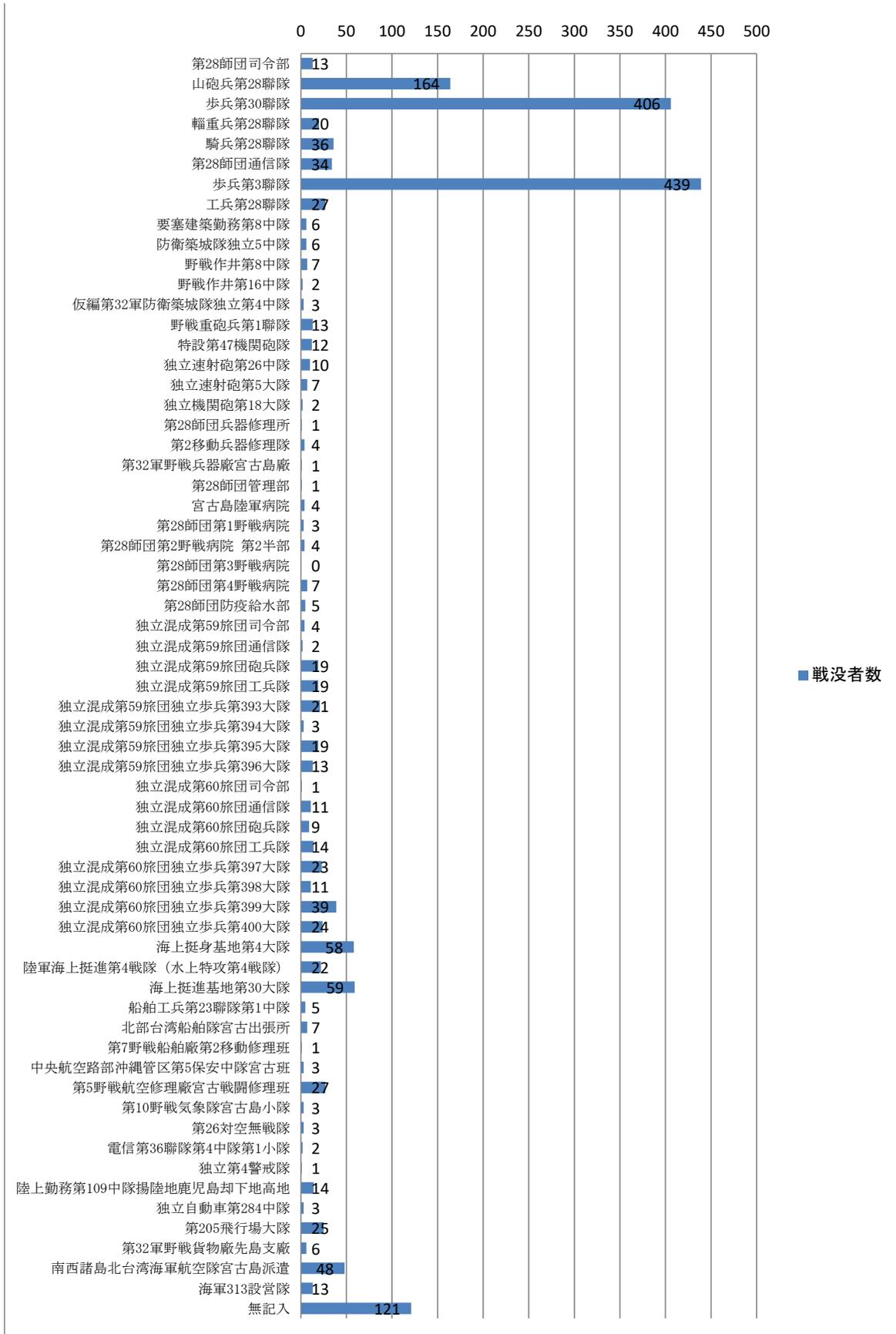


表 3



【参考資料②】 宮古の戦争遺跡関係書籍・論考（山口直美作成）

* 『宮古の戦争と平和を歩く』（宮古郷土史研究会 1995 年）タテ p14 ～ p18 に追記するかたちで作成

<本・報告書等>

- ・瀬名波 栄 1966 年『宮古島戦記 太平洋戦争記録』
- ・野口 退蔵 1972 年『宮古島建築兵始末記』永文堂
- ・沖縄県教育委員会 1974 年『沖縄県史 10 沖縄戦記録 2』 沖縄県教育委員会
- ・瀬名波 栄 1975 年『太平洋戦争記録 先島群島作戦（宮古篇）』 先島戦記刊行会
- ・宮古島巡拝記 三七会 1978 年
- ・平良市史編さん委員会 1978 年『平良市史第四巻資料編 2 近代資料編』平良市役所
- ・宇野 常彦 1979 年『征路六年（ガリ版）』
- ・西江 重樹 1981 年『宮古に甦る』 海上挺進基地第四大隊
- ・宮永 次雄 1982 年『沖縄俘虜記』 国書刊行会
- ・宮古の会本部 1984 年『春秋三十九か年 沖縄派遣第 28 師団第 4 野戦病院（豊第 5683 部隊）宮古の会機関紙 “清流” 第 14 号』
- ・神田 文男 1985 年『遙かなる宮古島 ー思い出の戦跡を訪ねてー』 朝日カルチャーセンター
- ・歩兵第 30 連隊史編纂委員会 1988 年『歩兵第 30 連隊史』
- ・龍沼 梅光 1989 年『北満・宮古島戦記 戦局と将兵の心理 無名戦士の記録シリーズ』
- ・森本 忠夫 1992 年『特攻 外道の統率と人間の条件』 文藝春秋
- ・池村 一男 1983 年『戦塵の煽りて』
- ・宮古市町村会 1995 年『太平洋戦争戦没者を祀る慰霊の塔』
- ・宮古郷土史研究会 1995 年『宮古島の戦争と平和を歩く』 麻姑山書房
- ・城辺町史編纂委員会 1996 年『城辺町史第二巻戦争体験編』 城辺町役場
- ・宮古市町村会 1996 年『太平洋戦争における宮古島戦没者名簿（都道府県別）』
- ・関東甲信越田島隊有志の会 1997 年『今次太平洋戦争における宮古島防衛戦に参加して』
- ・大下 茂樹 2000 年『海軍第 313 設営隊戦記と思い出』
- ・上野村教育委員会 2003 年『村民の戦時・戦後体験記録』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005（平成 17）年『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（V）－宮古諸島編』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集
- ・日韓共同「日本慰安所」宮古島調査団 2009 年『戦場の宮古島「慰安所」12 のことばが刻む「女たちへ」』 洪口伸
- ・宮古島市教育委員会 2011 年『宮古島の岩陰遺跡・沖縄県宮古島市内遺跡発掘調査』 宮古島市文化財調査報告書第 4 集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2015（平成 27）年 3 月 『沖縄県の戦争遺跡 ー平成 22 ～ 26 年度戦争遺跡跡遺跡詳細確認調査報告書一』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
- ・宮沢 貞子 2015 年『揺れる世界に平和を』 アント出版
- ・古川 薫 2015 年『君死に給ふことなかれ 神風特攻龍虎隊』 幻冬舎
- ・平良市 発行年不明『都道府県別納骨者名簿』

< 『宮古研究』 >

- 岡本恵昭 2000年 研究余滴「元震洋特攻八木部隊の概要」『宮古研究』第8号
- 岡本恵昭 2004年 「資料公開・宮古島に於ける戦争資料「霧生藤吉郎関係資料」「中尾藤雄関係資料」
『宮古研究』第9号
- 宮古島市民総合文化祭（郷土史部門） 2015 「フォーラム 戦後70年と宮古」『宮古研究』第13号
- 報告1 久貝弥嗣 「戦争遺跡の調査を通して学んだこと」
- 報告2 山里智子 「宮古の子供たちの未来を守るために今考えること」
- 報告3 下地和宏 「戦後70年、宮古の自然と文化を考える」
- 総合討論
- 久貝春陽 2015年 研究余滴「近年の戦争遺跡調査の動向」『宮古研究』第13号
- 久貝愛子 2010年 「14歳で遭遇した太平洋戦争」『宮古研究』第11号
- 砂川幸夫 1988年 「宮古の戦争遺跡について」『宮古郷土史研究会会報』No.55

< 『宮古島市総合博物館紀要』 >

- 岡本恵昭 「海軍挺身隊員中尾メモの公開について」『宮古島市総合博物館紀要』第4号
- 中尾藤雄 「元陸軍海上挺身隊『中尾メモ』全文紹介 - ①特攻艇員の日記より -」『宮古島市総合博物館紀要』第5号
- 仲宗根將二 「戦後50年宮古の現状と課題～自然と文化の変容～」『宮古島市総合博物館紀要』第6号
- 仲宗根將二 「回想の戦中平良（＝宮古）のまちと周縁～疎開・教育・暮らしの周辺」『宮古島市総合博物館紀要』第19号
- 久貝弥嗣・山口直美・菱木勇一・西里咲子・川満広紀・森谷大介 「宮古島市内の海軍砲台について」『宮古島市総合博物館紀要』第20号
- 山口直美・久貝弥嗣 「戦史資料にみる海軍飛行場と陸軍中飛行用の利用」『宮古島市総合博物館紀要』第21号

< 宮古郷土史研究会『会報』 >

- 砂川幸夫 1988年 「宮古の慰霊碑をめぐる」『会報』No.54
- 下地康夫 1988年 2月定例会「宮古の戦争遺跡について」
- 下地康夫 1993年 「宮古の戦跡めぐり（試案）」『会報』No.84
- 下地康夫 1994年 「宮古の戦跡めぐり」『会報』No.87
- 平良新亮 1995年 「戦争とは何だったのか - 戦後50年を省みて -」『会報』No.90
- 下地和宏 1995年 「城辺町民の戦争体験について」『会報』No.91
- 下地康夫 1995年 「宮古の戦跡予備調査」『会報』No.91
- 砂川 1995年 「講演「宮古の戦争と平和」と「戦跡めぐり」を実施（11.26）」『会報』No.93
- 仲宗根將二 1998年 「宮古の戦争<その1>～人的・物的被害の概要～」『会報』No.109
- 仲宗根將二 2000年 「宮古の戦争<その2>～「皇民教育」の終焉～」『会報』No.116

仲宗根將二 2001年「宮古の戦争<その3>～日本軍の性奴隷「従軍慰安婦」～」『会報』No.125
「第32回平良市民総合文化財（一般の部）『郷土史部門』戦後60年「講和と戦跡めぐり」No.148
久貝弥嗣 2012年「長南陣地壕発掘調査中間報告」『会報』No.190
久貝弥嗣 2012年「(仮称)吉田の陣地壕について」『会報』
砂川史香 2014年「宮古南静園の戦跡見学と講和の紹介」『会報』No.203
寺崎香織 2014年「戦争とは何か～モノから考える～」『会報』203
久貝弥嗣 2015年「新発見された戦争遺跡の中間報告～長南陣地壕・村越陣地壕を中心に」『会報』206
仲宗根將二 2015年「宮古の戦争・その4「疎開」」『会報』208
事務局 2015年「海軍313設営隊陣地壕跡の見学について」『会報』208
山本正昭 2015年「近年における宮古諸島の戦争遺跡を取り巻く状況について」『会報』No.209
事務局 2015年「戦跡を訪ねるPart2～旧日本軍司令部壕跡、御真影奉護壕、西更竹司令部壕」No.209
事務局 2015年「戦跡を訪ねるPart3～来間島の避難壕跡と山砲台跡～」『会報』210
事務局 2015年「第10回宮古島市民総合文化祭 市内戦争遺跡の巡検」『会報』No.210

<論考>

- ・山本正昭 2008年「宮古の戦争遺跡－その実態について－」『宮古の自然と文化』第2集
- ・山本正昭 2015年「沖縄県の戦争遺跡調査とその課題－沖縄県戦争遺跡詳細分布調査以降の動向から読み解く」『季刊考古学別冊23 アジアの戦争遺跡と活用』雄山閣

総合討論

〈進行〉これから総合討論のほうを行ってまいりたいと思います。総合討論では先ほど報告を行いました久貝を進行とし、山本さん保久盛さんらとともに討論を深めて参りたいと思います。それでは久貝さん総合討論の進行をよろしくお願い致します。

〈久貝弥嗣〉それでは、これから総合討論を始めていきたいと思います。

今回は、新しく発見された壕の調査の成果などではなく、保存、活用、整備に視点をあてていますので、通常の戦争遺跡の講座とか報告とはまたちょっと異なる趣旨となっています。しかし、実際現場で調査を行っていくなかで、発掘調査をした壕をどのように残していくことができるかは非常に重要な問題であると考えています。今回は、戦争遺跡の保存・整備・活用に焦点を当てて、私と山本さん、保久盛さんの三名で今回のテーマについて内容を深めていきたいと思っています。

事前にご質問を頂いたのは一件のみで、これについては質問の内容から最後に取り扱う事にしたいと思います。これとは別に、報告の中で難しい部分もあったと思いますが、御質問等ありましたら挙手にてお願いします。おりませんね、それでは総合討論のほうにうつってまいります。

総合討論では、今回の副題にもあります保存・整備・活用の三つのテーマごとに討論を行っていきます。まず保存について取り上げていきます。保存という部分で私が非常に気になったのは、山本さんの報告の14ページの7行目（本書の13ページ7行目）に、「厳密な実数がすぐはじき出せない主な理由は埋蔵文化財としての記録保存の対象となる遺跡を文化庁は地域において特に重要なものと位置付けている事から、全ての戦争遺跡は記録保存の対象とはなっておらず、遺跡分布図にも反映されていない事が要因となっている」と書かれております。これは戦争遺跡の取り扱いについては、地域によって特に重要なものと位置づけられており、各市町村で取り扱うレベルが違ってくるという事を示しているかと思います。逆に言えば、戦争遺跡の埋蔵文化財での位置づけがあいまいな状況にあるとも言えます。

県内ではこれまでも色々なシンポジウムも開かれており、戦争遺跡への認識は非常に高まっていると思います。このような全県的な流れもふまえて山本さんのほうから県内の戦跡の調査に関する近年の動向についても教えていただきたいと思います。

〈山本正昭〉沖縄県内での近年の戦争遺跡の調査状況から言いますと、実際に発掘調査された事例が激増しているかというところではなくて、微増ですね。わずかには増えているというような状況にあります。確かに沖縄県外市町村内で分布調査などの戦争遺跡の調査は、実際のところは確実に増えてきてはいます。それと同時に発掘調査を行った、もしくはこれから行うといった自治体もありますが、やはり市町村によって温度差があるというのが正直なところではないかと思います。例えば今日、保久盛さんの報告にありましたように南風原町ではかなり積極的に発掘調査を行っている状況が見られる一方で、全く発掘

調査事例が増えないような自治体もあります。そのような視点から、先程温度差という風に申し上げたんですけれども、この温度差が何からきてるのかという事も含めて考えていけないといけません。この要因の一つとして、まだ調査の方法論（ノウハウ）が共有化されていないという実状もあるのではないかと思います。一旦、発掘調査を思い切ってやると、二年目、三年目という状況が出てくるのではないかと思います。しかし、そういう発掘調査のノウハウが蓄積されないことが、発掘調査の事例が増えていかないという現在の状況に関係しているように思われます。

〈久貝弥嗣〉山本さんありがとうございます。皆さん今回の資料集の表紙を見ていただきたいと思います。これは長南陣地壕の発掘調査の一風景で、測量機材を使用して壕内の測量調査を行っています。実際の戦争遺跡の調査は、いつ壕内の天井や壁面崩落があるか解らない、危険性の高い調査であると言えます。この点において、南風原町では保久盛さんのほうから 26 ページ（本書の 24 ページ）にまとめられていますように、これまでの戦争遺跡の測量調査、発掘調査、地質調査など保存活用に向けて様々な調査の経緯が報告されています。この点についてもう少し具体的にお話をいただきたいと思います。

〈保久盛陽〉今回の私の報告では、南風原町における壕の文化財指定の事など話しましたが、この文化財指定というものも 1990 年になって急に動き出したわけではありません。その前段階として 1983 年から 1996 年にかけて全字で戦争証言の聞き取り（戦災調査）が行われ、この調査中に病院壕に関する情報も多く集まりました。

また、黄金森に関しては、70 年代から 80 年代にかけて当時の厚生省が主体となった遺骨収集が行われています。遺骨収集は遺骨と遺留品を収集することが目的であるため、壕の保存や記録といったことを考慮せずに、大型重機で掘っていきます。そのため、壕を破壊するようにして収集活動が行われていました。そういった中で南風原町の文化財保護委員を中心に、このままでは壕でどういったことがあったのか、壕そのものが持つ事実（歴史）というものが失われる可能性があるという懸念が生じ、陸軍病院壕の調査を行おうという流れになります。そして、この動きに、戦災調査を行ってきた動きも加わり、陸軍病院壕を文化財指定して守ると同時に保存活用に向けた調査を行っていきましょうということになります。

黄金森にある壕は先程話をした遺骨収集の他にも、戦後に埋蔵金騒動がありました。騒動の際、軍がここ（黄金森）に埋蔵金を隠したのではないかという噂を信じた人々が重機を持って来て穴を掘ったそうです。25 ページ（本書の 23 ページ）に壕の配置図がありますが本部壕と呼ばれる壕は、その結果位置がわからなくなったと言われております。以上の遺骨収集、埋蔵金騒動などによって多くの壕の位置がわからなくなりました。

そこでまずは測量調査が行われます。黄金森の丘陵の中で、どういった高低差があるのか、どのあたりに壕がありそうなのかという事をこの測量調査できちんと確認します。そして次に実際に壕があるのかないのかを確認する為の試掘調査、壕の内容を把握するための発掘調査を行います。特に 20 号壕に関しては非常に状態が良かったということもあり、

詳細な確認調査を行っています。このような考古学的な調査を積み上げていくことが、公開活用の基礎になったのだと思います。

〈久貝弥嗣〉保久盛さんありがとうございます。今、保久盛さんのほうから測量調査から、壕の場所を探し出すというような話がありました。南風原の壕の確認調査については琉球大学の考古学研究室が行っています。僕も保久盛さんも同じ大学の出身ですので多分同じように南風原での調査を行ってきたのではないかと思います。実際にどのようにして壕の位置を探す方法ですが、現在地表に確認されない壕というのは天井が落ちてるとゆうのがひとつの前提があります。そこで測量調査を行うなかで、窪地になっている場所に目星を付けます。そしてこのような少し窪んでいる場所にトレンチを入れて壕の形が出るかどうか、そういった試掘調査を行いながら地道に壕の確認調査を行っていきます。そのような成果が現在の沖縄陸軍南風原病院壕の保存や整備の一端になっていっているのかと思います。けれども非常に壕の発掘調査とゆうのは、他の現場に比べて大変過酷な調査であったという思い出があります。それとは別に記録保存という意味では分布調査も一つ大きな役割を果たすのではないかと思います。山本は県内のいろんな市町村で分布調査も行っていますが、これらの分布調査や記録保存調査も含めて考古学という分野から解っていく成果、逆に考古学のほうからだけでは解らないものなどについて山本さんのほうからご意見を伺いたいと思います。

〈山本正昭〉考古学の調査で解るのは、壕の構造、具体的にどういう道具を使って構築したのかという構築方法、そして何名ぐらい投入したのかとか大体の予測をつけるということについて考古学的な発掘調査というのはかなり有功であると思います。あと、発掘調査で出土する生活道具などの遺物や、場合によっては陣地として使用した軍関係の遺物の中からその壕の生活、どういう形で使ってたのか、あとはその壕の変遷を考えていくことができます。最初は住民が避難壕として使っていた状況から、軍が関与して住民を追い出して、そこが陣地壕に変わっていくという壕の変遷について、発掘調査から解明していくことができます。このような物から見る変遷という事に関しては考古学の発掘調査は非常に強みがあると思います。しかし、考古学の成果から全部が解るかと言いますと、当然解らない事も沢山あります。聞き取り調査からはこの壕は誰が入ったのか、どういう状況だったのかを明らかにしていくことができます。そして、保久盛さんの報告にもありましたけれども、壕の中の臭気などは、発掘調査では解らない情報になってきます。そのような物からとらえにくい側面に関してはやはり聞き取り調査、陣地日誌等で見られる文献資料などが非常に有効な壕を知る手段になってくるのかなと思います。ですので、考古学的には調査だけすればそれで全てが解るというわけではなくて、その発掘調査を契機にしてその壕の総合的な状況を把握するという形で戦争遺跡の実態というのを明らかにする事ができればと個人的には思っています。

〈久貝弥嗣〉山本さんありがとうございます。同じ様な質問になりますが、南風原町で行って来た壕の調査事例などについてお話しいただけますか。

〈保久盛陽〉南風原町における壕の調査方法については 23 ページ（本書の 21 ページ）下の写真の発掘された津嘉山司令部壕群の写真をみていただきたいと思います。南風原町の大部分の地質は泥岩層です。泥岩は風化に非常に弱く、放っておくと落盤したり壁面が崩れたりして、崩壊が進んでいきます。このような地理的環境から壕を調査する際にはオープンカットとありますが、壕の天井部分を重機で掘削して天井を無くす調査方法を用いて、作業員や、調査員の安全を確保して作業を行っています。今日の山本さんの話の中でも、各市町村における戦争遺跡の発掘調査の状況については温度差があるということでした。南風原町にとって戦争遺跡は 1990 年の陸軍病院壕の文化財指定を行って以後、南風原町の歴史を読み解く上で大切な遺跡であると考え、山本さんの報告の中にありました、地域にとって特に重要な遺跡ということで、戦争遺跡を捉えております。最近も津嘉山で壕が見つかったため、発掘調査を行っているところです。調査は、安全確保を優先して進めております。

〈久貝弥嗣〉保久盛さんありがとうございます。お二人の話を伺っていると、戦争遺跡の調査に関する方法であったりマニュアルというのがまだ確率されていないというのが一つ、現在の状況にあるかと思います。この点において、安全の確保は、最も重要な要素であると言えます。ちょっとニュアンスが変かかもしれませんが、これまでの調査経験値といった部分に基づきながら発掘調査を行っているように思います。安全確保という部分では、先程保久盛さんから話しのありました、オープンカットという方法も一つの戦争遺跡の調査の方法であると言えます。ただ私も一度長南陣地壕の発掘調査で行って見ましたが、周辺の地形や、調査期間（緊急調査）という面でケースバイケースであると感じました。このような発掘調査の方法などについて、色々と情報を共有していく必要があると言えます。

もう一点、先程山本さんのほうから話がありましたけれども、壕の調査に際して、聞き取り調査は大事になってくると言えます。今年は、戦後 72 年を迎えますので当時生まれた方は 72 才、10 才の方でも 82 才、非常に高齢化が進んでいく中で聞き取り調査は本当にギリギリの段階かなと思います。

その一方で、現在、戦争遺跡の分布調査を行う上で、実際の戦争体験者でなくても、戦後壕などの戦争遺跡の場所に行ったり、そういう話を聞いたりする方も非常に多いです。ですので、分布調査を行う上ではまだまだ聞き取り調査というのは有効な調査方法であると私も思います。つまり、こういった地道な分布調査であったり記録保存調査を積み重ねていく事が後世に戦争遺跡を残していく一つの重要な事であると言えます。

次に整備の部分について色々お話しを聞いていきたいと思います。まず私が気になったのは山本さんの資料の 16 ページ（本書の 15 ページ）に、二番の修復・整備された戦争遺跡という項目がありますが、その 5 行目の一番最後の部分から、「当該壕いわゆる南風原の陸軍病院壕の様に現状をそのまま活かしての修復、整備、公開は多大な費用を要することから沖縄県内において同様の公開事例は他に見られない。」と記されています。南風原陸軍病院壕第 20 号壕についても、保存、整備していく上では、多大な費用が有していると思

います。また安全管理の問題は、整備、活用を行う上で、クリアすべき大きな課題であると考えます。この点について県内の戦争遺跡の整備の事例について山本さんのほうでもう一度振り返って頂けますか。

〈山本正昭〉私が報告いたしました沖縄本島内で積極的な公開がなされている事例は豊見城市の海軍司令部壕と保久盛さんの報告がありました南風原町の沖縄陸軍病院壕の 2 例です。この 2 例は非常に積極的に内部まで公開しており、当時の状況が疑似体験できる非常に重要な場所ではあるといえます。しかし、南風原町の 20 号壕以降に同様な積極的に公開してる場所があるかという、今の所ありません。つまり 20 年近く新たに積極的な公開をしてる事例が増えていってない現状があります。その一方で簡易な整備がされてる戦争遺跡をいくつか事例を挙げさせていただきました。これは壕の前に簡易な案内板を設置したり、遊歩道を設置するというような整備が行われています。整備にあたっては時間も費用の負担を伴うため、どうしても先の 2 例のような大規模な整備を行い公開することは現状として困難な状況にあるといえます。今、簡易な整備がされた事例を久貝さんのほうからも二つぐらい挙げておりましたが各市町村の文化財部局の中で戦争遺跡を整備するという状況を見ても、自治体全体で活用整備を行っていくのか、部局の中だけで整備を行っていくのかで、その整備の仕方、方法が変わってくるといえます。このような各自治体の戦争遺跡の整備公開の仕方が大きく変わってくるという事が色々な事例を調べながら思ったところであります。

〈久貝弥嗣〉山本さんありがとうございます。繰り返す様ですがけれども整備のための費用や安全面の確保という問題は戦争遺跡を活用する上で大きな課題であると言えます。ただそういったものをクリアした南風原町の陸軍病院壕第 20 号壕について、保久盛さんの報告で 27 ページに、年間見学者数が 1 万人でこれまでに 10 万人の見学者がいるというのは非常に驚きの数字です。最近の新聞報道で宮古島市総合博物館の年間来館者数が 1 万 4 千人とありましたので、非常に多くの方がその 20 号壕を見学されてる事がわかります。この年間 1 万人という見学者について具体的にどういう内訳か保久盛さんにお聞きします。

〈保久盛陽〉この 1 万人の来壕者の内訳としましては、大体約 9 割に当たる方が町外の方です。そして町外の中の多数が県外の修学旅行となっています。逆に、この 9 対 1 の、1 のほうの町内の来壕者に目を向けると、その内訳は平和学習で訪れる小中学生や学童クラブが主体となっています。町内の一般の来壕者というのは非常に少ないということが言えます。現在、20 号壕を平和学習の場として活用するという点では、町外、町内を問わず活用しやすい状況にあると思います。しかし文化財は、やはり地域に根ざしたものですので、20 号壕の案内を行っている南風原平和ガイドの会をはじめとした地域の協力や認識、認知がなければ保存活用はなかなか長く続かないという面があると思います。ですので、この 9 対 1 の 1 の割合を今後少しでも多くするというような取り組みを考えなければいけないと思います。

〈久貝弥嗣〉1 万人の内訳を聞いて、さらに驚きました。それでも 1 割にある町内利用者の

教育施設としての目的が一番であるというご報告は非常に重要な意味を持っていると思います。逆に9割が、町外、いわゆる県外からの修学旅行生が実際9000人って事ですかね。

〈保久盛陽〉少なくとも過半数を超えますね。

〈久貝弥嗣〉この点については、県外からの戦争遺跡を活用した平和学習への需要が非常に高いと言えるのではないかと感じました。

県内では、大体6月～8月にかけて、多くの団体が戦争遺跡を活用した平和学習を行う機会も多くなります。逆に言うと、非常に季節的な活用であるとも思えます。このような点も含め南風原町では約1万人もの見学者数があるのに対し、他の市町村でも同じ様な事が言えるでしょうか、沖縄戦と言ってもそれぞれの市町村で歴史的な背景の違いもあると思いますが、その点について山本さんの方からご意見を頂きたいと思います。

〈山本正昭〉久貝さんの報告も見てちょっと思ったんですけども、南風原町と例えば宮古島市における戦争遺跡へのニーズという点においては大きな差があるのだと思いました。つまり、県外から平和学習を目的として宮古島へは来ないと思うんですよ。その理由としては、やはりその激戦地になってる沖縄本島だからこそ、平和学習の題材として南風原町の沖縄陸軍病院壕碑へのニーズが高まるのだと思います。やはりそういう歴史的な背景が平和学習目的で県外から多数の訪問者が訪れる要因になっていると思うんです。それでは、宮古島市のほうで戦争遺跡を整備していく際に、南風原町と同様の状況になるのかというと、それとは全く逆のパターンになるのかなという風に感じました。つまり宮古島市の場合、市内の方々の平和学習での利用の割合が高くなり、県外からの利用の割合は低い状況になって南風原町の比率とは逆に宮古島市民が9になって県外が1の比率を示す状況になるものと想定されます。誰を対象に戦争遺跡を整備していくのかを市町村が分析していかないと全く的外れな整備になっていく可能性もあるのではないかと思います。今後、宮古島市で戦争遺跡をさらに整備していく際には地元の視点からの整備というのが非常に重要な視点になってくるものと考えられます。このような整備の状況について久貝さんのほうから逆にご意見があればお願いします。

〈久貝弥嗣〉おっしゃる通りだと思います、歴史的な背景は重要だと思います。南風原町の陸軍病院壕がこれだけ県外から訪れる方が多いのは、やはり地上戦の一つの激戦地でもあったという歴史的な背景もあるのではないかと思います。ただ必ずしも9割を占める県外からの見学者だけを対象にするのではなく、保久盛さんの報告にもありました地元の学習への活用に結び付けていく事も大事だと感じました。また、各市町村ごとの歴史的な背景にあわせた戦争遺跡の整備も大切な事だと感じました。

話が変わりますが、先程から度々指摘のあります安全面の確保についてお聞きしたいと思います。保久盛さん、20号壕は公開して何年経ちましたでしょうか。

〈保久盛陽〉10年になりますね。

〈久貝弥嗣〉10年経った現在、20号壕の安全面の確保はどのような方法がとられているのでしょうか。

〈保久盛陽〉公開から10年経っております。壕内には今日お話したように地滑りを観測する機器や崩落の観測をする機器などをいれております。それとは別に、温湿度計もいれています。それは泥岩が乾燥であったり湿気、水分にも弱い性質をもっていますので乾湿が繰り返されていないか確認するために設置しています。また、壕には受付があると報告の中でも話しましたが、この受付に壕の管理人がいます。その管理人が毎日機材のチェックをするのと同時に目視で確認しています。例えば壁面がポロポロ落ちてないかとかそういう事も含めて観察しております。公開から10年経つ現在、壕にどのような状況変化がおきているのか見直す時期にきているのではないかという意見が文化財保護委員会より出されており、調査を行っています。過去には、93年に発足した南風原陸軍病院保存活用調査研究委員会で、壁面の強度調査などを行っています。現在、改めてこの壁面の強度調査などを実施しており、10年以上前と比べてどれだけ壕の壁面の強度が変化しているのか、これまでの地滑り観測の機器や落盤の危険性を観測する機器のデータを見直して、こういった変化が10年の間で表れているのかいないのかという事を含めて今現在見直す時期がきております。

〈久貝弥嗣〉一点だけ確認したいのは、10年分の計測データがあるという事ですか。

〈保久盛陽〉そうですね。ちょっと今回の報告の中では触れることが出来なかったんですけども、この地滑り観測用の機器、パイプひずみ計というものをいれてますけれども、こういったパイプひずみ計、落盤観測用の荷重計の記録の取りまとめを専門的な業者が行っており、最終的に報告書という形でまとめてもらっています。その報告書が10年分あり、その中で業者のほうからで問題点なども指摘していただいています。20号壕の安全面の管理についてはこのような専門業者とも協力しながら努めております。

〈久貝弥嗣〉10年分のデータの蓄積は、これからの戦争遺跡の活用を行っていく上でとても重要なデータであると思います。壕内部の崩落は人命に関わってきます。繰り返しになりますが、戦争遺跡の活用では安全面の確保は難しい課題であると言えます。

お時間も少し迫ってきたので次に、活用の部分に話を移していきたいと思います、実際活用していく中で先程保久盛さんの報告にもありましたが、多くの修学旅行生が20号壕も含めて県内の色々な戦争遺跡を訪れています、それだけ不特定多数の人が県内の戦争遺跡を訪れてるという事になります。現在、戦争遺跡を活用していく中での課題について山本さんにお聞きしたいと思います。

〈山本正昭〉平和学習で戦跡巡りというのは沖縄県内でしたら大体もうこの時期(6月初旬)ぐらいからやってる所が非常に多くあると思います。活用の仕方の展開という点においては、まず戦争遺跡が残されていることが大前提にあります。遺跡が残されていて、それを公開するために調査、そして整備を行うというようなプロセスを経て、活用していく事が大事な点であると思います。それでは、平和学習での戦跡巡りをどのようにして充実させていく中で一つの課題が出てきています。大きな課題としましてはやはり戦争体験者が大分減ってきている点があげられます。戦争体験が聞き取りにくくなっているという状況も

さることながら、その中でどう伝えていくのかというところで大きな課題があると思います。今日、久貝さんの発表の中で山田地区の戦争遺跡を地図上にプロットしている図がありました(33ページ)(本書の30ページ)。壕などの戦争遺跡はプロットはできますが形としてはなかなか残らない。例えば部隊の宿舎の跡や建物の跡、将校が宿泊したお宅などの戦争遺跡に関連する場所の空間的な広がりには重要な要素だと思います。これを壕だけで見ると三、四ヶ所ぐらいしかプロットが出来ませんが、それ以外の関連した場所についてもポイントをあげられていけば相当情報として拾えるというのがこの図だと思います。つまり何が言いたいのかというと壕などの戦争遺跡というのは言ってみれば点でしかないわけですが、しかし、このような戦争遺跡に関する場所をプロットすることによってこれが空間として、つまり面として再現する事が出来ます。点として捉えるのは戦争遺跡の調査をやって保存活用していく流れになるんですけど、ただ面として捉える時はモノではなくてやはり当時の状況を伝えていく人だと思うんですね。人の記録、もしくは記録の引継ぎこそが当時の空間というものを再現する事ができるのではないかなという風に思いました。ですのでそれぞれの得て不得手はあると思うんですけども、まずモノとしての戦争遺跡の長所、もしくは短所と、こういう聞き取りも含めて記憶として残していく長所、そしてそれも短所になるかもしれないですけども、それぞれの長所短所をですね認識した中で両者が上手く関係させる事が今後の活用という面では習得性があるというのは久貝さんの報告を受けて強く感じた所であります

〈久貝弥嗣〉ありがとうございました。同じ様な整備をして同じ様な成果が得られるわけではないというのは先程の山本さんの話にもあったとおりですが、宮古島市にも地域的な歴史的な背景があり、市町村ごとにまた違った活用の方法があると感じました。その様な活用事例の方法の一つとして、私の方で33ページ(本書の30ページ)で紹介したところです。今、山本さんがおっしゃった「点を面として捉えていく事の重要性」を考えた一つの事例であると思います。33ページ(本書の30ページ)の資料には載せていませんが、沖縄戦時の住民の非難壕等を更に書き加えていくことで、集落内での人の動きというのが見えてくるのではないかと思います。2ページ~3ページには戦争遺跡の分類、基準を書きましたが、民家とか炊事場として利用された井戸など、どこまで戦争遺跡に関連する部分として広げて捉えていく事が出来るのか、考えていく事も重要な視点であると個人的には思っています。

活用という部分で関連してきますので事前に頂いた質問をご紹介します。「現在いろんなものが散在していると思いますが、市として資料室を作る計画はないのでしょうか。そこに行けば戦争のことがほぼ解るといえる事であれば劣化した壕に行くこともないかと思いません。安全のためにも」。質問の中でも、やはり安全性を第一にみていることが伺えます。また、資料室などで、戦争遺跡の資料にまとめてみることはできないかという質問の内容であると思います。現在戦争遺跡の発掘調査で出土した資料は文化財資料室で一括して保管、管理しています。それを皆さんのほうに公開する機会が少ないのですが、今回の様に博物

館で行っています平和展では、国仲砂川の壕の調査成果を紹介をしています。また、長南陣地壕出土の木製品については保存処理なども進めています。公開できる機会が少ない事は否めませんが、企画展等を通して皆さんに紹介出来る機会を増やしていきたいと思っています。

もう一点は、壕の劣化が激しく、安全面を確保するために、壕に行かなくても壕の状況を知る事はできないかという事だと思えます。その点では、新しい技術も色々増えてきていると思えます。そういった部分で何か新しい取り組みとか山本さんのほうでご存知でしたら教えていただけませんか。

〈山本正昭〉日々、調査方法が進歩していっている中で、少し前でしたらレーザー測量という方法があります。レーザーを当てて壕の形態などを測量しています。最近いわゆる 4Kとか、いわゆるバーチャルリアリティー（VR）を用いた立体的な映像や、360度映像として再現出来るシステムが数年に進歩してきています。主にこれは映像関連会社等で実施されており、世界遺産のバーチャルリアリティー映像を制作していて、実際自分も見たことはあるんですけども、これを、例えばなかなか中に入れない壕の内部をバーチャルリアリティーに映像化、資料化して、いわゆる疑似体験的に壕の中を見る事が出来るというシステムは可能ではあります。非常にこれは没入感っていうんですかね、本当に中に入っていくような錯覚を覚えるぐらい高精細な画像を再現しています。このような映像技術を用いることで、なかなか公開に踏み切れない、もしくは非常に公開したいけれどもなかなか予算面でお金がかかってしまうというところにとっては非常に手っ取り早く壕の公開の方法になってくるような気はします。安全面の点でいうと、実際壕の中に入る訳ではありませんし、非常に中が暗くてちょっと怖いなど気分が悪いなどいう事になれば電源を切って止めることもできます。ただ、そういうシステムもありますが、それで全て事足りるのかっていう問題も一方ではあると思えます。実際に中に入って体験することもこれも重要な一つの学習であるのかなと思っています。そのあたり南風原町のほうで実際に壕の中に入れてはいるんですけど、いわゆるバーチャルリアリティーに関しては実際公開している南風原町の担当者としては、どういう風に考えているのかなと、保久盛さんからご意見伺えればと思います。

〈保久盛陽〉このバーチャルリアリティーというものは少なくとも今日何度もお話していますように壕は経年劣化していきますので、将来南風原町でも、壕内に入れなくなった場合を想定すると取り入れることを考えていかなければいけないと思えます。現在、南風原町は 20号壕を公開活用していますが、ガイドをしていると実際の壕に入ることによる学習効果は非常に高いことを感じます。私の報告で見て頂いてもらったように 20号壕の中には実際の杭木や焼けた跡が残され、ツルハシで掘った跡も残されています。また、この壕の中でどういった医療活動が行われていたのか、10・10空襲を経て医薬品、麻酔なども不足していましたので非常に不衛生な環境の元、中には麻酔なしで手術をおこなったという当時の状況を考えることもできます。壕の中の環境というのは、証言の中でも暗くジメ

ジメして常に誰かの泣き声、叫び声、うめき声がずっと聞こえていて本当に地獄の様な環境でした。これをバーチャルリアリティだったらよりリアルに作れるということもあるかもしれませんが、少なくとも実際に現実におきた場所で見て感じるというのは、非常に重要じゃないかと思います。

〈山本正昭〉始まる前に保久盛さんから、バーチャルリアリティと実際の公開、どっちが重要なのかと話をしていました、これは話しても決着がつかないと思うんですけど、要はバランスの問題なのかなと思います。バーチャルリアリティだから公開しなくていいとかいう話ではなくて、やはり両方体験する事が今後の戦争遺跡の活用の中で活かされてくるのではないかと思いますし、バランスの問題であると自分は感じました。

〈久貝弥嗣〉山本さん、保久盛さんありがとうございます。ご質問に対して答えになっているかは解りませんがこういった回答でよろしいでしょうか。

最後に私の方で今回のシンポジウムについて、まとめさせていただきたいなと思います。やはり今回県内の色々な事例を山本さんと保久盛さんのほうからお話しいただいて、やっぱりまだまだ戦争遺跡の取り扱いであったり、そういった調査方法については市町村でまだ模索段階にあるのかなと感じました。それは、それぞれの壕が持つ土質であったり現況といったものが大きく関わってくるからだと思います。整備とか活用という部分においても同じ様な方法が各市町村で同じ様に通じるわけじゃなくて、今回お話しした様な色々な活用事例があると思います。南風原病院壕の様に実際に壕を訪問していくような方法もありますし、最後に話したようにバーチャルリアリティというのも新しい一つの方法かもしれません。また、私のほうからはお話しした現地を訪れながら体験談を読んで歩く、そういった追体験も一つの方法であると思います。ですのでそういった地域に即したり、それぞれの対象にあった活用方法については、まだまだ色々バリエーションは増えてくるんだなと感じました。そういった部分でも、戦争遺跡の活用はまだまだ広まりがある、今回のシンポジウムのテーマにもあります戦争遺跡の可能性にという風なところに繋がっていくのかなと思います。最後に山本さん、保久盛さんからも戦争遺跡の可能性について一言お願いします。

※挙手にてフロアーからの意見

〈フロアー〉今年度の文化財講座第 1 回という事で若い人達がこの様に戦争遺跡に関して熱っぽく語り、どうすればいいのかという事を教えて下さってありがとうございます。これだけ宮古島市での短い時間で強烈な方達で、相当な数の、もちろんそれには念密である聞き取り調査をもとにして遺跡が相当な数確認されております。今回の保存・整備・活用という視点から、宮古島市として新たに確認された戦争遺跡を含めて保存という意味では言ってみれば文化財としての指定物件とする事も一つの保存の方法ですよ。ただそれ以外に見ていても、この物件は絶対に指定物件に相当するんだという物も幾つか見られます。ただしそこにいくアクセスが問題になるというところが多々あるんですよ。そういった

危険性が伴う部分もありますけど、壕の中だけではなくて、そういった事もあります。それから事前に指定された物件の中でも整備という関連からすれば次の活用というものにもふくまれますけど平和学習の中で壕の中に入る事、例えば足の悪い人でもちゃんと行けるように石につまづかずに歩ける様なものも整備の内に入るかと思ってるんです。活用の場合は地域にこういう風な物件がある、これをどう活用していくかという事がそれぞれの地域であると思います。それから沖縄と宮古を比較して、沖縄の事例をいっぱい出しますけども地域には地域の実状があるはずですからね、それを活用していける方法がより望まれる事かなと思います。そういう意味ではおそらく 2020 年は東京オリンピックで浮かれる事であろうという年になりますけど、その時はちょうど戦後 75 年にあたるんですよね。宮古としては今のような戦争遺跡としての物件をどうやって保存するかという部分に対して、例えば教育委員会あるいは宮古島市がどういう風なベースで動けるかという事も含めて考えていく事からだと私は思うわけです。で、もう一つこれは反面教師としての捉え方になると思うんですが、亡霊の様に教育勅語というのが独り歩きしようとしている事態です。我々は島外に出るといっただけでも有名なのは豊見城の頃ですよ、池間にもまだこれを寄せたらちょっと見える形になるかなという残骸はまだ残ってるんですよ、でもそれをやる事がいいのか、そのまま放置しておく方がいいのか、これを物凄く検討していかないと思ってるんです、宮古で唯一奉安殿の残骸があるという意味では、ちょっと崩れている残骸を整備して、形としては見れるんじゃないかなという一件がありますね。それも含めて戦争遺跡という範囲では保存・整備・活用という視点からすれば検討してもいいのかなと、・・・反面教師ですけど・・・ないとまた逆の方向に行く可能性だけ無きにしもあらずという風には付け加えておきます、どうもありがとうございました。

〈久貝弥嗣〉ありがとうございます。素晴らしいまとめのほうをしていただきました。これで、総合討論のほうは終わりにしたいと思います、皆さんどうも長い時間ありがとうございました。

〈進行〉山本さん、保久盛さん、久貝さんありがとうございました、保存・整備・活用の三点のほうに関しては熱い討論を頂きありがとうございました、

〈ご意見・ご感想〉

★南風原町の取り組みに敬意を感じました。「戦争遺跡は残すだけではなく活用することが大きな意義がある。」では宮古島市において野原岳頂上の電波探知機壕はどの様に①保存すると計画しているのか、現在は自衛隊基地の中で②一般住民は見学が出来るのか。

★安全のために壕の中を補強したり色々とお手を入れますが、形があまり変わってしまっただけ意味がないと思う。出来るだけ当時の様子を追体験する事が大事と思うので、祖の当りの事はしっかり考えてほしい。年々劣化していく壕など入らなくても良い方向を考えていく事も大事ではないか。



第1回シンポジウム
講演風景



第1回シンポジウム
総合討論風景



第1回シンポジウム
総合討論風景

戦争遺跡の可能性探る 保存、整備でシンポジウム

市教委主催

市教育委員会（宮國博教
育長）主催の第1回シンポ
ジウム「戦争遺跡の可能性
」が10日、市総合博物
館の研修室で開かれた。



映像は日伊良部村時代の1914（大正3）年に建立された忠魂碑で
県内では2番目に古い＝10日、市総合博物館

同委員会文化財係の久貝弥
嗣さんは、シンポジウムの
趣旨説明の中で「今後の戦
争遺跡の保存・整備・活用
の方法について考える機会
を持つことを主要なテーマ
として設定し、活発な意見
交換を行ってほしい」と
述べた。参加者らは、メモ
を取りながら熱心に聞き
入っていた。

文化庁の補助事業で20
13年度より「地域の特徴
ある埋蔵文化財公開活用事
業」で実施している。今年
度は今回のシンポジウムを
含めて三つのシンポジウ
ム三つの文化講座を予定
している。県立埋蔵
文化財センターが1995
年に実施した詳細分布調査

では、宮古島市内の62の戦
争遺跡が報告されている。
近年では、ほ場整備工事等
の開発に伴い新規に発見さ
れる事例も多く、戦後72年
目を迎える現在において
も、その数は増加傾向にあ
ると説明している。

久貝さんは「保存とは、
記録保存・現状保存・出土
遺物の保存処理を考えてい
る。整備とは、戦争遺跡を
活用していく上での状態を
整えていくこと。例えば壕
の保存、説明板の設置、ア
クセス道路の設置など。活
用とは、戦争遺跡を実際に
見学したりするなどして使
用すること」と分かりやす
く語った。

また久貝さんは「はじめ
に戦争遺跡とは」と題
して述べた。戦争遺跡の定
義については、文献資料を
引用し「近代日本の侵略戦
争とその遂行過程で、戦闘
や事件の加害・被害・反戦

抵抗に関わって国内国外で
形成され、かつ現在に残さ
れた構造物・遺構や跡地の
こと」と話した。

県立博物館・美術館の山
本正昭さんが「戦争遺跡の
整備について」沖縄県内の
事例から見る現状と課題
「南風原町教育委員会
の保久盛陽さんが「南風原
町における戦争遺跡の保
存・活用について」沖縄陸
軍病院南風原壕群を中心
として報告した。

久貝さんは「宮古島市内
での戦争遺跡活用事例」と
題し報告した。
このうち、山本さんは近
将来、戦争遺跡は戦争の
実態をうかがい知る上で
一級の遺跡として位置付
けられてくることはほぼ間違
いない」と強調した。
保久盛さんは「戦争遺跡
を二度と造らせないため

に、過ちを繰り返さないた
めにも、戦争遺跡から学
び、歴史を継承していく
ことが求められているので
はないだろうか」と提起し
た。

宮古毎日 平成 29(2017) 年 6 月 13 日〈火〉

宮古毎日新聞社より

戦争遺跡について学ぶ

市教委 県内事例を交え報告

2017年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第1回シンポジウム「戦争遺跡の可能性」保存・整備・活用の視点から」（主催・宮古島市教育委員会）



多くの市民が訪れ戦争遺跡の保存活用などについて説明を受けた
＝市総合博物館

10日、市総合博物館で行われた。関心のある多くの市民が訪れ、市教委の久員弥嗣さんから同シンポの趣旨や宮古島市内の代表的な戦争遺跡について説明を受けた。県内の事例など報告を受けた。

報告では県立博物館の山本正昭主任学芸員が「戦争遺跡の整備について県内の事例から見る現状と課題」をテーマにスライドなどを使い丁寧に説明。積極的に公開されている戦争遺跡として豊見城市にある旧海軍司令部壕等を紹介した。

一方、県内の戦争遺跡の課題として▽壕の内部まで含めての全体公開を行っている戦争遺跡は極めて少ない▽保存・整備・公開についてはそれぞれに目的が異なる場合が存在する▽保存・

整備の大半が戦争遺跡の近くに説明板を設置するために止まっている▽公開のためには安全面の確保が必要になってくるが、そのためには遺跡の改変を余儀なくされる▽戦争遺跡としての調査についてはその取扱いが明確でない」と指摘したうえで「何のために戦争遺跡を残すのかについて今一度考えていく必要がある」と強調した。

このほか、南風原町教育委員会の保久盛陽さんも「南風原町における戦争遺跡の保存・活用について」沖繩陸軍病院南風原壕群を中心に」と題し取り組みを報告した。

宮古新報 平成 29(2017) 年 6 月 11 日 (日)

宮古新報社より

平成 29 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 2 回シンポジウム

浦底遺跡の発掘調査にみる 無土器期研究の新展開

【報告テーマ】

- ・久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古島市内の無土器期遺跡の概要 - 浦底遺跡の発掘調査を中心として -」
- ・山極海嗣（琉球大学戦略的研究プロジェクトセンター特命助教）
「海と島の世界へ進出し、貝斧を利用した人々 - 東南アジア・南太平洋島嶼地域の事例から宮古・八重山諸島をみる」
- ・江上幹幸（元沖縄国際大学教授）「集石遺構の用途と文化」
- ・島袋綾野（石垣市教育委員会）
「八重山諸島の無土器期 - 地理的環境にみる石器の利用を中心として -」

【総合討論】コーディネーター：下地和宏

＊10月20日～29日の期間中、博物館特別展示室で浦底遺跡出土資料を展示（入館料が必要となります）

日時：平成 29 年 10 月 28 日（土）午後 2 時～ 5 時

場所：宮古島市総合博物館・研修室

問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課（0980-77-4947）

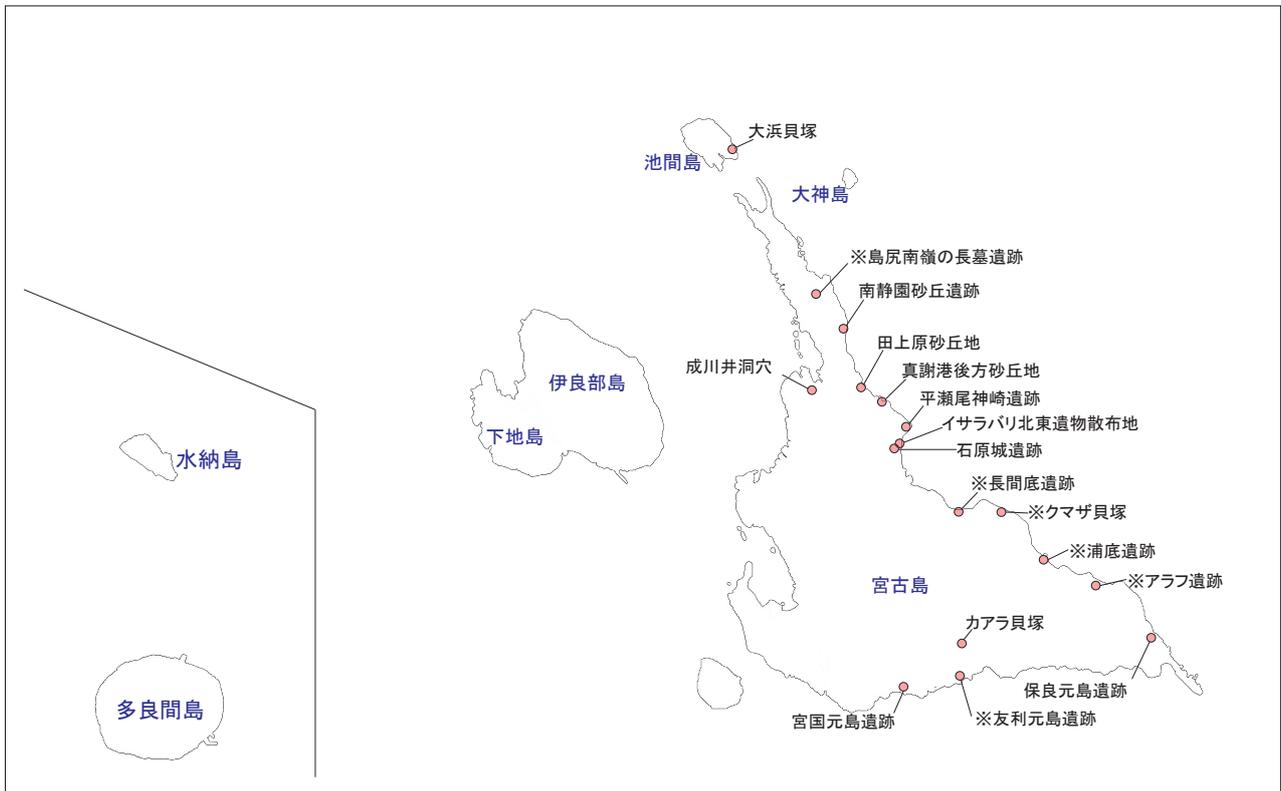
シンポジウムへの入場無料。予約不要

写真は、浦底遺跡の遠景（浦底漁港周辺）

日本・沖縄・宮古・八重山考古編年、略年表

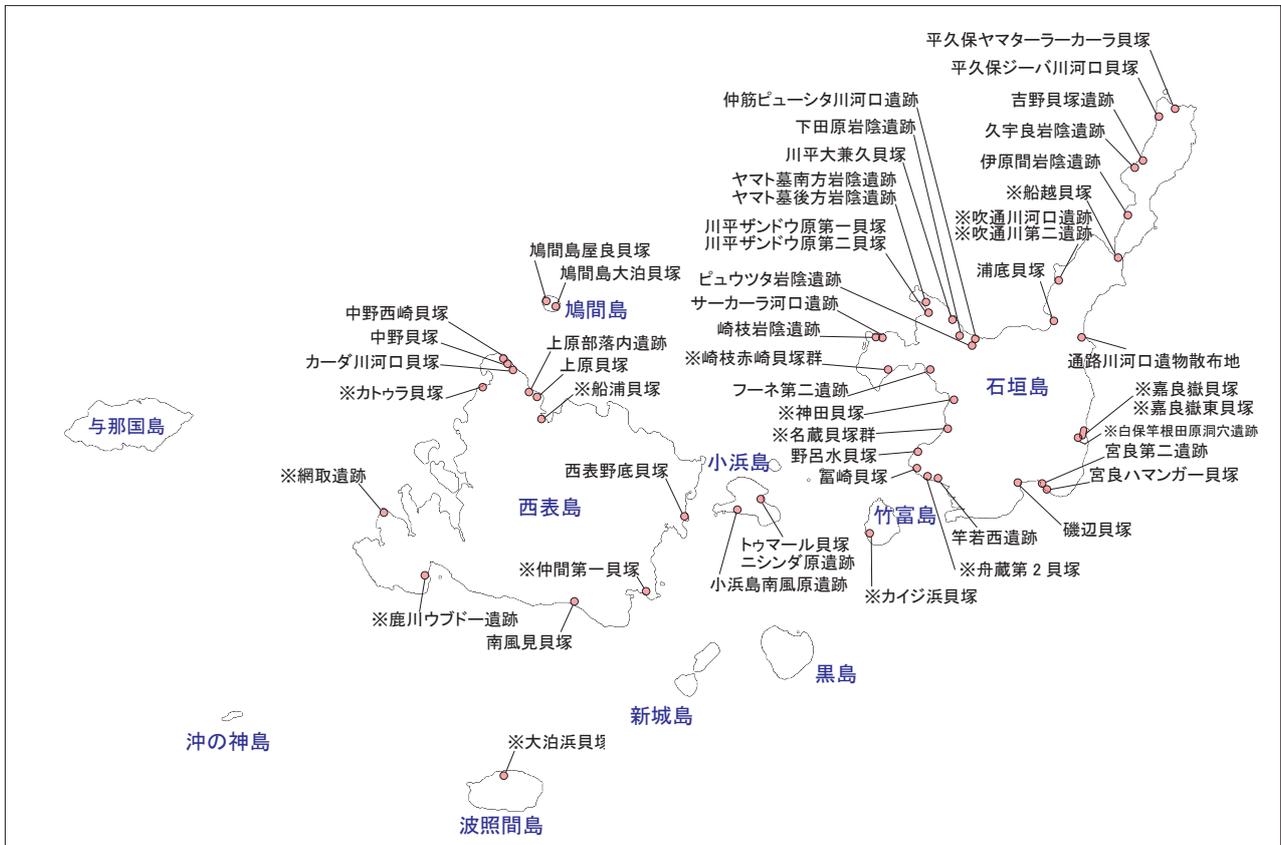
日本本土	沖縄諸島	宮古諸島	八重山諸島	年代	宮古の遺跡と主なできごと	八重山の遺跡と主なできごと	日本本土・沖縄諸島の遺跡と主なできごと	
旧石器時代	(後期更新世)	更新世(後期)	(後期更新世)	32,000年前			山下町第一洞穴(那覇市)	
				26,000年前	ピンザアブ洞穴			
				(後期更新世)	20,000年前		白保竿根田原洞穴(石垣島)	
					19,000年前		白保竿根田原洞穴(石垣島)	
					18,000年前			港川フィッシャー(八重瀬町) 浜北人(静岡)
15,000年前		白保竿根田原洞穴(石垣島)	下地原洞穴(久米島)					
縄文時代	?	?	?	12,000年前			縄文時代のはじまり	
				8,800年前	ツツビスキアブ(IV-1・2層)			
				6,600年前			渡具知東原遺跡(読谷村)	
				4,200年前	添道遺跡(多良間島)	ビュウツタ遺跡(石垣島)		
				3,900年前		大田原遺跡(石垣島)		
				3,500年前		下田原貝塚(波照間島)		
				2,800年前	アラフ遺跡(IV層)			
				2,500年前	浦底遺跡(V層)			
				2,300年前	アラフ遺跡(Vc層)	名蔵貝塚群・II層(石垣島)	弥生時代のはじまり	
				1,900年前	アラフ遺跡(III層)			
弥生時代	貝塚時代	無土器期	無土器期(後期)	1,800年前	浦底遺跡(III層)	カイジ浜貝塚・4層a(竹富島)		
				1,700年前		大泊浜貝塚・10層(波照間島)	古墳時代のはじまり	
				1,500年前	南嶺の長墓遺跡	大泊浜貝塚・11層(波照間島)		
古墳時代				710年	友利元島遺跡・15層	カイジ浜貝塚・5層(竹富島)	平城京遷都	
				794年			平安京遷都	
奈良時代		?						
平安時代				(11世紀)	友利元島遺跡・13層	大泊浜貝塚(波照間島) 新里村東遺跡(竹富島)		
				(12世紀)	住屋遺跡・ミスズマ遺跡			
鎌倉時代				(13世紀)	野城遺跡・高腰城跡	ピロースク遺跡(石垣島)	鎌倉幕府の成立	
				1317年	婆羅公管下密牙古人			
室町時代	グスク時代	グスク時代	中森期	1390年	与那覇勢頭豊見親中山朝貢			
				1500年	八重山アカハチ事件			
安土桃山時代								
江戸時代				1609年	薩摩の琉球侵略			
				近世琉球	バナリ期			

・宮古島市総合博物館2014年シンポジウム『宮古島の無土器期-資料集-』掲載の年表を一部修正



宮古諸島の無土器期遺跡（シャコガイ製貝斧の表面採集地点も含む）

※のつく遺跡は発掘調査を実施したことがある遺跡を示す。



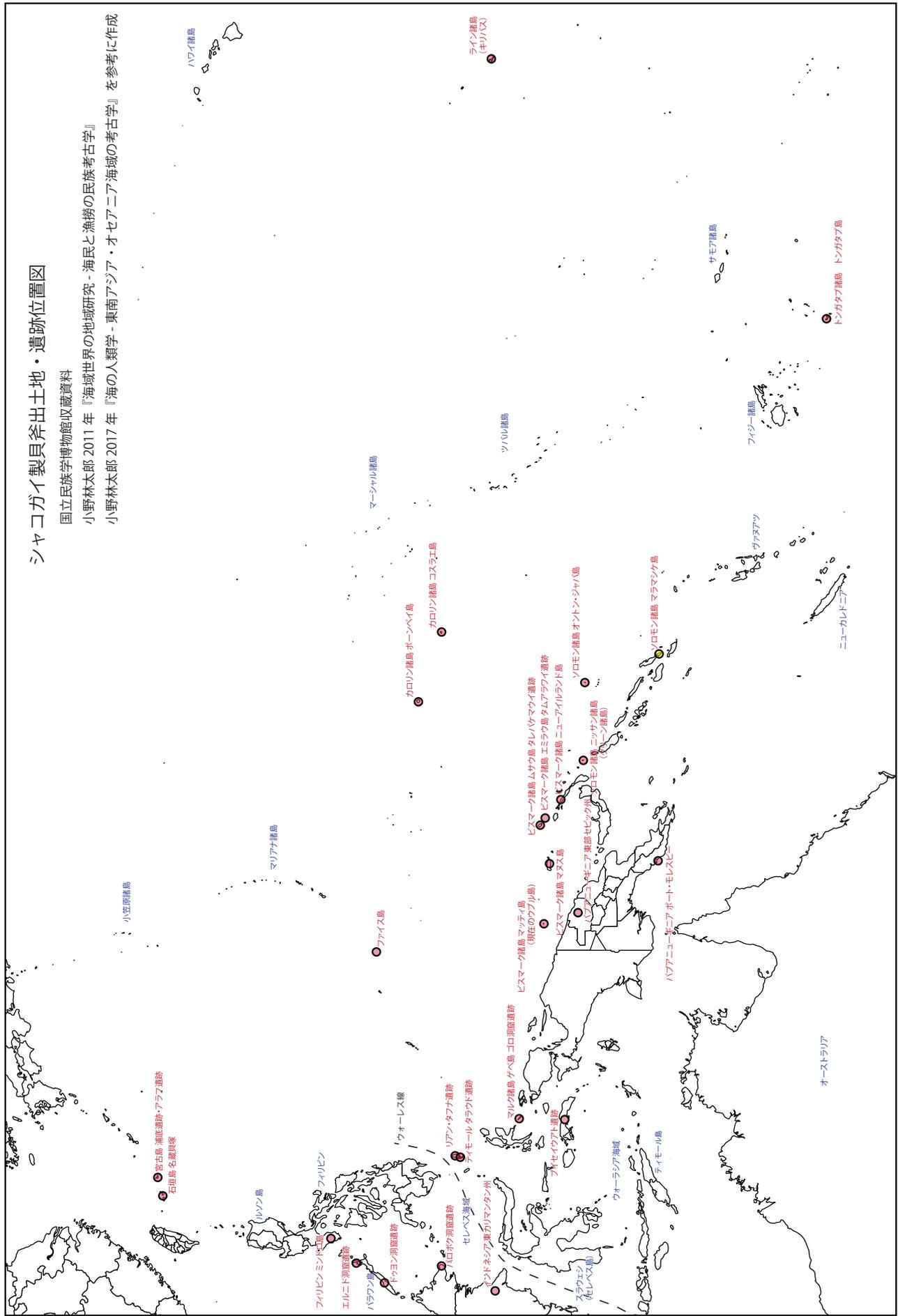
八重山諸島の無土器期遺跡 ※のつく遺跡は発掘調査を実施したことがある遺跡を示す。

シヤコガイ製貝斧出土地・遺跡位置図

国立民族学博物館収蔵資料

小野林太郎 2011年『海域世界の地域研究 - 海民と漁撈の民族考古学』

小野林太郎 2017年『海の人類学 - 東南アジア・オセアニア海域の考古学』を参考に作成



宮古島市内の無土器期遺跡の概要

－ 浦底遺跡の発掘調査を中心に－

久貝 弥嗣 (くがい みつぐ)

宮古島市教育委員会

はじめに

宮古島市内で、無土器期の遺跡が初めて発見されたのは、1981年の長間底遺跡である。長間底の海岸で行われていた砂取工事の現場からシャコガイ製の貝斧が発見された。当時、宮古島の遺跡分布調査を行っていた沖縄県教育委員会によって、現場から遺物の採集が行いながら試掘調査が実施され、遺跡の一部を保存地域として現状保存することが協議されている。

この1981年から1982年にかけて沖縄県教育委員会によって行われた分布調査では、前述した長間底遺跡を含め、成川井遺跡、石原城北東砂丘遺物散布地、クマザ貝塚、浦底遺跡、新生遺跡の6つの遺跡を無土器期の遺跡として認識している。

その後の無土器期の発掘調査事例としては、1987～1988年にかけて浦底遺跡が道路工事に伴い発掘調査されている。本調査は、今回のシンポジウムのテーマにも掲げられた遺跡の発掘調査である。後述するように、本調査では200点以上のシャコガイ製の斧が出土し、宮古島の無土器期研究への関心が高まる契機となった。

その研究への関心の高まりを示すように、2000～2006年にかけてアラフ遺跡（江上幹幸氏を代表とするアラフ遺跡発掘調査団）が、2001～2002、2011年には浦底遺跡（土肥直美氏を代表とする調査団）が、2006～2013年にかけて島尻南嶺の長墓遺跡（マーク・ハドソン氏を代表とする長墓遺跡調査団）が学術調査を実施している。また、2016年には、沖縄国際大学による浦底遺跡での発掘調査実習も行われている。これらの学術調査では、詳細な遺物の出土状況や、海域環境の成立時期、植物遺体、多種の科学分析、動物骨のDNA分析などが実施され、多角的な無土器期遺跡への研究が実施されている。2000年以降は、これらの活発な学術調査が宮古島の無土器期研究を牽引してきたといえる。

行政発掘の事例としては、2012～2013年に宮古島市教育委員会が建物工事に伴う記録保存のために友利元島遺跡で発掘調査を実施し、新たに無土器期の包含層が確認している。また、発掘調査ではないが、2015年3月にはアラフ遺跡の発掘調査資料が、2016年3月に浦底遺跡の発掘調査資料が宮古島市教育委員会に移管されている。資料が調査地の宮古島市に集約され、宮古島市内での研究、公開にむけた資料の充実性も高められている。

このような発掘調査や研究成果をふまえ、近年宮古島市内では、2014年に宮古島市総合博物館で第26回企画展「宮古人のルーツを探る part2～先史時代（無土器期）の宮古～」が開催され、会期中にはシンポジウム「宮古島の無土器期」も行われている。2015年に沖縄考古学会総会が宮古島で開催された際には、無土器期からグスク時代への移り変わりがテーマとして設けられ、県内外の研究者によって研究発表が行われた。その他の研究活動としては、2010年度に宮城弘樹氏研究代表とし

た「先島地域における先史時代の終焉とスク遺跡出現に関する研究（第39回三菱財団人文科学研究助成人文学-31）、2017年には山極海嗣氏による文化講座「サンゴ島に生き、文化を築いた人々ー浦底遺跡から考える新しい無土器期文化像-」（平成28年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業）も行われている。その他にも、多くの論考がだされておられ、これらの研究史については、あらためて報告の機会をもちたいが、浦底遺跡の発掘調査が行われた1980年度後半から90年代にかけては、シャコガイ製の斧を中心として、その文化の源流に関する研究が主要なテーマとされていた。当然ながら、宮古島の無土器期の始りや周辺地域との関係性を比較する上では、現在でも変わらぬ大きな不動の研究課題である。しかし、2000年以降の学術調査の活発化によって、集石遺構を中心とした遺構や、動物遺体、地理的環境などの視点から宮古島の無土器期の生業に関わる研究も深められてきている。

本論では、まず今回のシンポジウムのメイン遺跡となる浦底遺跡の発掘調査の概要について整理を行い、今後の課題などについてまとめていきたい。

1. 浦底遺跡の調査概要

(1) 調査概要

前述したように、浦底遺跡の発掘調査は、現在の浦底漁港へ至る道路の建設工事に伴い1987～1988年にかけて実施された。道路の工事区間にあわせて発掘調査が行われ、ベルトコンベヤーなども用いた大規模な調査としても宮古島では初めての事例といえる。

発掘調査は、道路の工事範囲にあわせて、4×4mのグリッドを基本として、調査区に設定を行っている。調査区は大きく2つの調査区に分かれており、現在資料整理を行う段階で、東側の調査区を東地区、西側の調査区を西地区と称している。西地区は、海岸線からの砂丘のマウンドの後背部にあたり、東地区は、砂丘地から丘陵下部に設けられた調査区である。両調査区とも、シャコガイ製の貝斧を中心とした遺物や、集石遺構や貝集積などの遺構がそれぞれ検出されている。しかしながら、堆積層は、前述した地理的環境の違いから、各層の対応関係については、現在も整理を行っているところである。

各地区の堆積層の概要としては、両地区とも第1層は、当時の地表面であり耕作土も含んでいる。西地区では、第2層から第4b層までが無土器期の包含層であり、東地区では、第2層から第6層までが無土器期の包含層として捉えられる。西地区においては、有機物を多く含んだ暗褐色層と含まない黄褐色層とで明瞭に分層を行うことができるが、黄褐色の層からも遺物や遺構が検出されることから、必ずしも暗褐色層のみを文化層として捉えるものではない。

両地区の各層との対応関係については、前述したように整理途中ではあるが、両地区の堆積層の関係性が考える一つの方法として、放射性炭素年代測定を用いた。これまでには、5つの年代測定結果がえられていたが、今回は、さらに10点を追加して年代測定を行った。年代測定に用いた試料はいずれも炭化物で、図1が、両地区の堆積層の年代測定結果を整理したものである（測定値はすべて補正年代）。年代測定結果は、概ね堆積層の層位関係と整合性がとれる結果といえる。西地区では、4b層が、約2500年前の年代値でまとまっており、4a層が約2000年前、3層が約1800年～2000年前の層である。東地区では、最下層の第6層の年代値が約2200年前と上層と比べ新しい年代値を示すが、第5層が約2500年前、第4層が約2200～2100年前、第3層も2100年前、第2層が1800～2100年前の層としてみることもできる。

この年代測定結果を見る限りでは、浦底遺跡は、約 2500 年前から 1800 年前の 700 年間の期間に活動していた遺跡としてみる事ができる。ただ 700 年間継続して人が生活しつづけていたのか、断続的に生活していたのかは、出土遺物や遺構の面からも検討を深める必要がある。

(2) 遺構 (図版 1)

遺構については、現在のところ詳細な整理に至っておらず、ここでは、代表的な遺構の概要についてのみふれ、今後の検討課題について洗い出しを行っていききたい。

浦底遺跡から検出される遺構としては、集石遺構、貝集石、埋葬人骨が現在確認されている (集石遺構については、江上幹幸氏による詳細な報告があるので参照されたい)。

貝集石は、西・東の両地区で検出されているが、調査面積に比して東地区での検出が目を引く。貝集積とは、食料残滓と考えられる貝を一定の範囲に廃棄した跡もしくは、貝をストックしていた跡と考えられる。そして、この貝集積は特定の貝種で構成される状況が見て取れる。東地区の貝集積の調査写真を見る限り、最も規模が大きいのがチョウセンサザエの貝集積であるが、その他にも、サラサバティ、マガキガイ、シャコガイ、シジミの貝種を主体とする貝集積がみとれる。これらは、概ね食料残滓に伴う貝集積と考えられるが、シャコガイについては、貝斧の素材となるため、そのストックとしての可能性についても検討を行っていく必要がある。

埋葬人骨については、西地区第 2 層からの出土であるため、無土器期ではない構成の人骨の可能性も想定される。これまで、宮古島の無土器期の埋葬人骨が検出された事例はなく、島尻南嶺の長墓遺跡で人骨の一部が検出されたのみである。本埋葬人骨は、足を組むような姿勢で埋葬されている。このような埋葬姿勢は、後続するグスク時代にもみられる姿勢である。今後、人骨の年代測定結果をまっけて考察を深めていきたいが、無土器期もしくは、無土器期からグスク時代へ移行する時期をかんがえる上でも注視していきたい遺構のひとつである。

<西地区>		<東地区>	
1 層		1 層	
2 層		2 層	2080±25yBP (あ-93) 1800±25yBP (い´-94) 2010±25yBP (い´-97)
3 層	1880±75yBP (そ-25) 2180±75yBP (こ-55)	3 層	2070±25yBP (い´-94) 124 号集石)
4a 層	2015±20yBP (そ-24)	4 層	2070 ±25yBP (あ-93) 2235±25yBP (い´-93)
4b 層	2520±80yBP (そ-27) 2500±20yBP (そ-34 69 号集石)	5 層	2515±25yBP (あ-93)
		6 層	2205±25 (か´-102)

図 1 浦底遺跡の放射性炭素年代測定値



西地区土層断面



貝集積検出状況〔チョウセンサザエ〕（う・え'・お'・か' -101 第6層）



貝集積検出状況〔サラサバティ〕（う・え-98～100、お-99～100 第5層）



貝集積検出状況〔シャコガイ〕（お-101・102 第5層）



第2号人骨検出状況（そ-33・34 第2層）

図版1 浦底遺跡の土層断面、貝集積、埋葬人骨

(3) 出土遺物(資料図版7・8)

出土遺物でもっとも点数が多いのは、シャコガイ製の貝斧であり、本資料については、山極海嗣氏による詳細な報告が行われる。ここでは、貝斧以外の資料について整理してみたい。

①貝・骨製品

シャコガイ製の貝斧について出土点数が多いのは、スイジガイ製利器である。浦底遺跡出土のスイジガイ製利器は、その刃部がすべて左上の突端部につけられるというのが大きな特徴である。それ以外の部位に刃部をつけることがないため、使用方法によって刃部の位置を特定したものと考えられる。スイジガイ製利器は、西、東の両地区の各層から出土する。これまで、シャコガイ製の貝斧については、層位によって形態的な変化が認められてきたが、スイジガイ製利器については、そのような出土傾向に特徴的な面は確認されなかった。

スイジガイ製利器について出土点数が多いのが、ホラ貝の有孔製品である。このホラ貝有孔製品についても特定の箇所にもしくは複数の孔をあける製品であるが、その用途などについては判然としに製品である。

その他にも、貝や骨を素材とした様々な製品が出土している。イモガイを使用したシェルディスクは、アラフ遺跡や長墓遺跡からも出土する代表的な無土器期の遺物である。同様の遺物として、サメ歯有孔製品があるが、無土器期の製品は、いずれも1つの孔しか穿孔しない特徴を有している。また、イモガイの体層部を縦に使用した札状の有孔製品は、非常に精練された貝製品として浦底遺跡を代表する遺物といえる。その他、イノシシの犬歯に1つの孔を穿孔した製品や、マガキガイの螺塔部を使用した貝小玉、また数量は少ないもののクジラの骨を加工した骨製品も出土している。

②石器

石器を代表する製品は、石斧である。いずれも、黒色片岩、緑色片岩という宮古島に産出しない石材を利用していることから、石垣島などの八重山諸島との関係性が指摘されてきた製品である。しかしながら、浦底遺跡からの出土点数は、2点に限られ非常に少ない。

また、泥岩に円形の穴をあけた2点の石器もよくしられる石器である。2点は重なった状態で出土しており、製品自体も全く形状が一致する製品である。使用方法については不明である。

その一方で、出土点数が多いのが磨石とくぼみ石である。両製品は、いずれもこれまでクローズアップされることの少なかった製品であるが、磨石は、貝斧の製作、くぼみ石は植物利用を推察させる製品である。また、石材としては、遺跡の周辺地で産出される泥岩、ビーチロック、細粒砂岩などを使用している。これらの石器の出土状況から、浦底遺跡の人々が、遺跡内でシャコガイ製の貝斧を使用していることが明らかにされ、石材としては、島の地理的環境に適応していたことを伺いすることができる。

③その他の遺物

浦底遺跡の第2層からは、土器が十数点出土している。その中には、明らかな15～16世紀代、もしくはそれ以降の土器も含まれているが、これまでのグスク時代の土器とは異なる胎土の土器も出土している。アラフ遺跡や過去の浦底遺跡の表面採集資料などからも土器が出土する状況は確認されている。この点については、今後の研究課題であるが、前述した埋葬人骨の件も含め、浦底遺跡の第2層の位置づけを考える上で重要な遺物の一つと考えられる。

2. 浦底遺跡の調査事例も含めた今後の無土器期研究へのアプローチ

(1) 宮古島の無土器期の年代観

これまでの資料整理も含め浦底遺跡が、約 2500 年前から 1800 年前の遺跡であることが分かってきている。この年代観と非常に近い遺跡がアラフ遺跡である。これまで、宮古島を代表するこの 2 つの遺跡の年代観が宮古島の無土器期の年代観として捉えられてきたが、近年では、長墓遺跡や、友利元島遺跡のように無土器期の中でも新しい年代に位置づけられる遺跡が確認され始めている。浦底遺跡の発掘調査成果は、この同時期の遺跡間との比較、年代の異なる無土器期遺跡との比較を行う上でも重要な意味をもつものとする。

山極氏の報告にあるように、浦底遺跡の西地区第 4b 層に特徴づけられるように、浦底遺跡の下層からは小型の貝斧で構成され、上層にいくに従い、大型化、局部磨製化の傾向が進む。この傾向は、友利元島遺跡の貝斧と比較した時に、より顕著な傾向であることが分かる。それでは、同時期のアラフ遺跡の貝斧とはどうであろうか。今後の大きな研究課題の一つである。また、約 2500 年前にこのような貝斧文化をもった東南アジア、太平洋諸島の地域間との比較も必要となってくる。

(2) 生業活動

しかし、無土器期の研究テーマが貝斧だけにとどまらないことはすでに周知のとおりである。2015 年の沖縄考古学会で菅原広史氏が報告を行った、友利元島遺跡のイノシシの出土状況は、5～8 世紀代の無土器期の人々がイノシシを一定の管理下においていた可能性を提唱された。

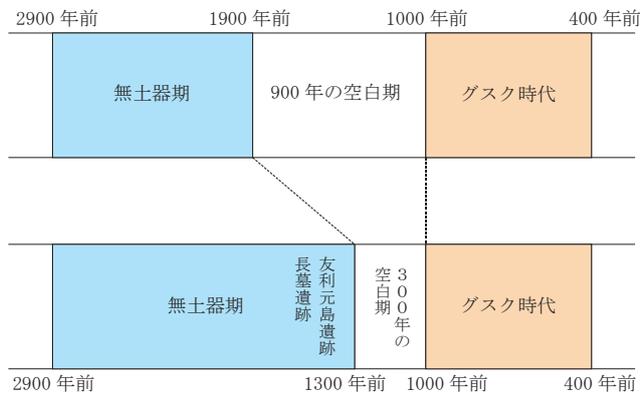


図 2 無土器期とグスク時代の関係性



写真 1 友利元島遺跡 2012 調査区全景



写真 2 第 2 号人骨



写真 3 第 2 号人骨に伴うカムイヤキ

イノシシの問題については、八重山諸島の下田原期も含め早くからその利用について問題提起されている。浦底遺跡のイノシシ骨も含め、その年齢構成や、雄雌比、解体痕などの分析を行っていくことで、無土器期におけるイノシシの利用について検討を深めていくことができると考える。

生業の問題でいうと植物利用も重要な課題である。しかし、アラフ遺跡の調査事例にみられるように、無土器期の植物遺体についてはその検出が困難であることが報告されている。しかしながら、現在の植物の生息環境も無土器期の植物利用を考える上では参考になると考える。この点についても専門家のご指導をいただきたい課題の一つである。

(3) 地理的環境

最後に、近年のアラフ遺跡の発掘調査事例についても紹介し、今後の課題としたい。宮古島市教育委員会が発掘調査を行ったアラフ遺跡の成果の一つとして陸産マイマイに関する報告がある。周知のとおり陸産マイマイはその生息環境によってその種類が異なる。アラフ遺跡では、9世紀以降を境にミヤコヤマタニシからカワニナへのその組成が変化している状況がみてとれる。ミヤコヤマタニシは、周辺が山林などの環境時に生息する貝とされ、カワニナは水環境ある場所に生息する貝であることから、アラフ遺跡の位置する一帯で、9世紀移行を境に山林に近い環境から水辺の環境へ変化していったことが推察される。本事例については、今後も考察を深めていく必要があるといえるが、出土遺物だけではなく、周辺の地理的環境からのアプローチも重要な要素であるといえる。

この地理的環境については、アラフ遺跡において河名俊男氏がビーチロックの形成やリーフの形成時期について報告されている。陸域だけではなく、海域の形成過程は、無土器期の人々の生業活動と密接な関係性をゆうしている。

謝辞

浦底遺跡の発掘調査の整理は、宮古島市に移管される前より沖縄県教育委員会によってはじめられている。今回の報告では、これらの資料を活用するとともに、当時の調査担当者であった照屋孝氏、上地千賀子氏から多くのご教示をいただいている。また、今回の報告者の江上幹幸氏、島袋綾野氏、山極海嗣氏には実際の遺物の検討についてご教示いただいた。末尾ながら記して感謝いたします。

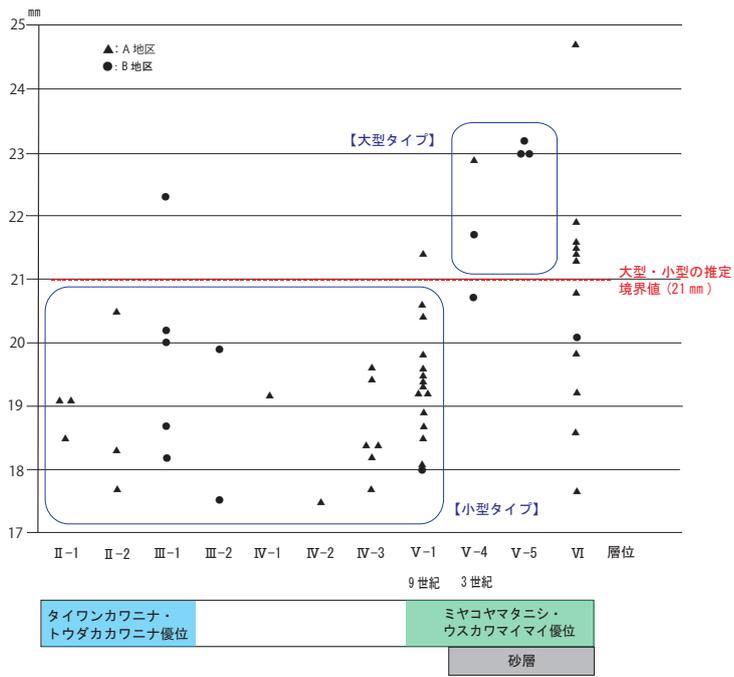


表 H26 アラフ遺跡 ミヤコヤマタニシ計測値表

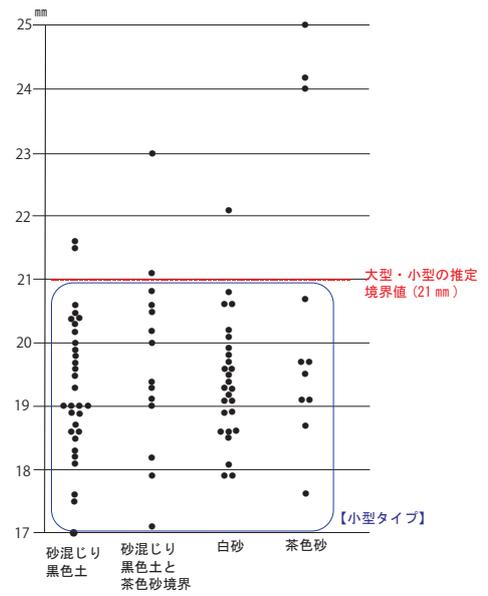
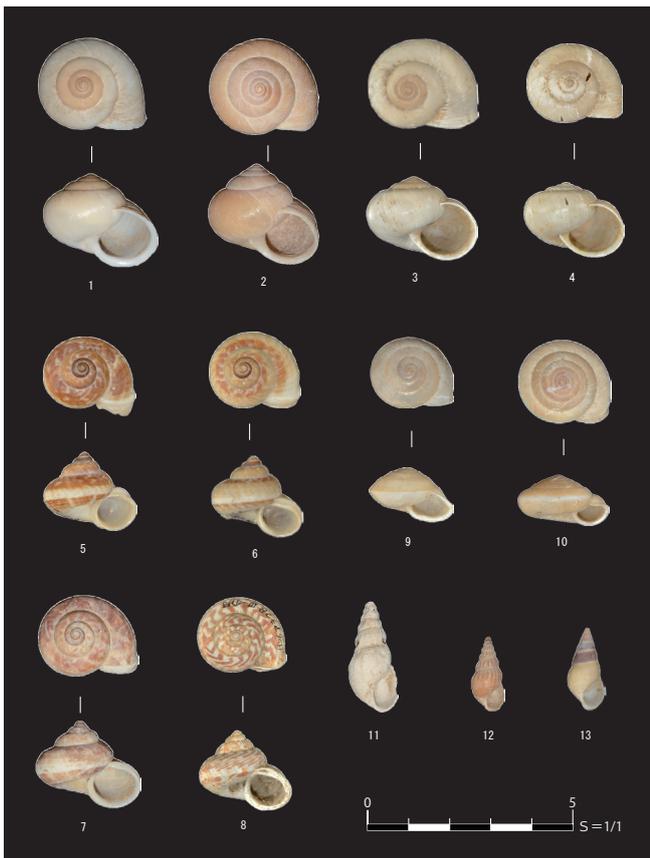


表 H28 アラフ遺跡 ミヤコヤマタニシ計測値表



海と島の世界へ進出し、貝斧を利用した人々

－ 東南アジア・南太平洋島嶼地域の事例から宮古・八重山諸島を見る－

山極 海嗣 (やまぎわ かいし)

琉球大学 戦略的研究プロジェクトセンター

1. 無土器期とシャコガイの貝殻で作られた貝斧

私たち現生人類の共通祖先（ホモ・サピエンス）が今から5～10万年前にアフリカを旅立って以降（出アフリカ）、宮古・八重山列島へと辿り着いたのは少なくとも約3万年前だったのではないかと考えられています。ただ、この時期の人々の物質文化（住居や道具などの生活の痕跡）は未だ明確になっていません。八重山列島ではその後約4,300年前になると土器や石器を利用する物質文化（下田原期（しもたばるき））が確認されるようになりますが、多良間島を除く宮古列島で明確な物質文化が確認されるようになるのは、約2,800年前或いは2,600年前になってからのことでした。この時期は人々が土器を利用しない文化であったことから無土器期と呼ばれています。



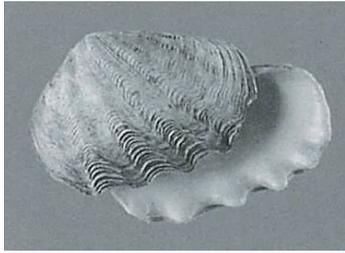
図1. 浦底遺跡出土のシャコガイ製貝斧
(宮古島市教育委員会所蔵：筆者撮影)

無土器期の物質文化は宮古列島だけではなく八重山列島でも展開し、八重山列島では土器利用文化（下田原期）から土器を利用しない文化（無土器期）へと変遷したことになります。このような文化変遷は、南太平洋の一部の島嶼地域でしか確認されておらず、世界的に見ても珍しい特徴だと言えます。しかし、無土器期は土器を利用しないだけではなく、シャコガイの貝殻で作られた斧「貝斧」（図1）や、石蒸し焼き調理に利用された可能性も示す「集石遺構」（江上幹幸氏の発表を参照）など、同じ時期の沖縄島や台湾といった周辺地域には見られないユニークな物質文化が見られることにも特徴があります。中でもシャコガイの貝殻で製作された貝斧は、これまでの研究でフィリピン南部などの東南アジア島嶼地域の貝斧と類似することが指摘されており、長らく無土器期の文化は東南アジア島嶼地域を中心とした南方と関係するのではないかと考えられてきました。

2. シャコガイで作られた「貝斧」とは？

シャコガイ製貝斧はその名の通りシャコガイの貝殻を材料とした道具で、研磨して刃を付けることで斧刃（手斧の刃先）のように仕上げたものです。この材料となるシャコガイは、現在の琉球列島では6種が現生しており、各々生息する環境にも若干の違いが存在します（図2）。また、オオシャコガイに関しては、現在の琉球列島で生息しているのかどうか判然としませんが、宮古・八重山諸島の各地でオオシャコガイの化石が確認できることから、具体的な生息時代は特定できないものの、かつての宮古・八重山諸島では生息していたものと考えられます。

琉球列島に現生するシャコガイ



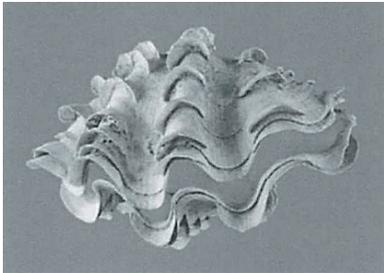
ヒメシャコ (*Tridacna crocea*)
最も小型。サンゴに穿孔して生息し、足糸孔も大きく吸着力も強い。比較的浅い水深でもよく見られる。近代では漁網錘にも使われた。(写真は菱田 2000 : 389)



シラナミ (*Tridacna maxima*)
前後に長く、外面に鱗状突起をもつ。礁斜面の垂潮間帯より深いサンゴに半ば穿孔して生息することが多く、足糸孔も大きく吸着力も強い。(写真は奥谷 2017 : 580)



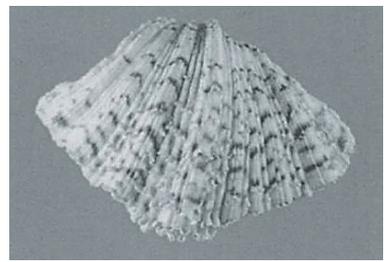
トガリシラナミ (*Tridacna noae*)
シラナミに似るが放射肋数や咬合部分の突起が尖る等で異なる。シラナミと異なり、リーフ上の中～低潮帯に生息。2007年に新種認定。(写真は奥谷 2017 : 580)



ヒレシャコ (*Tridacna squamosa*)
一見シラナミに見えるが、放射肋の間が丸く、広く、細かい放射状の条がある。水深 10m のサンゴ礁に多い。足糸孔は小さく、サンゴには穿孔しない。(写真は菱田 2000 : 389)

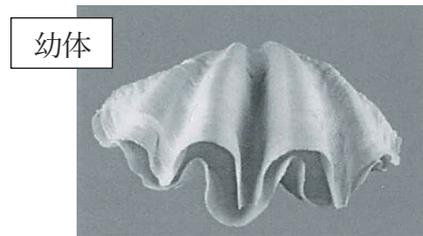


ヒレナシシャコ (*Tridacna derasa*)
ヒレナシという名前だが若い個体ではヒレシャコのような鱗状突起がある。足糸孔は小さいが、現生での確認例が少なく、生息域はよく分かっていない。(写真は筆者撮影・西表島採集)



シャゴウ (*Hippopus hippopus*)
分厚い貝殻で、放射肋が特徴的。足糸孔がなく、比較的浅い海底面のサンゴ片の上などを転がったり、サンゴの凹みに入り込んで生活する。(写真は菱田 2000 : 389)

琉球列島にかつて生息したシャコガイ (現生例は不明)



オオシャコガイ (*Tridacna gigas*)
世界最大のシャコガイ。2～20m のサンゴ礁に生息するとのこと。宮古・八重山諸島各地でも化石の確認例がある。ウェブ上や図鑑などでは八重山地域に現生とされるが、明確な生存例は不明。南太平洋地域では現生する。幼体 (写真右) が他のシャコガイと見間違えられている可能性が指摘されることもあるが、幼体時から放射肋が特徴的で、貝殻の体部は比較的薄めの印象を受ける。蝶番部は分厚い。生きているのを見かけたら教えてください。(写真は左が本間 1983 : 123、右が菱田 2000 : 389)

図 2. 無土器期の貝斧の材料に利用されたと考えられるシャコガイ (註 1)



図3. ミクロネシアで採集された貝斧の民族事例
(国立民族学博物館所蔵：筆者撮影)

遺跡から出土する貝斧の材料や食糧残滓としての貝殻には、基本的にこの現生6種とよく似た貝殻が確認できることから、当時生息していたシャコガイの種類やその生息環境も現在とあまり変わらなかったと考えることができます。宮古・八重山諸島の貝斧に利用される貝殻としては、ヒレシャコ・ヒレナシシャコ・シラナミ（トガリシラナミとの区別は困難）が多く、シャゴウも利用されています。一方で、明確なヒメシャコやオオシャコの利用は殆ど確認することができません。

では、シャコガイ製貝斧はどのような用途に利用された道具なのでしょう。これについては、残念ながら正確なことは分かっていませんが、南太平洋の島々ではこの貝斧とよく似た道具を比較的新しい時期まで使用している地域があり（図3）、こうした道具を参考に基本的にはカヌー製作に利用する手斧や、貝の採取などの穴を掘る用途に利用されたと想定することができます（後述）。

また、貝斧はフィリピン南部やウォーレシアといった東南アジアの島嶼地域や、南太平洋のリモート・オセアニア地域で古くから利用された道具でもありました。宮古・八重山諸島の無土器期の物質文化は沖縄諸島以北や台湾には見られないユニークなものであることからその文化の成り立ちに注目が集まっていますが、貝斧の東南アジア島嶼地域や南太平洋地域との類似から、無土器期の文化的起源が南方の地域に由来するのではないかという可能性が示唆されています（図4）



図4. 既存の研究で示された宮古・八重山諸島と南方地域との関係

3. 南方のフィリピン・ウォーレシアのシャコガイ製貝斧

それでは、無土器期との関係が示唆される南方地域では、どのような貝斧が確認されているのでしょうか。有名なものとしては、フィリピン南部パラワン島で出土したシャコガイ製貝斧を挙げることができます(図5)。これは約4,500年前の人骨に伴って出土した大型の貝斧で、シャコガイの貝殻の蝶番部を利用する点などは、宮古・八重山諸島の貝斧とも類似していると言われています(小野 1999 など)。このようなフィリピン南部の貝斧との比較を通して、1990年代に宮古・八重山諸島の貝斧は南方からもたらされたのではないかという見解が示されました(安里 1993 など)。この論の提示は、宮古・八重山諸島における先史文化の成り立ちについて南へと目を向ける重要な指針となっています。

また、近年ではフィリピンやウォーレシアと呼ばれる海域を含む地域で様々な貝斧が発掘されています。興味深いのは、約1万年前という古い年代の貝斧(図6・7)が見つかるようになってきていること

です(Bellwood 2007、Pawlik et al. 2015)。今から1万年前という時代は、フィリピンでは旧石器時代とされる時期に当たりますが、フィリピンやウォーレシアの人々はこのように比較的古い段階から貝を使って道具を作り、利用していたことになります。

では、なぜこの地域の人々は貝斧のような道具を必要とし、貝斧はどのようにして登場したのでしょうか。これに関しては、同じ時期に磨製石斧が出土していることから、石斧製作の技術を応用して作られた可能性や、一部の地域でのみ発明された可能性などが挙げられていますが(Pawlik et al. 2015 など)、未だに明確にはなっていません。しかし、1万年前よりも古い時期のウォーレシア地域では、貝製の釣針や遠洋魚の魚骨などが見つかるなど、この地域の人々が古くから海や島といった海域世界へ進出して適応していた可能性が高まっており、貝殻を材料にして道具を製作するという行為も人類の海洋適応が進んだ結果の一つではないかとする視点も示されています(小野 2017)。

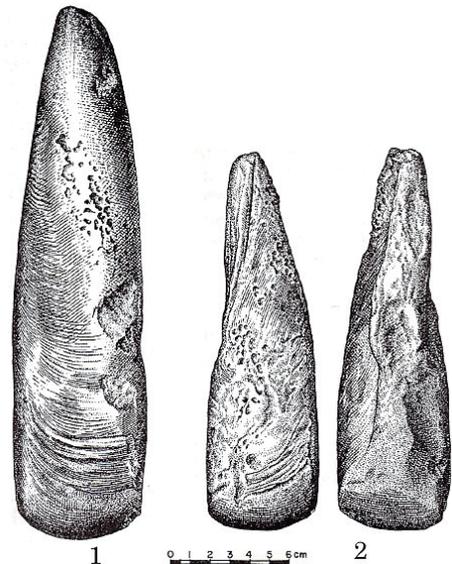


図5. パラワン島ドウヨン洞穴遺跡で出土した貝斧 (Fox 1970:63)



図6. 北マルク諸島ゲベ島のゴロ洞穴遺跡やブワワンシ遺跡で出土した貝斧 (Bellwood 2007 : 125)

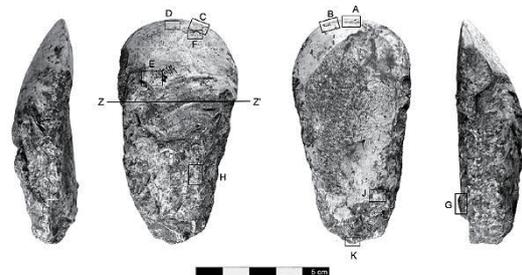


図7. フィリピン・ミンドロ島南部イーリン島のバドッグ I 遺跡で出土した貝斧 (Pawlik et al. 2015 : 300)

4. 南太平洋の島々へ進出した人々と多様化した貝斧

約4,000年前になると、台湾からフィリピンを始めとする東南アジア島嶼地域で人類史上の大きなイベントが発生しました。それが「新石器文化」と呼ばれる物質文化をもった人々の南方への大移動です。この人々は台湾を起点としてフィリピン・ウォーレシアへと展開し、約3,300年前には人類史上初めて南太平洋の島嶼地域リモート・オセアニアへと進出しました。現在の台湾やオセアニアを含む広い地域にオーストロネシア諸語という言語を話す人々が暮らしていますが、この新石器文化集団はその祖先となる人々であったと考えられています(印東2013など)。そして、このリモート・オセアニアへ最初に進出した人々が携えた道具の中にも、シャコガイで作られた貝斧が含まれていました。

リモート・オセアニアへ約3,300年前に進出した人々はラピタ人(ラピタ文化)と呼ばれています。彼らは装飾が美しい土器(ラピタ土器)を持った人々として知られていますが、多様な貝製品文化も持っており、比較的初期の段階から貝斧も利用されていたと考えられます(図8)。

また、宮古・八重山諸島やフィリピンでは無土器期や新石器時代の終焉以降、金属器(鉄器・青銅器)利用が出現・展開するにつれて貝斧の利用が衰退していくこととなりましたが、リモート・オセアニアでは最初に人類が進出した時期以降も長きに渡って貝斧が利用されていたことが確認されています(Takayama & Intoh1978、Intoh & Leach1985など)。

そして、広大な範囲の海域の中で、各々の島の地域性や環境に合わせて貝斧も多様な形・器種が展開していくこととなりました。このような地域ではシャコガイに限らず様々な貝殻を利用した貝斧も確認されており(図9)、加工できそうな貝殻を積極的に素材とし、道具を製作・利用していた様子を読み取ることができます。特に貝斧はサンゴ島での利用も多く、これも海域世界への適応の一つと捉えることができます。

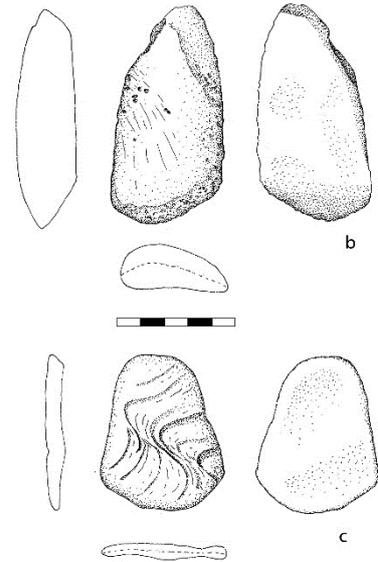


図8. ソロモン諸島南東部 RF-2 遺跡で出土した貝斧 (Szabó2010 : 123)

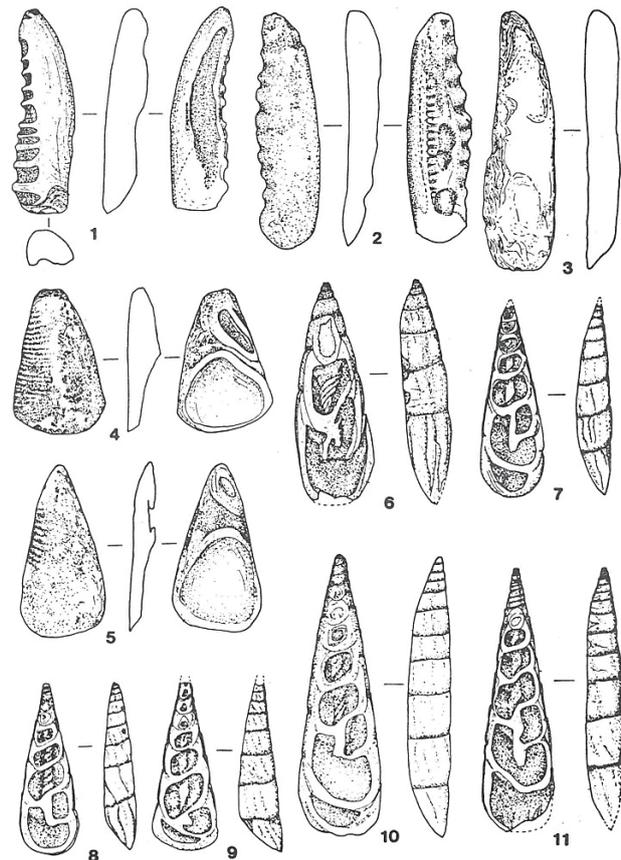


図9. チューク(トラック)諸島トル島のチュキーヌ貝塚で出土した500~400年前の貝斧。1~5はトウカムリガイ、6はフデガイ、7~11はタケノコガイを利用(Takayama & Intoh1978:Fig.16)

5. 民族事例からみる貝斧の利用

考古学的遺物として遺跡から見つかるものは、その用途を完璧に復元することはできません。私たちは遙か昔の人々にインタビューすることや、利用している姿を観察・記録することが出来ないからです。宮古・八重山諸島の貝斧もその例外ではありませんが、同じような道具を利用する現代の人びとや、そのような行動・生活の記録を参考に「推測」することができます。

南太平洋の島嶼地域・海洋世界では、ヨーロッパ人の文化的影響を受ける18～19世紀までは比較的伝統的な生活が行われており、19世紀にこの地域へと渡った宣教師ジョージ・ブラウンの自叙伝などにも記録が残されています (Brown 1908 など)。また、ブラウンは当時現地で利用されていた道具をコレクションしており (ジョージ・ブラウンコレクション：国立民族学博物館所蔵)、その中に多数の貝斧も含まれています (図10)。遺跡から出土する貝斧は、通常土壌中で木製部分が分解されてしまいますが、ブラウンのコレクションや人類学的調査によって得られた資料では、木製の柄と結合した貝斧の姿も確認することができます (図11)。このような利用が様々な地域や過去の時代とも共通するとは安易に断定はできませんが、利用を「推測」する上では貴重な資料であると言えるでしょう。



図10. 左からソロモン諸島オントン・ジャヴァ (左2点)、ビスマーク諸島マッティ島 (ウブル島)、同諸島ニュー・アイルランド島で採取された貝斧 (国立民族学博物館所蔵ジョージ・ブラウンコレクション：筆者撮影)



図11. ソロモン諸島オントン・ジャヴァ採取貝斧における結合式の接柄 (国立民族学博物館所蔵ジョージ・ブラウンコレクション：筆者撮影)

また、用途の面では、オセアニアの貝斧はカヌー作りや、イモ栽培に利用する土耕具など、様々な目的に応じて主に手斧として利用されていました。オセアニアの貝斧の材料や形態は多種多様ですが、斧の刃先の形や比較的扁平な造形などは他の地域の貝斧と共有している特徴もあり、宮古・八重山諸島の貝斧にもこのような用途を推察することができます。ただ、手斧自体は世界中で確認できる普遍的な道具であるため、様々な用途に適用できる基本的かつ万能的な利器の一つであったのかもしれませんが。

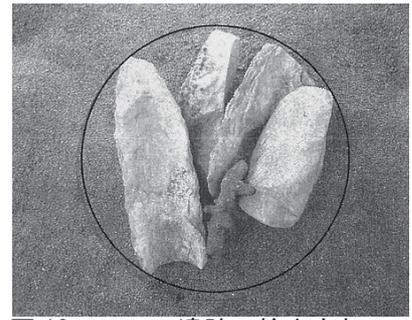


図 12. アラフ遺跡で検出された一括埋納された貝斧（江上 2007 : 316）

加えて、貝斧には日常的な道具以外の可能性も示唆されています。例えば、宮古島のアラフ遺跡で4つの貝斧が一纏まりで検出された事例に関しては（図 12）、インドネシアやオセアニアの民族事例と比較した上で、船を造る儀礼に関わる感謝や献花の意を示すものだったのではないかという考察が示されています（江上 2007）。残念ながらアラフ遺跡の一括埋納貝斧と同じ事例は他の遺跡で確認されていないため、このような儀礼が宮古・八重山諸島で一般的に行われていたかどうかは現時点では判然としませんが、儀礼といった精神的な要素とも結びつく可能性が貝斧に示されたというのはとても興味深い点であると言えるでしょう。

精神的な要素示すものとしては、フィリピン南部パラワン島のドゥヨン洞穴遺跡で出土した貝斧（図 5）も興味深い事例です。この貝斧は人骨に伴って出土しましたが、この人骨は頭蓋骨の耳元にシェルディスク（巻貝の底部を研磨して円盤状にしたもの。おそらく耳飾り。）が副葬されるなど、埋葬されていたものと考えられます。貝斧もこのような副葬品として出土しており（図 13）、その他にも磨製石斧や貝殻も伴っていたことが報告されています。この事例は、この時代の人々にとって貝斧が日常の道具であるだけでなく、死者の葬送儀礼に関わるものであった可能性を示しています。宮古・八重山諸島では無土器期の埋葬事例がないので検証が難しいですが、道具には日常的な用途を含め様々な利用方法が存在する可能性があるものと考えておく必要があるでしょう。

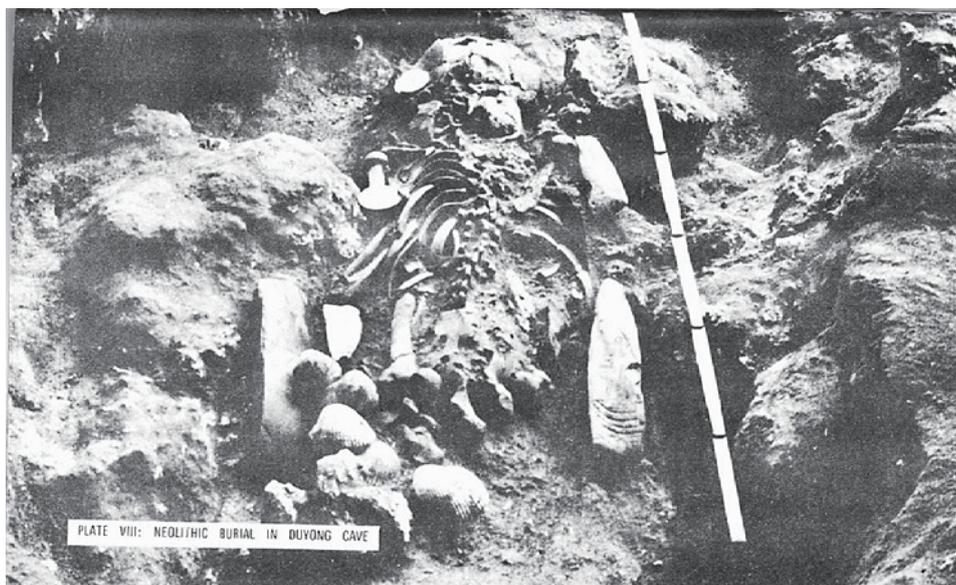


図 13. ドゥヨン洞穴で出土した埋葬人骨と貝斧を含む副葬品 (Fox1970:PLATE X III)

6. 貝斧利用文化は南方から北上したのか？

それでは、このような南方地域の貝斧の事例を踏まえた上で、果たして宮古・八重山諸島の貝斧利用文化＝無土器期文化は、既存の研究で示されてきたようにこれら南方の地域から北上したと考えられるのでしょうか。実は、この考え方には未だ解決されていない多くの問題が残されています。

その問題の一つは、宮古・八重山諸島の無土器期との関係が示唆されたフィリピン南部やウォーレシア地域の貝斧の多くが、無土器期より遥かに古い年代を示しているということです。フィリピン南部などの南方における古い年代の貝斧利用が宮古・八重山諸島まで伝わって無土器期の文化へと繋がったとするには、数千年という年代のギャップを解決しなければなりません。フィリピン以北ではこの時期以降の貝斧の出土例がなく、現時点で問題を解決する有効な論は示されていません。

では、年代的に無土器期と合致する3,000年前頃ではどうでしょうか。前述したように、約4,000年前に台湾からフィリピンなどの東南アジア島嶼地域へと新石器文化を持った集団が移動し、約3,300年前にはリモート・オセアニアへと進出しました。この時期、台湾やフィリピン北部、その間に位置するバタン諸島では貝斧利用が展開した様子が確認できないため、この新石器文化集団はフィリピン南部やウォーレシア辺りで貝斧利用を獲得したのではないかと考えられています（小野1999）。彼らは南太平洋の長い距離の海を越える航海術を持っており、貝斧も携えていました。リモート・オセアニアで利用された貝斧の中にも一見すると宮古・八重山諸島の貝斧と見間違えるようなものも確認することができます（図14）。この点から考えれば、彼らが長い旅路の果てに宮古・八重山諸島へ辿り着き、無土器期文化の祖先となったとしても違和感がないように思えます。

しかし、この考え方にも大きな問題があります。その一つは、初めてリモート・オセアニアに進出したラピタ人と呼ばれる人々は基本的に土器（図15）を利用する文化を伝えながら移動していたということです。リモート・オセアニアの一部では後に土器利用が喪失する地域がありますが、それは無土器期の開始よりも後の時期になってからのことでした。つまり、土器を利用しないということと、貝斧利用を兼ね備えた生活様式は、未だ無土器期と並行する時期のいずれの地域でも確認されていないということになります。これに加えて、ラピタ人たちは貝斧以外にも多様な貝製品を携



図14. 左：チューク（トラック）諸島トル島で出土した貝斧（Takayama & Intoh1978:Fig.15）
右：宮古島・浦底遺跡の貝斧（宮古島市教育委員会所蔵：筆者撮影）

えており、栽培植物やブタなどの家畜とともに島々へ入植しましたが、それらの文化要素は宮古・八重山諸島では確認されていません。宮古・八重山諸島と地理的に近いミクロネシアの貝斧（図 16）についても、シャコガイ貝殻の部位利用や形態が宮古・八重山諸島の貝斧とは異なるとする見解が示されています（小野 1999 など）。

また、無土器期の物質文化は周辺の沖縄諸島や台湾、フィリピン北部とは異なったユニークなものでしたが、これは周辺地域との文化的交流が密接ではなかった可能性が高いことを示しています。もし、ウォーレスリアやリモート・オセアニアの人々が宮古・八重山諸島へと大航海をしてきたのであれば、宮古・八重山諸島に辿り着いて以降にはなぜその航海技術を活かして周辺の地域とネットワークを構築しなかったのか疑問が残ります。

さらに、東南アジア島嶼地域から貝斧利用がフィリピン北部や台湾を伝って北上していった様子も現時点では確認できません。台湾やフィリピン北部では無土器期と並行する時期においても土器利用が継続的に展開していき、その間に位置するバタン諸島でも

台湾・フィリピンとの文化関係を示すような土器や石器などの物質文化を確認することができますが、これらの地域では土器を利用しない文化や貝斧の利用が展開した様子が見られないのです。

無土器期よりも遡る約1万年前という時期や、台湾から新石器文化を持った集団が拡散する約4,000年前以降に、フィリピン南部やウォーレスリアと言った東南アジア島嶼地域に貝斧利用が存在したことは間違いなく、南太平洋のリモート・オセアニアでは約3,300年前から現代に至るまでその利用が展開しました。これは一見「貝斧」という特徴で宮古・八重山諸島と共通しているように見えます。しかしながら、これら南方の人々が集団的に移住してきて無土器期の文化を担った、或いは彼らと恒常的に交流することで無土器期の文化が展開したと捉える上では、現時点では上手く説明できない問題が多いのです。

6. 近年の成果を基にした文化起源論に並ぶもう一つの可能性

このように多くの問題を抱えている南方起源論ですが、だからといって現段階でその可能性の全てが否定されるというわけではありません。これまでの考古学の多くの成果が新しい発掘調査によってもたらされているという点から考えれば、今後の新しい発掘調査成果によって無土器期の起源地にふさわしい場所が見つかる可能性は決してゼロではないと言えるでしょう。

しかし、2016年に約30年ぶりに宮古島へと帰還した浦底遺跡出土遺物の詳細が明らかになってきたことで（久貝弥嗣氏の発表を参照）、これまであまり顧みられていなかった可能性の検証や、既存



図 15. 国立民族学博物館所蔵のラピタ土器（複製）（印東 2014 : 77）



図 16. ミクロネシア・フェイス島出土の貝製品。cやdがシャコガイ製貝斧で、貝殻体部を斜めに切断して利用している（印東 2014 : 75）

の考え方の枠組みをより広く展開させる余地が生まれてきています。

近年、宮古島のアラフ遺跡や友利元島遺跡、長墓遺跡の発掘調査成果によって、宮古島の無土器期は大きく前後の時期に分けることができるのではないかと考えが示されました（久貝・大堀 2015）。そこに、これまで謎のベールに包まれていた浦底遺跡の 200 点近くの貝斧の分析が行われてきたことで、宮古島における貝斧製作も時間的変化に従って変遷していた可能性が示されています（山極・久貝 2017）。この変化では貝斧全体をよく磨き比較的形の整った貝斧から、刃のみを磨き比較的大型で素材の形を残す貝斧への変化が提示されています（図 17）。無土器期の宮古・八重山諸島は前半期・後半期ともに、周辺地域からの影響を受けて劇的に文化変容が起きた様子が確認できないことから、この貝斧製作の変化も宮古・八重山諸島で独自に生じた変遷であった可能性が高いと考えられます。

また、無土器期における宮古島の状況が明らかになるにつれて、隣の八重山列島との違いに関しても注目されるようになってきています。浦底遺跡やアラフ遺跡に見られるように、宮古島では貝斧を含めた貝製品や動物骨を用いた道具の利用が展開しましたが、石垣島や西表島を始めとする八重山列島では石材を用いた石器の利用が積極的であったと考えられています（島袋綾野氏の発表を参照）。八重山列島でも貝斧の出土は確認されていますが、この地域の当時の人々は貝ではなく石材を用いて道具を作る戦略を採用したようです。宮古島と八重山列島は、沖縄諸島や台湾・フィリピンと比べれば無土器文化であることや、基本的な生業・道具の器種構成などの点で共通性を持っています。つまり、宮古島と八重山列島は文化的にも比較的近い集団であったと考えられますが、一方で、全く同一というわけではなく、各々地域的な特徴が発揮されていた点は注目すべき要素です。



図 17. 浦底遺跡出土貝斧の下層から上層へかけての特徴の変化
(宮古島市教育委員会所蔵：筆者撮影)

文化やそれを持ったの集団が「どこから来たか」を考えると、しばしば起源地の文化が移住先でもそのままそっくり再現されると考えてしまうことがあります。しかし、人の移動や文化形成はそれほど単純ではありません。例えば、それまで石材を用いて石器を作っていた人々が全く材料となる石材がない環境へ移住すると石器作りが難しくなってしまうように、人は移住先の環境に合わせて行動や生活を変化させて適応する必要があります。このような人の移動と環境の関りは南太平洋のリモート・オセアニアでも指摘されており、特にサンゴ島のような利用可能な資源が少ない環境に人が移住する場合、文化要素の取捨選択や、新しい要素の発明が生じるとされています（印東1999など）。

このような観点から考えれば、無土器期の起源がいずれの地域にあるにせよ、宮古島で貝斧を含めた道具利用が展開したことや、八重山列島で貝斧ではなく石器を中心とした道具利用が展開したことは、それぞれの地域に居住した当時の人々が各々環境に合わせた行った選択の結果であると捉えることができます。東南アジア島嶼地域やリモート・オセアニアにおける貝製品利用に関しては「人類の海洋適応」として捉える視点が示されていますが、宮古・八重山諸島においても似たような適応が生じていたと考えるのも不思議ではないでしょう。

また、興味深いことに、約4,000～3,000年前以降に南方の海域世界へと進出した人々は必ずしも貝斧のみを使用していたわけではなく、石器に適した石材が豊富な火山島やその近くの島などでは石器利用も行われていました（図18）。つまり、南太平洋の小さな島嶼地域へと適応した人々であっても、環境に合わせて貝製品や石器を臨機応変に利用していたのです。これは、宮古島と八重山列島における道具利用の違いと比較すると、似たような環境における非常に興味深い人の行動の共通性です。

そして、無土器期と全く同一の物質文化を示す地域が未だ確認できないことや、宮古島と八重山列島における道具利用の違いを含む地域性、そして南方地域における海域適応との共通性を鑑みると、「宮古・八重山諸島で貝斧が生み出された可能性」についても改めて検証する余地があると言えるでしょう。この可能性は、宮古・八重山諸島における石斧製作の技術を応用することで貝斧がこの地域で独自に発明されたとする考え方で（高山2001など）、かつて南方起源論に反論するモデルとして提示されました。ただ、この考え方も下田原期と無土器期の接続の問題や、無土器化が起こり得るのか否か、八重山列島における無土器期の古い遺跡が見つかっていないのはなぜかなど、未だ複数の問題を残しており、近年まではあまり議論の俎上には載せられてきませんでした。しかし、東南アジア島嶼地域における貝斧の発生の一つにも磨製石斧技術からの派生の可能性が挙げられており、リモート・オセアニアでは時代が異なるものの土器利用文化の喪失が起こりました。これらの事例は、同様の出来事が宮古・八重山諸島でも起こり得ないものではないことを示しており、貝斧が宮古・八重山諸島で生み出された可能性も、今後南方起源論と同様に検証すべきものとして浮上してきていると言えます。

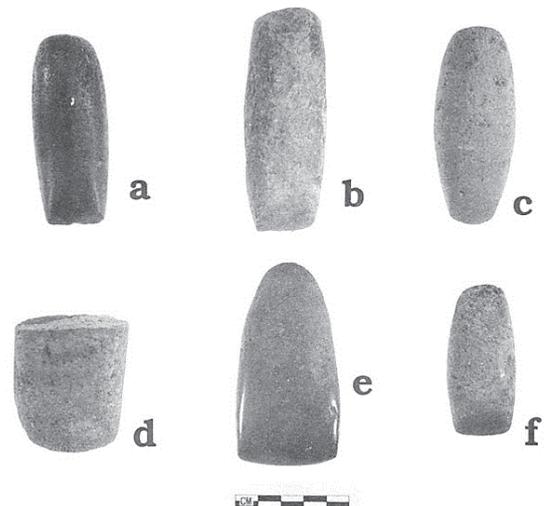


図18. 北マリアナ諸島アギガン島出土の磨製石斧 (Butler1992: 210)

7. おわりに：「どこから来たか？」からだけでなく「なぜそうなったか？」の視点へ

宮古・八重山諸島の無土器期に対して提示された南方起源論は、残念ながら現時点では明確な起源地やルートを明らかにするには至ってはならず、未だ多くの課題を残している状況です。しかしながら、貝斧利用という特徴的な要素が東南アジア島嶼地域や南太平洋の島々と共通する点を指摘したことは、一地域だけでなく広い視野で文化形成を考える上でも重要な役割を果たしています。長らく南方地域との比較を念頭にその文化形成が考えられ続けてきた宮古・八重山諸島の先史時代ですが、近年の発掘調査や資料の分析によって、既存の研究で培われてきた南方への意識を土台としつつ、それをさらに幅広く展開させる可能性が示されてきているからです。

考古学で捉えている物質文化や幅広い意味での文化は、それ自体が自然に生まれるわけではなく、「人々の行動の結果」として生み出されるものです。発掘調査事例が少なく、資料の蓄積も乏しい状況では最も基本的な「どこから来たか？」を探求するしかありませんでしたが、浦底遺跡やアラフ遺跡に代表される考古学的情報が蓄積してきたことや、八重山列島との比較を通じた総合的な研究視点が展開してきた今、当時の人々が各々の環境でどのような行動をとった結果として文化が形成されたかという「なぜそうなったか？」という視点で考えていくことも可能となってきました。

この点で、既存の研究で指摘された南方地域との「貝斧の類似」は単純にモノの類似だけではなく、それを利用した人々の「環境における行動」の類似としても捉えることが出来るのではないかと考えています。では、それが果たして文化的関係によってもたらされている類似なのか、はたまた同じような環境に人類が進出した時に生じる共通性なのかについては、この先貝斧のみならず考古学的情報全体や生態環境の情報を組み合わせて検証していく必要があるでしょう。しかし、宮古・八重山諸島の歴史過程を明らかにするという視座に加えて、島に居住した彼らの行動が同じ環境に暮らした人々とどのような共通点・相違点を持つかという視座をもつことで、より具体的にこの地域に生きた人々の環境との関わり方や、時に厳しい環境条件で生き抜く工夫といったものが描き出せるのではないかと考えています。その人々の「生きる上での工夫」の積み重ねは、宮古列島や八重山列島における「文化の歴史」と言えるかもしれません。

すなわち、かつて宮古・八重山諸島の先史時代研究を引っ張ってきた南方地域との比較という視座は、東南アジア島嶼地域や南太平洋地域も含めた幅広い人類史的研究の枠組みや、より発展的な文化史の構築へも展開してきたと言えるでしょう。

謝辞

本発表や資料におけるデータに関しましては、宮古島市教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センター、国立民族学博物館に多大なるご協力を賜りました。また、東南アジア島嶼地域やオセアニアの情報に関しては、国立民族学博物館の印東道子先生、鶴見大学の田中和彦先生、東海大学の小野林太郎先生に貴重な調査の機会や、得難いご教示をいただきました。結びに記して感謝申し上げます。

註

1:各貝の説明に関しては、鹿間(1950)、渡部・小菅(1966・1967)、本間(1983)、アボット・ダンス(1985)、菱田(2000)、奥谷(2017)を参考に作成しました。

参考・引用文献

- 安里嗣淳．1993. 「南琉球の原史世界」比嘉政夫（編）『海洋文化論』環中国海の民俗と文化第一巻、凱風社、61-84 頁。
- アボット, R. T. ・ S. P. ダンス．1985. 『世界海産貝類大図鑑』、平凡社。
- 印東道子．1999. 「オセアニアの島嶼環境と人間居住」『熱帯研究』3号(1)、日本熱帯生態学会、87-108 頁。
- 印東道子．2013. 「海域世界への移動戦略」印東道子（編）『人類の移動誌』、臨川書店、232-245 頁。
- 印東道子．2014. 「ブタをつれて海を渡った人たち－マイクロネシア・フェイス島の発掘から」『季刊民族学』149号(第38巻3号)、千里文化財団、69-86 頁。
- 江上幹幸．2007. 「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器－貝斧埋納遺構の考察を中心に」『南島考古』26号、沖縄考古学会、305-326 頁。
- 奥谷喬司（編）．2017. 『日本近海産貝類図鑑』第二版、東海大学出版部。
- 小野林太郎．1999. 「東南アジア・オセアニアの貝斧について－マイクロネシアにおける貝斧の型式分類と比較研究」『東南アジア考古学』第19号、東南アジア考古学会、19-56 頁。
- 小野林太郎．2017. 『海の人類史－東南アジア・オセアニア海域の考古学－』、雄山閣。
- 久貝弥嗣・大堀皓平（編）．2015. 『いま、宮古の考古学が面白い！－無土器期からグスク時代への移り変わり－』、沖縄考古学会。
- 鹿間時夫．1950. 『原色図鑑 続世界の貝』、北隆館。
- 菱田嘉一．2000. 『世界海産貝類コレクション大図鑑』、電気書院。
- 高山 純．2001. 「先島のシャコガイ手斧はフィリピン起源か」『南島考古』20号、沖縄考古学会、1-27 頁。
- 本間三郎（編）．1983. 『貝Ⅱ（二枚貝・陸貝・イカ・タコほか）』学研生物図鑑、学習研究社。
- 山極海嗣・久貝弥嗣．2017. 「先史時代における沖縄県宮古島を中心としたシャコガイ製貝斧の展開－浦底遺跡出土貝斧の分析を基にした時空間的変異の検証－」『物質文化』97号、物質文化研究会、113-132 頁。
- 渡辺忠重・小菅貞夫．1966. 『原色世界貝類図鑑』Ⅱ熱帯太平洋編、保育社。
- 渡辺忠重・小菅貞夫．1967. 『標準原色図鑑全集』第3巻、保育社。
- Bellwood, P. 2007. Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago (Revised Edition. First Edition in 1985). ANU E Press: Canberra.
- Brown, G. 1908. Pioneer-Missionary and Explorer, an Autobiography; A Narrative of Forty-Eight Years' Residence and Travel in Samoa, New Britain, New Ireland, New Guinea and the Solomon Islands. London Hodder and Stoughton. (Scholar's Choice Edition in 2015)
- Butler, B.M. 1992. An Archaeological Survey of Northern Mariana Islands. Micronesian Archaeological Survey Report Number 29. Department of Community and Cultural Affairs Saipan.
- Fox, R. B. 1970. The Tabon Caves: Archaeological Explorations and Excavation on Palawan Island, Philippines. Monograph of the National Museum no.1. Manila.

- Intoh, M. and F. Leach 1985. Archaeological Investigation in the Yap Islands, Micronesia. BAR International Series 277. Great Britain.
- Pawlik, A.F. et al. 2015 Shell tool technology in Island Southeast Asia: an early Middle Holocene Tridacna adze from Ilin Island, Mindro, Philippines. *Antiquity* vol.89: pp.292-308.
- Szabó K. 2010. Shell Artefacts and Shell-Working within the Lapita Cultural Complex. *Journal of Pacific Archaeology*, Vol. 1, No. 2, pp.115-127.
- Takayama J. and M. Intoh 1978. Archaeological Excavation at Chukienu Shell Midden on Tol, Truk. Reports of Pacific Archaeological Survey, Number 5. Tezukayama University: Nara City, Japan.

集石遺構の用途と文化

江上 幹幸（えがみ ともこ）

元沖縄国際大学教授

琉球列島は北琉球圏と南琉球圏に分かれ、南琉球圏に属する八重山諸島では有土器期から無土器期に移り変わる文化期を生み出し、宮古島では八重山諸島とは異なり、人びとは無土器期からこの島に住みはじめ、有土器期に人びとが活動した痕跡を確認できない。土器を持たない宮古島の人々にとって、食物加工施設として重要な役割を果たすと考えられる集石遺構は東海岸の遺跡から数多く検出されている。焼石調理に利用されたと考えられる礫の利用は野嶋洋子(1994, 2005, 2007)や田村隆(2015)が指摘するように民族誌での事例を分析することが最も有効である。土器を持たない人びとがどのような方法で加熱調理機能をシステム化していたかを浦底遺跡、アラフ遺跡の事例で検証する。本報告では民族誌のデータから無土器期を代表する浦底遺跡、アラフ遺跡の遺跡形成過程を明らかにできればと考えている。

1. 集石遺構

集石遺構は日本の旧石器時代から縄文時代に日本各地、特に関東地方、南九州の遺跡から数多くの遺構が検出され、その利用法についても多くの論考が提示されている。沖縄県出土の集石遺構は安座間充により集成され（安座間 2005）、調理施設を類推するもの以外にも礫が集中した状態から「集石遺構」と報告されているものもあると指摘している。土器焼成施設の可能性や埋葬施設などの用途を持つものである（安座間 2005）。

安座間が集成した沖縄本島の集石遺構はここで報告を行う浦底遺跡やアラフ遺跡にみられる径 1m 以内の小規模のものとは異なり、ほとんどが径 1m 以上の規模のものである。本土の旧石器・縄文時代に検出される集石遺構と同様に大形のものが主流を占めている。集石遺構の規模の違いは、土器をもたない人々の焼礫の使用法と関連する。礫群を調理道具として使用したと考えられる無土器期の人々が作りだした焼礫群は、土器を使用した文化期の人々とは異なる痕跡を残した。

アラフ遺跡での集石遺構の検出（第Ⅶ層 BP2765 ± 32）は、宮古島に住みついた人々がどのような生計戦略を持ってこの島に渡って来たかということを明らかにしている。おそらく、宮古島に来た人々は焼石調理法を知っていて、この島に移動してきたと考えら、集石遺構はその残存した跡である（資料図版 6 参照）。浦底遺跡やアラフ遺跡などで検出されている焼礫は後述する焼石調理に使用された痕跡である。

集石遺構は浦底遺跡では 168 基（発掘面積約 4000 m²）（集石遺構番号がつけられた件数）、アラフ遺跡では 50 基（発掘面積約 350 m²）が検出され、その検出状況から明らかに調理用の施設であったことを物語っている。浦底遺跡は報告書未刊（来年度発行予定）のため、詳細なデータは持ちえないが、写真での分析によれば、アラフ遺跡と同じように浦底遺跡に人々が住みはじめたときから集石遺構は検出され、最下層の東区第Ⅵ層から 3 基の遺構が確認されている。アラフ遺跡最下層第Ⅶ層から

の集石遺構とは検出状況が異なるが、焼礫を利用して人々が生計を担っていたことは明らかである。

浦底遺跡、アラフ遺跡のそれぞれの層位ごとの放射性炭素年代は以下の通りである。

浦底遺跡西区IV層 (BP. 2340 ± 75、BP. 2520 ± 80) III層 (BP. 1880 ± 75、BP. 2180 ± 75 BP. 2200 ± 75)、アラフ遺跡第VII層 (BP2765 ± 32、BP2772 ± 31年)、V層 (BP2220 ± 40、BP2310 ± 40)、第III層 (BP1920 ± 40)、II層 (BP843 ± 30) である。

浦底遺跡出土集石遺構は168基(その内10基は未確認)である。層別にみると西区II層18基、西区III層43基、西区IV a層層4基、西区IV b層49基、東区II層5基、東区III層17基、東区IV層7基、東区V層12基、東区VI層3基である。

アラフ遺跡出土集石遺構50基(3号、20号、34～39号集石は欠番)のうち、詳細なデータを手し得た集石遺構は38基である。III層9基、IV a層1基、IV b層4基、IV c層7基、V c層9基、V d層1基、VI層1基、VII層6基である。VII層については現地保存を優先し、原位置の状態での保存を試みたため、礫、遺物の取り上げは限られたものだけとなった。

最近、報告者はアラフ遺跡出土の集石遺構の分類を試みた瑞慶覧長順の基準を用いて(瑞慶覧2017)、同遺跡の集石遺構の再分析を試みた(江上2017)。

I型＝「密集型」：プラン及び掘込み認識可、礫が中心に過度に集中している状態

II型＝「集中型」：プラン及び掘込み認識可、礫の分布が集中している状態

II - 1. 礫の総数および重量は少ないが、集石の中心に分布しているため集中してみえる状態

II - 2. 多数の礫が集中している状態

III型＝「分散型」：プラン及び掘込み認識困難

III - 1. 礫がまばらに分布している状態

III - 2. 礫の集中箇所が1箇所、もしくは複数箇所見られる状態

これら類型化のすべては浦底遺跡出土の集石遺構で確認される。特にI型、II型が顕著に検出され、後述する焼礫を利用した石蒸し調理用地炉(earthoven)の用途を明確に示す資料となっている。最下層の浦底遺跡、アラフ遺跡ではかなりその様相が異なるが、浦底IV b層、アラフV層は白砂層の中にブロック状に集石遺構が集中的に検出される状況は分布域から読みとれる。図2は西区(II層からIV層b)、東区(II層からVI層)までの集石遺構の出土位置図の概略であるが、分布域が数か所に集中しているのが読み取れる。1m内の小型の焼礫群は使用された地炉の底部であり、ある程度の回数は使用したと思われる。

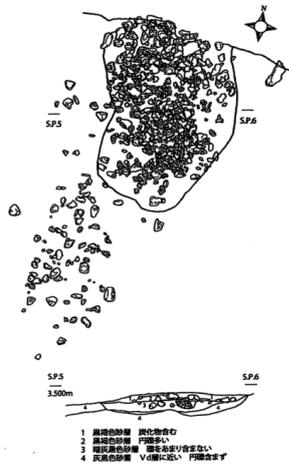
3 焼石調理法

直火や熾火を利用して「焼く」調理法と土器を利用せずに地炉を用いて調理する石蒸し調理は先史時代から行われていた調理法である。用途については、民族誌の検討などから推測される石蒸し調理、グリル、焼石包み込み調理、ストーン・ボイリングである。

旧石器時代の礫群、縄文時代の集石遺構は具体的な使用法を復元する場合、民族考古学的学問領域から分析を試みる方法が活用されている。

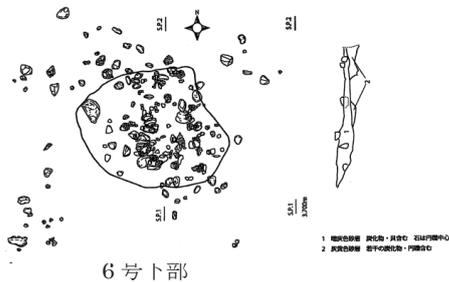
オセアニア(野嶋1994 2005 2007)や北米先住民(田村2015、野嶋2007)の民族誌事例は焼石調理の使用法、使用、廃棄過程を明確に記録することで、遺跡形成過程の復元に大きな役割を

I型 「密集型」 プラン・掘り込み礫が中心に集中
アラフ遺跡
III層 1基 IV層 3基 V層 2基 VII層 4基



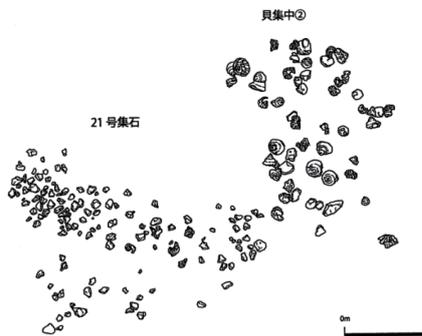
V層 30号

II型 「集中型」 プラン・掘り込み、礫の分布集中
II-1 礫の総数・重量は少ないが集石の中心に分布



6号下部

II-2. 多数の礫が集中している状態



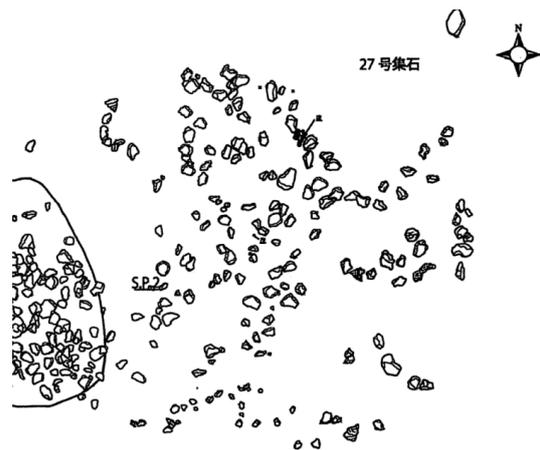
21号

III型 「分散型」 プラン及び掘り込み認識困難
III-1 礫がまばらに分布している状態



31号

III-2 礫の集中箇所が1箇所、もしくは複数箇所



27号

表 1

	平面分布密度 類型化 (表1)					計
	I型	II型		III型		
		II-1	II-2	III-1	III-2	
III層	1	0	3	2	3	9
IV層	2	2	2	4	2	12
V層	2	4	0	3	1	10
VI層	0	0	0	1	0	1
VII層	4	1	0	0	1	6
	9	7	5	10	7	38

図 1 集石遺構分類図

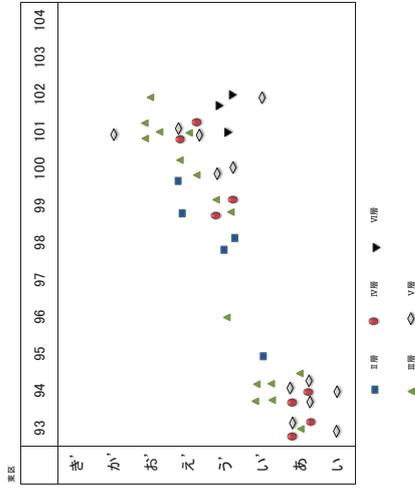


写真1 第26号集石



写真2 第73号集石〔せ-35・第3層〕



写真3 第150号集石〔う-98・第3層〕

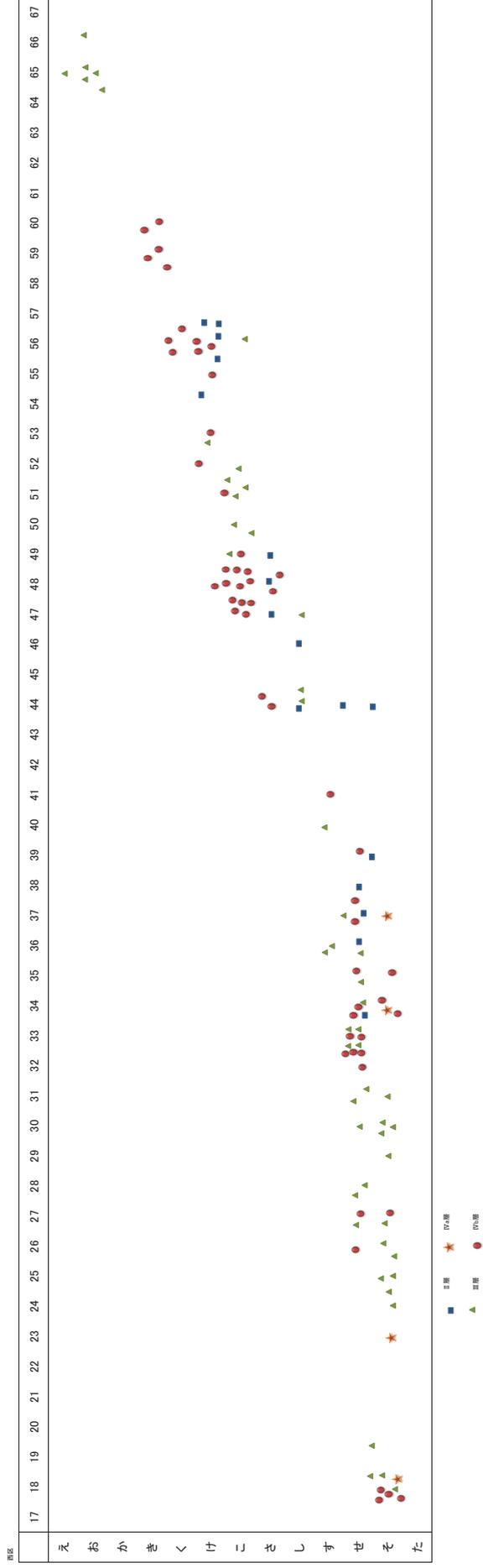


図2 集石遺構検出位置図

担っている。

北米での民族事例では、北はアラスカから南はメキシコ湾岸に至る帯状の地域で綿密な分布域が形成されているという（田村 2015）。礫群で調理される食品は北太平洋沿岸北部では動物の肉、南西部では植物が対象となる。北米でのトムスによる焼石調理分類(Thoms 2007)はピット・オープン調理(露出石蒸し炉)、(密閉石蒸し炉) スチーム・オープン調理(煮沸調理)、グリル調理、ストーン・ボイリングであり、オセアニアで行われるその分類は①石蒸焼き、②グリル、③焼石包み込み調理、④ストーン・ボイリングである。田村と野嶋はそれぞれ、焼石調理の考古学的相関を以下のように想定している（野嶋 2005）

これらの調理法は地炉を用いて「蒸し焼きにする」、直火や熾火で「焼く」、焼礫での「煮る」に大別される。

焼石調理法	考古学的相関
A・地上式石蒸焼き (同一場所での石材加熱・調理)	礫集中部：礫加熱の痕跡・木炭；周辺に 散在した焼礫 (上部にも焼石を用いる場合)
B・地上式石蒸焼き (別地点での石材加熱・調理)	礫集中部；周辺に散在する焼礫 (上部にも焼礫を用いる場合)
C・グリル	礫集中部；礫加熱の痕跡・木炭
D・地下式石蒸焼き (同一土壌内での石材加熱・調理)	土壌；土壌内の加熱痕跡・木炭集中 土壌内焼礫；土壌周辺に散在する焼礫 (上部にも焼礫を用いる場合)
E・地下式石蒸焼き (別地点での石材加熱・土壌内調理)	土壌；土壌内焼礫；土壌周辺に散在する焼礫 (上部にも焼礫を用いる場合)
F・焼石包み込み調理	礫加熱のための焚火跡；散在する焼礫 (礫数比較的少)
G・ストーン・ボイリング	礫加熱のための焚火跡；散在する焼礫 (礫数比較的少) 容器としての土壌の可能性

北米、ポリネシアでの使用工程についてはリーチとブースマンにより、興味ある図が示されている。図3はピット・オープンの使用工程図であり（Leach and Bousman 2001, 田村 2015）、田村はその工程を以下のように報告している（田村 2015）

- 1 直径1～1.5m、深さ0.3m程度のピットが掘られる。ピット内で燃料が燃やされる。
- 2 炎がおさまらないうちに礫が火中に投げられる。火が小さくなり、燃料が炭化すると、礫の温度は調理用として好適になる。
- 3 熱せられた礫の上にパッキング材として枝葉や草葉が置かれ、その上に前もって採集された食材が並べられる。これは食材を過加熱から防御するために必須である。食材はさらにパッキング材によっておおわれる。
- 4 ピットを掘削したときの排土でおおう。この排土で不足するときには、ピットの周辺から土を集

める。この際、新たに採土用のピットが掘られることがある。ピット・オープンの周辺は、採土用のピットや凹地によって取り囲まれ、地表面には凹凸が生じる。蒸し焼き終了までには24～72時間を要する。工程5は調理が終了し、工程6からピットが再利用される工程に入る。

- 5 調理に十分な時間を費やしてオープンが開口される。次いで、ピット内の灰や炭化物、礫などが取り除かれ、清掃作業がおこなわれる。再利用できる礫（礫は強く焼成されることによって、その熱伝導率－オープン内保温効果が低下する。これが頻繁な礫交換の理由である。Jackson 1998）はピットの脇に集積され、破碎した礫片はまわりに捨てられる。
- 6 ピットが再利用され、2回目の調理が開始される。
- 7 以下工程2～4が反復される。しかし今回は覆土用の土砂として、工程5におけるピット内清掃に伴う排土が再利用される。また、新たに採土用のピットが掘られる。こうして、調理2回目の覆土中には、灰や炭化物とともに、多くの破碎破片と石器が混入することになる。
- 8 ピットの再利用がすすむにつれて、ピット周辺からの、また、オープン覆土からの廃棄物が集積する。これには、キャンプに廃棄されていた石器が含まれるが、ピットの稼働とは無関係な石器類が次第にピット周辺に堆積する。

北米、オセアニアでの焼石を利用した調理法は多くの民族誌に記載されている。19世紀から20世紀に調査された事例から窺う限り、北米、オセアニア共に同じような使用方法で調理を行い、焼礫の痕跡を残している。これらの事例が時代的にどれくらい遡るかは明らかではないが、一部の地域では、これらの調理法が現代社会の中で伝統的調理法として残存している。

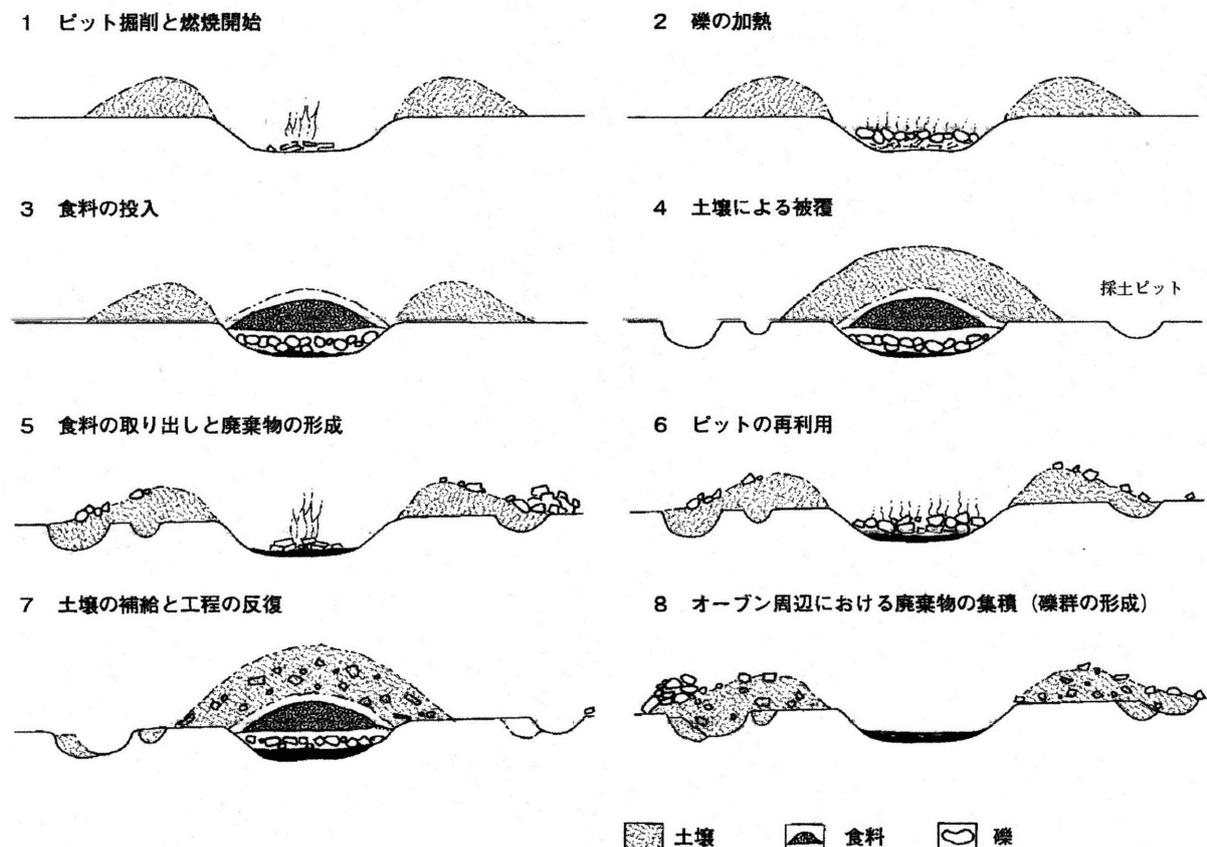


図3 ピット・オープンの使用工程図

オセアニアではラピタ遺跡から集石遺構が確認され、土器、地炉、直火で調理されていた。その後、多くの地域で土器が消失し、ポリネシアやマイクロネシアでは地炉による石蒸し調理が主要な調理法となっていく。島嶼地域の限られた環境の中で生計を確立するための戦略として、食物の獲得、食物の加工技術は重要要素となる。

オセアニアで一般的に知られるウム料理は石蒸焼き、グリル、焼石包み込み調理の調理法を含む。ストーン・ボイリングはオセアニアではあまり一般的ではないが、ココナツミルクを煮つめたり、魚やタロの葉、サツマイモの蔓などを調理するとき使用されているという (Buck1964, Thompson 1940)。

石蒸し料理はいくつかの調理法があるが、1930年代にマイクロネシアで調査を行った松岡静雄は以下のような報告をしている。往昔カロリン群島において「パンの実でも魚類でもウム (又はウムム) といふ穴竈で蒸焼にするのである。其方法は調理すべき物品の多寡大小に応じて径1 m内外、深さ適宜の穴を掘り、先づ薪を燃して火熱を起し、之に丸石を投げ入れて赤くなるまで灼いて平に接げた上に芭蕉其他の葉を数重に敷き詰め、之に炙るべきものを載せ、其上から木の葉を若干の厚みにきせ、更に其上を土で覆うて置くのである。若干時間の後には其内容物は極めて完全に一魚鳥獸畜ならばその腸までも一蒸焼になるのである。(中略) 多量のパンの実又はタロ芋を一時に蒸す為には之を円錐状に積み上げ、これを覆うた木の葉の頂上に孔を穿ち、水を注ぎ込むと大なる爆音を立て水蒸気が発生する。乃で其の孔を塞いで更に木の葉又は草を加へて被覆して置けば30分の後によくむれると松村氏は報告した。此調理法の性質上一時に相当の多量を処分することを利益とするから、多くの場合一部落又は若干家族が共同して之を行ひ、豚、犬の如き大きなものは之を切って分配し、小魚、果実、球根等は各自持ち寄ったもの又は割当てられた数量を取るのである。ルク島ではパンの実、タロ芋等は其の場で石杵を以て板の上で搗き潰し、径25cm くらいの捻り餅にして持ち帰る。」(松岡1943) 図 に掲載した北米の民族誌の事例と同じような方法で実施されている。

石蒸し調理に使用される地炉の構造は①平坦な地面上に炉を構築するもの、②地面を浅く掘りくぼめるもの、③穴を掘る代わりに樹皮を用いて型枠を作り、その中で調理するもの、④炉の周囲に石囲いを設置し、炉底部に敷石を施しているもの ④炉の周囲に葉を編んで型枠を作り、その中で調理するものなどがある。

無土器期の遺跡から検出される集石遺構はおもに石蒸し調理に使用された焼礫と考えている。これらの遺跡から検出される礫は石を焼くプロセス時に使用されたものと食物を調理するプロセス時に使用されたものに分かれる。野嶋は石を焼くプロセスと食物を調理するプロセスが同じ場所で実施される地域としてポリネシア、マイクロネシア、メラネシアをあげ、ニューギニアでは石を焼く場所と調理をする場所が異なることを指摘している。(野嶋1994)。

図3に見られるような集石遺構は上記のような工程で焼礫が使用された残存である。民族誌の事例でも指摘されているように、調理に使用される石は拳大ほどに大きさのものであり、遺跡から検出される焼礫と同じである。図3は地炉の底に敷き詰められた礫が幾度か使用された跡の遺構であり、その周辺に散乱する焼礫は廃棄された痕跡の可能性もある。これらが遺跡形成過程としての残存物である。①多くの石が集積した状態、②石が抜き取られ、黒色土の堆積した状態、③度重なる使用によるマウンド化などが遺跡形成過程の遺構である (野嶋1994)。

無土器期の焼礫がストーン・ボイリングで使用された可能性については別の論考で指摘いたので、ここでは割愛する（江上 2017）。

最近の旧石器時代の礫群研究は宮古島の生業戦略を考察する上で多くのことを示唆している。例えば保坂康夫の研究では、論文タイトル「礫群から集石へー「詰める」から「覆う」調理法へー」が示すように、旧石器時代の礫群から縄文時代の集石への変化過程を検討することで、植物資源をどのように処理し、食物資源に変えていくかという問題に取り組んでいる（保坂 2004）。「覆う」調理法ではより大型の礫が効果的であり、「詰める」調理法ではより小型の礫が効果的であることを指摘している。すなわち旧石器時代の礫群の「詰める」調理法から縄文時代の「覆う」調理法の変化は検出された遺構に規模にあらわれている。さらに、遺構の小型化から大型化への変化である。琉球列島に見られる無土器期の集石遺構から貝塚時代の集石遺構の規模の変化は、土器を使用しない時期と土器を使用する時期の集石遺構での調理対象物・方法・目的の違いがこれらに反映しているのではないかと考える。

さらに、民族考古学的方法論で焼石調理法を論じた野嶋も興味深い見解を示している。旧石器時代から出現する礫群は炭水化物を含む植物質食料（根茎など）を長時間加熱処理するために必要であり、さらに植物内の有毒な 2 次代謝物質や多感物質を除去するための食物加熱技術として、礫群の長時間加熱という調理法が有効な手だてとなり、民族誌事例の多くが示唆するものには石蒸し料理と根茎類植物類との強い相関関係があると指摘している（野嶋 2005）。まさに宮古島の集石遺構利用による食物資源を考察する上で重要な研究であると考えられる。資源の限定された島嶼環境に居住する人々は沿岸を中心とする豊富な海岸資源を利用していた。サンゴ礁島という制約の多い環境で人間が生きぬくための戦略は食物獲得と可食である。限られた環境資源を可食可能なものにするために、最も重要なことは加工、調理する機能を見出すことである。

他方、浦底遺跡、アラフ遺跡の集石遺構で顕著な特徴が観察された。それはサラサバテイの存在である。検出された集石遺構には、高い確率で上部に一個のサラサバテイが置かれている。もちろん食料残滓としてのサラサバテイではなく、明らかに展示目的で配置されたものである（資料図版 6）。この状況は第Ⅶ層の遺構から第Ⅲ層の遺構まで継続している。今後、民族誌事例などを検証し、その用途を明らかにしたいと考えている。

おわりに

浦底遺跡やアラフ遺跡から出土した遺構、遺物から考察する限り、宮古島における無土器期前半の主要な文化要素は集石遺構と比較的豊富な種類の貝製品、特に様々な用途を持つシャコガイ製品であることが明らかとなった。未報告ではあるが、浦底遺跡では 168 基の集石遺構と 160 本（200 本超）の貝斧（シャコガイ製品）が出土している（照屋 1989、Asato 1990、山極・久貝 2017）。これらの主要な文化要素からみた「ものからコト」へと問題を発展させた時、彼らが集石遺構を調理施設として使用し、前面に広がる海・陸の産物を調理し、様々な貝製品・骨製品を製作・使用して生計をたてていたであろうことが浮かびあがる。島嶼環境での生活を確立するためにも礫を利用した調理法は重要であった。

では、同時期の八重山諸島ではどのような生活を行っていたであろうか。宮古島の東海岸で人びと

が生計活動をはじめた頃（現在までのデータでは 2900 年前）は八重山諸島では空白の時期であり、八重山諸島に集石遺構、あるいは貝斧が確認できるのは紀元後である（金武・島袋編 2009）。

これらのことを念頭に置き大胆に考察するならば、宮古島の無土器期前半文化を担った人々は、何処の地からか焼石調理法を携えて移動を開始し、八重山諸島を経由してではなく、彼の地から直接あるいは何処かを經由して宮古島に居住したと考える。すなわち、宮古島の無土器期前半は八重山諸島とは異なる文化系統ではないかと考えている。

「もの」のみを取り上げると、石垣島から搬入されたであろうと考えられる石器石材の問題があげられるが、アラフの人々が八重山諸島と接触を持つことはあったが、あくまで「もの」の獲得であり、八重山諸島から文化を携えて移住した根拠としてあげるには未だ不十分ではないかと考えている。いずれにせよ、長期にわたり、土器を使用せずに特異な生計戦略で生活を営む人々の痕跡がアラフ遺跡には残存しているのである。今後の調査で当該文化の全貌がより明らかになることが期待される。

参考文献

- 安座間充 2005 「沖縄貝塚時代集石遺跡集成」『沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター 1-14
- 安斎英介・横尾昌樹・大堀皓平・瑞慶覧長順・安座間充・江上幹幸・馬淵和雄 2011 「沖縄県宮古島アラフ遺跡における新石器時代後期初頭の生計活動―集石遺構の分析を中心に―」日本考古学協会研究発表ポスターセッション
- 江上幹幸 2005 「宮古島における先史時代の生計活動」『第 35 回三菱財団事業報告書』三菱財団 pp. 433-436
- 江上幹幸 2007a 「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器―貝斧埋納遺構の考察を中心に―」『南島考古』多和田真淳先生生誕百年記念特集号 26 沖縄考古学会 pp. 305-326
- 江上幹幸 2007b 「宮古の先史時代―アラフ遺跡からみた貝斧を使う人々の暮らし―」『沖縄考古学会 2007 年度研究発表資料』沖縄考古学会 pp. 12-19
- 江上幹幸 2009 「無土器期の宮古島～進む発掘調査～ アラフ遺跡」『有土器から無土器へ - 先島諸島先史時代無土器期の暮らし -』石垣市史考古ビジュアル版 3 石垣市史編集室 pp. 28-29
- 宮古島アラフ遺跡からみた貝斧を使う人びとの暮らし」金武・島袋編『有土器から無土器へ - 先島諸島先史時代無土器期の暮らし -』石垣市史考古ビジュアル版 3 石垣市史編集室 pp. 70-73
- 江上幹幸 2014 「アラフ遺跡の概要」『宮古人のルーツを探る part 2 ～先史時代(無土器期)の宮古』宮古島市総合博物館 pp. 17 「無土器期遺跡のもつ日本の歴史的価値」宮古島市総合博物館第 26 回企画展海関連行事 シンポジウム『宮古島の無土器期』資料集 宮古島総合博物館 10-15
- 江上幹幸 2015 「無土器期の位置づけ」『いま、宮古の考古学が面白い！―無土器期からグスク時代への移り変わり - 』沖縄考古学会 2015 年度研究発表会資料 4-12
- 江上幹幸 2017 「集石遺構から見た無土器期の様相」『南島考古』36 沖縄考古学会 pp. 169-185
- 江上幹幸・馬淵和雄・松葉 崇(編)2003 『アラフ遺跡調査研究 I ―沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告―』アラフ遺跡発掘調査団 六一書房
- 江上幹幸・安斎英介・大堀皓平・瑞慶覧長順 2017 『アラフ遺跡調査研究 II ―沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告―』アラフ遺跡発掘調査団』(今年度発行予定)アラフ遺跡発掘調査団

- 大林太良・杉田繁治・秋道智彌（編）1990 『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』国立民族学博物館研究報告別冊 11号 国立民族学博物館
- 岸本義彦（編）1993 『多良間の遺跡－村内遺跡詳細分布調査報告書－』多良間村文化財調査報告書第10集 多良間村教育委員会
- 岸本義彦 1996 『多良間添道遺跡－発掘調査報告書－』多良間村文化財調査報告書第11集 多良間村教育委員会
- 金武正紀・島袋綾野（編）2009 『有土器から無土器へ－先島諸島先史時代無土器期のくらし－』石垣市考古ビジュアル版 3 石垣市史編集室
- 瑞慶覧長順 2017 「集石遺構」『アラフ遺跡調査研究 II－沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告－』アラフ遺跡発掘調査団』（今年度発行予定）
- 田村隆 2015 「礫群の形成、特に閉鎖式ピット・オープンについて」『研究連絡誌』76号 千葉県教育振興財団 1-9
- 照屋孝 1989 「浦底遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会 559-563
- 野嶋洋子 1994 「石蒸焼き料理法の諸相－オセアニアにおける調理の民族考古学的研究にむけて－」『民族学研究』59-2 pp.146-160
- 野嶋洋子 2005 「焼石調理の民族誌－礫群研究の民族学的視点－」『考古学ジャーナル』531 pp.17-21
- 野嶋洋子 2007 「集石の民族誌－焼石調理の特徴と先史学的意義」『縄文時代の考古学5 なりわい－食糧生産の技術』同成社 221-234
- 保坂康夫 2004 「礫群から集石へ－「詰める」から「覆う」調理法へ－」『山下秀樹氏追悼考古論文集』山下秀樹氏追悼考古論文集刊行会 pp.119-128
- 松岡静雄 1943 『ミクロネシア民族誌』岩波書店
- 山極海嗣・久貝弥嗣 2017 「先史時代における沖縄県宮古島を中心としたシャコガイ製貝斧の展開－浦底遺跡出土貝斧の分析を基にした時空間的変遷の検証－」『物質文化』97 pp.113-131
- Asato, S. 1990 The Distribution of Shell Adzes in the South Ryukyu Islands. In the Urasoko Site, A sketch of the Excavation in Photographs. The Gusukube Town Board of Education, Okinawa, Japan.
- Buck, P.H. 1964 Arts and Crafts of Hawaii: I. Food. Bernice P. Bishop Museum Special Publication 45
- Leach, J.D. and C.R. Bousman 2001 Cultural and secondary formation processes : on the dynamic accumulation of burned rock middens. In Test excavations at the Culebra Creek site, 41BX126, Bexar County Texas, edited by Nickels, D., Bousman, C. B. Leach, J.D. and D. A. Cargil. The University of Texas at San Antonio.
- Thompson, L. 1940 Southern Lau, Fiji; an Ethnography. Bishop Museum Bulletin 162
- Thoms, A. V. 2007 Fire-cracked rock features on sandy landforms in the Northern Rocky Mountains : toward establishing reliable frames of reference for assessing site integrity. Geoarchaeology. An International Journal 22-5 pp.477-510

八重山諸島の無土器期 - 地理的環境にみる石器の利用を中心として

島袋 綾野(しまぶくろ あやの)
石垣市教育委員会

はじめに

南西諸島の最も南に位置する先島諸島（宮古・八重山諸島）は、その地理的環境からも、沖縄本島以北とは異なる先史文化を持ち、先史時代においては、台湾やオセアニア地域との関係が考えられている。そのため、それらの地域とは異なる考古学編年を利用するのが一般的である（表1）。今回は、特に八重山諸島の先史時代の概要を紹介する。

なお、本稿における八重山諸島の無土器期は、おおむね次の年代観で報告する。

無土器期：およそ2,000年前～12世紀初頭まで続いたと考えられる文化で、土器の使用が確認されない先島諸島独特の文化。

八重山諸島においては、無土器期に先行する先史文化として下田原期が把握されている。下田原期と無土器期との関係については、文化一元論と文化二（多）元論の、大きく2つの考え方がある。高宮廣衛（高宮 1992）は、これらの諸説を次のように整理した。

- i) 有土器→無土器→有土器の変遷を是認する説。
- ii) 無土器時代は存在しないとする説。
- iii) 土器を持つ文化と持たない文化が共存したとする説。
- iv) 共存ではなく入れ替わるとする説。

表1 八重山諸島の考古学編年

編年		土器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡
先史時代	旧石器時代 (参考) ¹⁴ C20416±113 ¹⁴ C18752±100 ¹⁴ C15751±421					白保竿根田原洞穴
	(先土器文化の可能性?) (参考) ¹⁴ C4250±50 ¹⁴ C3970±95 ↓ ¹⁴ C3290±90 ¹⁴ C3280±100	下田原式土器	石斧	無し	砂丘後背の微高地	下田原 仲間第二 大田原 ビュウツタ
	(未発見の空白期)					
無土器期	(参考) ¹⁴ C1770±85 ¹⁴ C1770±70 ↓ 12世紀前半	無し	貝斧 石斧	開元通寶 中国陶磁器（北宋末）が 僅かに出土 徳之島産カムイ窯須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤崎
歴史時代	新里村期 12世紀 ↓ 13世紀	新里村式土器 ピロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器（北宋末～南宋）が少量出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ピロースクの2・3層
	中森期 13世紀末 ↓ 17世紀初	中森式土器	無し	中国陶磁器（元～明）が大量出土	丘陵上や平野 石垣が登場	鳩間中森 フルスト原 新里村西 花城村
	パナリ期 17世紀 ↓ 19世紀	パナリ焼	無し	湧田・壺屋陶器や八重山陶器が出土	近世の廃村や現村落	新城島

石垣市史の編年（石垣市総務部市史編集課2007）を参考

これらを先述の文化論に分けると、i) と ii) は文化一元論、iii) と iv) は文化二(多)元論にあたる。発掘調査が進む中で、無土器文化の存在は容認される傾向にあるが、この両文化期に隔たりがあるかどうか、という点においては、同地域の研究者を二分する。

ただし、これは八重山諸島に限る考え方だと理解している。なぜなら、宮古諸島には未だ、明確な下田原期の遺跡は確認されていないからである。つまり、宮古諸島においては、文化一元論、二(多)元論に左右されず、旧石器時代の次に確認される無土器期という文化をどのように理解するか、ということが重要であり、この点においても八重山諸島とは異なる状況である。

ここでは、八重山諸島の無土器期の概要を紹介し、宮古諸島の同時期との比較に利用していただきたい。

1. 八重山諸島無土器期の遺跡

八重山諸島において、確認された無土器期の遺跡は多い。未調査又は人工遺物が出土しないために性格不明の遺跡もあるが、『石垣市史考古ビジュアル版』第3巻(石垣市2009)に掲載された無土器期の遺跡数は、51遺跡ある。その後、石垣島で白保竿根田原洞穴遺跡(沖縄県立埋蔵文化財センター2013, 2017)や舟蔵第二貝塚(石垣市教育委員会2017)、西表島のウブドー遺跡(竹富町教育委員会2009)が確認されていることから、少なくとも54遺跡は把握されていることになる。

先述のとおり、八重山諸島で確認されている無土器期の年代観は、放射性炭素年代の測定結果で、約2,000年(沖縄県教育委員会1979)～1,800年前(沖縄県教育委員会1986)に始まり、終末は中国産白磁碗や長崎産滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキが入ってくる時期、12世紀初頭だということが確認されている(沖縄県教育委員会1986、石垣市2009)。

石垣島を中心に見た無土器期と、それより前の自然環境に関わる研究から、現在、遺跡が未発見で空白期になっている時期には、礁嶺(干瀬)を伴うサンゴ礁の発生が見られ、その前の時期よりもさらに海産物を求めやすい環境になったと考えられている(河名2009)。同時に、下田原期と無土器期の間には、海岸線が沖側に移動した可能性もある。つまり、海進・海退の問題、自然災害(津波等)による集落の消滅・移動も含めて、現在発見されない先史時代両時期の間の空白期を考える必要もある。

八重山諸島の無土器期の遺跡の多くは、前の時代にはなかったと考えられる新期砂丘上に形成されている(石垣市2009)。標高はほとんど5m以下で、波照間島大泊浜貝塚で8m程である。無土器期の人々は、海浜や河口に面した場所に住み、海に依存した生活をしてきたことが想像される。ただし、白保竿根田原洞穴遺跡については、無土器期とされた層の標高は30mほどもあり、これまでのパターンに当てはまらない。無土器を代表する人口遺物が見つかっていないことから、立地の検討は保留したい。

遺構としては、掘立柱建物跡などの住居跡や、炉跡と考えられる集石遺構などが検出されているが、ここでは主に、遺物一特に石器の出土状況等について報告したい。

2. 無土器期の遺跡から出土する遺物

八重山諸島の無土器期の遺跡では、石製品、貝製品、骨製品等が見つまっている。特に、他地域との比較において特徴的に捉えられているのは、宮古諸島でも出土するシャコガイ製貝斧の存在であるが、もっとも多く出土するのは石製品である。貝斧の出土量は、宮古諸島の浦底貝塚やアラフ遺跡のほうが、圧倒的に多数である。

貝製品には、実用品である刺突具や工具、容器のほか、実用品または装飾品に分類される二枚貝や巻貝等の有孔貝製品が多く出土している。この時期には、下田原期には見られなかった貝斧や円盤状製品（シェルディスク）等が出土し始める。また、先述したシャコガイ製貝斧は、石垣島では名蔵貝塚群で30本を超える表面集品があるが、遺跡からの出土例は少ない。これは、先述のように、宮古諸島とは異なる出土傾向である。出土傾向の違いだけでなく、その形態にも両諸島で違いがある。八重山諸島ではちょうつがい部利用型が圧倒的で、その他の部位の利用は採集品で僅かに見られる程度だが、宮古諸島では放射肋を利用したタイプも見られ、その形態も様々である。

このシャコガイ製貝斧が、「文化の一部」として認められるのは、琉球列島では先島諸島だけである。このことは、宮古・八重山共通の要素として考えられるが、上述のように単純な理解では、一括りにできない。

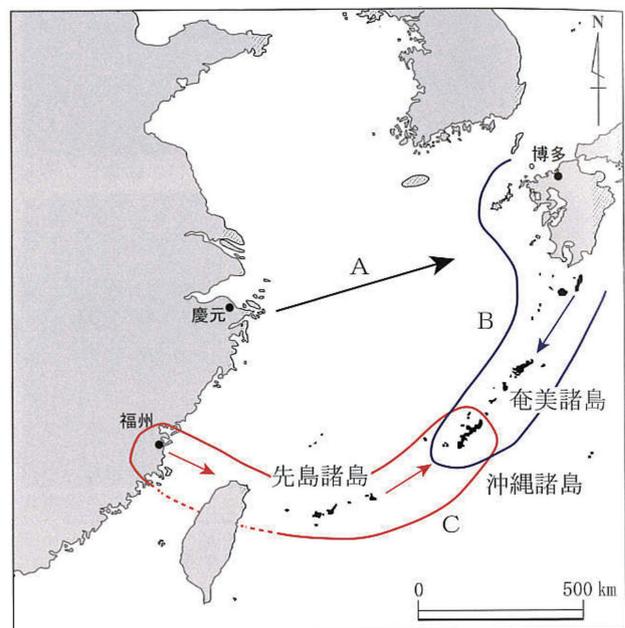
円盤状製品（シェルディスクまたはその未製品と考えられるもの）も、無土器期の遺跡から出土し始める傾向にある。同資料は有孔・無孔があるが、ペンダント等、装身具の可能性が考えられている。フィリピンのDuyong 洞穴ではシャコガイ製貝斧と一緒に出土する（Fox1970）。その用途は装飾品（ペンダント；shell pendantと耳飾り；Cone shell ear ornament）と考えられている。八重山諸島では、崎枝赤崎貝塚（石垣市教育委員会 1987）等から出土しており、これは、宮古諸島の無土器遺跡とも共通の遺物となっている。

その他、骨製品も出土するが、無土器期の終末には他地域から搬入された遺物も見られる。中国産陶磁器や、徳之島産カムイヤキ、長崎産滑石製石鍋、鉄製品、銭貨等である。

中国産陶磁器には中国産白磁端反碗、白磁玉縁口縁碗、褐釉陶器が含まれ、すべて、大泊浜貝塚（沖縄県教育委員会 1986）からの出土である。特に、中国産陶磁器や、徳之島産カムイヤキ、長崎産滑石製石鍋というセット関係は、1978（昭和53）年に発掘された恩納村の熱田貝塚でも確認されており（沖縄県教育委員会 1978）、調査を担当した金武正紀は11世紀末～12世紀前半に属するこの遺物が、沖縄諸島のグスク開始期と関係する可能性を指摘している。八重山諸島でも無土器期の終末に、同じセットが搬入されたことが確認されているのである。

しかし、これらのうち中国産の陶磁器については、宮古諸島では出土していない。これは、無土器期に続く八重山諸島の新里村期で出土する陶磁器事情とも重なる。このことは、木下尚子が示したように、中国産陶磁器等交易ルートが2つ存在していたことに由来するものと考え（図1：新里 2014）。

なお、無土器期の終末からは鉄鑿等の鉄製品も、少量ながら認められる。興味深いものでは、中国唐時代に鑄造された開元通寶が複数の遺跡から見つかっている（石垣市教育委員会 1987, 2017 ほか）。



13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏
（木下2009を改変）

- A：慶元から博多に向かう中国陶磁の動き
- B：博多を起点にする中国陶磁の流通圏
- C：福建を起点にする中国陶磁の流通圏
- ：陶磁の移動方向

図1 中国産陶磁器の流通ルート

同資料がどのような経緯で八重山諸島に入ってきたのかをめぐっては諸説あるが（木下 2000）、いずれにしても無土器期の人々が何らかの形で対外的な交流をしていたことが分かる資料である。特にその年代は、会昌開元と呼ばれる 9 世紀頃に作られたものが複数確認され、2016（平成 28）年にも石垣島の舟蔵第二貝塚で包含層中から 2 枚出土している（石垣市教育委員会 2017）。これらも、宮古諸島の無土器期では確認されていない。これは宮古諸島の無土器文化が、この頃まで存続しなかったことに由来するかもしれない。

3. 八重山諸島無土器期の石器

八重山諸島の無土器期で最も多く作られるのが石製品であるが、その種類には、石斧や磨石、敲石、石皿、砥石、石包丁等がある。遺物の組成は前文化期の下田原期とほとんど変わらないが、石斧のサイズやバリエーションに変化があり、石包丁や石錘の可能性のある有孔石製品等が新たに加わる傾向にある。

石製品のうち、出土量が多いのは石斧である。局部磨製石斧、磨製石斧、転用・再利用、打製石斧、未製品を含め、数多くの石斧が出土している。石斧の素材には、トムル層に由来する石が好んで使われるが、宮良層や野底層の石も見られる。

無土器期の石斧については、大型化するという傾向が考えられた時期もあるが、高宮廣衛はこれに対し、大型化ではなく、「開元通宝が出現する時期になると再び 20cm 前後の、あるいはそれ以上の大型のものも若干現れるようになる。ただし、一般的にいわれているような大型化は認められない。つまり、平均値が増大して 20cm 前後になるといったような現象は、現在の資料に関する限り認められない」としている（高宮 1995）。

無土器期の石斧の刃部形態は、下田原期の資料のほとんどが両刃か両刃様の刃部であったのに対し、明瞭な片刃の磨製石斧が現れることが、特徴のひとつである。石斧のバリエーションについては、①平面形態が短冊形で刃部厚と刃部幅が 1 : 1 に近く、両側面に平面を持ち片切刃をもつタイプ、②刃部幅が刃部厚より長く両側面に平面を持ち、片切刃を持つタイプ、③刃部幅が刃部厚より長く両側面に平面を持ち、蛤刃を持つタイプ、④断面形状が半円に近い形状を描き、片切刃を持つタイプ、⑤断面形状が薄い半円に近い形状を描き、片切刃を持つタイプなどが見られる。これは、いわゆる万能斧から、専用工具への変化とも捉えられる。

4. 石器の利用

八重山諸島の、と一概に言っても、その範囲は広い。トムル層が確認されているのは、石垣島（中北部）、西表島（北東部）、小浜島（北部）の 3 島である（図 2）。たとえば、大泊浜貝塚で多くの石器が出土した波照間島では、石器の原材料となる石材は産しない。宮古島の南部と石垣島の北部との直線距離は、地図上の距離で 90km 強。石垣島北部と多良間島までは約 35km で、島からは石垣島を臨むことができる。多良間島の西高嶺遺跡では、トムル層に由来する礫が出土し、さらに宮古島の無土器遺跡からも八重山産の石材が出土することから考えると、移動できない距離ではない。対して、波照間島の北部から西表島南部は、20km 強。この関係だけで見ると近いと思われがちだが、西表島でトムル層があるのは北東部にある野原崎周辺で、そこまでは直線距離でも 30km 以上あり、安易に近いとはいえない。また、波照間島の遺跡からは、八重山諸島では石垣島でのみ産する花崗岩も磨石などの遺物として出土している。さらに、与那国島でもトムル層の石で作られた石器が出土するが、与那国島の最東端から西表島の西部の直線距離でも 65km 以上

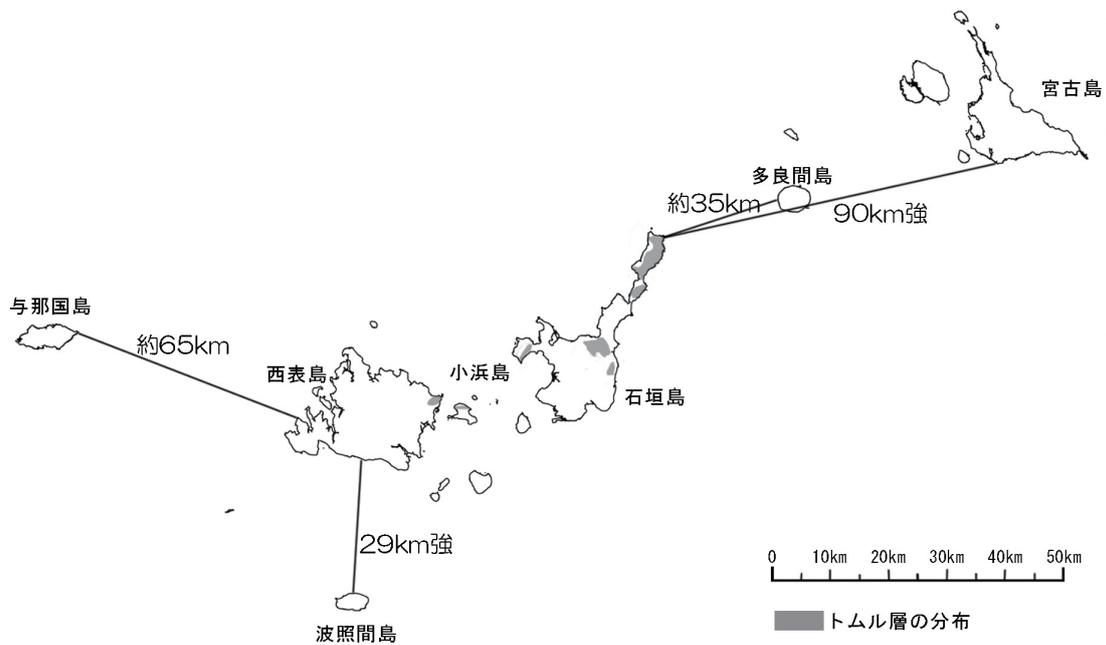


図2 宮古・八重山諸島図



写真1 左：トムル崎 右：新石垣空港近く（トムル崎の岩石のほうが脆い）

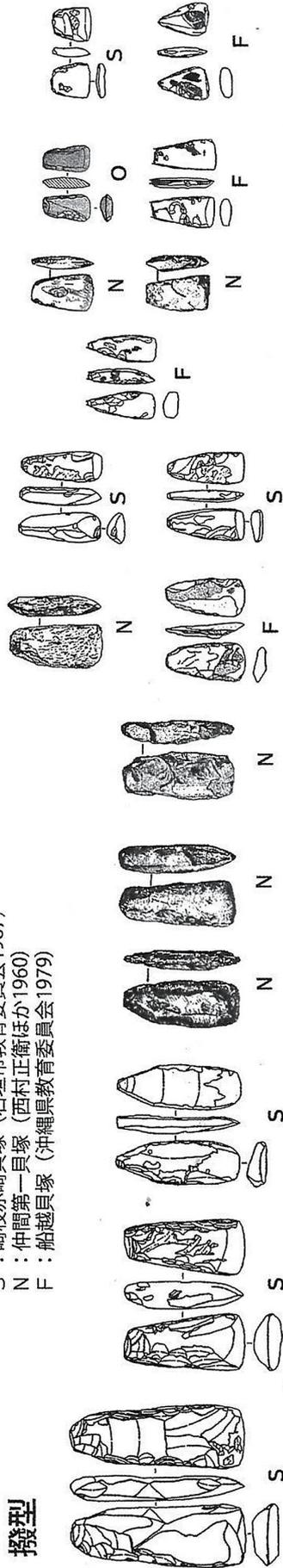
の距離があり、そこから石材の産地の野原崎まではさらに西表島を半周しなければならない。また、与那国島からは、西表島、石垣島を臨むことはできない。

ここで確認したいのは、宮古諸島で石器の出土が少ない理由が、単純に石材入手の問題であれば、八重山諸島においても、石材を産しない島で暮らす人々にとっては同じ条件とならないか、ということである。波照間島や与那国島に住む人々にとっては、石材よりもシャコガイ（貝材）の方が、身近であろう。また、トムル層がある場所に行ったからといって、すべての石が石材に向くわけではないため、石器に適した石の知識を持った人が、石材集めには出向かなければならない（例えば、石垣島北部トムル崎のトムル層は、しまりが悪く、白保嘉良嶽西側のトムル層は堅いなどの特徴：写真1）。

先述のように、八重山諸島の遺跡で、シャコガイ製貝斧が見つからないわけではない。その上で石材を求め、石器を作る事例のほうが、多いということに意味があるように思う（図3）。これは、宮古諸島の無土器期の人々は貝斧（貝器）を好み、八重山諸島の無土器期の人々は石斧（石器）を好むといった、文化の違いを意味するものかもしれない。

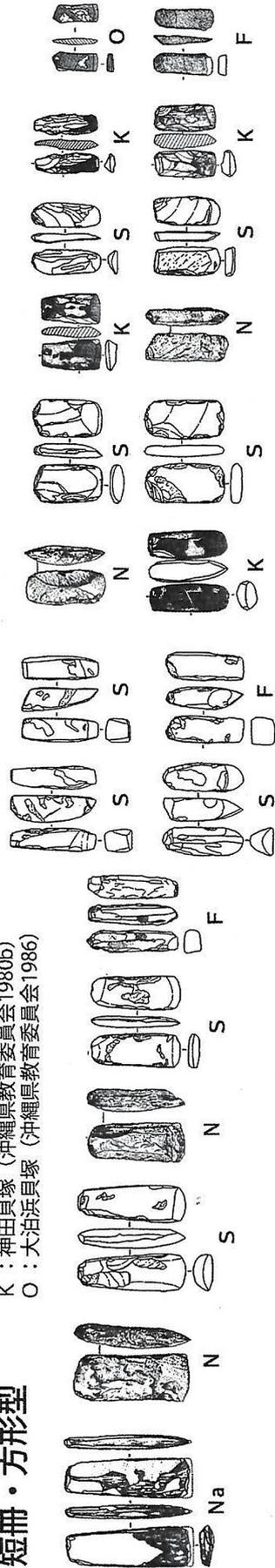
撥型

S : 崎枝赤崎貝塚 (石垣市教育委員会1987)
 N : 仲間第一貝塚 (西村正衛ほか1960)
 F : 船越貝塚 (沖縄県教育委員会1979)



短冊・方形型

Na : 名蔵貝塚採集資料 (沖縄県教育委員会1981)
 K : 神田貝塚 (沖縄県教育委員会1980b)
 O : 大泊浜貝塚 (沖縄県教育委員会1986)



狭刃型

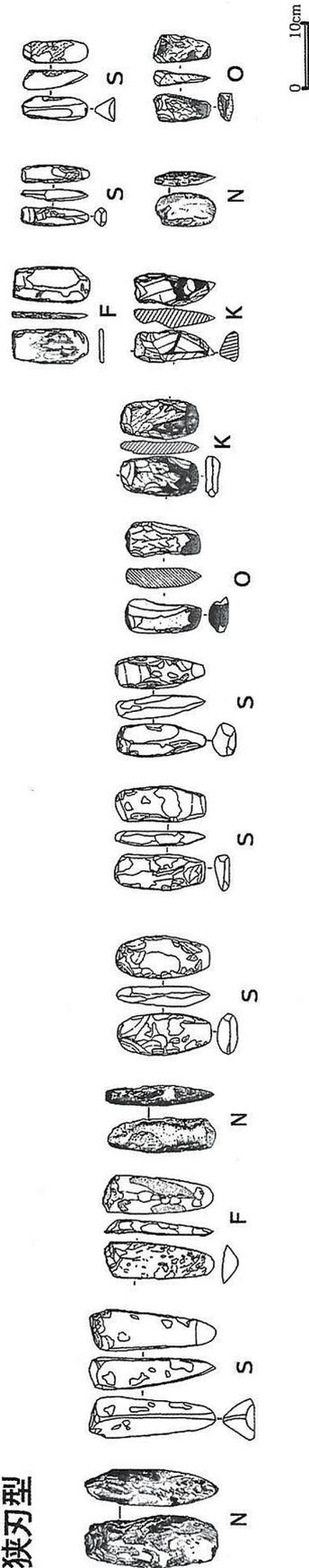


図3 無土器期石斧の例 (石垣市 2009 より)

5. おわりに

過去の拙文を振り返れば、宮古諸島と八重山諸島の無土器期をまとめて論じているものもある。近年、宮古諸島の遺物を実見する機会を得たり、改めて八重山諸島の島々を踏査しながら、丸っきり同じではない、という意識が強くなってきている。

これはひとえに、宮古諸島において諸々の講座の開催など、積極的な公開と討論がなされてきたことが大きい。また、アラフ遺跡の成果が公表されていること、浦底貝塚の資料が宮古島へ戻ってきたことも重要である。

宮古諸島と八重山諸島の先史文化は、沖縄諸島以北とは異なる性格から、ざっくりとまとめられてしまいがちだ。これは、過去における自身の反省点でもある。しかし、それぞれの地域には、それぞれの歩みがある。仮に無土器期という時期が両諸島共通の文化であっても、まったく同じ環境、まったく同じスタートでなければ、その差異が見られるのは当然のことだろう。それを受け止めた上で、お互いの違いを認識し、研究の次のステップに立ち向かう必要がある。

ジェネライズ (Generalize) という単語には、「一般化する、総合する、普及させる」といった意味がある。地域の文化が、簡単にジェネライズされると、それぞれの個性が沈んでしまう。それぞれの個性を理解し、活かさなければ、いつの間にか琉球列島は一つの文化圏で統一されてしまうだろう。

なお、宮古・八重山諸島の文化の境界を論じるにあたっては、多良間島の存在を忘れてはならない。かの島を含めて、両地域の文化解明が進むことを望みたい。

また、こういった講座をきっかけとして、お互いの島々の地中に潜っていた文化に興味を持ち、もっと学びたいというファンが増えることを願う。

【参考・引用文献一覧】

- 石垣市 2009「有土器から無土器へ—先島諸島先史時代無土器期のくらし—」『石垣市史考古ビジュアル版』第3巻 石垣市
- 石垣市教育委員会 1987『崎枝赤崎貝塚—沖縄県石垣市崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第10号 石垣市教育委員会
- 石垣市教育委員会 2017『舟蔵第二貝塚—ホテル建設に伴う緊急発掘調査—』石垣市文化財調査報告書第36号 石垣市教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1979『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』沖縄県文化財調査報告書第22集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1985『与那国トゥグル浜遺跡—与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第66集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『白保竿根田原洞穴遺跡—新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第65集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡確認調査報告書1—事実報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第85集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡確認調査報告書2—総括報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第86集 沖縄県立埋蔵文化財センター

- 河名俊男 2009「石垣島周辺域における下田原期以降、12世紀前半までの自然環境—“未発見の空白期”と無土器期との関連性に関わる試論—」『石垣市史考古ビジュアル版』第3巻 石垣市
- 木下尚子 2000「開元通宝と夜光貝」高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編『琉球・東アジアの人と文化：高宮廣衛先生古稀記念論集』上巻 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 木下尚子 2012「琉球列島における先史文化の形成と人の移動：島嶼間の人文地理的關係に注目して」『文学部論叢』103：13-27, 熊本大学.
- 新里亮人 2014「カムイヤキの生産と琉球列島の海域事情」『南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～』黎明館企画特別展 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 高宮廣衛 1992「八重山考古學研究略史」『陳奇祿院士七秩榮慶論文集』陳奇祿院士七秩榮慶論文集編輯委員会（台北）
- 高宮廣衛 1994「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 高宮廣衛 1995「八重山型石斧の基礎的研究（3）—磨面に関する若干の観察—」『南島考古』第15号 沖縄考古学会
- 竹富町教育委員会 2009『鹿川ウブドー遺跡 埋蔵文化財発掘調査概要報告』竹富町教育委員会
- Robert B. Fox 1970：CHAPTER IV DUYONG CAVE:A Stratified Site with a smakk Flake and Blade Industry and Neolithic Assemblages. The Tabon Caves. National Museum MANILA

総合討論

〈下地和宏〉これより総合討論に入りたいと思います。総合討論は基本的には貝斧の問題、石斧の問題、集石遺構の問題の3点に絞って進めていきたいと思います。先ほど4名の方から報告がありましたように浦底遺跡の調査成果から新しい発見がいくつかありました。とりわけ今回博物館で展示されています浦底遺跡の一番下の層の4b層から出土した貝斧には、形態的な特徴をみてとることができます。この特徴的な貝斧は、4b層より上層の4a層、3層、2層からも出土しているのですが、4b層でまとまって出土していることが非常に大きな浦底からの新しい展開になったと思います。そのことを含めまして浦底遺跡を通してアラフ遺跡をどのように見えるかとそれぞれにお話をさせていただきたいと思います。まず山極さんの方から改めて浦底遺跡の貝斧について整理させていただきたいと思います。

〈山極海嗣〉これまで貝斧と一言でいっても複数の遺跡から数点ぽつぽつ見つかった状況でありまして、どうやら種類は色々ありそうだけれども種類の意味が分からない、という状態でした。これに対して浦底遺跡は複数の層が重なって確認されています。そして、それぞれの層から色々な特徴を持った貝斧がある程度の割合で出土している状況が読み取れます。堆積する層は攪乱がなければ上に行くにつれて新しくなると考えられるので、下層から上層への貝斧の特徴や種類の変化は、時間的な変化として捉えることができます。資料の31ページ（本書の72ページ）に図を載せていただきましたけども、先ほど下地さんが述べられたように下の層では全面を磨いた小さめの貝斧がたくさん出てきてます。それがだんだん上の層に行くにつれ全体は磨かずに刃のみを磨き、形態的には大きな貝斧が増えてくる状況が見えてきました。このように、まず浦底遺跡の中での貝斧の時間的な変化を読み取ることができたことは、一つ目の成果であるといえます。では、浦底遺跡以外ではどうかという点については、すぐ隣のアラフ遺跡の存在が重要になってくると思いますが、これについては江上先生にコメントをお願いしたいと思います。

〈江上幹幸〉先ほど山極君が話をしてくれたようにこれだけの貝斧を分析しながら見ていくと、再度アラフ遺跡の貝斧を層別に見直さなければいけないと思います。これから細かく見直していく必要がありますが浦底遺跡で確認された貝斧の変化はアラフ遺跡でも見えてくるのではないかと感じています。

ただ浦底遺跡と違うところは最下層の浦底遺跡での古いタイプの貝斧とアラフ遺跡でいわゆる最下層といわれているBP2900年に近い年代で出土している貝斧のタイプが異なる点です。このタイプの貝斧は浦底遺跡の古い層では出土していません。ですからアラフ遺跡の最下層の貝斧をこれからどういうふうに捉えていったらいいのかということと、山極君が言ったようにアラフ遺跡をもう一度見直す形で浦底遺跡の時代差がアラフ遺跡に同じような流れがあるのか、もし流れが違うのであればどうして違うのか再検証しなければいけないと思います。改めて課題を与えられたと考えています。

〈下地和宏〉浦底遺跡の年代についてはC14年代測定によって2500年前から2000年前と

いう結果がえられています。出土する堆積層の時間軸からすれば浦底遺跡の下層から出土する小型で丁寧に研磨された貝斧は、上の層からでも出てきています。それでは、八重山の方では、浦底遺跡の下層で出土する貝斧が確認されているのでしょうか？

〈島袋綾野〉報告でもお話したのですが、八重山諸島では全体的に貝斧の出土量が少ないというのは先ほどの発表のメモにも入れてあったんですけども、全面磨かれた資料は得られています。ただ包含層の出土ではありません。八重山の無土器の遺跡は、海浜地に近くて砂取り等で壊されているところが多いのですが、そういったところを歩いて表面採集されたものの中にツルツルに磨かれた小型の貝斧が得られている事例があります。先ほど鹿川ウブドー遺跡の件ありましたがウブドーでもツルツルに磨かれたような貝斧、実際に近いもの、今回展示されている浦底の下層から出土する貝斧と同様のものも、八重山で見つかっているという印象をもっています。

〈下地和宏〉友利元島遺跡の下層からも貝斧が16点くらい出土していますよね。友利元島遺跡無土器は基本的には1500年前くらい前無土器期も終わりの方に差し掛かっている頃です。友利元島遺跡から出土した貝斧の特徴や浦底遺跡の貝斧との比較についてコメントをお願いします。

〈久貝弥嗣〉友利元島遺跡の無土器は、おっしゃるとおり1500年前から1100年位前の年代測定の結果が得られています。今日比較資料として展示もしておりますけれども、浦底遺跡の下層（4b層）の貝斧に比べて非常に大型です。また、研磨面事態も局部的に刃の部分だけ磨くという傾向にあります。浦底の下層（4b層）のような貝斧は友利元島遺跡からは出土していません。浦底遺跡でも上の層にいくに従い大型化しながら研磨面が局部的になってくる傾向もみられます。そういった状況から考えると浦底の上の層にあるようなタイプの貝斧と似てくるんじゃないかなという風に思います。

〈下地和宏〉さて、このようなシャコガイで作った貝斧については、これまで、南の方で作られたものが宮古にあるいは八重山に入ってきたのではないかという考えが主流を占めていました。今回の中では、貝斧が宮古で作られた可能性についてふれられていました。貝斧は製品としてあるわけですが、宮古島内における貝斧の製作という観点についてまず山極さんにお伺いしたいと思います。

〈山極海嗣〉結論から先に言ってしまうと今、浦底遺跡で見つかっている貝斧というのはおそらく浦底遺跡、つまり宮古島で作られたものだと考えてよいものと私は考えています。その理由は、まず浦底遺跡の中で見つかった製品としての貝斧以外にも、まだ磨いてないけど貝斧のような形をしている「貝斧もどき」みたいな製品未満の資料が結構見つかっているということです。これは合理的に考えれば貝斧を作る前の前段階の素材として採取されたものと考えられるでしょう。もう一点は、今日も展示室で公開されていますがツルツルとした研磨面をもった砂岩の石皿が出土していることです。ツルツルしているということはそこで何かを磨いたという痕跡であるわけですが、そこで出土遺物の中で磨かれたものを探してみると、やはり一番磨いているのは貝斧なんですね。この石皿の上に

は白い貝を磨いたような痕跡が残っているものもありますので、貝斧を磨くのに利用した可能性は高いと考えています。つまり、浦底遺跡では貝斧の素材、それを磨く道具が揃っているということです。この点から考えると、浦底遺跡の貝斧は他地域から製品として交易などで、もちこまれたものではなく、その場（宮古島）で現地の人々が作り、使用した道具と考える方が妥当性を有しています。

〈下地和宏〉アラフ遺跡ではどうでしょうか？

〈江上幹幸〉考えとしては、今、山極君が話をした考えと全く同じです。アラフ遺跡でも同じような状況が見られます。アラフ遺跡を調査している時にも、仮にこれを製品として作っているのであれば製作した場所が見つかっていいのではないかというような助言が出ました。そのことを考えるとアラフ遺跡でもそういった形跡（製作した場所）は確認できませんね。浦底遺跡でも形成は見つかっていないのですが、山極君も先ほど述べていたように、貝斧に近い形状のものを海岸で拾ってそれを再加工したということが、もちろん考えられます。貝そのものを最初から加工するというのが通常言われていることです。そういった仕事はいわゆる生活の場所ではなくおそらく採集した海岸でおおよその作業を行ったのではないかと考えています。ですから、おおよその形状までは例えばビーチロックを使用したり、それに似たものをすり石代わりに使うようなことで形状を整えて、それから生活の場所に持ち込み、先ほど話に出た砂岩のようなもので仕上げをする。あるいは使用した後に再加工するというようなことを行ったのではないかと考えています。製作地が見つからなくてもアラフ遺跡、浦底遺跡の貝斧は遺跡で作られていると考えています。

〈下地和宏〉お二人も宮古で製作したという考えでしょうか？

〈江上幹幸・山極海嗣〉そうですね。

〈下地和宏〉八重山の場合もそうでしょうか？

〈島袋綾野〉貝斧に関してなんですが、八重山の貝斧も地元の島々で作っているものだと理解しています。石垣島だけではなくて西表島でも貝斧は見つかったりもします。崎枝赤崎貝塚では、今日スライド紹介しましたが、キレイな貝斧以外にもただ割っただけのものや敲かれただけみたいな形の、加工したシャコガイも 1 種類出ています。これはやはり自分たちのところで作ろうとしたという証だと認識しています。

〈下地和宏〉浦底では浦底、アラフではアラフという場所で貝斧を作ってそこで利用している状況が確認されています。遺跡としてではなくて拾われた場所がありますよね、資料集の 3 ページ（本書の 53 ページ）には宮古でもいくつか貝斧が発見された場所が書かれています。例えば浦底とかアラフで作られたものがそこに移動したという可能性というのはないんですか？

〈久貝弥嗣〉おっしゃったように宮古島の無土器期遺跡が資料集の 3 ページ（本書の 53 ページ）に載っています。これは発掘調査で出土した以外にも、表面採集したものも含めてプロットしています。例えば成川井洞穴やカアラ貝塚がそのような事例になります。これらの場所では、拾われている数が 1 点とか 2 点とか非常に少ないです。しかし、拾わ

れているということはそこに貝斧が持ち込まれているという事に間違いのないと思います。成川井洞穴にしてもカアラ貝塚にしても、どちらも洞窟や、岩陰という地形にあります。このような場所はまだ調査された事例が少ないです。長墓遺跡は今お話ししました岩陰という地形に形成された遺跡です。長墓遺跡のような砂丘に遺跡が形成されるのではなく、岩陰遺跡であったり成川ガーやカアラ洞穴のような岩陰、洞穴といった環境にある遺跡でも今後、宮古島の無土器を考える上では重要な視点であると思います。

〈下地和宏〉シャコガイで作られた貝斧は、次のグスク時代の遺跡からも何点か出てくることは出てくるんですが、だからといってそれが無土器の遺跡ではないので、何らかの形でのちの時代までも入ってきた部分もあると思います。それと貝斧の問題に関しては目的としては道具として作っているはずなんですよ。展示されている一番最下層に出ている小さなものと大型のやつとの比較、道具としてもどうかということも含め、道具としたら何に使ったのか？ということも含めて貝斧から何が見えるのかとお願いします。貝斧の道具としての使い方について。

〈久貝弥嗣〉江上先生が発掘調査を行ったアラフ遺跡では、貝斧の 4 点セットの埋斧遺構というのがあります。その点については江上先生より説明があると思います。一般的に言われるのは貝斧は船を作る道具と考えられています。遺跡から出土する貝斧は、いろんな形態があり、刃のつけ方などによって使用方法が異なると思います。もともと斧というものは結構万能的に使われるものかと思います。

〈下地和宏〉少し久貝さんもふれていましたが、アラフでは世界でも例をみない貝斧の一括出土がありました。この点について江上先生の方から改めて説明をお願いします。

〈江上幹幸〉アラフ遺跡では特に特異な 4 点の全く形態の違う貝斧が一括して出土しています。一括出土した状態については、調査後、興味ある事実がわかりました。4 点の貝斧の頂点がすべて半径 10 cm の円弧状にのることがわかりました。また、断面図から判断し、これらが箆状の容器に入れられた状態で置かれ、そして埋没した可能性を考えました。つまり貝斧を容器に入れ、ある目的で展示したのではないかと考えたわけです。その貝斧 4 点については、例えば木の平面を削るときの道具、それから平面を削る道具、湾曲面を削る道具、それとかなり削る部分で細かい細工が必要な彫刻刀的な役割の道具というように使用方法が確実に違う形状のものが 4 点まとまって、一括して出土したという状況があります。もちろん、船を造るだけの道具ではなく、例えば建物を建てる時の木の加工や、木碗状の容器を作るための道具として使用したことも考えられます。私自身は単純に造船に使用されたのではないかというようなことを論文に書いているのですが、それだけではなくて木を加工する道具としての機能を持つ道具が貝斧なのだと思います。民族誌の事例として、1930 年代後半のミクロネシアで報告された事例があります。その報告には、実際に一人の人間が船を造るための種類の異なる道具（貝斧）が掲載されていますが、その道具はアラフ遺跡出土の 4 点の貝斧とほぼ同じ性格のものでした。この様な民族事例を引用にして 4 点一括出土の貝斧を造船の道具と結びつけて考えましたが、ただ単に造船だけでは

なく、いわゆる木の加工という事でそういった貝斧を使用していたのではないかと思います。先ほどの4点の貝斧は集石遺構に展示をしたサラサバティと同じように、何かの儀礼時に展示を行った状態のまま埋没していったと考えています。その中でも可能性が高いのは、造船儀礼ではないかと論文では結論付けていったわけです。

〈下地和宏〉同じシャコガイの貝斧といってもそれぞれに用途の違うものが作られていることがアラフの事例から分かるような気がします。違う用途の貝斧があるらしいということなんですが、八重山の場合は無土器期の主体的な道具である石斧についても同様に用途の違いがみられますか？

〈島袋綾野〉資料の52ページ（本書の93ページ）の方に八重山諸島で見ついている石斧の代表的な形で集めていますが、いろんなタイプがあります。今回報告の方でも鹿川ウブド一遺跡を紹介しましたが、砥石と、機能や形、大きさも違う石斧が4点まとめて出土しています。これは江上先生が指摘したような何か祭祀的なものというよりは、製作地に近いところにまとめて置いていたのかなというイメージがあります。つまり製作した、出来立てのものをそのまま置いて行ったものが、埋まってしまったのではないのかなと解釈をしました。

52ページ（本書の93ページ）にある石斧をみると、大きなものから幅が1cm位の小さなものまで、いろんな形の石斧があります。やはり石斧と一言でいってもいろんな機能のものを作って使用しているということがいえると思います。八重山で出てくる石器というのは、ほとんど使われているものが見つかるんですね。場合によっては刃の研ぎなおしをしたようなものとか、刃がこぼれてしまったらまた別の用途で、叩き潰す敲き石として転用する状況が見られます。現在のところ石器の中で祭祀に繋がるようなものは、私の中では浮かばないのが現状です。

〈下地和宏〉確認になるのですが八重山の無土器期というのは2000年前以降という報告がなされていました。それは今お話になった石器も2000年前以降のものだと理解してよろしいでしょうか？

〈島袋綾野〉はい、私は石器もそれ位だと思っています。名蔵貝塚群は、貝斧が多く出土する八重山の遺跡として有名なんですけど石斧も出土しており、割合としては石斧の方が多いですね。貝斧の拾われた本数によると33本くらい報告されたと思うのですが、ただ石斧はもっとたくさん拾われています。なので、この二つ（貝斧と石斧）というのは並行してあったと思っています。

〈下地和宏〉浦底遺跡からも2点石斧が見つっていますね。1点は2層から、もう一点は最下層の4b層から出土しています。先ほど八重山においては石斧の年代については2000年前以降だという話がありましたが、浦底遺跡の場合はそれよりも古い2500年前の石斧ということになります。その点については、どのように考えますか？

〈山極海嗣〉そうですね、宮古島の浦底遺跡の比較的古い包含層で石斧が出ているということはどう理解するかというと、一番考えられるのはその時点で宮古島の人々は貝斧をた

くさん作っているんですけども、宮古島以外の島に産出する石材を使って石の斧、石斧を作るということも知っていたと考えた方がいいのかなと私は考えています。そうすると八重山との間の移動という話も少し出てくると思いますが、これに関しては、個人的に頻繁に交流していたとは考えにくいかなと考えています。ただ、少なくとも最初に貝斧を作った集団の人たちというのは、石斧の技術も持っていたのではないかなというのが私の見解です。

〈下地和宏〉確認なんですけど石材は間違いなく八重山で産出される石材と理解してよろしいですか？

〈山極海嗣〉良いと思います。宮古島というのはサンゴ島なので主に石灰岩や、堆積岩である砂岩などでできている島です。一方、石斧に使われている岩石は変成岩といって、熱や圧力によって岩石が変成することによってできる岩石です。この変成岩が産出するのは、先ほど島袋さんのご発表にもありました主にトムル層といわれる地質になります。宮古島の浦底遺跡から一番近いところと言えば、八重山が一番近いので八重山から運ばれているんじゃないかと考えるのが妥当ではないかと考えています。

〈下地和宏〉浦底から出土している 2 点の石斧は、製品として作られたものを持ち込んできたのか、それとも浦底遺跡で加工して作ったのか、どのように考えられますか？

〈山極海嗣〉これは本当に難しいですね。貝斧と違って素材状態の岩石が出土しているという状況がないので。ただ、宮古島の遺跡の中でも石斧になってない石材が出土している事例があるので、その辺は宮古島で製作した可能性を示唆するものなのかもしれません。あとは製作技法の部分から考えていくことができると思います。技法の部分で八重山列島で確認されている石斧との関係性がどのように捉えられるのか、今後は八重山の石器との比較も重要だと思います。これはむしろ私から島袋さんに質問させていただきたい点ですね。

〈下地和宏〉今の件は、八重山の石斧の年代が 2000 年前以降と報告で確認されていますがそれ以前の 2500 年前にも八重山では、石斧が使用されていた可能性があったということでしょうか？

〈山極海嗣〉2000 年前以前に八重山に遺跡がなくて、人がいないと仮定するのであれば八重山で作られたものを交流などで手に入れるという話は成り立ちません。そうすると、宮古島にいた人が八重山の石材を使って八重山で作って持ってきたかもしれません。その場合だと石斧を作った主体は宮古島の人ということになります。しかし、この点については、八重山の遺跡が見つかっていないということが果たして 1600 年前とか 2000 年前以前に八重山に人がいなかったことを完全に証明しているかどうか、ということですね。これについては、まだいろいろな可能性が残されている段階だと思います。

〈下地和宏〉ありがとうございます。八重山で 2000 年前以前に石斧が製作されていた可能性は秘めているということですね。アラフ遺跡からは、浦底遺跡のような石斧は出土したんでしょうか？

〈江上幹幸〉アラフ遺跡は浦底遺跡のように完成された石斧というのは出ていません。石斧らしいものが1点と、これから石斧を作ってもいいなあと考えられる石材が1点出土しています。両方とも八重山の石垣島から産出される石材と考えられています。年代的なことを考えるとやはり浦底遺跡で出土している石斧の年代とほとんど変わりません。ですから2500年くらい前に製品ではない石材としての石が宮古島の遺跡から出土していること自体が重要です。ただ石材を宮古島の人々が八重山に取りに行くのかな？と思いました。その当時、八重山には人の痕跡が確認されていませんが、近い将来、人の痕跡のある遺跡が発見されるのでないのかなと考えます。他にも遺跡自体が消滅したという考えは以前から言われていますので、このような視点からも約2500年前の八重山の状況というものは、もう一度考え直した方がいいかなと思います。

〈下地和宏〉浦底遺跡の最下層の4b層から宮古島からは産出しない八重山の石材、石斧が出土したことは事実です。このような出土状況について山極さんは2000年前より古い無土器の遺跡が出てもいいんじゃないかという意見も述べられていましたが、八重山の場合にはそれ以前の痕跡というのは今までの調査からは明らかではないんですか？

〈島袋綾野〉今まで調査で見つかった事例からすると、「ない」というのが事実です。ただ私以前からこれを否定したことは1回もなく、まだ未発見の無土器期という言葉で八重山の編年でもいれてもらったりとか、見つかってないという可能性は一切否定していません。ですので、先ほど江上先生が述べられたように2000年前をさかのぼる遺跡が発見されるという可能性というのは捨てたくはないと思っています。もう一つは、最初に浦底の石器を見て考えたのは先史時代の人たちも物を拾ってきたということもあるんじゃないかなとも考えました。八重山の無土器期よりも古い時期の下田原期の人々が使用していた石器を拾ってきて、実は浦底の人たちが使ったんじゃないかな、と少し思っていたりしました。ただ実際に浦底の石斧を見たときに先ほど石器の作り方に違いがあるとお話をしたんですけれども、やはり無土器期の特徴がある石斧だと考えます。ということは、新たに生み出された石斧、おそらく一番古い年代から出ている無土器期の石斧というのは、実は八重山ではなく、宮古にあるというのが今分かっている事実だと認識しています。

〈下地和宏〉確認しておきます、浦底から出ている石斧は下田原期の石斧ではなくて無土器に製作された石斧という意味ですか？

〈島袋綾野〉はい

〈下地和宏〉分かりました。友利遺跡では、貝斧の他に石器は出土していませんでしたか？

〈久貝弥嗣〉石器は出土してないですね。

〈下地和宏〉1点も？

〈久貝弥嗣〉そうですね。出土していませんね。

〈下地和宏〉分かりました。石器の出土状況についてみた場合、八重山の遺跡から貝斧が非常に少なく石器が主体を占めるという状況ですが、宮古の場合は今のところは浦底遺跡やアラフ遺跡においてなんですけど、わずか2点ずつしか出土していません。アラフ遺跡の

場合は完全な石斧と同じ状況だったんですね、そういう石斧の出土という視点からみると八重山との交流はそれほどなかったことが推察されます。ところで八重山において石斧は、宮古の無土器期の遺跡から貝斧が出土するのと同じようにできるのでしょうか。先ほどもありましたように貝斧にも大型があるし小型があるということでしたが、石斧の状況を含めて詳しくお願いします。

〈島袋綾野〉八重山の石斧についてですが、まず一点目として確実に地元で作られているということ、そして大きさについても 52 ページ（本書の 93 ページ）の図にありますようにいろんな大きさの石斧があるということがいえると思います。補足的にお話をいたしますと、八重山の石斧は、一つの遺跡から百何点という数が出る事例もあります。それは見つかるときに大型のもの小型のものが混じって出る遺跡もあれば、表面採集の際に選ばれている可能性はあるんですが、小型の石器ばかりという遺跡もあります。ですから石斧が出土する無土器期の遺跡と一言でいっても、八重山の遺跡そのものに結構個性があって、石斧というのは一言では説明できないというのが現状です。

〈下地和宏〉先ほどは、貝斧の道具の機能について意見を伺いましたが、石斧の場合の道具としての機能は何が考えられるのでしょうか？

〈島袋綾野〉石斧の機能としての問題ですけれども、大きな石斧については、最初農耕具とかの可能性も考えられていました。また民族事例では、大きな石斧は、重さがありますので、石斧に柄をつけてイノシシの解体に使ったという記録もあります。ですので、大きな石斧については動物の解体に使っている可能性と、農耕具として使用されていた可能性が考えられます。そして大小様々なものもありますし、すごく幅の細いのは細かな加工をしたんだろうと考えられます。そして、木を切り倒すという事なんですけれども、実は近世、近代になってからも黒島という島の方で石斧を使って木を倒していた、という民族事例の報告もあります。石斧というのは、なんにでも使ってたと思います。

〈下地和宏〉次に 3 点目の集石遺構について考えていきたいと思います。今日、江上先生から集石遺構について詳細な報告がありました。集石遺構については、宮古の真謝漁港で実際、体験してみましたが、石を焚いて焚き木をくべて結構調理ができたんですよ。その時の実験の写真が展示室でも飾られています。そのような調理という意味合いで考えた場合、アラフ遺跡についても、もっと集石遺構が広がるんだと思いがあるんですが、いかがでしょうか？

〈江上幹幸〉そうですね。そう思います。浦底遺跡の集石遺構は、今現在写真で確認作業を進めていますが、158 基まで確認しております。県の調査時の番号は 168 基が最終番号になっています。ただ見方によっては久貝君が最初に書いているように 200 基くらいあるのではないかと書いていましたが、それくらいはあったのではないのかなと思います。浦底遺跡の調査時まで、沖縄県内では集石遺構はそんなに注目されていませんでしたし、日本の方でもそんなには、今ほどには注目されていません。そういった調査の作業認識もあるので、浦底遺跡の集石遺構の数はもっと多かったのではないのかなと印象をもちました。

〈下地和宏〉八重山の場合でもアラフ遺跡や浦底遺跡と同じような形で集石遺構は出てくるんですか？

〈島袋綾野〉八重山の方でも集石遺構というのは見つかっています。ただ一つの遺跡で見つかる数が全く違いますね。たくさんではなく3つ4つとかそれぐらいという数の違いがあります。ただこれは発掘面積の問題も関係してくると思います。先ほど砂取の話をしました。結構緊急で発掘調査を行うことが多くて、開発面積や、その調査範囲については、留意しておかなければなりません。ただ現在把握されている集石遺構の数は、八重山は宮古ほどは見つからないという状況です。ただ全くないということはありません。

〈下地和宏〉友利遺跡の場合も集石遺構はありました？

〈久貝弥嗣〉友利遺跡では明確な集石遺構は確認されていません。ただ、骨が焼けているような範囲が二つありました。浦底遺跡のように石ががっちりまとまっている状況ではなくて、少し散乱するような感じで石が検出されているような状況の跡です。

〈下地和宏〉確認なんですけど今、八重山と宮古の無土器の遺跡では道具としての素材は石器が主の八重山と貝斧が主とする宮古という違いはあるかもしれませんが今のような集石遺構などの生活の痕跡という点でも共通している部分があると理解しているんですかね。

〈島袋綾野〉私はそういう意味では共通の事項は、あるというふうに認識しています。先ほども話したように集石遺構じたいは発見例は少ないんです。しかし以前イノシシの骨を見てもらった時に、イノシシの骨の割り方が下田原期に比べて、無土器のものの方が大きく割られているという指摘をされたことがありました。その理由について、指摘してくれた先生と考えたときに、アースオープンとか、今日話があった石蒸し焼の調理法の場合、そういった骨の大きさにこだわらず調理できます。つまり土器の場合だと土器に入れるために肉を小さくしますが、アースオープンなどの場合だと骨を細かくする必要がないため、無土器期の人が食べた後の骨は大きなものがあるんじゃないか、と指摘されたことがあります。そういうことを考えると無土器期の人たちの調理法というのは、まず土器に入れる、器に入れるということの考えより先に、自分たちが調理したいもの大きさに合わせたものを作るということが、前提にあったんじゃないかなと考えています。

〈下地和宏〉貝斧の問題と石斧の問題、集石遺構の問題、みんな絡んでいる問題であります。今回のシンポジウムを通して、貝斧というのは今までは南の方から持ち込まれたという考えもありましたが、宮古、あるいは八重山で自分たちで貝斧を製作したという共通の理解は得られたんだろうと思います。ただし、これがどのようにして作られ始めたのかという問題はおいておきます。おいておきますが、浦底遺跡では200点あまりの貝斧が出土しており、その出土点数は世界的にも例をみないものです。また、アラフ遺跡でも表採を含めれば50本あまりの貝斧が確認されています。そういう意味では宮古では必然的に貝斧は使われ、作られていたんだろうなと理解できるような気がします。

ここでフロアーからの質問をとりあげていきたいと思います。島袋さんへの質問ですが宮古では滑石製石鍋、カムイヤキ、白磁玉縁碗の3点セットがグスク時代の始まりというふ

うに確認をしているのですが、八重山の場合ではグスク時代の定義とはなんですか？

〈島袋綾野〉基本的なところで、私も含めまして八重山の研究者でグスク時代という言葉を使うことは少ないです。私もグスク時代という言葉は、自分で論文を書くときも使わないようにしています。無土器の時期が終わって、先ほどの 3 点セットが出てきたときに、なんで無土器期かといいますと、大泊浜という遺跡は、もっと下層の無土器期の古いところから続いてきて、12 世紀の前半あたりの年代がでる層まで、無土器の層が続いていくんですね。その上に土器を作り始める層が載っています。3 点セットが出た層というのは、下から層が繋がっていく中で、無土器の範疇に入っている層の中に 3 点セットが入っています。だから無土器なんです。その上には、明確に土器を作り始める層が載っています。人骨も見つかっているのですが、人骨と一緒に八重山で改めて土器を作り始めた時期の土器が見つかっています。八重山では、なぜグスクと使わないかという、無土器の終わりから土器が改めて作り始められる時期というのが 12 世紀初頭位ということで認識されています。さっき言った大泊浜の調査の時にも確認されたことなんです、3 点セットが出て無土器の時期が続いていて、そのあとに新たな時期になって土器を作り始めているというのが一つの理由です。もう一つ一番大きな問題は、沖縄本島を中心としたグスクの文化の考え方というもの、11 世紀なったり 12 世紀なったり書く人によってグスクの年代が違いますよね。私たちが今研究しているところが、そこに振り回される必要はないと考えています。八重山の変遷の仕方、それは琉球列島のなかでも地域差があってもいいんじゃないかと考えております。それだと無理やりグスクという言葉に当てはめなくても、自分たちの文化の築き方は、確認できるだろうと思っています。もう一つは、グスクというのは八重山にはないです。集落址はあるんですけども、いわゆるお城的なグスクというのはないので、グスク文化とかグスク時代という言葉が適切かどうかの議論が、今でもあります。そういうこともあってグスク時代という言葉は私は使っていないです。

〈下地和宏〉どちらにしても今説明があったように八重山の場合は 3 点セットというのは、白磁玉縁碗、カムイヤキ、滑石製石鍋が確かに大泊浜の無土器層の中にでてくるんですよ。宮古の場合どちらかというすでに土器が作られている時代にこれがでてくるという大きな違いがあります。ただ一つだけいえることは無土器期の社会と次の時代の線がまだ繋がっていないんですよ宮古の場合には。空白がある。今のところは 300 年と書いてあるがまだ一本の線が繋がっていません。今日テーマとした無土器期の社会と次の時代と遺跡の社会が繋がっていない、空白がある。それを埋める時に今の問題が出てくる可能性があるんだなとお伝えしておきたいと思います。

今回の浦底の遺跡の発掘の例から話をしてきたんですがこれはそのまま終わるのではなくて、確かに次の問題はイノシシの問題があるわけだし、環境の問題もあるわけだし食料の問題も含めていっぱいあるんですよ。これらは答えを持っているのが浦底遺跡だろうと思っています。またアラフの資料もみんな宮古に移管してもらいましたのでそれも含めて新しいことがわかりつつあるんだろうなと今の現状です。ただし私たちがこれから何が見

えるんだらうまた、見ることを通して宮古の無土器の社会がもっと世界的に広がりをもった形に見えるかもしれませんし、江上先生の膨大なる世界的な中でのお話を考えると宮古はすごい位置にいるなど改めて思ったりしているのですが、のちにしても持っているシャコガイ製の貝斧というのがそういうふうな社会の広がりをもたしているということは非常にすごいものがあると感じました。これからは引き続き委員会でやっていくかもしれない、いわゆる無土器期の社会、お互いに八重山も宮古もそれぞれの個性を持ちながら歴史を歩んできているんだらうねと確認できればと思います。何か最後に伝えておきたいことはありますか？

〈下地和宏〉それでは、これで地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回シンポジウム総合討論を終わります。



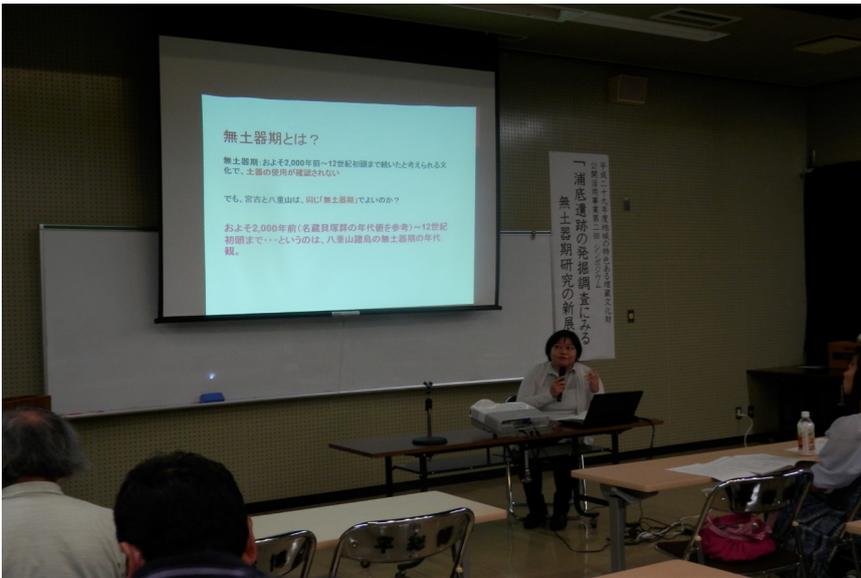
第2回シンポジウム
久貝弥嗣氏による講演風景



第2回シンポジウム
山極海嗣氏による講演風景



第2回シンポジウム
江上幹幸氏による講演風景



第2回シンポジウム
島袋綾野氏による講演風景



第2回シンポジウム
講演風景



第2回シンポジウム
総合討論風景

浦底遺跡

「無土器期研究」でシンポ 発掘調査成果を市民に周知

シンポジウム「浦底遺跡 研究の新展開（主催・市教育委員会生涯学習振興）」の発掘調査にみる無土器期



出土品などの説明を熱心に聞く参加者＝28日、市総合博物館



久貝弥嗣さん

課が28日、市総合博物館で行われた。このシンポジウムは世界的にも特徴的な文化要素を持つ、浦底遺跡の発掘調査成果について広く市民に周知するため、2017年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の一環として行われた。

宮古毎日 平成 29 (2017) 年 10 月 30 日〈月〉
宮古毎日新聞社より

集石は食料残滓（さんし）と考えられる貝を、一定の範囲に廃棄した跡、あるいは貝をストックしていた跡と考えられる」と説明した。

出土品は貝、骨製品や石器で、貝製品はシャコガイ製の貝斧の出土点数が多かった。

久貝さんは「浦底遺跡の発掘調査成果は、アラフ遺跡など同時期の遺跡間との比較、年代の異なる無土器期遺跡との比較を行う上で重要な意味を持つと考えられる」とした。

琉球大学戦略的研究プロジェクトセンターの山極海嗣特命助教が「海と島の世界へ進出し貝斧を利用した人々」と題し講演、江上幹幸元沖縄国際大学教授が「集石遺構の用途と文化」と題して、当時の生活の様相などについて話した。

石垣市教育委員会の島袋綾野さんが「八重山諸島の無土器期―地理的県境にみる石器の利用を中心として」と題し、講演

市教委

無土器期の研究推進へ

浦底遺跡 発掘調査 新展開シンポジウム



総合討論で下地さん（左）をコーディネーターに意見を交わす（同2人目から）久貝さん、山極さん、江上さん、島袋さん＝28日、市総合博物館

2017年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回シンポジウム「浦底遺跡の発掘調査にみる無土器期研究の新展開」（主催・宮古島市教育委員会）が28日、市総合博物館研修室で行われた。浦底遺跡からシャコガイ製の貝斧200点以上が出土したことは考古学会から注目されていることを強調。宮古と八重山の比較では浦底遺跡は貝斧が大量に出土しているが、八重山でも貝斧は出ているものの石斧の出土量が多いという特徴が挙げられた。それぞれの出土品で意見を交わし、今後の調査発掘・研究につなげた。

同シンポジウムは世界的にも特徴的な要素をもった浦底遺跡の発掘調査成果を広く市民に周知するとともに、専門家による最新の研究成果を報告し宮古の無土器期への研究の推進を図ることを目的に実施。関心のある市民らが熱心に耳を傾けた。

報告は、久貝弥嗣さん（宮古島市教育委員会）が「宮古島市内の無土器期遺跡の概要―浦底遺跡の発掘調査を中心に―」、山極海嗣さん（琉球大学戦略的研究プロジェクトセンター）特別助教が「海と島の世界へ進出し貝斧を利用した人々―東南アジア・南太平洋諸島地域の事例から宮古・八重山諸島をみる―」、江上幹幸さん（元沖縄国際大学教授）は「集積遺構の用途と文化」、島袋綾野さん（石垣市教育委員会）は「八重山諸島の無土器期―地理的県境にみる石器の利用を中心として―」でそれぞれ行った。

総合討論では下地和宏さんをコーディネーターに4人が意見を交わした。

浦底遺跡から出土したシャコガイ製の貝斧の特徴では「下層（古い層）の形が小さく、全体がていねいに磨かれている」などと紹介し、年代によって形態的な変化の傾向が見られることが説明された。宮古と八重山で出土した貝斧、石斧とも使用されていたものや加工途中が出ていることを踏まえ、それぞれの地（遺跡）で製作されたという考えが示された。

宮古新報 平成 29 (2017) 年 10 月 30 日 〈月〉

宮古新報社より

中国産陶磁器からみるグスク時代 東アジア海域の交易

- ・ 田中克子（アジア水中考古学研究所）
「琉球諸島出土の中国陶磁器を考える - “今帰仁タイプ”・
“ピロースクタイプ” 白磁をめぐって -」
- ・ 久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古島市内グスク時代の中国産陶磁器」
- ・ 瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）
「琉球列島の陶磁交易と那覇港」

日時：平成30年2月3日（土）午後2時～5時

場所：宮古島市総合博物館・研修室

問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課（77-4947）

シンポジウムへの入場は無料。参加予約申し込み不要



ミノズマ遺跡出土の中国産陶磁器

琉球諸島出土の中国陶磁器を考える

— “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁をめぐる —

アジア水中考古学研究所

田中克子

はじめに

日本において、釉(うわぐすり)がかかり、高温で焼かれた磁器生産が始まるのは、1600年代の初め頃である。これ以前、陶磁器は海外、中でも地理的に近く、優れた磁器生産技術を最も早く築き上げた中国からそのほとんどを輸入してきた。このため、当時の日本人々にとって陶磁器は貴重品であり、時にはそれを所有すること自体が大きな価値を生むことさえあった。日本にもたらされた陶磁器の多くは古代遺跡に残され、発掘調査によって再び私たちの前に当時と変わらぬ姿を見せてくれる。これによって、時代ごとにどのような陶磁器がもたらされたのか、さらには当時の貿易の状況や国内流通に関するさまざまな情報をも得ることができる。

日本と中国との貿易商人(海商)が介在した貿易は、9世紀初頭前後に始まり、その窓口になったのが大陸と近い位置にある北部九州の博多である。以来、この地は一大貿易拠点としての地位を確立する。約40年間にわたり発掘調査を続けている博多遺跡群では、膨大な量と種類の中国陶磁器が出土し、このことを物語っている。中国から運ばれてきた陶磁器は博多に荷揚げされ、この地から日本列島各地へと流通して行く。琉球列島も例外ではない。こうした状況は14世紀後半に始まる琉球と明王朝による「進貢貿易」によって大きく変わり、明王朝に格段に優遇された琉球が、東アジアから東南アジア海域を繋ぐ海上貿易の表舞台に立つことになる。沖縄諸島で出土する海外陶磁器の豊富さは博多を遥かに凌ぐもので、九州以北地域(以下、状況に応じて琉球列島以外の日本列島を示す呼称“ヤマト”を使用)で出土しないような優品も多い。琉球を中心とした国内流通網が形成されたことを示している。

ところが、「進貢貿易」が始まる以前の13世紀後半頃から、当時の貿易拠点でもあった博多でもほとんど出土しない陶磁器の一群が先島諸島から沖縄諸島にかけて見られるようになる。これらは最初に注目された出土遺跡名から“今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ”白磁と呼ばれている。これらがどこで作られ、どのような背景の中で運ばれてきたのか検討することは、「進貢貿易」開始前の東アジア海域における陶磁交易圏の様相を知り得る重要な手掛かりになるものである。

1. “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁とは

1981・82年、石垣島ビロースク遺跡の発掘調査により、それまで日本国内で普遍的に出土していた陶磁器には見られない白磁の一群が出土した。種類は2種類あり、1種類が遺跡名を採り“ビロースクタイプ”と仮称された(金武他 1982)。その後、今帰仁城跡発掘調査でもこの2種類が多

く出土したことから、残りの1種類が“今帰仁タイプ”と命名された(金武他 1991)。当時その産地が特定できていなかったことから、以後、これらの仮称が型式名称として定着する。

(1) “今帰仁タイプ” 白磁(図1)

- ・重ね焼き焼成による大量生産品で質は悪い。重ね焼きの方法として、a. 内底を輪状釉剥ぎするものと、b. 内底に釉を掛けずに露胎のまま残す2種類がある。
- ・白磁と称されているが、実際釉は青味が強く、白磁か青磁かは判断がつけがたい。
- ・器種は碗のみで、体部が大きく外に直線的に開く。

(2) “ビロースクタイプ” 白磁(図2)

- ・基本的には一匣鉢一器焼成。
- ・今帰仁タイプに比べ全体に器壁が厚く、分厚く平坦な高台を持つ。
- ・釉は基本的には白色不透明～半透明釉。
- ・器形により大きく3種類に区分される。

I類：内底が小さく、中心が丸く内側に突出する。無文と内壁に楡描文が施されるものの2種類。器種は碗のみ。

II類：内底が丸く凹む。体部から口縁にかけて内湾する。無文、内底に印花文を施すもの、印花文とヘラ彫りによる蓮弁文を組み合わせたものがある。器種は碗のみ。なお、輪状高台の他、円盤状高台のものが数点のみあり、この高台の製品には皿もある。

III類：内底が広く平坦。高台脇が外に大きく張り出し、体部は内湾、口縁は外に反る。無文と内底に「蓮華文」の印花文を施すものがある。器種は碗・皿・坏。

2. “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁の生産地と窯製品の概要

両種の白磁はその特徴から福建産の可能性が極めて高いことは以前より指摘されていたが、2005年から4年間、熊本大学と福建博物院の共同研究調査が行われ、それぞれの具体的産地を特定することができた。両者とも福建省の省都福州を河口とする省内最大の河川・閩江流域にある(木下 2009)。

(1) 窯の概要(図3)

① “今帰仁タイプ” 白磁の産地：福建省浦口窯

福州市連江県浦口鎮に所在。連江は閩江河口の北側にあり、浦口窯は定海湾にそそぐ敖江の河口北辺に位置する。1954年に窯が発見された後、断続的に踏査されている(栗他 1994,p.78-81、曾 2001,p.164-165)が、発掘調査は行われていない。窯の分布範囲は10万㎡とされ、全て龍窯(登り窯)である(栗 2009,p.33)。

② “ビロースクタイプ” 白磁の産地：福建省閩清窯

“ビロースクタイプ” 白磁の特徴を持つ窯は閩江流域及びその支流域に点在するが、琉球諸島出土品の窯として確定できるのは、福州市閩清県東橋鎮に所在する閩清窯である。ただし、沖縄本島で数点出土するビロースクタイプII類の内、円盤状高台を持つ碗・皿は、閩清窯では確認されていない。類似品の産地として閩江上流の南平市にある茶洋窯が挙げられる。閩清窯は閩江の中流北側域に分布する。閩江とその支流・安仁溪との合流地点から安仁溪上流(北)方向へ、①安仁溪窯②義窯③青窯と3

つの大きな窯群がある。総距離は約 10km にわたり、その規模は極めて大きい。各窯群の製品は極めて似ており、消費地出土品での識別は困難なことから、全て含めて“閩清窯”の呼称を用いる。1958 年に窯が発見された後、1983 年に厦門大学などによる踏査(閩清県他 1993)が行われた。さらに、2015 年には福建博物院文物考古研究所による窯跡(義窯の下窯崗窯)の発掘調査と同時に閩清窯の全面的踏査も行われ、現在 110 ヶ所以上の窯跡が確認されている。発掘調査された下窯崗窯は残存状態が極めて良好で、焚口から窯尾まで約 75m、幅約 2.6m の龍窯である(羊 2016)。工房跡も検出されている。

(2) 各窯製品の流れと“今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ”製品の年代的位置付け

①浦口窯の生産状況(図 4)

浦口窯は基本的には青磁を主体として生産した窯で、浙江省竜泉窯青磁の系統に属するが、同時に白磁や黒釉製品も生産。窯の操業年代については、発掘調査が行われていないため、窯跡採集資料によって概ね宋～元代とされる(曾 2001, p. 165)。図 4 は日本国内・海外沈船の出土状況と各製品の形態的特徴に基づいた生産概要である。

I 期：11 世紀中頃～12 世紀中頃(1～4、a)

白磁(1～4)と櫛描文青磁(a) (“初期竜泉窯系統”)が見られるが、種類・量とも極めて少ない。窯の生産活動はまだ本格化していなかったと思われる。

II 期：12 世紀後葉～13 世紀初頭(5～18)

この時期から圧倒的に量が増加し、特に櫛描文系青磁(いわゆる“同安窯系青磁”の系統に属する)(5～9)が主体となる。全体に粗製で、内底輪状釉剥ぎされた重ね焼き製品が目立つ。白磁(10～18)は、重ね焼きされた輪状釉剥ぎの無文粗製白磁碗(10)の他、やや上質の劃花文・印花文製品(景德鎮窯模倣品)(11～17)がある。一部は博多にももたらされるが、国内流通はしていない。

III 期：13 世紀前葉～14 世紀中頃(19～42)

この時期になると、青磁釉と白磁釉の使い分けがなくなり、どの製品も同様に青味がかかった淡灰色を呈する。形状的に櫛描文系青磁と竜泉窯青磁の模倣製品(19～24・29～32)を青磁、これらに属さない 25～28・33～42 をとりあえず白磁とする。青磁系統製品については形状の特徴から、2 時期に細分が可能。一部は博多にも運ばれる。

前半<13 世紀前葉～後葉>(19～24) II 期・櫛描文系青磁の系統を引く無文碗(19～21)と竜泉窯青磁蓮弁文碗の模倣品(22～24)がある。

後半<13 世紀末～14 世紀中頃>(29～32) ほぼ竜泉窯青磁の模倣製品(29～32)のみとなる。蓮弁文浅形碗(29・30)と折縁口縁盤(31・32)の 2 種。全ての製品が内底輪状釉剥ぎ、或いは露胎の重ね焼きされた製品となる。一部は博多にも運ばれるが、国内流通はほぼない。

★“今帰仁タイプ”製品及び類似品

III 期白磁(25～28・33～42)は全て重ね焼きによる大量生産品となる。“今帰仁タイプ”、及びそれに類する製品で種類は極めて多い。博多では類似品が 13 世紀初頭に出土している(27)ことから、こうした製品は 13 世紀初頭には生産されていた可能性は高い。また、III 期製品の一部である、いわゆる“今帰仁タイプ”製品(33～37)は、13 世紀後半～14 世紀初頭にかけて琉球諸島にもたらされる。さらに、元寇(1281 年・弘安の役)関連遺跡の長崎県鷹島海底遺跡・韓国新安沈船(1323 年)からも、近似した製品が出土していることから、14 世紀前半頃まで生産が続いたことは確かである。消費遺跡では全形を知り得る資料が乏しく、今後は“今帰仁タイプ”という定義を琉球諸島出土品に限定するのではなく、浦口

窯Ⅲ期の白磁全体の中で捉え、資料増加を待ち再度分類や年代設定を見直す必要がある。

②閩清窯の生産状況(図 5)

閩清窯は基本的には景德鎮窯青白磁の系統に属し、白磁を主体として生産するが、宋代には櫛描文系青磁・黒釉製品、また明代後半期には竜泉窯青磁模倣品も生産する。発掘報告書が未刊(近日常版)のため、白磁製品についてのみ概要を記す。図 5 は日本国内・海外沈船の出土状況、及び各製品の形態的特徴に基づいた生産概要である。

I 期：11 世紀中頃～12 世紀中頃(1～15)

皇祐三年(1051)銘のある資料が出土しており、これ以前の製品が出土していないことから、11 世紀中頃には生産が始まるとされる。I 期製品(1 は除く)は 11 世紀後葉の日宋貿易開始直後から大量にヤマトに輸出された製品。

II 期：12 世紀後葉～13 世紀初頭(16～29)

I 期に比べ、種類が豊富になる。特に、劃花文製品を主体とする景德鎮窯青白磁の模倣品(21・22・24～29)のような上質品が増加するが、これらは東南アジア方面に大量に輸出される。ヤマトへの輸出品は 16～19 のような簡素な文様や無文の粗製品が主体となっている。

III 期：13 世紀前葉～14 世紀中頃(30～37)

★“ビロースクタイプ” I・II 類製品

II 期と比べると製品の種類は急激に減少し、13 世紀初頭を境に生産活動が落ちてきた様子が窺える。“ビロースクタイプ” I(36)・II 類(37)は、この時期から生産が開始され、琉球諸島へ運ばれている。琉球諸島と新安沈船の出土状況から、III 期の遅い時期(14 世紀初頭～14 中頃)に生産主体時期があったと思われるが、形態的特徴から、I 類が II 類に先立ち生産され始めたと思われる。II 期の製品から“ビロースクタイプ” I 類につながる製品として、III 期の早い時期(13 世紀前葉～後葉)に、30～35 を設定。I 類は碗のみ、II 類は碗の他、窯跡では皿も確認されており、内底に花文や双魚文などの印花文が施されるもの多い。

IV 期：14 世紀後葉以降(38～44)

<14 世紀後葉～15 世紀中頃>(38～41)

★“ビロースクタイプ” III 類製品

琉球諸島では“ビロースクタイプ III 類”(38～41)が進貢貿易開始と共に輸入され、15 世紀前半にかけて大量に出土する。I・II 類に比べ器種が増え、碗(38・39)の他、皿(40)・坏(41)・鏝縁口縁鉢などもある。内底に印花文を入れるものが多く、大部分は蓮華文(38)で、他に鳳凰文(39)、双魚文(41)などもある。

<15 世紀後葉以降>(42～44) “ビロースクタイプ” III 類に代わって、重ね焼きによる大量生産粗製品が出現。平底皿(42)と、内底を露胎にした碁笥底皿(43)・高台付き皿(44)がある。内底に印花文が施されたものもある。これらの類似品は沖縄本島で出土し、概ね 16 世紀代に位置付けられているが、明確な出土年代を示す資料が不足しており、生産年代については不明確。以上の他、竜泉窯青磁の模倣品も生産。

3. “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁をめぐる問題

(1) “今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ” 白磁はどのように琉球諸島にもたらされたか？

13 世紀後半頃から進貢貿易開始前、琉球諸島にもたらされた白磁は、“今帰仁タイプ”と“ビロースクタイプ” I 類・II 類である。中でも、時期的に古い“今帰仁タイプ”と“ビロースクタイプ” I 類が先島諸島に集中している状況が見られる。ヤマト地域ではほとんど出土しない製品である。このことから、これらは当時の貿易拠点である博多から流通したものはなく、中国→台湾北部→先島諸島→沖縄諸島というルートを使用した貿易船が、直接運んで来た可能性が極めて高い。

(2) 貿易船はなぜ来航したのか？

ヤマト(博多)へ向かう貿易船の寄港地の可能性。

(理由) ①当該時期の他の陶磁器の出土が極めて少ない。←琉球諸島で取引される対価物は何？

②正式貿易ルート(寧波—博多)使用困難による南方ルートへの変更。

※元王朝による日本人商人への管理強化に対する暴動・略奪の発生、王朝の内乱などにより浙江省沿海域の使用が困難。これにより、福建—琉球列島—博多を繋ぐルートが出現(榎本 2008, p. 78-81)。このルートを利用した貿易船が、途中水など補給のために寄港し、小規模な取引を行った。“今帰仁タイプ”・“ビロースクタイプ”製品は、この取引によって残されたものでは？

参考文献

榎本 涉 2008「日宋・日元貿易」『中世都市 博多を掘る』海鳥社

木下 尚子 編 2009『13 世紀～14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部

金武正紀 他 1982『桃里恩田遺跡』石垣市教委

金武正紀・宮里末廣 他 1991『今帰仁城跡発掘調査報告 II』今帰仁村教委

閩清県文化局、厦門大学人類学系考古専業 1993「閩清県義窯和青窯調査報告」『福建文博』1993 年第 1・2 期合刊、福建省博物館

栗建安、陳恩、明勇 1994「連江県の幾処古瓷窯跡」『福建文博』1994 年第 2 期、福建省博物館

栗建安 2009「福建閩江流域宋元時期窯址概況」『13～14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部

羊澤林 2016「宋元期における閩清義窯の生産及び対外貿易」『平泉と東アジアをつなぐ—貿易陶磁器にみる交流の様相』(2016 年岩手大学平泉文化研究センター主催国際シンポジウム発表資料)

曾凡 2001『福建陶瓷考古概論』福建省地図出版社

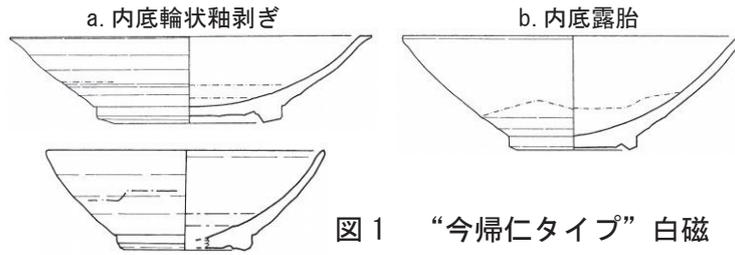


図1 “今帰仁タイプ”白磁

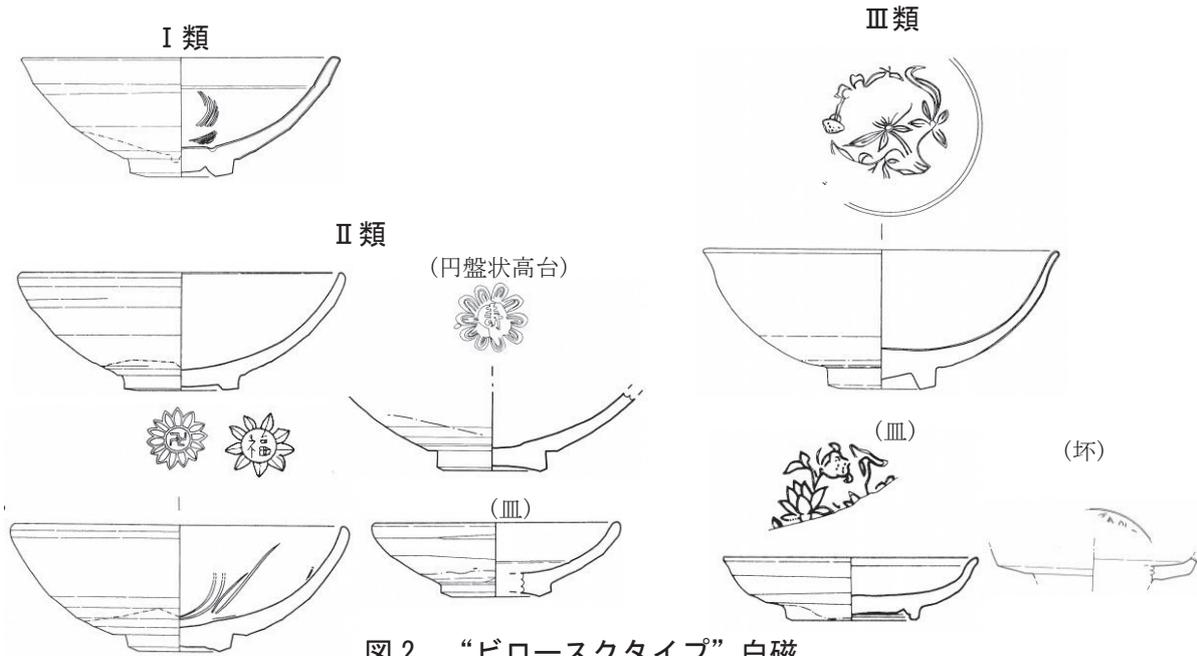


図2 “ビロースクタイプ”白磁

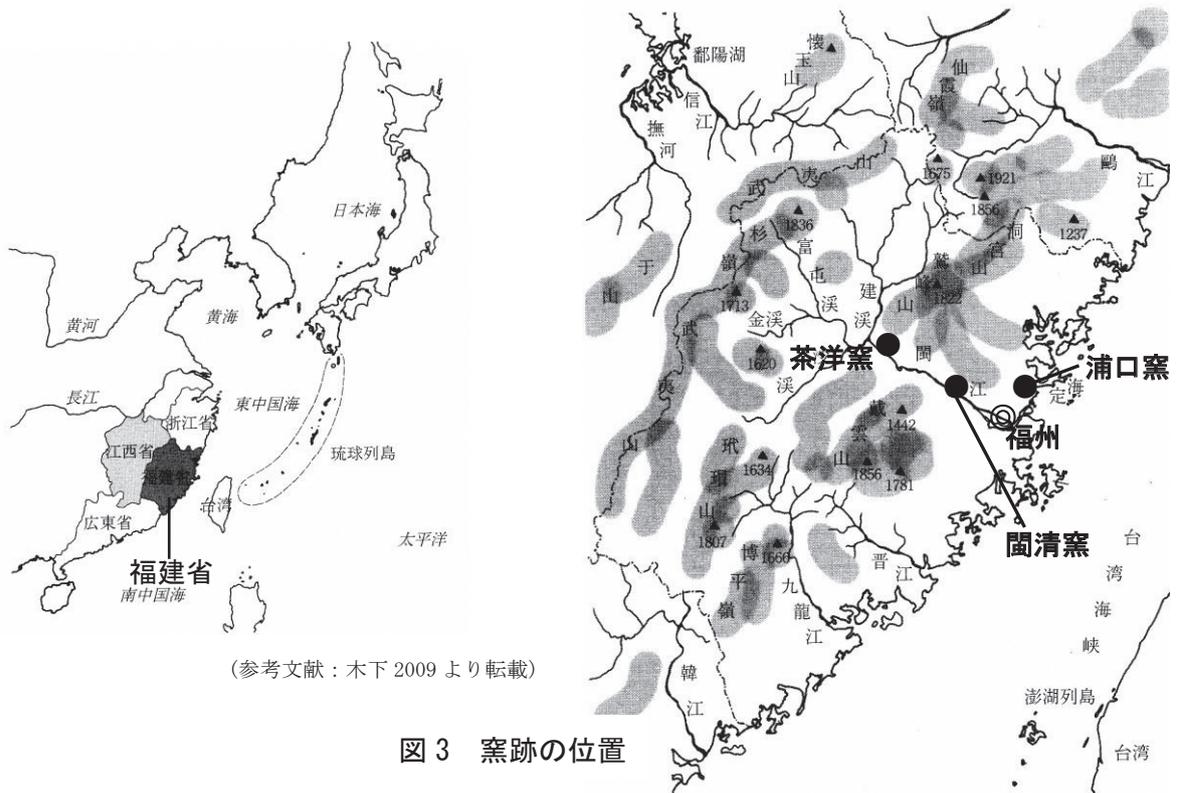
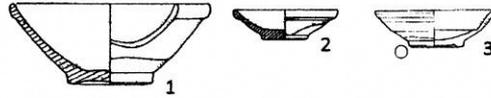


図3 窯跡の位置

(参考文献：木下 2009 より転載)

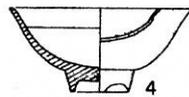


I 期

(白磁)

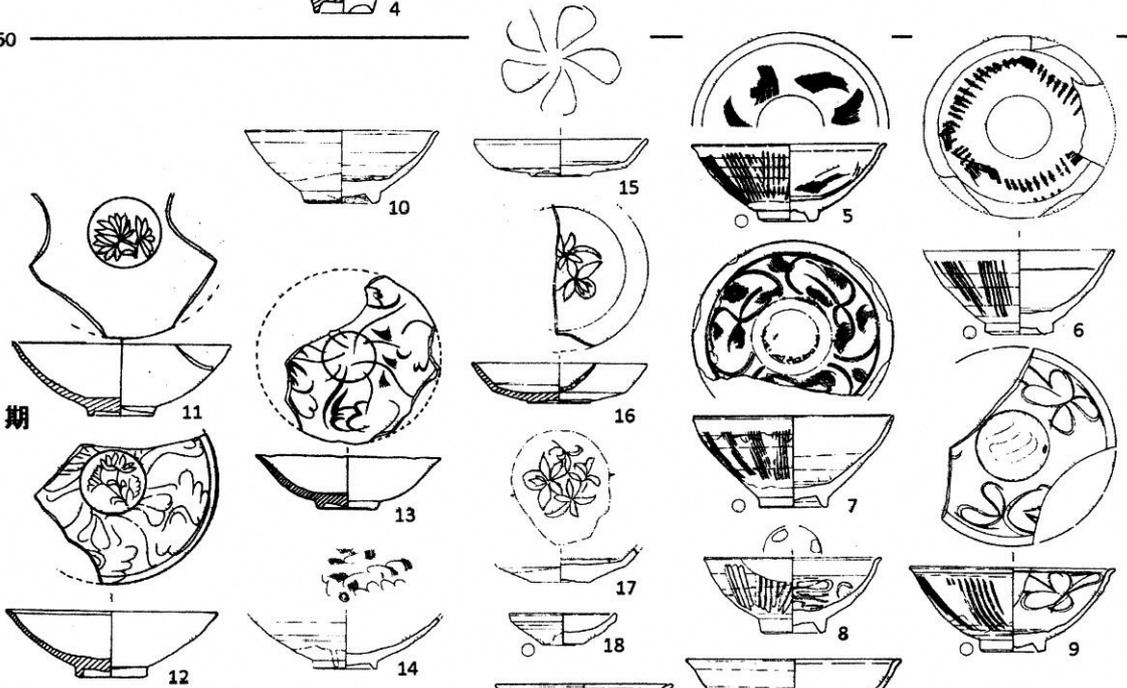
(青磁)

(南宋1127)



1150

II 期



1225

(元1271)

※鷹島(1281)

III 期

※新安沈船(1323)

1350

無印: 窯跡採集
 ○: 博多出土
 鷹: 鷹島海底出土
 沖: 沖縄出土

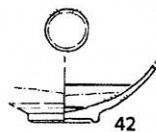
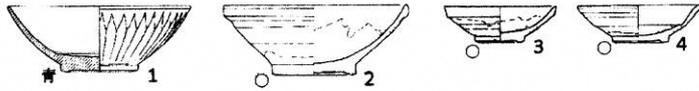
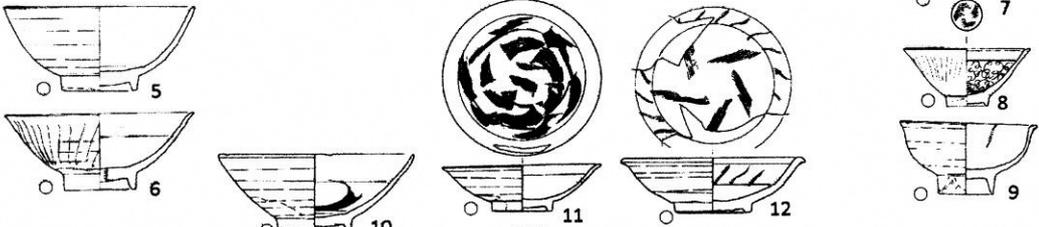


図4 浦口窯の生産状況

1050

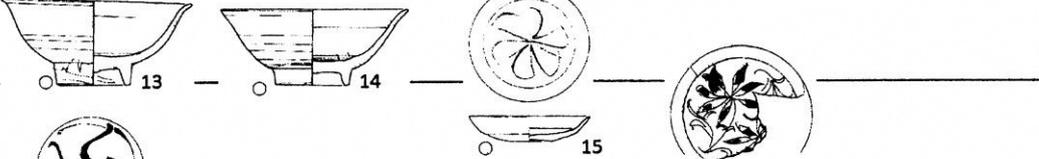


I 期



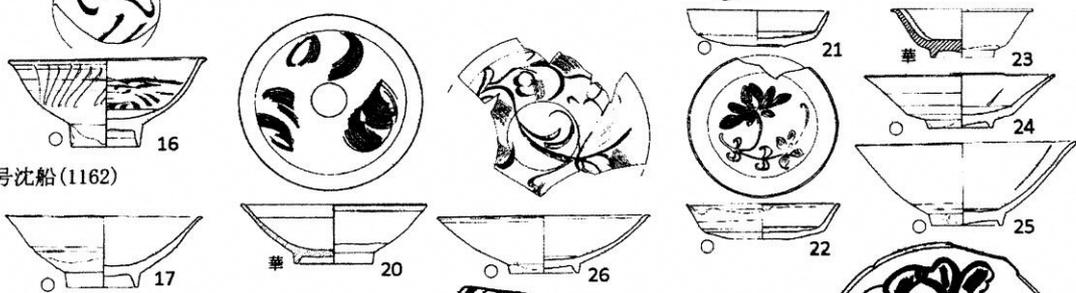
(南宋1127)

1150



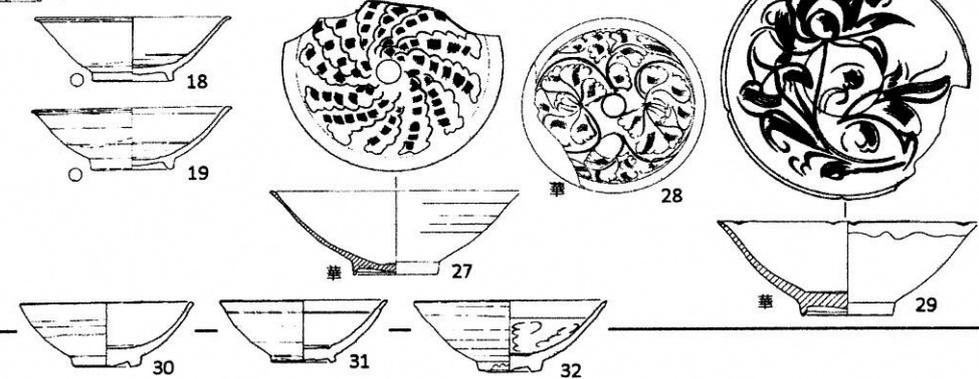
※華光礁1号沈船(1162)

II 期

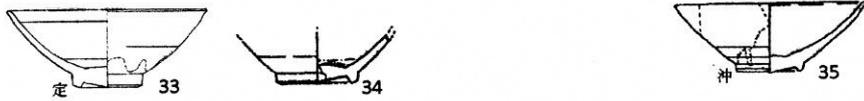


※南海1号沈船
(12C末~13C初頭?)

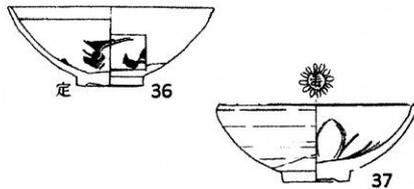
1225



(元1271)



III 期

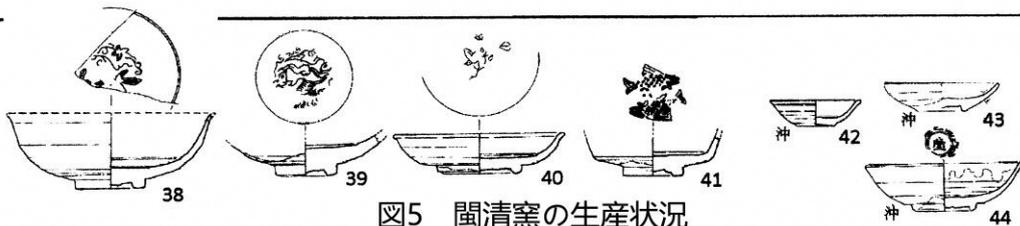


※新安沈船(1323)

1350

(明1368)

IV 期



無印: 窯跡採集
○: 博多出土
青: 青龍鎮出土
華: 華光礁1号沈船出土
定: 定海灣出土
沖: 沖繩出土

図5 閩清窯の生産状況

宮古島市内グスク時代の中国産陶磁器

久貝 弥嗣

はじめに

『球陽』によれば、後に与那覇勢頭と称される真佐久が、中山の察度に朝見したのは1390年のことである。その後、宮古島と沖縄諸島との関係性を示す記録が確認されるのは、仲宗根豊見親が琉球王府の先導としてオヤケアカハチの征討へむかったとされる1500年のことである。1504年には那覇の通堂に宮古蔵が設置されたとの記録もあることから、少なくとも1500年代の初頭には宮古島と沖縄島の琉球王府との間に公的な関係が築かれていたといえる。しかし、1390年と1500年の間の110年間、宮古と沖縄島がどのような関係性にあったのかは歴史資料からよみとることはできない。また、1390年以前の宮古島がどのような対外関係を有していたのかも同様である。

このグスク時代における宮古島の島外関係を考える上で、考古学の調査・研究から注目されている中国産陶磁器として今帰仁タイプ白磁碗がある。今帰仁タイプ白磁碗は、宮古・八重山諸島に多く出土する傾向が示されており(宮城・新里 2009)、その搬入ルートとして中国南部-八重山諸島-宮古諸島-沖縄諸島が示されている(木下 2009)。今回の報告では、宮古島市内の発掘調査の成果をもとに主に13世紀後半から15世紀前半の白磁に着目していきたい。

2. 今帰仁タイプ白磁碗

(1) 今帰仁タイプ白磁碗の定義

白磁今帰仁タイプは、ビロースク遺跡において薄手直口口縁碗として報告され、今帰仁城跡主郭の報告段階で今帰仁タイプ白磁碗として金武正紀氏が報告している。今帰仁タイプ白磁碗は、その高台や口縁部の形態に大きな特徴を有する。高台の特徴については、「ハ」の字状に外側に開き、畳付内端だけが畳に付く。畳付外端は稜を示し、外端部を意識的に面取りしたものはない。また、外底の高台際を篋で削って三角形に凹めて仕上げる特徴がある(金武2007)。金武氏は、前述したビロースク遺跡、今帰仁城跡主郭に加え、慶田崎遺跡出土の今帰仁タイプ白磁碗を中心にⅠ～Ⅲ類に細分を行っている(金武2007)。

- Ⅰ類：口唇内端が稜を示し、口唇部を平らか内傾にする。内底釉を蛇の目搔き取りする。高台は「ハ」の字状に開き、畳付外端の面取りがない。外底の高台際を篋で削って三角状に凹る。
- Ⅱ類：口縁部や高台の特徴などはⅠ類と同じであるが、内面下位から内底までを露胎にする。
- Ⅲ類：口唇部を丸く仕上げたものである。施釉方法は内底露胎と内底まで施釉したものがあるが、単に重ね焼きのときの上と下の違いかと考えられるので同じ類とした。高台はⅠ・Ⅱ類と同様である。

今帰仁タイプ白磁碗の年代観については、今帰仁城跡主郭の出土層位と共伴遺物との関係性から13世紀末から14世紀初頭としている。また、その生産地については、福建浦口窯が考えられている。

(2) 宮古島市内遺跡出土の今帰仁タイプ白磁碗

宮城・新里両氏は、今帰仁タイプ白磁碗、ピロースクⅠ～Ⅲ類について集成を行い、今帰仁タイプ白磁碗が宮古・八重山諸島に多くみられる陶磁器であることを明らかにした(宮城・新里 2009)。実際に、宮古島市内の今帰仁タイプ白磁碗の集成を行うと、両氏が示した集成以上に今帰仁タイプ白磁碗の出土が非常に顕著であることが再確認された(久貝 2014)。

宮古島市内の今帰仁タイプ白磁碗の再集成を行う際に、高台の形態などは広義の今帰仁タイプとして捉えられるが、施釉方法や内底の形態などに若干の差異も認められた。また、口縁部の形態についても若干の差異があると感じた。以下に、今帰仁城跡出土の今帰仁タイプ白磁碗との比較を行った際の相違点について整理を行う。

①高台 高台については、「ハ」の字状に開き、畳付外端の面取りがない。外底の高台際を篋で削って三角状に凹るといふ特徴は、今帰仁タイプ白磁碗を含めた浦口窯の特徴であるといえる。宮古島市内出土の今帰仁タイプ白磁碗の高台の特徴として以下の2点をあげる。

- ・内底に一条の削りを廻し入れるものが多くみられる
- ・内底の蛇の目釉剥ぎはⅠ類にもみられる特徴であるが、Ⅰ類は比較的底径が広く、内底は平坦に近い広い底部をなし、器高の低い器形を呈する。一方で宮古島市内の蛇の目釉剥ぎの高台は、底径がⅠ類に比して狭く、内底の中央部に向かって凹む形態をなす。
- ・今帰仁城跡の今帰仁タイプ白磁碗は、素地は灰色系を呈すものが多いのに対し、宮古島市内の今帰仁タイプ白磁碗は

②口縁部 口縁部の形態は、金武氏が定義するように明瞭な稜を有し平坦面をなすものに加え、稜が不明瞭なものもみられる。宮古島市内遺跡出土の今帰仁タイプ白磁碗については、Ⅰ類に比定される口縁部はほぼなく、稜が不明瞭なもの、丸みをおびるもの、舌状の形態をなすもの、微弱に外反し肥厚するものとバリエーションが豊富である。

今回の文化講座も含め、今帰仁タイプ白磁碗の要素について検討を深めていきたい。

3. 高腰城跡の再検討-白磁を中心に-

今回、宮古島市内の11世紀後半・12世紀～15世紀前半の遺跡の様相を再検討することを目的に高腰城跡出土遺物について再整理(分類・集成)を行った。以下、沖縄諸島との比較を行うことから瀬戸氏の時期区分に従って高腰城跡の遺物についてみていきたい。

(1) 瀬戸1期

瀬戸1期の遺物組成で、高腰城跡出土の資料としては白磁玉縁碗(白磁Ⅳ類)のみで、高腰城跡からは口縁部で5点、底部で1点の出土が確認されている。滑石製石鍋の出土は認められなかったが、表面採集資料としては滑石混入土器が1点確認できる。

(2) 瀬戸2期

瀬戸2期は、劃花文碗(青磁Ⅰ類)、櫛描文皿の遺物で組成される。青磁についても明確な集計について未整理であるが、劃花文、櫛描文皿とも口縁部での出土は非常に少ないとみられる。

(3) 瀬戸3期(13世紀後半～14世紀前半)

瀬戸3期は、13世紀後半の3古期と、14世紀前半の3新期に細分される。

瀬戸3古期は、鎬蓮弁文碗(青磁Ⅱ類)、口禿碗・皿(白磁A群)、今帰仁タイプ白磁碗(白磁F群)

を構成遺物としている。高腰城跡の出土状況としては、白磁で口禿碗(口縁部)が3点出土するのに対し今帰仁タイプ白磁碗(口縁部)は31点し、底部の出土状況をもみても今帰仁タイプ白磁碗は13点である。青磁の鎬蓮弁文碗(口縁部)の出土も1点と白磁口禿碗と同様に非常に少なく、高腰城跡の瀬戸3古期における今帰仁タイプ白磁碗の割合が非常に高いことがみてとれる。

瀬戸3新时期は、青磁Ⅲ類、Ⅳ類古相と、白磁のビロースクタイプⅠ・Ⅱ類(白磁C1・C2)を遺物構成としている。白磁の出土状況についてみるとビロースクⅠ類(口縁部)は12点、ビロースクⅡ類(口縁部)は67点である。ビロースクⅡ類は、白磁全体の量からみても46%の割合を占めており、高腰城跡の白磁を代表する遺物である。これまで今帰仁タイプ白磁碗の出土の地域的な傾向について考える機会が多かったが、瀬戸氏よりビロースクⅡ類の出土量についても地域的な傾向について検討を行う必要があることをご教示いただいた。ビロースクⅡ類は、沖縄諸島においても多くの遺跡から出土する白磁である。しかし、その出土量についてみると、30点以上の出土がみられる遺跡は、今帰仁城跡や中城グスクなど非常に限られてくる。この点については、現在これ以上に論を深めることができないが、実見の限りでは八重山諸島の遺跡においてもビロースクⅡ類の出土割合が高いと感じられる今後検討を行っていききたい。

(4) 瀬戸4期(14世紀後半～15世紀初頭)

瀬戸4期は、青磁Ⅳ類新相とビロースクⅢ類(白磁C3)を主な遺物組成とする。ビロースクⅢ類口縁部で5点、底部で1点の出土であり、白磁が増加した瀬戸3期に比べ激減する。しかしながら、沖縄諸島の出土状況と比較した場合、ほぼ同様の傾向を示しているものと考えられる。このような白磁とは対照的に青磁Ⅳ類新相は非常に多く出土する状況がみてとれる。

(4) 時期的変遷

高腰城跡の白磁の出土状況を第4図に示した。本図に示されるように、高腰城跡において中国産陶磁器が増加するのは、瀬戸3古期の段階である。それ以前の瀬戸1期、2期の段階においても遺物の出土はみられるが、その数量に大きな変化がみられるのは瀬戸3古期であろう。しかし、瀬戸1期、2期においても少量の遺物が出土する点は、本段階から高腰城跡の遺跡の開始期を示していることは留意すべき点である。

瀬戸3古期の様相が今帰仁タイプでほぼ組成される点は前述したとおりである。本段階で留意すべき点として同時期の沖縄諸島の遺跡との比較である。今帰仁タイプの様相については、前述したように広義の今帰仁タイプ白磁碗の概念で捉えられるものの、従来の定義の今帰仁タイプ白磁碗よりもバリエーションが認められる。また、共伴遺物としては、鎬蓮弁文碗や口禿碗が非常に少なく、同段階において高腰城跡は今帰仁タイプ白磁碗を主体とした出土状況を示しているといえる。また、前段階の瀬戸1・2期と比較しても、遺物の出土量は増加していることも高腰城跡瀬戸3古期に何らかの画期を想定することができる。

瀬戸3新时期については、今後の検討を要するがビロースクⅠ・Ⅱ類が沖縄諸島に比して出土量が多い点をふまえるなら、瀬戸3古期から継続した地域的な出土傾向が推察される。

瀬戸4期になると、ビロースクⅢ類や青磁Ⅳ新相の出土状況から沖縄諸島と類似した出土傾向を示すものと考えられる。

4. 高腰タイプ遺跡群

久貝は、これまで宮古島市内のグスク時代を大きく3つに時期区分するとともに、グスク時代の遺跡を大きく3つのタイプに分類した(久貝 2014)。時期区分としては、Ⅰ期を11世紀後半・12世紀前半から13世紀中頃、Ⅱ期を13世紀後半から15世紀前半、Ⅲ期を15世紀中頃から16世紀とした。さらに遺跡の分類では、住屋タイプ、高腰タイプ、元島タイプという3つの遺跡の分類を行ったが、宮古島市内のグスク時代で非常に地域性の高いタイプの遺跡を高腰タイプであるとした。高腰タイプの遺跡の特徴として、大きく以下の4点を挙げた。

- ①第1期を初現とし、第2期を最盛期としながらも15世紀前半に終焉をむかえ、第3期へ継続しない。
- ②丘陵上部に立地し、石積遺構を有する。『雍正旧記』にもその記録がみられる。
- ③与那覇原軍の伝承に関連する遺跡が多い。
- ④青花が出土せず、白磁今帰仁タイプ、ビロースクⅠ・Ⅱ、青磁無文外反碗、中国産褐釉陶器、宋銭に特徴区的な出土状況を有する。沖縄本島の組成と異なる。*用途は不明だが多くの遺跡に石材が確認される。

これらの①～④の全ての要素を示す遺跡は少ないが、①・②の特徴を共通してもつ広義の高腰タイプ遺跡群としては、高腰城跡、野城遺跡、大牧遺跡、ミスズマ遺跡などがあり、小規模な発掘調査や表面採集資料などから、大嶽城跡、ムイ島遺跡、カームイ嶺遺跡、平瀬御神崎遺跡、大浦多志城跡なども同遺跡群に含まれるものと考えている。これらの遺跡群の分布をみると宮古島の東海岸に集中する状況がみてとれる。久貝は、これまで高腰タイプ遺跡群の有する石積遺構については、一方が崖面に有する点も含め防御的な機能を想定してきた。しかし、現在調査を進める中で、海岸線を望む遠見としての機能も重要な要素であると考えられる。

試論とはなるが、筆者が宮古島の時期区分を行った一つの基準として、この高腰タイプ遺跡群の終焉時期を大きな画期の一つを考えている。下地和宏氏は、14世紀に宮古島の遺跡が増加する状況を指摘し、その要因として中国産陶磁器の増加に伴う島外地域との関係性について触れている(下地 2011)。その島外地域の関係性を示す中国産陶磁器として、今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクⅠ・Ⅱ類であり、木下氏らが提唱された南の交易ルートであるといえる。下地氏が14世紀の遺跡として提示された遺跡のその後をみると、久貝が提示した高腰タイプは遅くとも15世紀前半には終焉をむかえる。それとは対照的に、出土遺物などの点からより盛行していく遺跡に住屋タイプ遺跡群がある。はじめにでも述べたように、1504年には那覇の通堂に宮古蔵が設置され、宮古と沖縄諸島の交易の拠点の一つとなったと考えられる。宮古島における交易の拠点は、蔵元跡がおかれた現在の市街地一帯であり、海の玄関口は漲水港であった。これらの状況からも市街地一帯に展開する住屋タイプ遺跡群が15世紀中頃以降に盛興期を迎える歴史的な背景は十分に理解される。その一方で、高腰タイプ遺跡群の13世紀後半以降の海域の主要な拠点は白川浜であったことが推察される。久貝は、仲宗根豊見親が琉球王府との関係性を強め始めた15世紀後半もしくは16世紀初頭において、従来白川浜を含めた複数あったとされる交易の拠点としての窓口が漲水港に集約される段階で、その機能が衰退し遺跡の終焉につながったのではないかと推察する。この点においては、もう一つの遺跡タイプである元島タイプ遺跡群と関係性や土器の視点からの考察を深めていかなければならず、今後も研究を進めていきたい。

<参考文献>

- 木下尚子 2009年「第5章総括」『13～14世紀の琉球と福建』 熊本大学文学部木下研究室
久貝弥嗣 2014年「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」『南島考古』No.33 沖縄考古学会
下地和宏 2011年「「宮古人」を考える」『宮古の自然と文化』第3集 宮古の自然と文化を考える会
宮城弘樹・新里亮人 2009年「第3章第3節琉球列島における出土状況」『13～14世紀の琉球と福建』 熊本大学文学部木下研究室

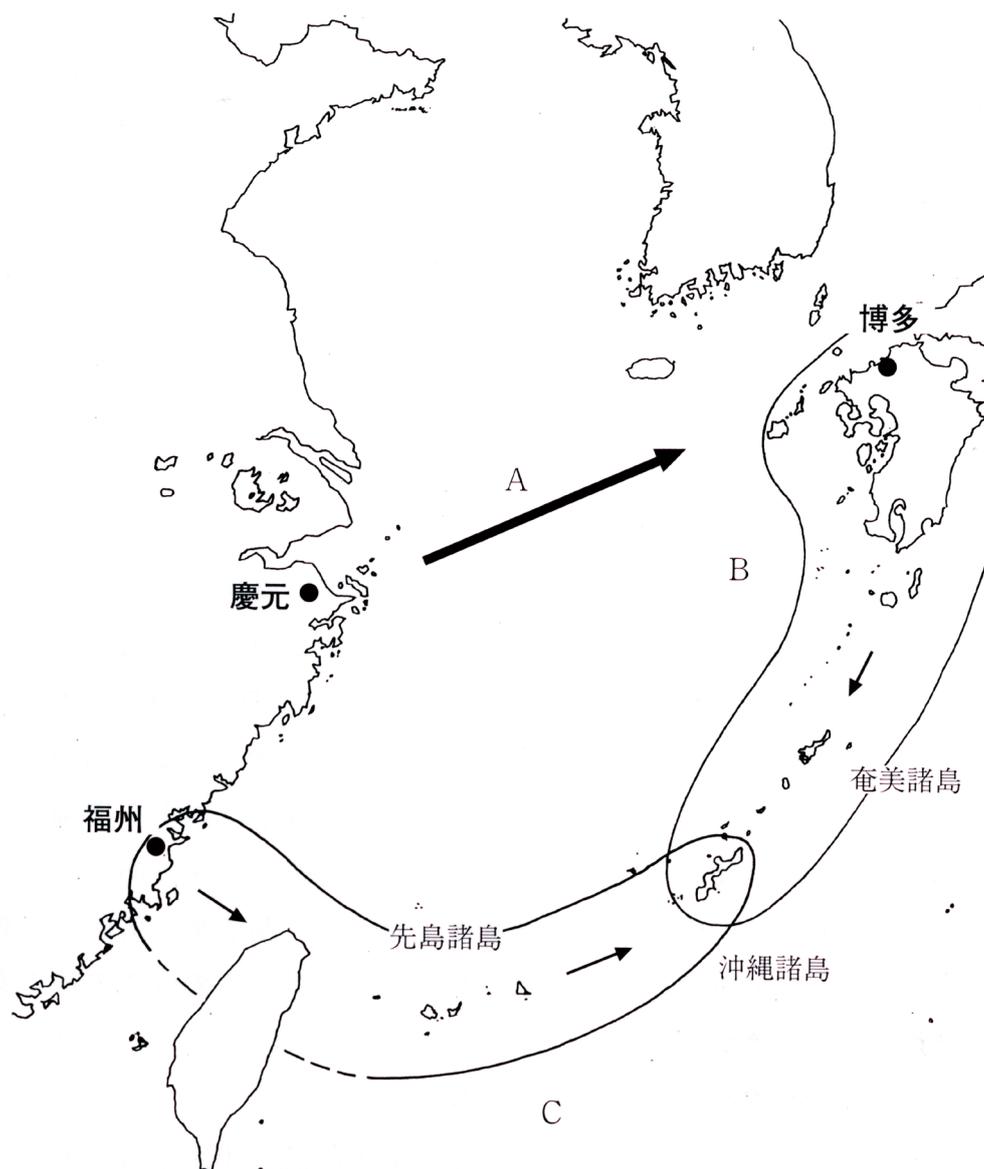


図1. 13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏

- A：慶元から博多に向かう中国陶磁の動き
- B：博多を起点にする中国陶磁の流通圏
- C：福建を起点にする中国陶磁の流通圏
- ：陶磁の移動方向

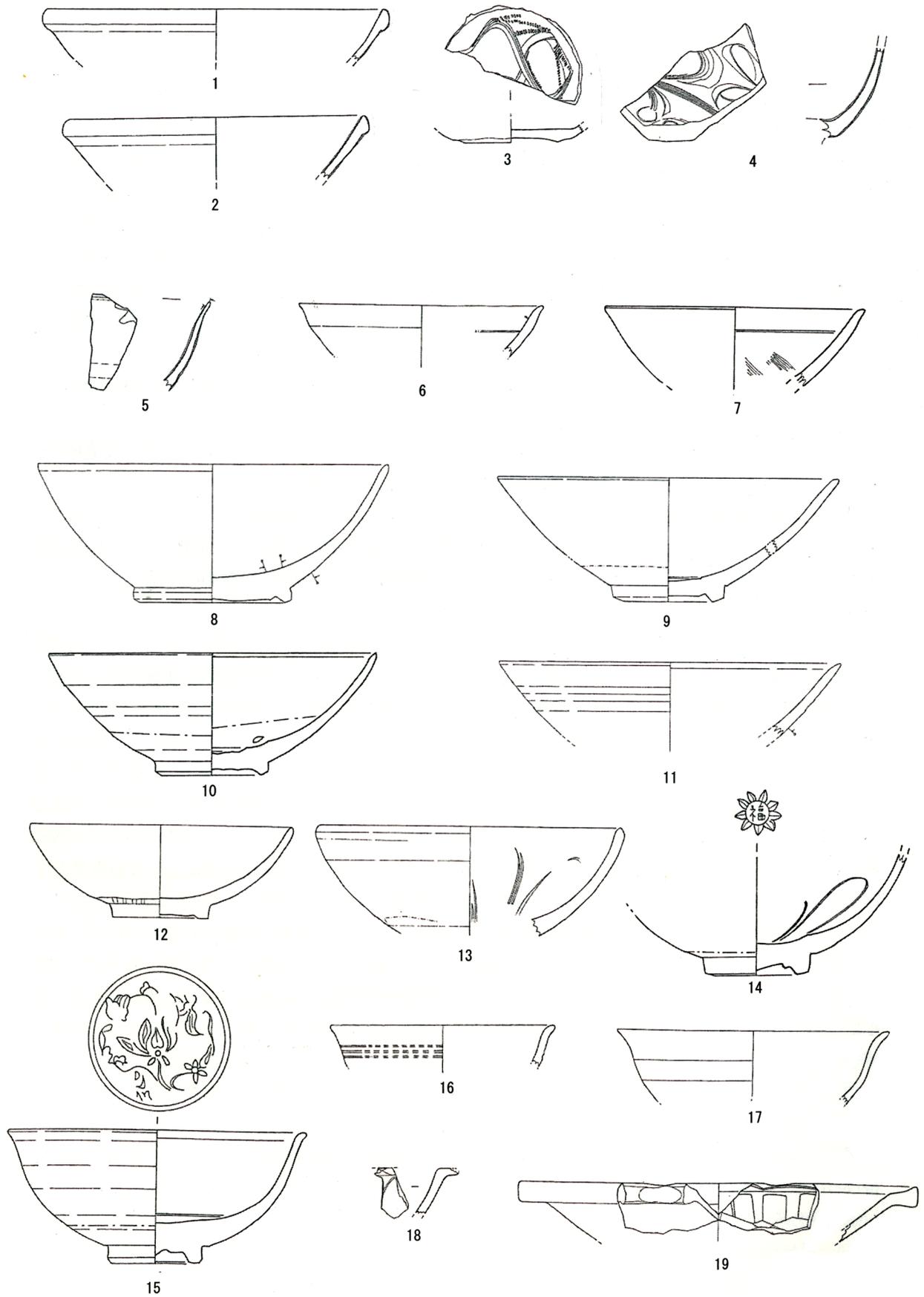


図12 第1期・第2期①の中国産陶磁器 (S=1/3)

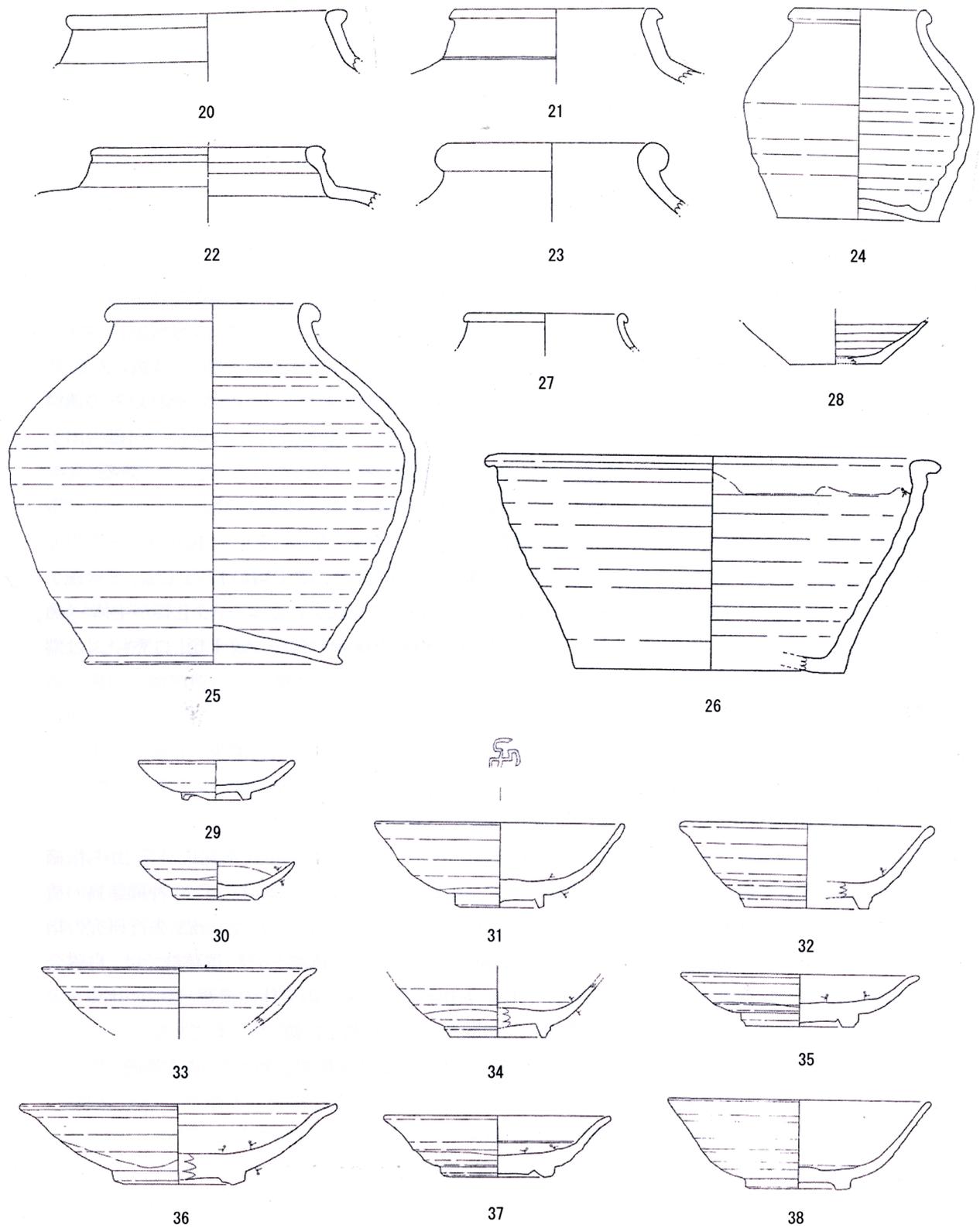


図3! 第2期・第3期(白磁)の中国産陶磁器

1・4・5・7・10・14・15・29~37: 住屋遺跡(1999) 3・18・19: 野城遺跡 6・12・16・17・20~23・27・28: 高腰城跡
 9・13・29: 住屋遺跡(俗称尻間) 2: 平瀬御神崎遺跡・表探
 8: 大浦多志城遺跡・表探 24・26: ミヌズマ遺跡(2013年調査)



写真1 高腰城跡出土の今帰仁タイプ白磁碗（第21図1）



写真2 高腰城跡出土の今帰仁タイプ白磁碗と庄辺窯系白磁（左第23図2、右第23図3）



写真3 今帰仁城跡（主郭）出土の今帰仁タイプ白磁碗（第27図3）

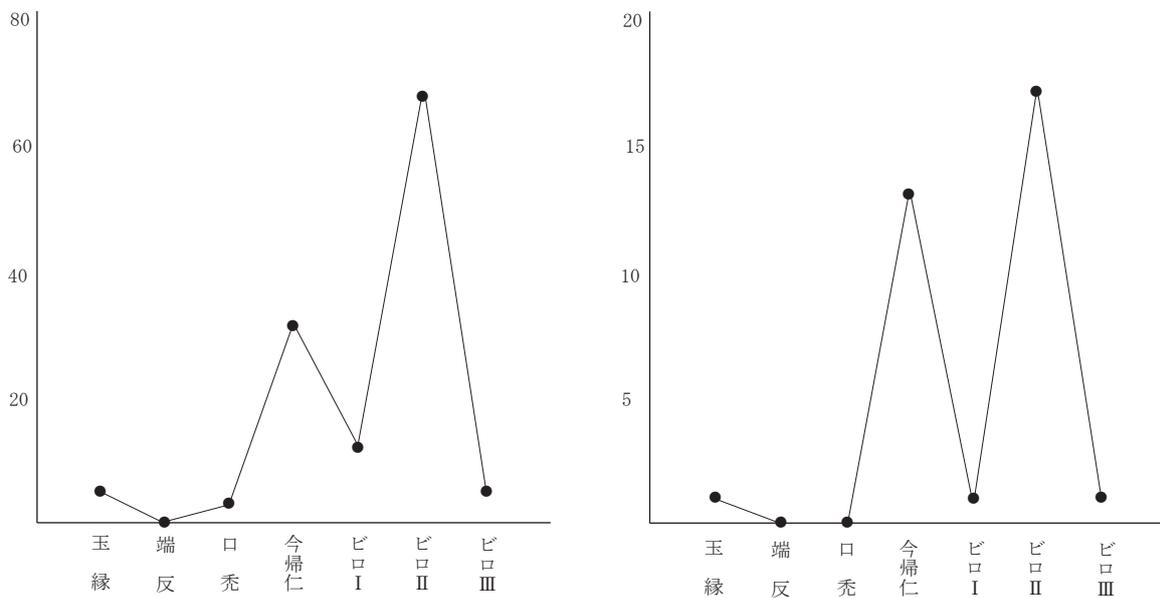


図4 高腰城跡の白磁出土点数（左は口縁部の集計、右は底部の集計）

琉球列島の陶磁交易と那覇港

瀬戸 哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）

はじめに

琉球列島では、中国産を主とする貿易陶磁が多く出土することで知られている。その中で、日本本土では見られない琉球列島、特に今回の会場である今回の宮古島でも多く出土する今帰仁タイプ・ビロースクタイプ白磁に注目したのが沖縄県内の考古学者、金武正紀氏であった（金武 1989・金武 2009 ほか）。そして、その生産地を追求されたのが今回報告される田中克子氏であり、共に福建省で生産され、前者は福州沿岸の浦口窯、後者は閩江中流域の閩清窯だということを突き止められた（田中 2003、田中・森本 2004）。

筆者は、首里グスクなどの発掘調査に携わり、琉球列島の出土状況より陶磁の編年に努め、それをもとにグスク時代¹の交易や社会について若干の検討を始めつつある（瀬戸ほか 2007、瀬戸 2011・2014・2017 a・b・c）。今回は、これらの成果から 11～14 世紀を中心とした沖縄島中南部を中心とした陶磁交易と、14 世紀後半に首里グスクなどの大規模な城塞的グスクの隆盛と共に整備されたと考えている那覇港の形成と景観について報告したい。

1 沖縄島における陶磁交易の展開

グスク時代において対外交易によって得られたモノとして、考古資料では陶磁が最も認識しやすい。そこで、11～14 世紀の陶磁交易を検討するために、大宰府分類（山本 2000）などをもとにした筆者の陶磁分類・編年により 4 つの時期を設定して、搬入された陶磁等が一定量見られた遺跡の変遷について沖縄島中南部を中心に整理したい（瀬戸 2017 a・b）。各期の出土量であるが、現在刊行されている調査報告書から各時期の代表的なタイプの陶磁の出土量を集計し、中量・大量・超大量の 3 つに区別した（第 1 図）²。なお、1 期には陶磁以外に滑石製石鍋も対象としているが、これらは長崎県彼半島産とされるので、同様に交易によりもたらされたと考えるからである。

1 期 11 世紀後半～12 世紀前半

116

大宰府 C 期に該当する時期で、最も多く出土する白磁碗 IV 類（玉縁口縁碗）について対象とした。また、石鍋も概ね当期に搬入されたことが出土状況からも言える。この白磁と石鍋は、博多を拠点とする商人や九州の諸勢力による流通に関連したと考えられている（金武 1989・新里 2015）。琉球列島では喜界島城久遺跡群で最も多く出土しているので、本遺跡群がそれより以

¹ グスク時代の定義については異論があるが、ここでは奄美諸島（群島）、沖縄諸島、宮古・八重山諸島に共通する大きな時期区分として使用する。その開始を中国産白磁、長崎産石鍋、徳之島産カムイヤキが共通に流通し農耕が開始された 11 世紀後半と考え、その終焉は首里グスクを中心とした集権体制がほぼ確立される 15 世紀末～16 世紀前半と捉えている。その後の 16 世紀後半～17 世紀前半を近世社会への移行期と捉える。

² 各遺跡における出土量は、調査面積、陶磁の分類基準や集計方法が異なるので、厳密な意味では比較することは難しい。ただ、今回 80 遺跡を対象に検討して、各期で出土量が該当するものをピックアップしたところ、大まかな傾向は把握できるものと考えている。

南の他遺跡への搬入に強い影響があったと考えている（瀬戸 2014）。

さて、白磁碗Ⅳ類と石鍋は、西海岸中部域に集中しており、特に北谷町小堀原・後兼久原遺跡、那覇市銘苅原・ヒヤジョー毛遺跡が超大量出土遺跡、宜野湾市伊佐前原第一遺跡、真志喜石川第一・第二遺跡が大量出土遺跡である。これらの遺跡は、海岸部より 1 km 以内の平地・台地に立地している。ただ、少量ではあるが、各地で出土する遺跡は見られ、既に内陸部でも見られる。この 1 期には西海岸中部が交易拠点で、それには同時期に隆盛している喜界島等勢力の移民も含めた強い関係があったと考えられる（池田 2012・瀬戸 2014）。

このことに合わせて、長崎県大村市竹松遺跡でカムイヤキが出土したことに注目したい。これまでカムイヤキの最北の出土地は、鹿児島県出水市・伊佐郡であったが、竹松遺跡では 11 点出土した。この他、朝鮮無釉陶器が 212 点、大量の滑石製縦耳型石鍋が出土している（川畑・堀内 2016）。この背景としては、文献史料で持躰松遺跡などが所在する阿多郡を拠点とした阿多忠景は肥前平氏である彼杵氏と姻族とする説があること、喜界島征討を行ったとする天野遠景の一族は鎌倉期には彼杵荘の惣地頭であったことなどから、中世の南島交易には九州の領主層が関係したとする見解は、史料との同時性の検証はあるが筆者も頷ける（野口 2017）。

2期 12世紀後半～13世紀前半

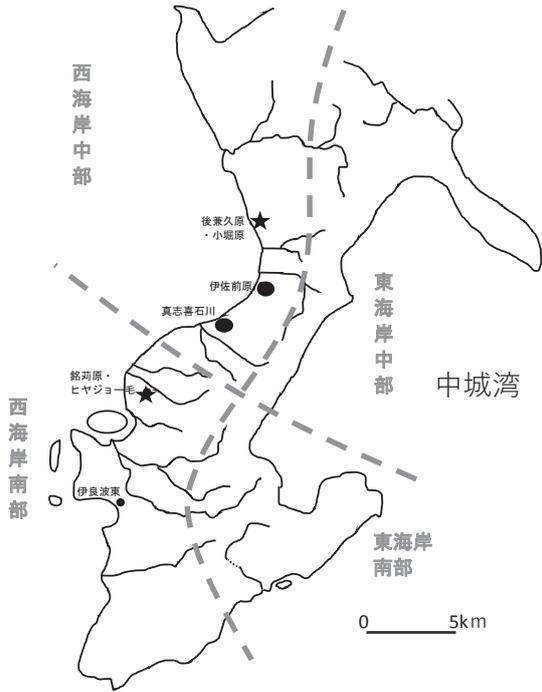
龍泉窯系青磁（以下、青磁）Ⅰ類・いわゆる同安窯系青磁などを指標とする大宰府D期を中心とする時期で、青磁Ⅰ類（劃花文）碗を対象とした。1期の中心地域とみられた西海岸中部では超大量出土遺跡が無くなり大量出土遺跡も減っている一方、東海岸にも登場するようになる。また、少量出土遺跡でもより内陸部の遺跡が増えている。以上より、本期には前期の拠点であった西海岸中部の遺跡が求心力を失った、もしくは別場所に移動したことなどが考えられよう。

この2期には城久遺跡群の出土量が激減するので、喜界島等勢力が弱くなったもしくは、1期の段階で沖縄島を含む琉球列島へその勢力が遷移していった可能性も考えられるが、現時点では決め手がない。そこで、新里亮人氏が筆者の2期に九州全体で中国陶磁のピークがあると指摘することに注視したい（新里 2015）。先述した持躰松遺跡などがある阿多郡では、「唐房」などの地名も根拠として宋商人居留地である可能性が考えられ、硫黄・ヤコウガイ・赤木などの南島物産を獲得するための拠点であったという見解がある（柳原 2004）。

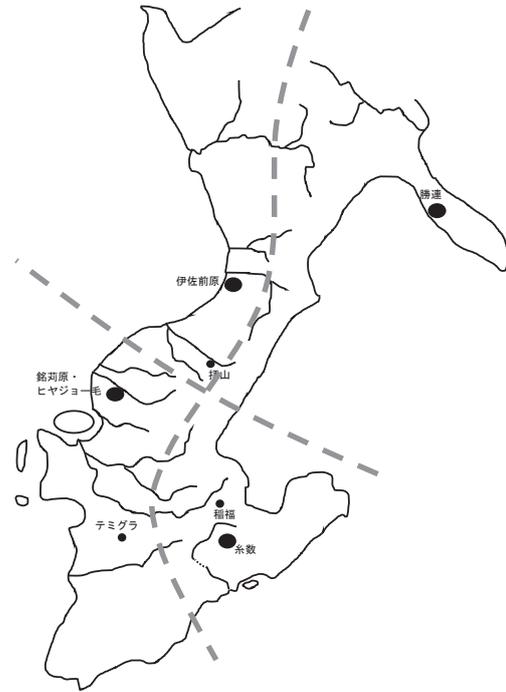
これらのことから、沖縄島の交易拠点が東海岸にも登場することは、九州諸勢力による南島交易がより盛んになった可能性も推測される。このことは、奄美大島倉木崎海底遺跡や久米島はての浜沖で2期の陶磁が大量散布しており、これを沈没船の存在を示すものとみて、琉球列島を経由する日中間航路が想定されることと同調しているものと思われる（金沢 2006）。

3期 13世紀後半～14世紀前半

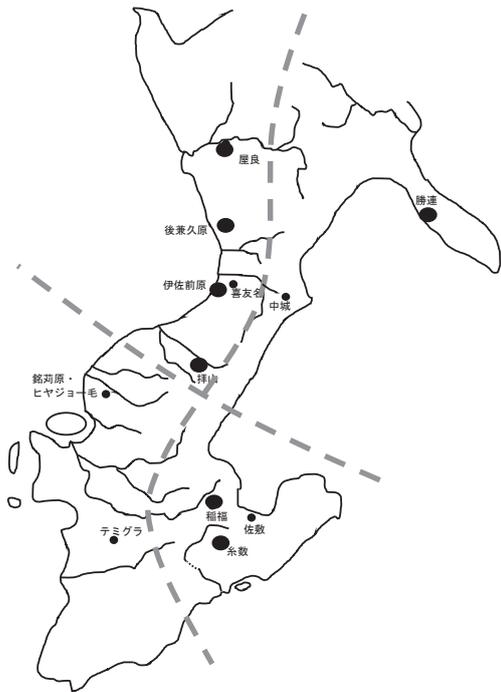
本期はさらに2細分でき、3古期を13世紀後半、3新期を14世紀前半とするが、明確に区分できる出土事例は少ないのでまとめている。今回は、古期が青磁Ⅱ類（鎬蓮弁文）碗、新期が白磁C1・2群（ピロースクタイプⅠ・Ⅱ）を対象とした。なお、この白磁C1・2群の他、白磁F群（今帰仁タイプ）がこの時期に出土するが、これらは九州島日本本州ではほとんど出土しないものであり、博多等を介さない琉球列島における独自の交易が想定されている（金武 2009、新里 2015）。なお、沖縄・奄美よりも宮古・八重山に相対的に多く出土していることから、生産地である福建地域と宮古・八重山との直接的な交易も十分想定される場所である。また、今回は詳論できないが、今帰仁村今帰仁グスクが3～4期における沖縄島では最も多くの陶磁が出土する遺跡で、白磁C1・2、F群も多く見られ、宮古・八重山との直接的な関係を想定した



1期 (11世紀後半～12世紀前半)

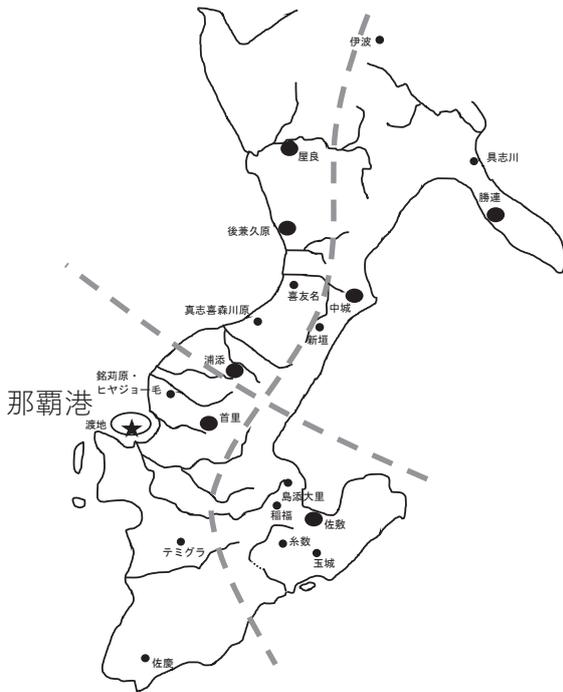


2期 (12世紀後半～13世紀前半)

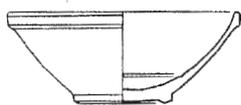


3期 (13世紀後半～14世紀前半)

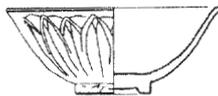
各期の主要陶磁器



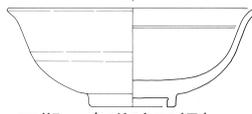
4期 (14世紀後半～15世紀初頭)



I期 白磁碗IV類



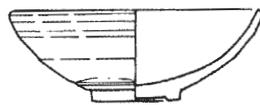
III期 青磁碗II類



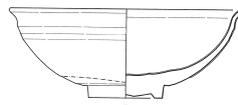
IV期 青磁碗IV類新



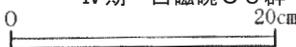
II期 青磁碗I類



III期 白磁碗C2群



IV期 白磁碗C3群



主要タイプの出土量

※2タイプある場合はいずれか

★ 超大量 (300点以上)

● 大量 (50点以上)

● 中量 (20点以上)

第1図 沖縄本島中南部における11～14世紀代の主要陶磁器出土遺跡の変遷分布図

い。

3期の出土量を見ると、1・2期からすると2倍程度の増加があった。また、屋良グスク・拝山遺跡などこの時期に出土量が増えてくる遺跡には、河川沿いの内陸部に立地するものが見られる。これは、2期にも存在した琉球列島経由の日中間航路の利用がより高まってきて、より安全に船が停泊できる水や食料等補給のための寄港地を求めてきたからではないかと考えられる。

そのことを示す資料としては、肥後高瀬に近接する樺番城窯系などの中南九州産須恵器が少量だが沖縄島で出土することが挙げられる。榎本渉氏が文献史料により14世紀中葉には中国寧波への渡来僧が、これまでの博多から直接の「大洋路」ではなく、高瀬から南下し琉球列島を経由する「南島路」の利用が増加したと指摘している（榎本2010）。つまり、この「南島路」利用が3期には一定度利用されていた可能性が考えられるのである。実際、この高瀬に当たる菊池川下流域では11～16世紀代の陶磁が多く散布しており、九州以北ではほとんど見られない白磁C2群の出土も見られるのである（田上2017）。

4期（14世紀後半～15世紀初頭）

指標とする陶磁器としては、青磁IV類新相と白磁C3群を集計し対象とした。これまでとは異なり、数百点以上の出土が見られる時期であるが、沖縄島では那覇港に当たる渡地村跡と、今回は詳細に触れられないが、今帰仁グスクが挙げられる。渡地村跡では、1か所に300点以上出土する青磁だまりが検出されており、非常に大量の陶磁が一括廃棄されたものと考えられる。時期は遡るが博多遺跡群と同様な出土状況であり、つまり1372年に開始されたとされる明朝との朝貢を契機とした直接かつ積極的な交易が始まったことを示すものと言えよう。

また、浦添・首里・勝連、そして今帰仁などの城塞的なグスクでも大量の出土が見られ、一般的なグスク時代のイメージがこの時期になって登場するものと考えられる。また、これらのグスクでは大和系・高麗系といった瓦が出土しており、13世紀後半もしくは14世紀前半からの生産とする諸説あるが、陶磁との共伴状況では4期の生産消費と考えている。ここでは詳論できないが、安里進氏が浦添グスク・ようどれの調査から、高麗系瓦などが13世紀後半に生産されており、この段階には既に同グスクが城塞的なグスクとして完成されており、沖縄島の中心であったとする説には、考古資料の現状からではまだ裏付けられていないと考えている（安里2006）。

2. 発掘調査成果よりみる那覇港の形成と景観

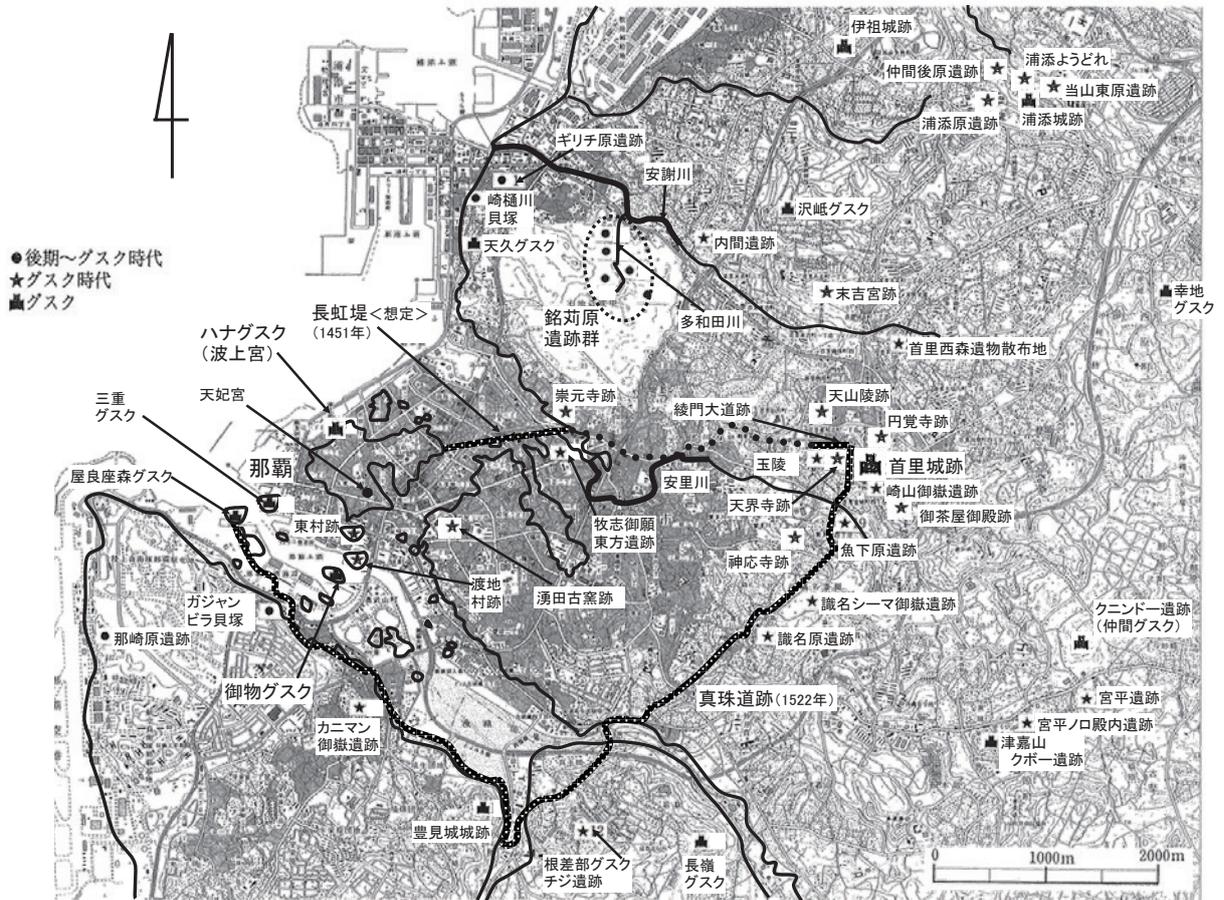
那覇港周辺の発掘調査の歴史はまだ浅いが、近年の渡地（ワタンジ）村跡（沖埋文2007、那覇市2012）、東（アガリ）村跡（沖埋文2017）の調査成果により、その形成と景観について報告したい。まずは、那覇港の立地や、文献史料で想定される空間構成を整理したい（第2・3図）。

（1）那覇港の立地と空間構成

那覇港は、かつては「大湖」、17世紀中葉には「漫湖」と称された、国場川下流域に当るサンゴ礁が発達しない淡水域の湿地地帯の北側に位置する「浮島」と呼ばれた独立した島の南岸付近であった。明治以降に埋め立てが進んだが、かつての古海岸線を復元すると、その浮島の周囲にはさらに小島が点在するような状況が想定されている。なお、浮島では真水が得られることは少なく、近代に至るまでは南側の対岸の落平（ウティンダ）と呼ばれる湧き水より舟で運搬されていたほどであった。発掘調査でも、基盤層は砂礫層で海水が湧いてくる状態であった。



第2図 明治初年の那覇（嘉手納宗徳氏作成図より）



第3図 那覇・首里周辺遺跡分布図・古海岸線想定図（新島 2005 を参考に作成）

浮島には、中国人等が居住した「久米村」、西・東村である那覇の民政や交易事務を扱う「親見世」、唐船小堀と呼ばれた船だまりを挟んだ小島には渡地村、宮古・八重山の貢納物を扱った王府の機関「宮古蔵」、さらに南の小島には貿易品の保管庫である「御物グスク」があった。那覇を管理したとされる官職としては、「御物城御鎖側官」「那覇里主」「那覇主部」などと称されるが、渡来人ではなく琉球人とされている。久米村では瓦葺きの屋根があり、「土城」が築かれ、中国人の他にも朝鮮人が居住していたとされ、また航海神の媽祖を祀る天妃宮などがあった。北側の若狭町であるが、上里によると波上熊野権現や日本僧が建立したとされる護国寺や地藏堂の存在や、那覇士族の家譜などの近世以降の諸史料により、日本人により創設されたと考えられている。

浮島と「琉球国都」と考えられる首里城がある台地とは「石橋」で繋がれており、これは1451年に築かれた長虹堤とされる。浮島の東対岸にはある泉崎村には、士族屋敷が立ち並ぶ一方、涌田地区は瓦・陶器の生産窯、下泉地区には大工などの職人もいたとされる。浮島では、若狭町では櫛引・轆轤・挽物細工などの職人がおり、西・東村では親見世周辺で市場が開かれたとされる。

一方、浮島及びその南対岸の西方には海中道路が整備され、1553年には屋良座森グスク、年代不明だが三重グスクといった石垣による砲台が構築された。なお既に、1522年には尚真王によって首里城より南下し国場川の南岸を通る真珠道が整備され、その碑文より軍事用であったと考えられている。これらは後期倭寇等の対外勢力への防衛政策と考えられ、1609年の薩摩侵攻時にも島津軍船を砲撃し、那覇からの侵入は防いだ。つまり、那覇は16世紀代には海からの侵入を防御する軍事機能を有していたことになる。

(2) 那覇港の形成時期と変遷

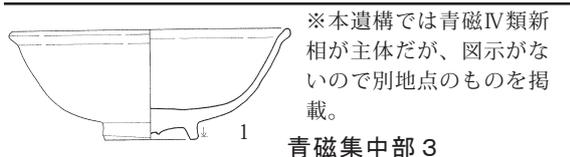
浮島において、現在最も古い遺跡としては、波上宮に位置するハナグスクがある。洞穴や周辺部には貝塚後期土器が散布しているが、そのあと間をおき、13世紀後半～15世紀後半の遺跡である。また、長虹堤の基点である崇元寺の南対岸に位置する牧志御願東方遺跡は、13世紀後半～14世紀後半の遺跡である。このように浮島では、13世紀後半には人々が生活していたと見られるが、那覇港近辺では未だそこまで遡る遺跡は確認されていない。

那覇港に面する渡地村跡では、青磁集中部と名づけられた数百点以上の青磁が集中して廃棄された遺構が形成されるが、その初現は14世紀後半～15世紀初頭の年代を想定している青磁IV類新相の段階以降である(第4図)。このような同種のタイプの陶磁器が一括廃棄される状況は博多遺跡群でも確認されており、これこそがまさに集散地としての港湾の特徴であろう。これをもって、港湾としての那覇の形成開始は14世紀後半としたい。また、琉球列島においては同種の陶磁器がこのように大量に一つの遺構で見つかることはこの以前にはなく、その背景は明への朝貢開始期とされる1372年前後と考えている。ただ、先述したようにまだ実年代を確定できる根拠は他にはなく、新島が想定する1350年前後の14世紀中頃に遡る可能性もないとは言いきれない。今後の大きな検討課題である。

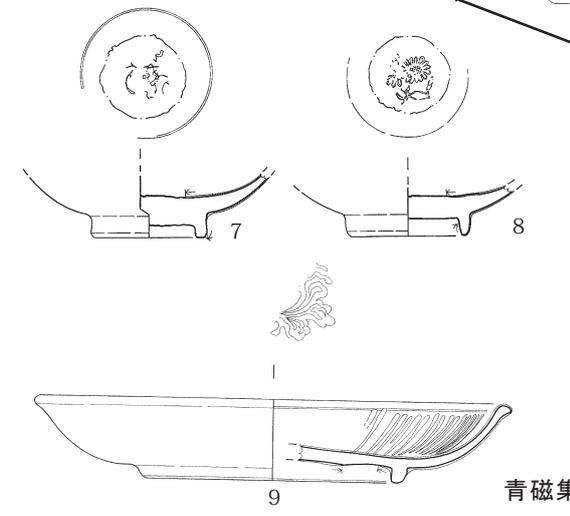
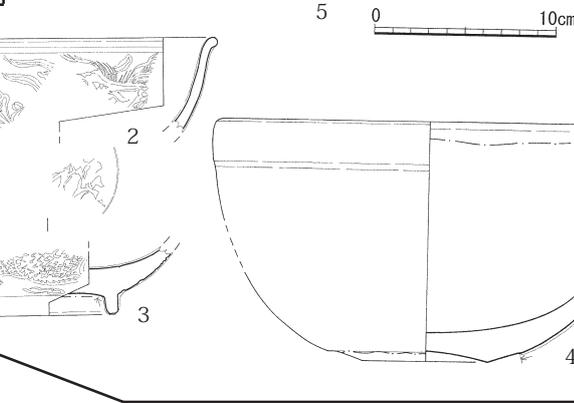
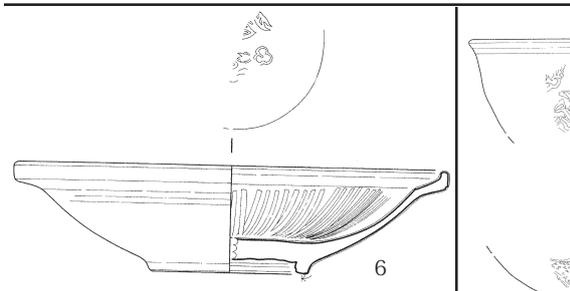
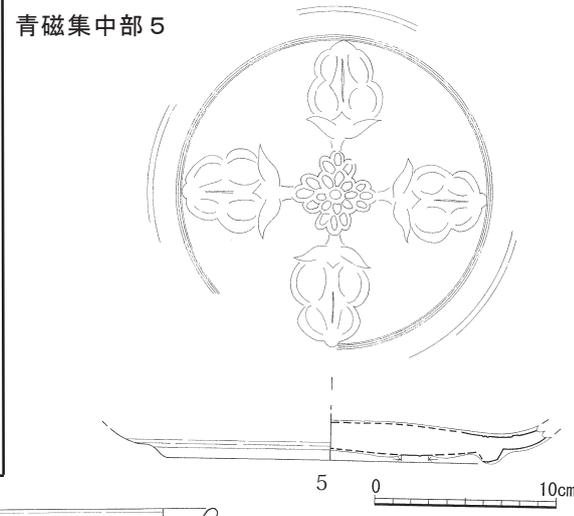
14世紀後半とされる遺構面は、岩盤が平滑に削平された範囲が見られ、大規模な造成があったものと考えられる。渡地村跡では具体的な建物プランは把握されていないが柱穴群や区画と考えられる幅1m前後で浅い溝が展開し、先述した青磁を中心とした一括廃棄遺構の他、貝集積遺構などが見られる。一方、東村跡でも14世紀後半～15世紀初頭段階の遺構面も見られるが、主体は15世紀中葉以降と考えられる。また、古海岸線の復元から考えると、東村跡は浮島そのものではなく、渡地村跡の北方の別の小島に位置することになり、南側から浮島へ造成が



渡地村跡第5層検出面主要遺構図



※本遺構では青磁Ⅳ類新相が主体だが、図示がないので別地点のものを掲載。



第11図 渡地村跡第5層検出面青磁集中部出土青磁（那覇市2012）

進んでいったことも考えられる。なお、御物グスクは、表採陶磁器より 15 世紀前半～中葉、渡地村跡の唐船小堀と称される地点では、15 世紀後半～16 世紀前半と考えられる石積みによる護岸の構築も確認され、15 世紀代以降さらに那覇港の整備が進むと見られる。

(3) 出土遺物からみた交易・対外関係

那覇港は 14 世紀後半に整備が開始されたとしたが、首里城の整備が本格化するのも同時期と考えている。琉球史研究では、対外交易の隆盛は 15 世紀前半までと考えられているが、確かに上等品が多いのはその時期である。しかし、出土量では 15 世紀後半～16 世紀前半であり、文献で描かれる堺商人の琉球貿易などの民間も含めた多様な貿易のイメージと合致する。

それを裏づける資料として、東村跡 SX13 で確認された陶磁器の一括廃棄遺構である（第 5 図）。青磁碗・白磁皿が主体で 725 点の陶磁が見られる。特に青磁雷文碗が集中して見られ、その特徴は筆者分類では青磁 V 類末相に当り、文様が非常に雷文帯以外は無文であることが多く、外底には釉が途中までかかる。同じく雷文碗が主体である首里城跡京の内 SK01 では、外底蛇の目釉剥ぎが主で、雷文帯以外に草花文が描かれるなどの違いが顕著である（第 6 図、沖泉教 1998）。また、この資料に類似するのが、古くから知られる和歌山県の紀淡海峡の海揚がり陶磁である。この紀淡海峡の雷文碗は著名であり、京の内の資料と比較されていたが、それよりはかなり粗製であった。しかし、今回の東村跡 SK13 資料により、文献で記される堺商人による南九州から高知へ廻る太平洋ルートが存在が裏付けられる可能性があるといえるのである（森村 2007、續 2011）。

一方、上等品の陶磁器としては、龍文などの流麗な文様が描かれる竜泉窯系青磁が渡地跡など見つかっており、その特徴から筆者の V 類、概ね 15 世紀代と考えられるものが挙げられる（第 4 図）。これらは、森達也によると中国の官窯から竜泉窯に依頼して生産されたものであり官器として位置づけられるものとして、皇帝の下賜品であった可能性も想定している（森 2012）。ただ、那覇では、首里城跡・勝連グスク・今帰仁グスクなどのように、元青花などは現在出土していない。しかしながら、上等品の出土は、首里城にはやや及ばないが、各グスクには匹敵もしくは凌駕しているものと思われる。

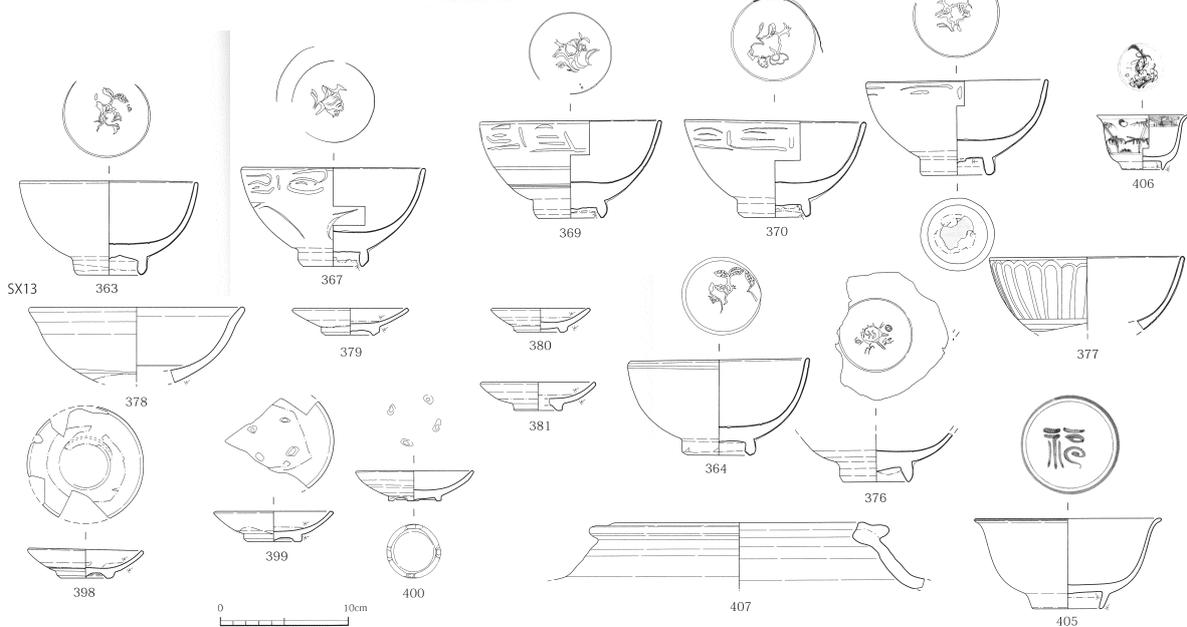
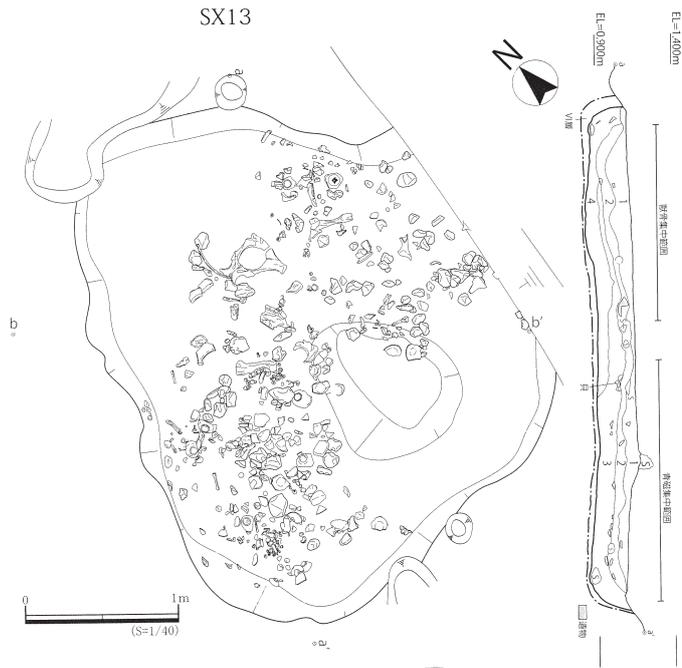
本土系陶器としては、各グスクでも見られるように備前、そして瓦質土器が出土し、15～16 世紀代のものである（第 7 図）。特に、後者は 10 点程度見られるので、首里城跡や天界寺跡に匹敵する量と言える。これらは、非常に精巧な風炉なども見られ、大和産そのものではないが、比較的良質なものが運ばれているものと考えられる（瀬戸 2011）。

他に対外交易・交流が窺える資料としては、中国で海巴と称され琉球から多く運ばれたとするタカラガイの 1000 点以上も集中する集積遺構が渡地村跡で確認されている（第 8 図）。その他、渡地村跡では時期不明だが、花卉形のガラス玉が出土しており、大友府内などのキリシタンが所有していたとする数珠コンタツのものと同様に類似している（第 9 図）。

琉球列島内の関係としては、渡地・東村跡では 15～16 世紀と見られる宮古・八重山の土器が多く出土していることが挙げられ、先述した宮古蔵の存在が裏付けられるものと思われる。

(4) 生産の諸相

渡地村跡・東村跡では、14 世紀後半～16 世紀前半にかけて、ヤコウガイ・サラサバテイラなどの貝集積も見られる（第 8・10 図）。これらの多くは破片となっており、これを検討する資料としては、首里城銭蔵東地区で確認された 15 世紀後半～16 世紀前半で確認された貝だまりである。ここでも、ヤコウガイ・サラサバテイラに付け加え、チョウセンサザエが大量に出土し



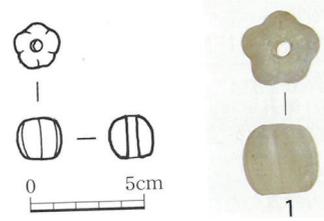
第5図 東村跡 SX13 出土陶磁 (沖埋文 20017)



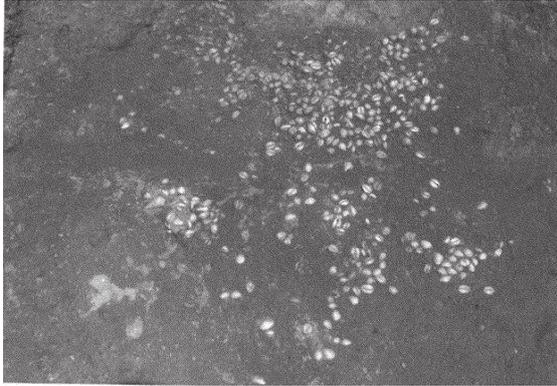
第6図 首里城跡京の内 SK01
出土青磁雷文碗 (沖県教 1998)

東村跡出土 (沖埋文 2017)

第7図 那覇出土本土産瓦質土器・備前・土師皿



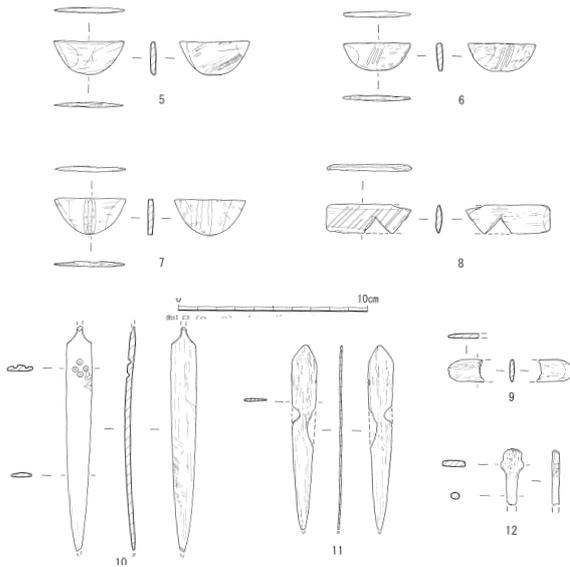
第9図 渡地村跡出土ガラス玉
(沖埋文 2007)



第8図 渡地村跡検出土貝類 (上)・タカラガイ集
中部 (下) (那覇市 2012)



第10図 東村跡サラサバテイラ集積
(沖埋文 2017)



第12図 渡地村跡出土骨製品 (那覇市 2012)



第11図 首里城跡銭蔵東地区貝だまり出土状況・螺鈿片・ヤコウガイ等破片 (沖埋文 2016)

ており、その大半は破片となっている。その破片の状況から螺鈿に製作した残滓であることが想定されている（沖埋文 2016）。そして、東村・渡地村跡でも同様の破片であった。つまり、首里城内で行われていたと同様の螺鈿製作が那覇でもされていたのである（第 11 図）。

また、鉄滓や溶着した銅銭、るつぼも見つかっており、これは金属生産が考えられる。やはり、首里城跡でも同様に生産しており、その時期は 15 世紀後半～16 世紀前半である（上原 2009）。その他、15～16 世紀代と考えられる層序では、簪やへら状、半月形などの骨製品が多く出土している。明確な未成品があるかの詳細な検討が必要だが、用途不明の切断痕がある骨片も見られるので、骨製品の製作の可能性もあろう（第 12 図）。その他、渡地村跡の護岸際の堆積層では、箸等の木製品のほか、朱塗りの漆製品が見られる。また、敷き固められた床面の周囲に炉跡、径・深さが 1.5m 前後の円形石積み遺構 2 基が並んでおり、報告書では塩田跡ではないかとしているが、何らかの工房であったことは間違いがない。このように、那覇港では多様な製品が製作されていたのである。

（5）出土銭貨の様相

銭貨は、宋銭、明銭、無文銭が概数としては同率であるが、その中でもやや明銭が多い。特徴としては大銭が多いことであり、那覇市調査区でみると、北宋 98 枚（350 枚中）、南宋 72 枚（80 枚中）、明銭 14 枚（431 枚中）、総数 184 枚（861 枚中）、その比率は 17% である。これは、小畑弘己の集計でみると、全国では 100 枚、うち博多が 37 枚、琉球列島が 31 枚というデータでも大銭の集中度が指摘されていたが、那覇ではさらにより如実であること言えよう（小畑 2003）。この大銭は中国で多く出土していることから、琉球列島は日本よりも中国寄りの銭貨流通システムであったことを改めて提議している（宮城 2017）。

また、琉球列島内では、首里・今帰仁・浦添グスクがその出土量の上位とされていたが（宮城 2008）、那覇もそれに匹敵するといえる。ただ、大銭の出土は那覇に目立つ傾向であり、このことが対外との貨幣流通が行われたと見られる港湾としての特徴の可能性と考えられよう。

おわりに

琉球列島の陶磁交易は、11 世紀後半から喜界島勢力の移民も含めた影響により、列島全体で開始されるが、13 世紀代までは基本的に博多を中心とした九州諸勢力との枠組みで行われたものとする。13 世紀後半に、宮古・八重山を中心に今帰仁・ピロースクタイプという陶磁の存在により、琉球列島における新たな交易の枠組みが登場する。そして、それが沖縄島を拠点とした 14 世紀後半の明への朝貢に繋がることで那覇港の急速な整備が始まり、首里城をはじめとした城塞的グスクを拠点とした各勢力の抗争に繋がるものと考えている。つまり、通説で言う三山分立とされる沖縄島での勢力争いを遅く捉えている。それには、宮古・八重山での出土陶磁、那覇港の調査研究が大きなきっかけを握っている。

引用文献（紙幅の都合により、最低限に留めた）

安里進 2006 『琉球の王権とグスク』山川出版社

池田榮史 2012 「琉球国以前—琉球・沖縄史研究におけるグスク社会の評価をめぐって」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館

上原静 2009 「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鑄造工房」『紀要沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター

榎本渉 2010 『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社

- 沖縄県教育委員会 1998『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（1）—』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2007『渡地村跡』 2016『首里城跡—銭蔵東地区発掘調査報告書—』 2017『東村跡』
- 小畑弘己 2003「出土銭貨からみた琉球列島と交易」『先史琉球の生業と交易 改訂版』熊本大学文学部
- 金沢 陽 2006「ナカノハマ採集遺物を加えて構築される中世東シナ海民間貿易航路の実像」『前近代東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』国立歴史民俗博物館
- 川畑敏則・堀内和宏 2016「大村市竹松遺跡の調査概要（古代～中世）」『9～11世紀における大村湾海域の展開』長崎県考古学会
- 金武正紀 1989「沖縄における12・13世紀の中国産陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号
- 金武正紀 2009「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究—中国福建省を中心に—』熊本大学文学部
- 新里亮人 2015「琉球列島における中国陶磁器—11世紀～14世紀を中心に—」『貿易陶磁研究』第35号 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也 2011「琉球から見る中世後期の流通」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 瀬戸哲也 2014「グスク時代4つの画期」『南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 瀬戸哲也 2017a「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」『貿易陶磁研究の現状と土器研究』第35回日本中世土器研究会
- 瀬戸哲也 2017b「那覇港整備以前の陶磁流通と交易形態—沖縄本島中南部を中心に—」『南島考古』36
- 瀬戸哲也 2017c「那覇の形成と景観」『港市としての博多』中世都市研究会博多大会 2017 発表資料集
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編（2007『紀要沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センターにも転載）
- 田上勇一郎 2017「玉名（考古学的様相）」『港市としての博多』中世都市研究会博多大会 2017 発表資料集
- 田中克子 2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号
- 田中克子・森本朝子 2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点—中国製粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁—」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 續伸一郎 2011「環濠都市遺跡から出土した中国製陶磁器の様相について（素案）」『博多研究会誌 20周年記念特別号』
- 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡』
- 新島奈津子 2005「古琉球における那覇港湾機能—国の港としての那覇港」『専修史学』第39号 専修大学
- 野口 実 2017『列島を翔ける平安武士 九州・京都・東国』吉川弘文館
- 宮城弘樹 2008「琉球出土銭貨」の研究『出土銭貨』第28号 出土銭貨研究会
- 宮城弘樹 2017「琉球列島における貨幣認識と貨幣利用の多様性」『南島考古』第36号 沖縄考古学会
- 森達也 2012「龍泉窯青磁の展開」『龍泉窯青磁展』愛知県陶磁資料館 山口県立萩美術館・浦上記念館
- 森村健一 2007「復権・琉球・堺における禅林と海商」『南島考古』第26号 沖縄考古学会
- 柳原敏昭 2004「中世日本の北と南」『日本史講座 第4巻 中世社会の構造』東京大学出版会
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第49集



第3回文化講座
講演風景



第3回文化講座
田中克子氏による講演風景



第3回文化講座
久貝弥嗣氏による講演風景



第3回文化講座
瀬戸哲也氏による講演風景



第3回文化講座
総合討論風景

陶磁交易圏の様子探る

市文化講座で田中さんから研究報告

2017年度地域の特色がある埋蔵文化財公開活用事業の第3回文化講座「中国産陶磁器からグスク時代東アジア海域の交易（主催・宮古島市教育委員会）が3日、市総合博物館研修室で

行われた。田中克子さん（アジア水中考古学研究所）は、白磁と呼ばれる陶磁器が先島や沖縄本島で見られるようになったのは中国からの貿易船のルート



文化講座で報告する田中克子さん（奥）＝市総合博物館

宮古毎日 平成30(2018)年2月4日(日)
宮古毎日新聞社より

朝による「進貢貿易」の前の13世紀後半頃から、当時の貿易拠点の福岡博多でもほとんど出土しない今帰仁タイプとビロースクタイプ

の白磁と呼ばれる陶磁器が先島諸島から沖縄本島にかけて見られるようになったことに着目し、「これらがどこで作られ、どのような背景で運ばれてきたのかを検討することが陶磁交易圏の様相を知り得る重要な手がかりになる」などと話した。

白磁は特徴や調査から福産の省都福州を河口とする省内最大の河川・閩江流域にあるとした。博多などほとんど出土しない製品

なことから、「中国―台湾北部―先島諸島―沖縄諸島」というルートを使用した貿易船が先島や沖縄本島に直接運んできた可能性が高いと説明した。

先島や沖縄本島に來航したことについては「博多へ向かう貿易船の寄港地の可能性」を強調。その理由としてはこの時期の他の陶磁器の出土が極めて少ない▽「寧波―博多」の正式貿易ルートが何らかにより使用困難となり、南方ルートに変更し貿易船が途中水な

このほか久貝弥嗣さん（宮古島市教育委員会）が「宮古島内グスク時代の中国産陶磁器」、瀬戸哲也さん（沖縄県立埋蔵文化財センター）が「琉球列島の陶磁交易と那覇港」で報告した。

平成二九年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第四回文化講座

化石で探る宮古島のホ乳類の移り変わり と人類渡来問題

講師：河村愛（富山大学）

日時：2月18日（日）10時～正午

場所：宮古島市総合博物館・研修室

備考：講座の参加料は無料。予約不要

問合せ先：宮古島市教育員会

生涯学習振興課（77-4947）

2月16日～25日の期間中は、特別展示室で『発掘調査速報展 2017』を開催。

ツツピスキアブより出土した宮古島最古の石器や、ヤブチ洞穴出土の沖縄最古の土器などを展示。

展示の見学については入館料が必要となります。

宮古の化石ゾウ渡来説

市教委文化講座

河村愛さん(富山大学特任助教)が推測

市教育委員会(宮古博物館)は18日、市総合博物館で2017年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用



講演に熱心に聞き入る参加者=18日、市総合博物館

事業による第4回文化講座を開催した。講師に招かれた富山大学特任助教の河村愛さんが「化石で探る宮古



河村愛さん

河村さんは、宮古島をつくる地質時代を約1万1700年前の完新世(かんしんせい)から259万年前の前期更新世(こうしんせい)の

島のホ乳類の移り変わりや人類渡来問題」と題して講演した。河村さんは「宮古島で発見された化石(臼歯など)のトロゴンテリゾウは、大陸から台湾経由で移入されたと考えられる」と台湾移入ルートを推測した。

宮古毎日 平成30(2018)年2月20日(火)

宮古毎日新聞社より

い)とした。

かつて宮古島の琉球石灰岩でできた棚原洞穴から発見された化石の臼歯(きゅうし)などの鑑定からトロゴンテリゾウ(古型マンモス)と特定された。

河村さんは「トロゴンテリゾウは前期更新世から中

期更新世後期にユーラシア大陸北部に広く分布していた種。宮古島の琉球石灰岩形成後、海面が著しく低下した際に台湾を経由して移入したと考えられる。台湾にも類似の化石が見つまっている」と説明した。

更新世は、後期更新世(12万6000年)、中期更新世(78万年前)、前期更新世(259万年前)に分けられる。分する一つ。約260万年前から約1万年前までの期間。そのほとんどは氷河時代であったとされる。



写真はツツピスキアブの発掘調査作業風景

平成二十九年年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回文化講座

沖縄最古の文化への探求 | 新発見された県内最古級の遺跡 |

【報告】

- 「ツツピスキアブ洞穴」(久貝弥嗣・宮古島市教育委員会)
- 「白保竿根田原洞穴」(仲座久宜・沖縄県立埋蔵文化財センター)
- 「サキタリ洞遺跡」(山崎真治・沖縄県立博物館美術館)
- 「藪地洞穴遺跡」(横尾昌樹・うるま市教育委員会)

日時：2月24日(土) 午後2時～5時

場所：宮古島市総合博物館・研修室

発掘調査 実施箇所

宮古諸島



ツツビスキアブ (宮古島市)
旧石器時代 (後期更新世) ~ 近世

沖縄本島



藪地洞穴遺跡 (うるま市)
縄文時代~弥生から平安並行期



サキタリ洞窟 (南城市)
旧石器時代 (後期更新世) ~ 近代

八重山諸島



白保竿根田原洞穴遺跡 (石垣市)
旧石器時代 (後期更新世) ~ 中森期 (クスク時代)

ツツピスキアブ

宮古島市教育委員会生涯学習振興課

主任主事 久貝 弥嗣

目的：確認調査 所在地：宮古島市平良字下里嶺原 1068 番地

時代：旧石器時代（後期更新世）～近世 調査面積：18㎡

調査期間：平成 21（2009）年～平成 26（2014）年

ツツピスキアブの発掘調査では、約 10,000～20,000 年前の層（IV-1・2 層）と、約 24,000 年前の層（IV-3 層）で人の生活の痕跡が確認されました。約 10,000～20,000 年前の層からは、イノシシの骨が多く出土し、シカ、ネズミ、コウモリなどの動物骨とともにチャート製の石器や人骨も出土しています。また、約 24,000 年前の層からも人が使用したと考えられる炭化物がまとまって検出される面があり、これらの時代に宮古島には人が存在していたことが明らかになってきました。



発掘作業風景



発掘作業風景



土層堆積（●の地層は約 10,000～20,000 年前、◆の地層は約 24,000 年前）



約 24,000 年前の炭化物の検出状況
棒の立っている場所が炭化物の出土位置。

IV -1・2層（10,000～20,000年前）の発掘状況



石器出土状況



石器2出土状況



遺物出土状況

遺物の出土した場所に竹串をさしています。



イノシシの切歯

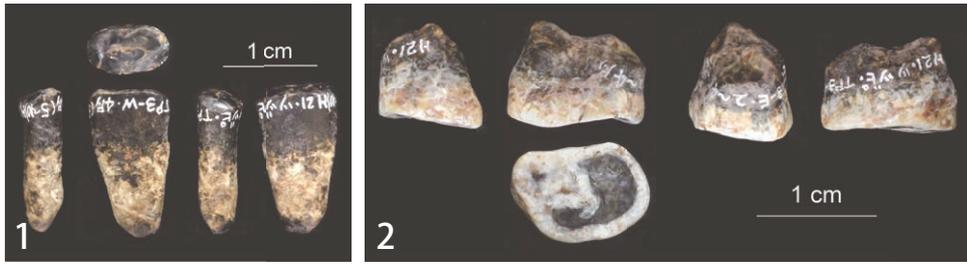


チャートの円礫



動物骨出土状況

出土した動物骨は、歯が多く、骨の出土は少量でした。



◀ 人骨

2点の人骨。

1は前歯に近い部分の歯(上顎小白歯)で、2は奥歯(上顎大白歯)になります。



▲ 石器

1～3は、チャートとよばれる岩石で、人為的に打ち割った加工がみてとれます。4は、砂岩と呼ばれる岩石で、磨り石として使用されています。

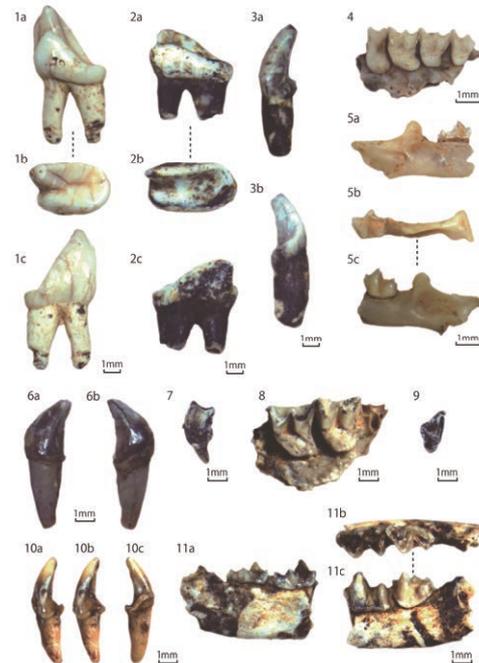
チャートの円礫▶

人的な加工は見られないものの、チャートの円礫が多く出土しています。



▲ シカ骨

シカ骨の出土量は少ないが、大型でミヤコノロジカと考えられます。



▲ 小型動物 (コウモリ) の骨

1～3: オオコウモリ属、4～5: キクガシラコウモリ属、6～11: カグラコウモリ属

▲ イノシシ骨

イノシシ骨の出土の大部分は歯で、骨の出土は非常に限られていました。

しらほきおね たぼるどうけつ
白保竿根田原洞穴遺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班長 仲座 久宜

目的：重要遺跡範囲確認調査 所在地：石垣市字白保（新石垣空港敷地内）
時代：旧石器時代（後期更新世）～中森期（グスク時代相当）
調査面積：約2㎡ 調査期間：平成28（2016）年6月27日～7月8日

1. はじめに

白保竿根田原洞穴遺跡は、新石垣空港建設に伴い発見された遺跡です。平成22（2010）年度の記録保存調査に続き、平成24（2012）年度から平成28（2016）年度まで、保存目的の確認調査を行いました。これらの成果は、平成29（2017）年3月に調査報告書として公表されています。

そして5月19日には、出土人骨に関する記者発表を行い、翌日から県内外の新聞やテレビなどで大々的に報道されました。また、これに関連して開催した人骨の一般公開では、開催期間9日間で3,200人を超える入場者を数え、ひとつの企画展としては当センターが開所した平成12（2000）年以來、最多の入場者数を打ち出しました。

今回の講座では、昨年度の調査概要に加え、これまでの分析・研究によりわかってきたことを一部紹介します。

2. 昨年度の調査について

平成28（2016）年度は、平成26（2014）年度から調査を継続しているH4区ⅢE層において、人骨の回収作業と遺跡の3次元計測を行いました。その結果、岩陰内から62点の人骨片を回収することができました。これらの人骨は、現地で出土状況と位置情報を記録し、クリーニング後は部位同定を行い、これまで出土していた人骨と接合を行いました。その後、各種分析を行いその成果をまとめ、調査報告書として「事実報告編」、「総括報告編」の2分冊で刊行しました。

この調査と並行して、石器石材調査として西表島と小浜島をめぐり、八重山諸島には石器として利用できる石材が多く分布することがわかりました。

また、普及活動として7月2日には現地説明会を開催し、続いて12月には石垣市立八重山博物館において移動展を開催し、多くの皆様に来場いただきました。

3. これまでの成果

白保竿根田原洞穴遺跡では、調査に際し調査指導委員会を設置し、調査・分析法、遺跡の評価や報告書の構成に至るまで検討しながら進めてきました。これまでの調査・分析により、現時点で判明している主な成果は以下のとおりです。

- ① 約2万年間にわたり断続的に利用された複合遺跡：八重山最古の下田原期を遡る時期に人類が到達
- ② 中森期（グスク時代相当）の炉跡^{ろあし}発見：洞穴内はヒトの行動が可能な明るさがあった可能性
- ③ 堆積の構造・過程を解明：人骨をはじめとする遺物は洞穴外からの流れ込みではなかった
- ④ 下田原期の墓の発見：副葬品を伴い集骨された状態、八重山諸島初の発見
- ⑤ 完新世初期（約9,000年前）の層から土器片出土：下田原期を遡る土器文化が存在した可能性
- ⑥ 旧石器時代の層から石器などの道具類の出土なし：豊富な石材があるのになぜ？
- ⑦ 人骨片の総点数は1,100点を超える：個体数（人数）は20人を超える
- ⑧ 人骨は岩陰や洞壁の平坦部5ヶ所に集中分布：墓として利用した可能性
- ⑨ このうち1体分は人体の位置関係を保つ：岩陰に葬^{ほうむ}った可能性、旧石器時代の墓、国内初の事例
- ⑩ 残りが良好な人骨4体：白保1号～4号と命名、今後顔や身体の復元が期待される
- ⑪ 骨中コラーゲンからDNA分析：南方起源の集団か、日本人のルーツ解明に期待・・・・・・・・

4. まとめと今後の予定

日本全国には、約1万ヶ所の旧石器時代の遺跡が存在しますが、その当時生きた人々そのものといえる化石人骨の発見は沖縄に集中しています。その中でも白保竿根田原洞穴遺跡の調査成果は、旧石器時代の葬法を考える上で貴重です。

また、今後の人骨の研究により、当時の人たちの顔つきや身体を復元できるほか、港川人や周辺諸国の化石人骨と比較研究を行うことにより、その起源や系統について知ることができる可能性を秘めています。

このような人骨の成果以外にも、これまで最古とされてきた下田原期以前の土器文化の存在や、洞穴が2年以上もの長期間使い続けられたことなど、重要な発見があります。

その一方で、旧石器時代の層から石器などの道具類が発見されていないこと（使える石材はあるのに）、住居や食料などの生活の痕跡が確認されていないことなどの課題も存在します。

白保竿根田原洞穴遺跡が旧石器時代の墓であるとすれば、この周辺に彼らが生活していた空間が存在しているはずですが、今後、ほかの洞穴遺跡で同様な調査を行うことにより、その様相が明らかになる可能性があります。

白保竿根田原洞穴遺跡の調査は、これでひとまず終了しますが、出土遺物や洞穴、環境に関する分析・研究は引き続き行われます。あらたな成果が出ましたら、その都度公表していく予定ですのでご期待ください。

サキタリ洞遺跡

沖縄県立博物館・美術館 博物館班

主任 山崎 真治

目的：確認調査 所在地：南城市玉城字前川 浮花原 202 ほか
時代：旧跡時代（後期更新世）～近代 調査面積：72 m²
調査期間：平成 21（2009）年～平成 29 年（2017）年
旧石器時代

概要

沖縄県立博物館・美術館では、港川人の時代の「文化」の解明や、港川人以降の「空白の時代」を埋める手掛かりの発見をめざして、沖縄島南部の石灰岩地帯に分布する洞穴遺跡の発掘調査を行っています。沖縄島南部の南城市と八重瀬町の境を流れる雄樋川^{ゆうひがわ}の河口には、港川人が発見された港川遺跡があります。雄樋川の流域には数多くの石灰岩洞穴が分布しており、観光洞として公開されている玉泉洞とその周辺に分布する洞穴群は、玉泉洞ケイブシステムと呼ばれる大規模な洞穴群を形成しています。サキタリ洞もそうした洞穴の一つです。港川人も、こうした洞穴をすみかにしていたのかも知れません。

サキタリ洞周辺には、雄樋川が石灰岩を深く削りとった谷が広がり、独特の景観を形作っています。現在、この谷は「ガンガラーの谷」として、ガイドツアーコースとなっています。サキタリ洞はこのツアーコースの出発点に位置しています。サキタリ洞は、東西に二つの開口部をもつ大ホール型の洞穴で、その面積は約 620 m²、現洞床の標高は約 40m、天井の高さは 7 m もあります。沖縄県立博物館・美術館では、2009 年からこの洞穴の発掘調査を行っています。

サキタリ洞遺跡の大きな特徴は、約 4 万年前以降の各時代の地層が、積み重なった状態で見つかったことです。これほど長期にわたる地層がきちんと保存されていることは極めて稀です。また、石灰岩洞穴であるため、骨や貝など、通常の遺跡では残りにくい遺物が良好な状態で保存されていました。特に、旧石器時代の人骨や貝器（貝殻で作った道具）の発見は、大きな話題となりました。

調査区 I

調査区 I では地表下約 2m まで発掘を行いました。この地点の堆積物は、以下のよう
に 5 つの地層に区分することができます。表土：現代遺物を含む黒色土。F S 層：炭酸カ

ルシウムによって固結化したフローストーン (Flowstone) 層。厚さ約 30cm。I 層：しまりの弱い褐色土層。II 層：炭化物を多く含む炭化物層。III 層：しまりの弱い褐色土層。このうち、I～III 層が旧石器時代に相当します。堆積物の上部を覆っていた FS 層は、コンクリートのように固い地層だったため、削岩機やツルハシを使ってこの FS 層を除去する作業は困難を極めました。しかし、こうした堅牢な地層にバックされていたため、下部の旧石器時代の地層は大変良好な状態で保存されていました。

酸性の土壤に広く覆われた日本の旧石器時代の遺跡からは、石器以外の遺物はほとんど見つかっていませんでしたが、サキタリ洞遺跡の発掘によって約 2 万年前の沖縄の旧石器人は、貝殻で作った道具 (貝器) を使用していたことがわかりました。約 2 万年前の地層から見つかった貝器には、世界最古の釣針 (巻貝製) をはじめ、マルスダレガイ科 (マツヤマワスレ) やクジャクガイを利用した加工具、シマワスレ、ツノガイ類を利用した装飾品 (ビーズ) が見られ、多様な貝器利用がうかがわれます。マルスダレガイ科の貝器には一辺に凹状の刃部をもつ「扇形貝器」が特徴的に見られます。

調査区 II

調査区 II では地表下約 3m まで発掘を行い、I～VII 層まで 7 枚の地層を確認しました。I 層：近現代。II 層：グスク時代～近世 (11 世紀以降)。IV A 層：縄文時代晩期 (約 2 千 5 百年前)～弥生平安並行時代 (約 1 千年前)。IV B 層：縄文時代中～後期 (?) (約 4 千年前)。IV C 層：縄文時代前期 (約 5 千年前)。V 層：縄文時代早期 (約 9 千年前)。VI 層：無遺物層 (9 千年前以前)。VII 層：縄文時代早期以前 (9 千年前以前)。

調査区 II の発掘で注目されるのは、縄文時代前期の条痕文土器が出土した IV C 層よりも下位の V 層から、それまで沖縄では類例の知られていなかった押し引きもん土器が発見されたことです。この V 層の下位には無遺物の VI 層があり、さらにその下位の VII 層中からは、1 体分の人骨が発見されています。この人骨は、仰向けに横たわった状態で、各部位の骨が交連した状態 (関節同士が組み合った状態) で見つかりました。また、人骨の頭、右腕、胸、腹の直上から、人為的に配置されたと考えられる 30～50cm 大の石灰岩礫が検出されています。以上のことから、この人骨は人為的に埋葬されたものと考えられます。VII 層の年代は未確定ですが、少なくとも約 9 千年前の V 層よりは古いと考えられます。これまで国内で発見された埋葬人骨のうち、最も古いものは愛媛県上黒岩岩陰遺跡や長野県栃原岩陰などで発見された 1 万～9 千年前頃のもので、サキタリ洞の人骨は、それらと並ぶ国内最古級の埋葬人骨となるものです。

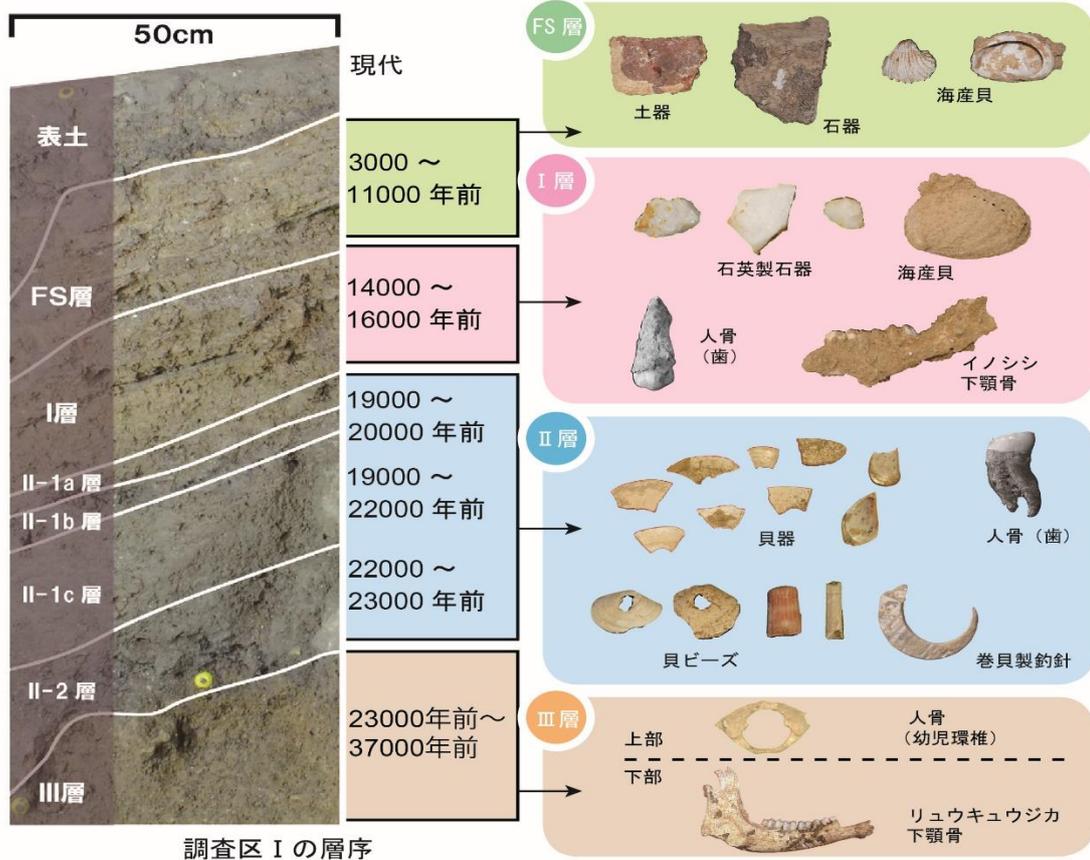


図1 調査区 I の層序と出土遺物

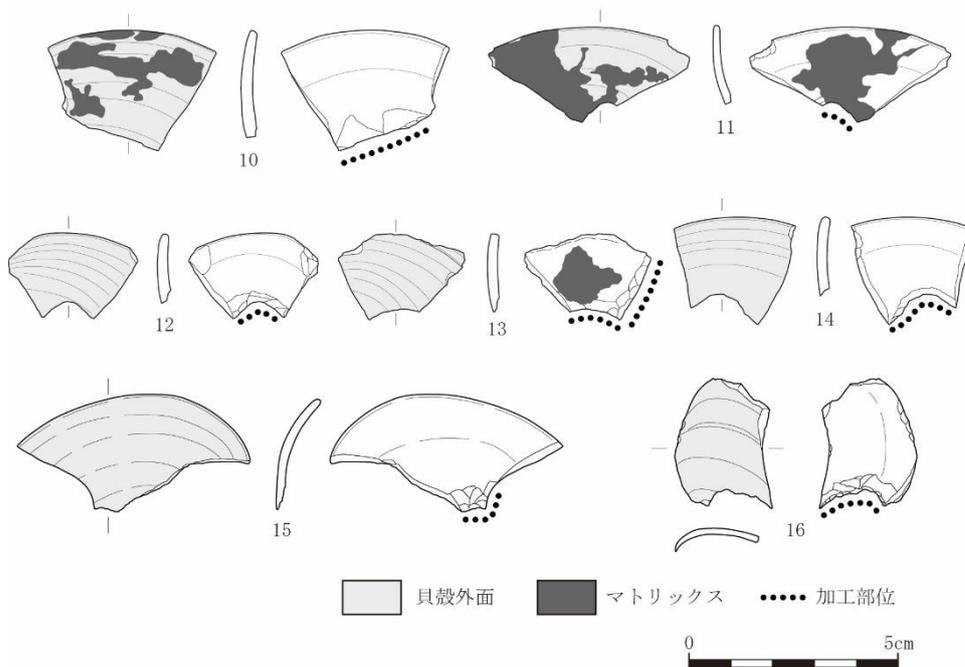


図2 調査区 I から出土した貝器 (約2万3千~2万年前)



図3 調査区IIの層序と出土遺物

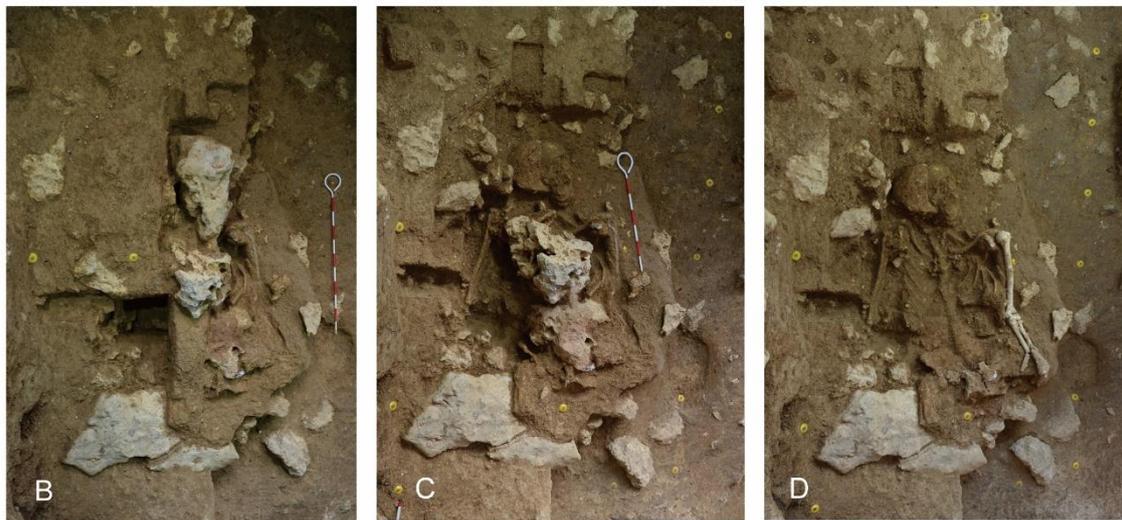


図4 調査区II・VII層出土の人骨(9000年前以前)

藪地洞穴遺跡 発掘調査

うるま市教育委員会文化課

主任主事 横尾 昌樹

目的：試掘調査 所在地：うるま市与那城屋慶名東藪地
時代：縄文時代～弥生から平安並行期
調査面積：計 23.5㎡ (TP1 = 4㎡、TP 2 = 4㎡、TP 3 = 7.5㎡、TP 4 = 4㎡、TP 5 = 4㎡)
調査期間：平成 26 (2014) 年 11 月～平成 27 (2015) 年 1 月、平成 27 (2015) 年 6 月～8 月、
平成 28 (2016) 年 6 月～9 月

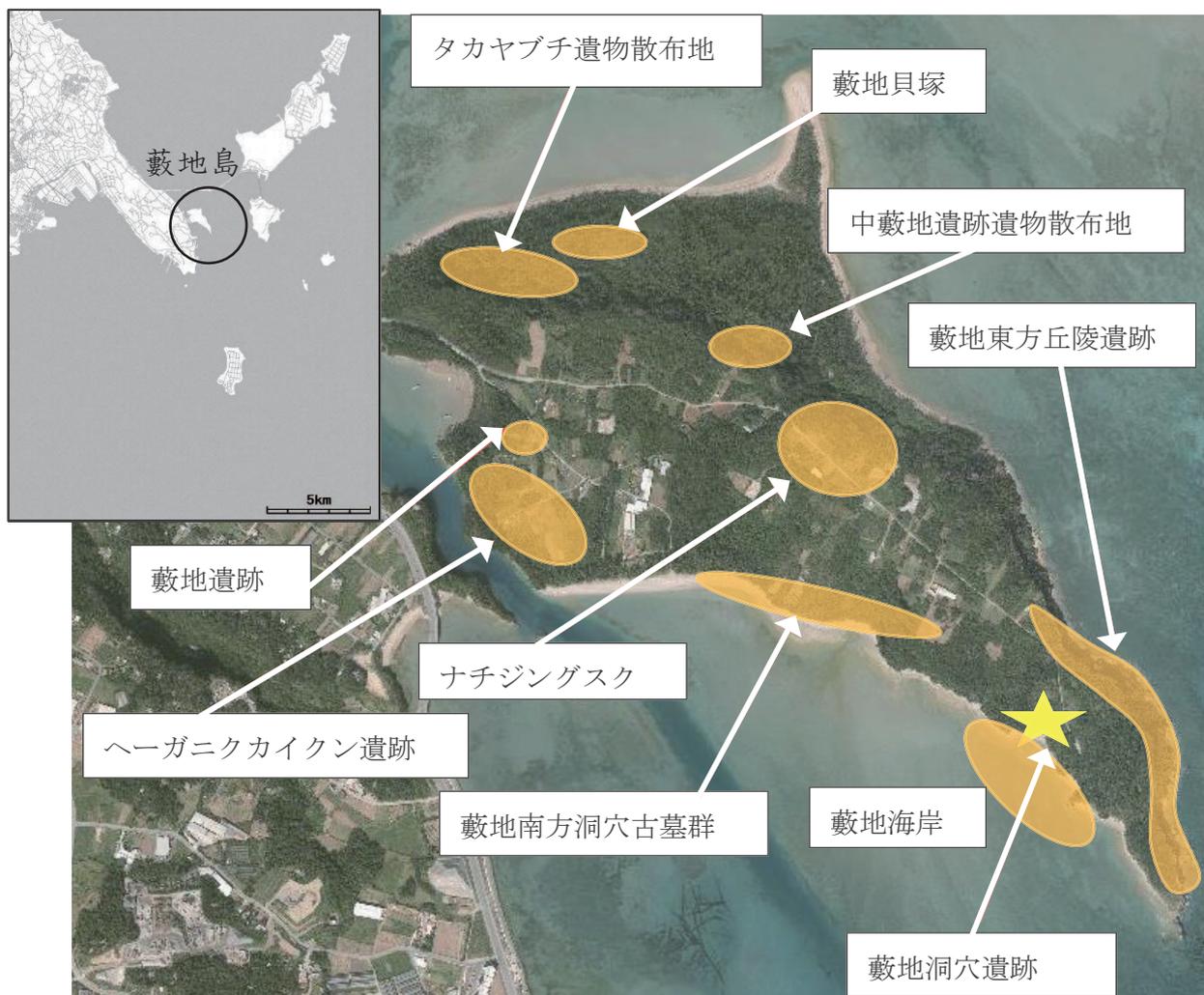
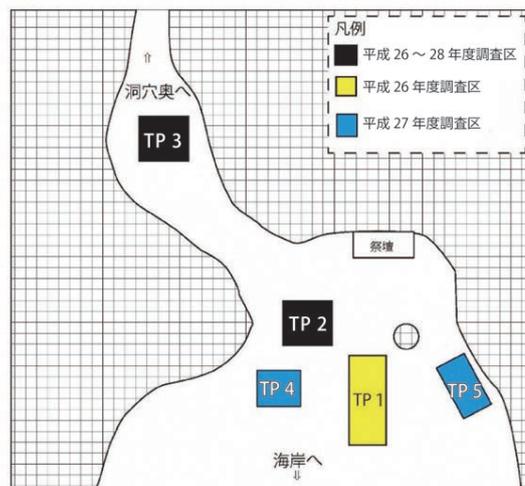


図1 藪地島の遺跡

- ・藪地遺跡－沖縄貝塚後期の遺跡。土器片、貝殻片が確認されている。
- ・ナチジングスク－グスク時代の遺跡。遺物は確認されていない。
- ・藪地貝塚－貝塚時代後期の遺跡。土器片や貝殻片が確認されている。
- ・ヘーガニクカイケン遺跡－貝塚時代後期の遺跡。土器片や貝殻片が確認されている。
- ・藪地海岸－縄文時代前期頃。曾畑式、条痕文土器が採取されている。

藪地島の歴史

島内には、これまでの踏査により9遺跡が確認され、1箇所先史時代の遺物が採取されています（図1）。最も古い遺跡は縄文時代に相当する藪地洞穴遺跡であり、その後は貝塚時代後期の遺跡が多数所在します。続くグスク時代の遺跡はナチングスクがありますが、詳細は不明です。伝承では昔、屋慶名の人々は藪地島に住んでいたと伝えられていますが（与那城村教育委員会1989）、集落の痕跡は現在のところ確認されていません。今後の調査で発見される可能性は大きいです。



調査区の概略図

発掘調査

現在、藪地島周辺の島嶼地域にはマリンレジャーや観光で訪れる人が多く、観光開発が進行しています。これら島嶼地域では、本島東海岸地域の観光開発計画があり、藪地島も含まれており、周辺地域と合わせて今後進展していくことが予想されます。この開発計画の事前調査のため、平成26年度から平成28年度にかけて藪地洞穴遺跡の試掘調査を実施しました。

遺跡概略

勝連半島の北側に位置する藪地島にある洞穴遺跡です。1960年に國分直一氏、嵩元政秀氏らにより初めて発掘調査が行われ、その時、約6,000年～6,500年前の爪形文土器つめがたもんどきが発見されたほか、貝殻を加工して作った鏃やじりなどが発見され、沖縄の先史時代を研究する上で重要な発見となりました。



藪地洞穴遺跡入口の様子

今回の調査の概要

今回は、洞穴内部と洞穴入口付近、洞穴の前の広場、計5か所に調査区を設け発掘を行いました。調査区からは、爪形文土器が大量に出土し、その他、石斧、貝鏃等が出土しました。洞穴の入口付近では、爪形文土器期の炉跡と思われる遺構も発見されました。また、洞穴奥部の調査区では約9,000年以上前と思われる土器と、古代人の食料の痕跡と思われる貝殻、イノシシの骨等も同じ層より出土しており、沖縄における先史時代の生活の様子がわかる資料が出土しました。

各調査区の成果について（発掘調査区はTP〇と省略しています）

TP1－平成26年度に幅1m、長さ3mの調査区を発掘しました。その結果、上層部は貝塚時代後期（約2,000年前～1,000年前）の地層が確認でき、同時期の貝輪や土器も出土しました。それよりも下層では縄文時代晩期頃（約2,500年前）の地層を確認し、同時期の土器が出土しました。洞穴の入口付近では、さらに古い時代の縄文時代前期～早期末頃（約6,500～6,000年前）の爪形文土器と炉跡を発見しました。



TP1で見つかった炉跡

TP2－平成26年度から28年度にかけて幅2m、長さ2mの調査区を発掘しました。その結果、縄文時代晩期頃（約2,500年前）の地層を確認し、同時期の土器や貝殻が出土しました。さらに下層では、縄文時代前期～早期末頃（約6,000～6,500年前）の爪形文土器が大量に出土し、同時に局部磨製石斧が出土しました。そのほか、貝殻を加工して作った貝鏃^{かいぞく}や貝製のビーズも出土しました。人工遺物以外にもイノシシの骨や貝殻が出土しています。また、爪形文土器の層を掘り下げると、爪形文土器とは異なる厚みのある土器が出土しました。この土器については、現在どのような土器か調べているところです。



TP2で見つかった爪形文土器等①



TP 2で見つかった爪形文土器等②



爪形文土器とその下層の土器

TP 3 -平成 27 年度から洞穴の奥に幅 1 m、長さ 3 m の調査区を発掘しました。硬い石灰岩の層を削岩機を用いて割り、掘り進めたところ、貝殻（ハイガイ）とともに文様の確認できる土器が出土しました。土器は、県内での出土例が少ない「押引文土器」と考えられ、出土した層位の年代を測定したところ今から約 8,500 年前という測定結果（暦年較正年代）が得られました。さらに深く掘り進めると、約 40 cm 掘り下げた地層から土器と大量のマガキ、ハイガイ、シレナシジミの貝殻、イノシシの骨が出土しました。その地層の年代を測定したところ、約 9,000 年以上前（暦年較正年代）という結果がでました。



TP 3で見つかった土器や貝殻等



波状文土器の出土状況



TP3で見つかった波状文土器

TP 4 -平成 27 年度に、洞穴の前庭部に幅約 2 m、長さ約 2 m の調査区を発掘しました。その結果、縄文時代晩期頃（約 2,500 年前）の地層を確認し、同時期の土器や貝殻が出土しました。



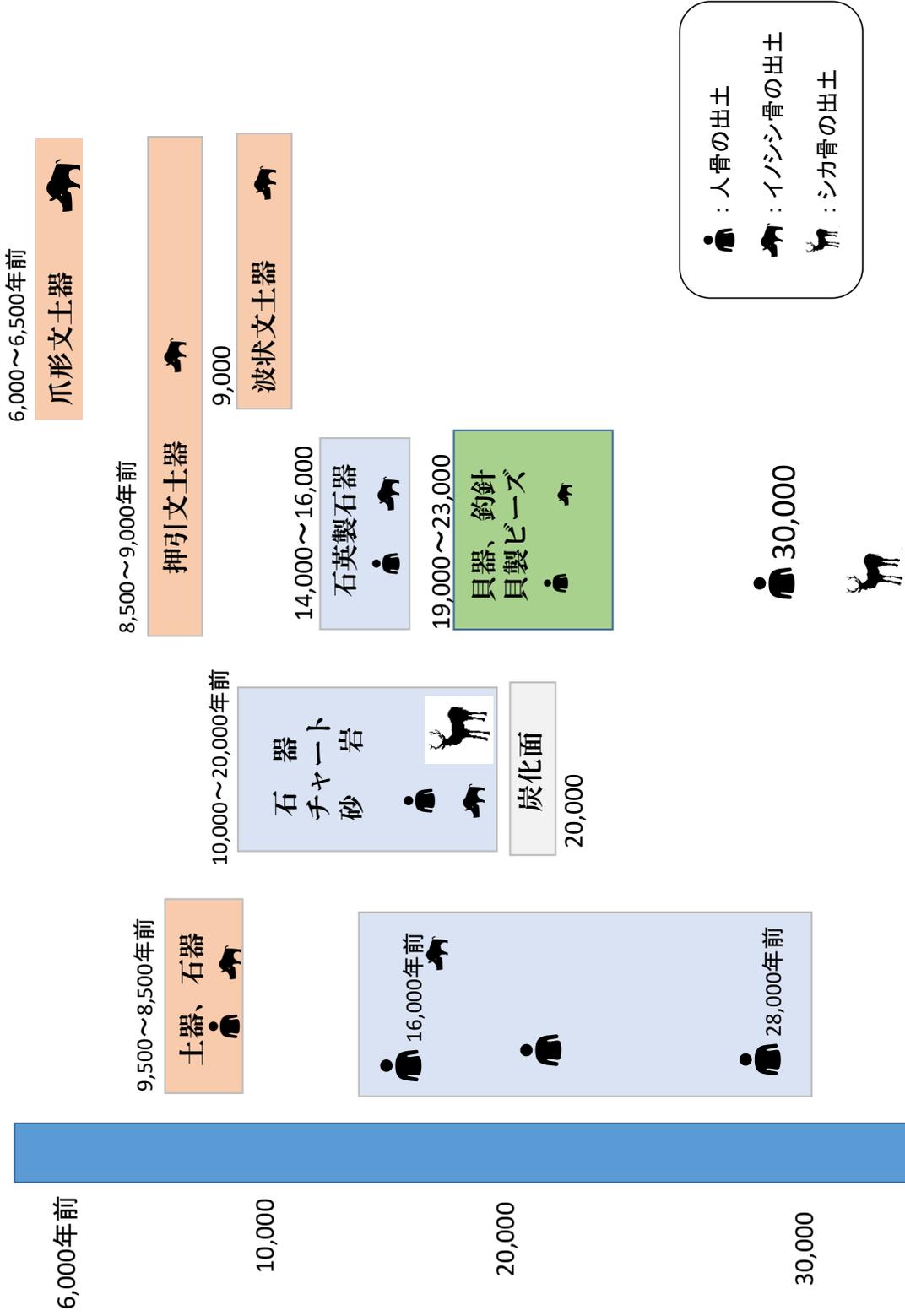
TP 4 の調査壁面

TP 5 -平成 27 年度に、洞穴入口の横（祭壇を正面にして右側の壁際）を幅約 1.5 m、長さ約 2 m の調査区を発掘しました。貝塚時代後期（約 2,000 年前～1,000 年前）の地層が確認でき、同時期の土器や人骨の一部も出土しました。



TP 5 の調査壁面

白保 ツヅピ サキタリ 藪地



図版 4 遺跡の発掘成果相関図



第5回文化講座
金城亀信氏による挨拶
※沖縄県立埋蔵文化財センター
所長



第5回文化講座
久貝弥嗣氏による講演風景



第5回文化講座
仲座久宜氏による講演風景



第5回文化講座
山崎真治氏による講演風景



第5回文化講座
横尾昌樹氏による講演風景

世界最古の釣針など展示



初日から観光客らが訪れ、沖縄で出土した遺物に見入っていた＝16日、市総合博物館

巡回展では、宮古島市の「ツツピスキアブ洞穴(丘陵頂上部近くを貫通する洞穴)を含む県内9地区の発掘調査で出土した遺物や写真パネルが展示されている。同センターの金城亀信所長は「この巡回展を通して多くの方々が先人たちの暮らしに思いをはせるとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める一助となつてほしい」とのコメントを寄せた。宮古の「ツツピスキアブ」は、旧石器時代(後期更新世)～近世で、約24000年前の層で人の生活の痕跡が確認され、その時

宮古毎日 平成30(2018)年2月17日(土)

宮古毎日新聞社より

県立埋蔵文化財センター

県内出土の遺物300点

市博物館で発掘調査速報展

県立埋蔵文化財センターの「発掘調査速報展2017」宮古島巡回展が16日、市総合博物館で始まった。25日まで。今回の巡回展では世界最古の釣針のほか、県内9カ所の遺跡と保存処理事業で保存処理された遺物など300点を展示している。会場には、初日から観光客らが訪れ、沖縄で出土した遺物に興味津々の様子で見入っていた。

代から宮古島には人が存在していたことが明らかになっている。

そのほか、世界最古の釣針は、南城市のサキタリ洞遺跡で出土。この釣針は約

市教育委員会生涯学習振興課文化財係の久員弥嗣主任主事は「なかなか宮古で見ることのできない展示物が多く、見応えのある内容となっているので、多く

の市民に見に来てほしい」と呼び掛けた。

そのほか、今回の巡回展に関連して18日には同博物館で文化講座「化石で探る宮古島のほ乳類の移り変わり」と人類渡来問題」が午前10時から行われる。

さらに、24日にも「世界最古の文化への探求―新発見された県内最古級の遺跡―」をテーマに同センター調査班の仲座久宜班長らが報告を行う。

2万3000年前の物で、14の巻き貝(ギンタカハマ)製となっている。

そのほかにも、円覚寺跡(那覇市)、首里城公園内の真珠道跡、大嶺村跡などから出土した遺物も展示されている。

平成 29 年度地域の測色ある埋蔵文化財公開活用
最新の研究成果にみる宮古の歴史
－文化講座資料集－

発 行 年 平成 30 年 3 月
発行・編集 宮古島市教育委員会
 〒906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里 600-1 番地
 TEL : 0980-77-4947 FAX : 0980-77-4957
製 本 ぐしけん印刷
